



序章

柔らかな風…

肘掛けに添えた右手の甲を、ふうと撫でて遠ざかる。
手をかえして、通り過ぎた風を指先に感じてみようとした。

もう、いない…

まだ幼さが残る、端正だが寂し気な横顔がほんの少し表情を曇らせた。

病院の中庭は、よく晴れた青空に誘われたように沢山の人が芝生の散策を楽しんでいた。

彼女の側には誰も居ない。

陽射しを避けるように木陰に車椅子を停めて、うつむくでもなく、遠くを見るでもなく、一点の絵画のように静止した彼女の姿には、他者との繋がりを絶たれた者の孤独が色濃く張り付いていた。

膝に載せた詩集のページを、ほっそりした指先が戯れるように捲ってゆく。

大鷲が首をさかしまにして空を見る。

空には飛びちる木の葉も無い…

高村光太郎の『苛察』を彼女は読み始めた。

淀みなく詩を朗読する彼女の脇を通り過ぎる人はだが、誰一人振り向きもしない。

無関心というにはあまりに異様な光景であった。

まるでそこに誰も居ないかのような。

彼女の声は誰にも聞こえていなかった。

軽く引き結ばれた唇は少しも動いていない。

彼女は口をきけなかった。

蝉の声が響きを増す頃になると、詩を読むのに疲れた彼女は日差しに追われるように病棟へと戻りはじめた。

ワタシの声… だれにも聞こえてない…

どんなにおっきな声を出しても、だれも

当たり前、か

汗ばんだ小さな手でホイールを回し、ゆっくり、ゆっくり、舗装のゆき届いた路を進んでゆく。

中庭から病棟の入口に向けては緩やかなスロープになっていて、力の弱い彼女はいつも帰りに苦勞していた。

リハビリを兼ねてワザと平坦にしていらないらしいのだが、患者達には不評であった。

いつもより多く外にいたせいか、入口まであと少しの所で疲れて止まってしまった。

ホイールはどこかで引っかかったみたいに、どうやっても動きそうになかった。

どうしよう…

どうでもいい…

どうしよう…

小さな葛藤が、彼女の眉間にひとすじの皺を作った。

ガタン ッ!

いきなり車椅子が前に動く。

驚いて振り向いた彼女の目に、逆光でシルエットになった人影が映った。

車椅子のグリップに両手を添えた影がニコリと歯を見せた。

だれ？

涼しげなブルーアイがふたつ、彼女のほうへ向けられていた。

彫りの深い東洋系の顔立ちの中で、その目だけが明らかに異質であった。

ハーフ、かな？

「(あなた、誰?)」

聞こえる筈の無い問いを発しながら、彼女は奇妙な違和感を感じていた。

暖かな波動を放つその目は、こちらへ向けられてはいても彼女を『視て』はいなかった。

焦点は彼女を素通りし、何処か知らぬ遥か彼方へと結ばれていた。

「(もしかしたら…)」

次の瞬間、彼女は心臓がとび出る程驚いた。

「ウン、そうだよ。見えないんだ」

答えたのだ。彼が。彼女の『声』に。

「(○×△□☆ッ!!…)」

小さな体のちいさな心臓が、破裂せんばかりにバクバクと鳴り響いた。

あまりの動揺に車椅子から落ちかけた彼女の肩を、思いがけず力強い手がしっかりと包む。

「ゴメン、驚かせるつもりじゃなかったんだ。困っているんじゃないかって…それでボク…」

ハッと気付き、彼は肩に添えた手をあわてて離した。

それを見て少し鼓動の収まってきた彼女は、日差しを避けながら改めて彼を見た。

青いTシャツにジーンズ。

スニーカーがヨレヨレだ。

うなじの髪が、風になびかずピヨンと跳ねている。

「(ワタシの声、聞こえるのね)」

「そうだよ、ビックリした？」

間髪を入れず彼が答える。

「（ビックリって… それって普通じゃないよネ）」

奇妙な語ら이었다。

傍から見れば、無表情な車椅子の少女に少年がひとり言を呟いているようにしか見えなかった。

「小さい頃から声が聞こえた。でも気がついたら誰も喋ってない。聞こえてたのはみんなの『心の声』だったんだ」

「（目は？ その目はいつから？）」

小首を傾げて彼女が聞く。

「産まれた時から。ボク、世の中を自分の目で見た事は一度もないんだ」

「（そうなんだ…）」

彼女の『声』の口調が沈んだ。

「キミ、可愛いのかな？」

急な言葉にまた鼓動が上がりそうになった。

「（しっ失礼ね！ ナニよもう…アナタ名前は？）」

「殉。キミは？」

「（加夏子、カナでいいよ）」

それが、不思議な出会いの始まりだった。

第一章

病棟に隣接する本館の三階。開け放った窓から下を眺めている医師がいた。

「何か面白いものでも見えまして、先生」

カルテを整理しながら若い看護師が聞いてくる。

「ん…ああ、イヤ、別に何が見えるという訳じゃないんだが。チョット、ね」

「また悪い虫が騒ぎ出したんじゃないかって。この間も先生ったら『今度B棟に入院した若奥さん、精密検査が必要だっていうからウチのほうへ来ないかな〜？』って今にも涎を垂らしそうだったじゃないですか」

白衣の医師が思いきり顔をしかめた。

「涎はひどいなあ、せめて涙を流してくらいにならないかね？」

「余計にアヤシイです」

軽く微笑みながら彼女は医学雑誌の束を渡した。

「今月号、先生の論文が載っているでしょ？ オメデトウございます。ちゃんと御自分の目でお確かめになって下さいね」

「自分で書いた論文だぞ、何でいちいち読み返さなきゃならないんだ」

「成果の確認です」

「目出度いと思うなら、今度ふたりに御祝いしないか？ 横浜に素敵なレストランを見つけたんだ、夜は港の灯りが綺麗で…」

看護師がクスリと笑った。

「謹んで御遠慮させていただきます」

「そんなあ！ キヌちゃ〜ん」

「気持ち悪い声を出さないで下さい。それに、その呼び方は止めて下さいと何度も御願いしましたよね？ せめてエミちゃんとか呼んで下さいませんか」

「呼び方変えたら朝まで付き合ってくれる？」

「フ・ケ・ツ」

にべもなく誘いを断った彼女、衣笠恵美子は何気無く窓の外を見た。

「アラ、あの子たち」

「そうなんだ。さっきからスロープで立ち話をしているように見える。だが、なあ」

「彼女、確か歩行障害と一緒に…」

「失語症を併発している。よほど怖い目に会ったのだろう、可哀想に。相手は通り魔だったらしいが」

「…」

「彼が話し掛けるのは珍しくないんだが、ちと相手が悪いな」

「？どういう意味ですか」

恵美子は理解出来ないと言うように首を傾げた。

「不思議な少年だね。ああやって接触をもつ事で今まで何人もの患者を全快に導いてきたんだ。僕らは密かに彼の事を『幸福の王子』と呼んでいるくらいだ。だがなあ」

医師が表情を曇らせる。

「彼女は無理だ」

「どうしてそう思われるのですか」

「それは…」

医師が言い淀んだ。

溜め息をひとつ漏らしてから、彼は恵美子に向き直った。

「あの娘の場合、肉体の損傷時の状況が同時に強烈なトラウマとなってしまうている。強い自己暗示とでも言えはいか。そのせいで現状が常態化されてしまっているんだ」

「現状の…常態化？」

「判り易く言うとなね」

彼は机の上にあったジッポをとりあげ窓枠に置いた。

「車が走ってくる。たまたま道を渡っていた人が運悪くはねられたとしよう」

窓枠にジッポを滑らせ、二本の指で人に観立てた左の手を弾いてみせた。

「バンッ！ 車はそのまま走り去っていった」

「ヒドイ… 轢き逃げですね」

「その人は幸いにして命を拾った。目立った障害もなかったので比較的早く日常生活に戻る事が出来たんだ。でも後遺症は思わぬ形で現れたんだよ」

「？」

「その人はタクシーの運転手だったんだが、二度と元の仕事には戻れなくなってしまったんだ」

「車への恐怖心が生まれた、とかいう話なのでしょうか？」

「イヤ、そうじゃない。運転が出来なくなったんだよ。手足が動かなくなるなんて生易しいものじゃない、意識を失ってしまうのさ。車種、座席位置、状況や誰と一緒にかなど全くお構いなしに、車に乗った途端、昏睡状態に陥ってしまうんだ。事故直後にそうだったようにね」

「そんな事って… その人は健康面で問題は無かったのでしょうか？」

「脳にも躰にも異常は見つけられなかった。医学的には何の問題も無い健康体だったよ。だが症状は100%再現された」

ジッポをポケットにしまいながら、医師は再び窓の外に視線を移した。

「例え話かと思ったのですが、実際にその方を診察されたのですね、先生は」

「ああ。PTSDよりタチが悪いよ。結局は原因も治療法も、何ひとつ判らずじまいで終わってしまったがね」

医者なんて無力なモンさと自嘲気味に笑い、医師は遠くに見える二人を目で追った。

「精神科の友人がね、自己暗示の一種じゃないかとアドバイスしてくれたが、お手挙げだった事に変わりは無い。強烈

な経験は、その強烈さ故に身心に焼き付いてしまう。あの王子さまにどんな不思議な力があつたとしても『自分はどうである』と当たり前のように信じ込んでしまっている相手に何が出来るとも思えないよ」

「でも、何か他に治療方法があるんじゃないですか？　ずっとこのままなんて…」

医師が首を振った。

その目は、二人をいつまでも見つめ続けていた。

第二章

出会ってから2週間

殉は、今では私の毎日に欠かせない存在になっていた

彼には私の『声』が聴こえた

とっても不思議なことなのだけど、今では何もしなくても意思の疎通が出来る彼を誰より信頼している

そして今日もまた…

「ヤァ」

いつも最初の一言は『ヤァ』から始まる

お気楽なんだか親しみ易いんだか

「カナちゃん、今日は外へ出ないの？ 燕の子供達が随分と大きくなったよ、一緒に観にいかない？」

まるで小さな子供を誘ってるみたい

これでも高校三年生よ、そりゃあ躰だって胸だって、普通よりホンの少し小さいかも知れないケドさ

あれ？ 彼が顔を寄せてきた

もしかして……

◇

殉がひそひそ声で呟いた。

「ムネは関係無いと思うけどなあ」

「（バカッ！ そんな事まで聴かなくてイイのっ！！）」

「聴こえちゃうんだからしょうがないだろ、聴かれたくなかったら頭で想わないでよ」

照れ隠しなのか、珍しく殉がふくれっ面で言い返した。

「（仕方無いじゃん、ジュンには私の考えてる事は全部お見通しなんだから）」

「そりゃそうだけどさ…」

ますます膨れ上がる顔を観るのが愉しくて、もう少しダダをこねてみる事にした加夏子は片方のホイールを押して彼に背を向けた。

「ゴメン… 怒った？」

「（知らない）」

……

「僕、いつも嫌われてた。この力のせいで」

「（えっ？）」

彼の口調が急に重苦しいものになり、今度は加夏子の方がドギマギしてしまう。
暗く沈んだ声は、いつも明るく話し掛けてくれる殉からは想像出来ないものだった。

「親からも親戚からもバケモノ扱いされていたんだ。サトリっていう妖怪なんだそうだよ。そうやって怖がられて、みんなから放り出された僕を面倒見てくれたのは兄さんだけだった」

思いもかけない話に、加夏子は返す言葉が見つからなかった。
声とは裏腹の乾いた横顔が、逆に深刻な内面の懊悩を表しているようで痛ましかった。

「（お兄さん、いまどこにいるの？）」
「判らない。でもきっと帰ってくる… きっと」

彼が呟いた。
二人が運命の皮肉に気付くのは、まだまだ先のことであった。

◇

日課のリハビリ。
周囲の熱意とは無関係な世界に彼女は居た。

両脇から支えるトレーナー。
動かない足を両手で引きずり前へ… 前へ…
3 m程の練習路を行っては戻りを繰り返す、単調でつまらない時間だった。

アンヨがじょうず… アンヨがじょ～ず…

なんでだろ
歩けないのに
歩かないのに
どうしてこんな事するの
どうしてみんな、こんなに熱心なの
ワタシ赤ん坊じゃないんだよ

車椅子は不便だけど、今はなんとも思わない
静かな場所と詩と、いっぱい緑と、少しのお陽さまがあればワタシは幸せ
ジュンもいるし
贅沢過ぎてばちがあたっちゃう

私はしあわせ
ワタシハシアワセ
ワタシハ… ワタシ… ハ…

ワタシどうしてここにいるの!?

トレーナーの二人は、加夏子から離れると同時に両手を上に挙げた。

「スイッチいれます！」

低いチャージ音が響き始める。

…逝くなよ、嬢ちゃん…

ボソリと銀さんが呟いた。

◇

また風が吹いてる…

加夏子がゆっくり目を開けると、病室の白い天井が正面に見えた。
開け放った窓からは、カーテンを微かに巻く風が部屋の中へと流れ込んできていた。

また何かあったんだ、わたし

初めてではなかった。

こうやって、気がつくとベッドに横になっている事がしばしばあった。
深い眠りから覚めた時のように、動かない足はおろか腕や躰まで物憂気にだるく、すぐにはいうことを聞いてくれない。
息をするにもユックリやらないと咳込んでしまうのだった。

「お目覚めね、気分はどう？」

ここしばらく私を担当している年配の看護師が、食事を載せたトレイを持って入ってきた。

「大変だったわね。いつもアナタは突然なんだから。みんな大騒ぎだったのよ」

何がタイヘンで、何が突然なのか、そんなの判るわけじゃない

なんだかイラっときて、加夏子は目をすぼめた。

いつもこの部屋で目覚める。

いつも誰かが言う、大変だったと。

そしていつも、何ひとつ覚えていないのだ。

「そうそう、貴方の担当は今日から違う人になるから。後で紹介するわね」

口調は穏やかだが、看護師の顔はどこかホッとしているように思えた。

口がきけず筆談すらおっくうがる自分が看護師達に好かれていないのは知っていたが、他人のあからさまな感情は加夏子をいつも不安にさせた。

それすら他人には判る筈も無かったのだが。

「コンニチハ、もう起きているのね」

開いていた病室のドアから見知らぬ看護師が入ってきた。

歳は二十代後半位であろうか。潔癖そうな光の強い目が加夏子を正面から覗き込んできた。

「やだ、もう来ちゃったの。今あなたの話をしていた所なのに」

「和田さん、申し送りはもう済んでいますよね。手伝って頂いたのは感謝します」

睨みつけるような視線のまま、若い看護師が深々と頭を下げる。

「あとは私が」

「おおヤダ、年寄りをそんなに早く追い出したいのかねえ〜」

相変わらず笑顔だが、さっきより露骨に不快感を見せた年配のほうの看護師は、アト宜しくと言い捨てて部屋を出ていった。

このヒトも同僚達からあまり好かれていないのだなと加夏子は思った。

「夏は好き？」

唐突に若い看護師が話し掛けてきた。

「私は嫌い。ついでに言うておくけど、今のアナタも嫌い。傷付いた自分を『歩けない』と思い込んでるアナタも、ね」

覗き込む目が光を増していた。

第三章

たゆたうだけの日々に変化が生じていた。

それは加夏子にとって心地良い変化ではなく、どちらかと言えば苦痛を伴うものだった。

「オハヨウ！ いつまでもベットの中でグズグズしてちゃ駄目よ。食事をとったら遅れているリハビリのメニューを沢山こなさなきゃならないんだから。人參残したら銀さんに言ってトレーニングを倍にしてもらいますからね、ちゃんと食べるのよ！」

衣笠恵美子と名乗ったその看護師は、初対面で加夏子を嫌いだと言っただけで済んだ。

反発や嫌悪感を抱くより先に、余りにアッサリキッパリした態度に彼女は毒気を抜かれてしまった。むしろ逆に年下の加夏子のほうが、

「（この人、こんな調子じゃすぐにクビになっちゃうんじゃないかしら…）」

と心配してしまう位であった。

変わった人だなあ…

そんな印象を持ちつつズルズルと彼女のペースに乗せられて数日が過ぎてしまった。

否応無くペースアップしてゆくリハビリメニューに嫌気が差して何度か反抗を試みてはみたが、まるで石仏にあられをぶつけるように跳ね返されてしまう。

そしてシブシブ、普段に倍したメニューをこなす事になってしまうのだ。

何でこんな目に会わなきゃならないの？

今日は大好きな詩を読みたいのにつ！

不意に強い怒りが湧いてきて、加夏子は朝食をトレイごと恵美子の顔めがけて投げつけた。

ガシャアーーーン！！！！

病室中に食器と内容物が飛び散る。

食器をぶつけられた恵美子は、顔を押しえて前屈みになったまま動かなかった。

やがてゆっくりと躰を起こした恵美子を見た時、加夏子は自分のしてしまった事に漸く気がついた。恵美子の額はパツパツと切れ、白い肌に太い鮮血の条が幾つも流れていたからだ。

自分の顔から血が音を立てて引いていくのがわかった。

「今までで一番のヒットね、それだけ元気なら病人扱いしなくていいかな」

血まみれのまま、恵美子がニッコリと微笑んだ。

…血の涙を流す聖母マリア…

愕然としながら、フトそんな言葉が頭をよぎった。

◇

病室での出来事いらい、恵美子との間の葛藤は小康状態となっていた。

額の傷は出血の割に大したことはなく、恵美子自身、何もなかったかのように振る舞っているのだが、当の加夏子はすっかりしょげかえってしまっていた。

恵美子の額に貼ってある大振りの絆創膏を目にするたびに心の何処かがチクリと痛み、バツの悪さから言われる事に素直に従ってしまう。

誰かを憎んだり傷付けたりという感情とは無縁のまま育ってきた加夏子にとって、今度の出来事はショックであったのだ。

ワタシ、かわっちゃったんだ
歩けないからじゃない
喋れないからじゃない
もう戻れない

彼女の中で想いの蔦が絡みつき、捻れ、またひとつ心の牢獄を造り出す。

病院生活が始まって以来、彼女が編み続けてきた蔦の牢獄の数がどれ程のものか、恵美子はもとより周囲の誰一人として知る術は無かった。

もし加夏子の闇を理解する者がいるとしたら、それは…

いつにも増して憂いの色を濃く宿した顔を心と上げ、加夏子が恵美子をじっと見た。

「ん？ なに」

視線に気がついた恵美子がクリップボードにペンを添えて差し出すと、細い指がさらと短い文字をしるす。

最近筆談すら億劫になりがちに加夏子にしては珍しく急いた様子に興味をそそられ、恵美子はボードに目をおとした。

ジュンはどこにいるの

それだけ。

ボードの向こうに、訴えかけるようなまなざしをひたと据えた加夏子が静かに座っていた。

この娘はここから出たいのだ

病室ではなく、『ここ』から連れ出してくれる者を待っているのだと、理屈ではなく直感が恵美子に教えた。

ただ仲良しに会いたくなかったんじゃない、あの王子さまは、彼女の閉じ込められている部屋の鍵を確かに持っているのだ。

看護師としてのプロ意識が恵美子にしらを切らせた。

「ジュンって… ああ、堀川殉くんね。彼なら居ないわよ。一時退院で帰宅中ね」

事務的に返答すると、加夏子は酷く落胆したように車椅子を窓の外へと向けた。

外は晴れてはいなかった。

第四章

昨日の陰鬱な空が嘘のような快晴であった。

湿度も低く、肌に触れる空気がサラサラと心地よい感触を伝えてくる。

天気の良い日はいつもそうしているように、加夏子は詩集を膝に、中庭の木陰へ車椅子を停めていつものように朗読を始めようとしていた。

そういえば…

ジュンと初めて会った日も、こんな気持ちのいい風が吹いていたっけ

たったの1週間。

それっぽっちの空白がひどくもどかしく、腹立たしくもあった。

一時帰宅って、ジュンの家には誰もいない筈じゃない、ひとりぼっちの家に帰って何があるっていうの？　ここならワタシだっているのに

理不尽な想いであるのは判っていた。

彼にだって家に、病院ではなく自分の家に帰りたいという気持ちがあっても当たり前だと頭ではわかっていた。

それでもジュンに会いたい…

会ってワタシの『声』を聞いてほしい…

話をしたい、いっぱい、ウンとイッパイ…

背後から草を踏む音がした時、彼女は何故か願いが聞き届けられたと思った。

ジュン！

車椅子のホイールを勢いよく回し、期待を込めて後ろを振り向いた。

膝の上から中原中也の詩集が落ちる。

「よう！　いい天気だな、嬢ちゃん」

笑いながら近付いてきたのは、いつもリハビリの訓練に付き添っている中年のトレーナーだった。

近くまで歩いてくると、彼は加夏子の足許に落ちた詩集を拾い、軽く叩いて土を落とした。

「中也か。若いのにずいぶん屈折した詩を読むんだな」

屈託なく話すその男が、皆から銀さんと呼ばれていた事を思い出した。

「『在りし日の歌』なら俺も読んだ事があるぜ。もっとも嬢ちゃんと違って、初めて読んだのは四十を過ぎてからだけだな」

かなしい心に夜が明けた

うれしい心に夜が明けた

野太い声が、ゆっくりと一編の詩を詠う。

加夏子がハッと表情を変えた。

その詩の題名は、

『青い瞳』

「嬢ちゃんが誰を待ってるか見当つくよ。俺達は軀を直す手伝いは出来るが、それ以外はからっきしだ。悔しいがアイツにゃ敵わん」

銀さんが指さす方を向くと、人影が一つ、陽炎に揺られながら近付いてきた。

「ヤァ」

1週間ぶりの、あたたかい笑顔がそこにあった。

◇

どうかしてしまっただんじゃないかしら

自分でもそう思う程、次から次へと加夏子の頭の中には言葉が浮かんできた。

時間も経緯も脈絡もすっ飛ばして、止めようのない想いの洪水が溢れてくる。

ジュンが、チョット待ってよと苦笑しながら諭そうとしても、彼女の想いの『流れ』はまるで土石流並みであった。

「カナちゃん、もうチョットゆっくり話してよ、ちゃんと聞いているからさ」

「(ダメ！ ジュンが黙って家にもどっちゃったのが悪いんだからね!)」

ピシャリと言い放ち、加夏子はますます脈絡の無いエンドレスな話に没頭していった。

◇

薄く開いたドアの隙間から、二人の奇妙な会話を覗き見る者がいた。

「銀さん…どう？ あの二人。ワタシにはどう見ても、あのコ達がちゃんと意思の疎通をしているようには見えない。でもなにかしら、あの愉しそうな姿は」

恵美子の後ろでは、難しい顔をした銀さんが腕を組んで立っていた。

「フムウ〜…」

「ンもうっ！ さっきからそうやって唸ってばかりなんだから。おかしいとは思わないんですか？ 彼女、話せないんですよ。さっきから彼が一人で赤くなったり青くなったりしてるだけ。でも見て下さい、あんなに表情をコロコロ変えて…あんなに愉しそうに。初めて見た」

小声ではあったが、恵美子は興奮した口調を隠そうともしなかった。

「彼は絶対！ 彼女と直接コミュニケーションを取っています。この様子が何よりの証拠ですよ！」

「エミちゃん…」

「これが彼の『幸福の王子』である秘密なんですよ！ 彼さえ居れば、自閉症の子だって心を開けるかも知れない。治療法の無い人達にも希望が出てくるんじゃないかしら！ うまくいけば…」

「エミちゃん！」

銀さんが怖い顔で恵美子の両肩を掴んだ。

「あの坊やは俺達の道具なんかじゃない。あの子はな、ああやって誰に頼まれた訳でもないのに、毎日病室を回って、淋しそうなコ、哀しそうなコ、退屈で壊れてしましそうなコの話聞いてやってるんだ。自分だって目が見えないくせにな。俺達はいつも陰から見てる、坊やが手に負えなくなった時にはいつでも助けてやれるようにな」

どこか哀しそうな顔をした銀さんが言った。

「放っておいてやろうぜ、な？」

銀さんの言葉に、恵美子はそれ以上にも言えなくなっていた。

◇

外出許可が出たのは、殉が病院に戻った翌週の事だった。

入院してから初めての外の世界…

加夏子はずっと拒否していた。

何故だか判らない、でもこの病院の外にはとてつもない怪物が待ち構えていて、一步でも門を出ればひとくちでワタシを頬張り、噛み砕き、骨も肉も無いグチャグチャの塊になるまで味わって、ゴクンと飲み込んでしまうに違いない

理由も無くそうだと確信していた。

ちがう

何かがひどく間違っている

そんな風に思えるようになったのは、ジュンと話すようになってからだと加夏子は思った。

自分では一度も世の中を視た事の無い彼の言葉。そこには『真実』があった。

まともに見開いているというだけの目には決して映る事の無い、ありきたりな、何処にでもある、でも絶対に偽りじゃない風景が目の前にあるかのようにありありと感じられるようになったのだ。

そして、決めた。

出てみよう、と。

「（…チョット、いってくる、ね…）」

病院の正門で迎えを待つ間、加夏子はずっと黙っていた。

『声』を出すのがひどくしんどかった。

「（ひと晩だけだから、すぐ帰ってくる。荷物だってそんなに持っていかないし）」

加夏子は車椅子の手摺を睨んで、うつむいたまま『話して』いた。

「言い訳してるみたいに聞こえるよ」

殉が笑いながら答えた。

「僕だってこの間は帰ってきたんだ。カナちゃんだって帰ってあげなきゃ。お父さんやお母さんも待ってる筈だよ」

「…」

「もしかして『この前は散々、一時帰宅したジュン君をなじっておいて今度は自分が帰っちゃったりしたら格好がつかない』、な～んて思っちゃったりしてるの？」

「…」

「ねえカナちゃ…」

「(そんなのじゃないっ!!)」

殉の言葉を覆い隠すように、加夏子の想いが『声』となってほと走った。

「(私… ワタシ怖い、どうしてだか知らないけど怖いの! スゴく怖いっ!! 行きたくないっ!!!)」

車椅子から身を乗り出して殉にしがみ着いた。

「(やだヤダッ、やっぱりヤダァ!!…)」

幼な子のように怯える加夏子の背をさすりながら、殉は優しく囁いた。

「大丈夫。君には家族がいるから」

そして、近付いてくる白いクラウンに手を振ってみせた。

◇

エアコンが程良く効いた車内は快適だった。

加夏子は後部座席で身を反らせ、遠ざかる病院の建物をいつまでも見つめていた。

「カナちゃん、やっと病院の外に…ううん、家に帰ろうって気になってくれたのね。連絡があったとき私、すこし泣いちゃった」

助手席で加夏子の母、清水紗季子が白いハンカチを膝の上で握りしめながら呟きかけた。

品の良い藍色の和服が、小さな軀と小さな声を包んでいる。

「この一年、どれだけこの日を待ったか。ねえアナタ」

ハンドルを握る男は、彼女とは対照的に威丈夫の巨漢だった。

加夏子の父、清水恒彦はそのいかつい体軀からは想像出来ない優しく弾んだ声で言った。

「ああ、パパはなあ、もう嬉しくってウレシクって、昨日の夜なんかロクに眠れなかったんだぞ！　今夜はカナの大好きなカルボナーラだ、ママが腕によりをかけて作ってくれるからな！！」

後ろを振り向きはしなかったが、彼の声は喜びに満ち溢れていた。

加夏子はまだ後ろを向いたままだ。

「カナちゃん、ずっと病院の方を見てるのね。さっき見送りに来てくれてたコ、仲良しなの？　もしかしてボーイフレンドなのかしら？」

「よさないかサキ。カナだって年頃なんだ、ボーイフレンドの一人や二人いたって不思議じゃないだろ、ましてや長い病院生活だ、色々話したりする同い歳の友達だって出来るさ、ナァ」

前席で両親が話し続ける間、加夏子は一度も前を見ようとはしなかった。

まるでそこには誰も居ないかのように。

まるで世界で自分一人が呼吸してるかのように。

まるで…

蛇にいざなわれ、楽園を追われたイブのように。

それでも彼女の両親は話し続けた。

絶え間無く、途切れることなく。

やがて完全に病院が見えなくなると、加夏子は初めてゆっくりと前を向いた。

お喋りが止み、車内をしばし沈黙が包み込む。

……

二人を見る加夏子は静かに、静かに微笑んでいた。

第五章

どこにでもいる当たり前の家族の姿だった。

人影のまばらなアウトレットモールを散策し、隣接するヨットハーバーから吹く潮風の中を仲良く三人で進む。

大柄な父親はよく喋りよく笑った。

娘も、娘に寄り添う母親もその様子に釣られて笑顔をこぼした。

普通と違うのは、車椅子に座った娘が一言も言葉を発していない事だった。

◇

板張りの栈橋で、買って来たパンをちぎっては群飛ぶカモメに放って飽きることのない娘の姿を、少し離れた所から両親が見守っていた。

「あのコったら、あんなに愉しそうに… 病院を出る時は死刑台に引きずり出されるみたいな顔をしてたから心配だったけど、とても良くなってそう。まるで今にも歩きだしそうじゃないですか」

眩しそうに手をかざしながら、紗季子が傍らの夫に話し掛けた。

だが恒彦は先程までどうって変わり厳しい顔で押し黙っていた。

「アナタ？」

「昨日、あの子の担当医と話した。リハビリトレーナーも交えてジックリとな」

「それで、先生は何ておっしゃってたの」

「背中の傷はこの一年でほぼ回復したそう。元々、重要な部分には殆んど傷は無かったし、神経を圧迫していた骨片も三回の手術でほぼ除去する事に成功した。にも関わらず加夏子の足は一向に動く兆しすら無い。言葉も戻ってこない。それに」

「あの事はまだ、なのね」

「ああ、何も思い出さないそう。あの日の記憶は、一年経った今も何一つ戻ってきていない」

太い溜め息が恒彦の口から漏れた。

「交通事故、か。そう信じ込む事で加夏子は恐怖を封じ込めたのだろうと医者は言っていた。だがその力が強過ぎて、自分が歩けたことも、喋れたことも、一緒に忘れてしまったんじゃないかとも言ってたよ」

胸のポケットからマルボロの箱を取り出しながら、どこかすがるような目で恒彦が紗季子を見た。

「なあ」

「？」

「もしかしたら、あの子は今のままのほうが幸せなんじゃないだろうか」

「そんな！ アナタったら」

紗季子は絶句した。

「歩く事や口をきく事を思い出すのが、加夏子の忘れてしまいたい恐怖を呼びさます事になるというなら、いっそのまの方が…」

タバコの火はつかなかった。

太い指の間でライターが震えていた。

◇

久しぶりの一家団欒の食事。

忘れかけていた父と母の暖かさ。

手作りのカルボナーラはひどく懐かしい味がした。

パパもママも、本当にワタシの帰りを待っていてくれたんだ

加夏子の想いは複雑であった。

今日まで病院で過ごしてきた一年間がすごく遠回りだったような、実体の無い脅迫観念に縛りつけられ続けてきたような、そんな気分であったのだ。

事故の怪我だってもうだいぶ良くなったって先生も言っていたし

そろそろ家に帰ることを考えなきゃダメかもな

ワタシ、何であんなに病院から出るのを怖がってたのかしら

こうして自分の家に戻り、父や母の変わらぬ笑顔に触れていると、加夏子は今までの自分が不思議に思えてきた。

ワタシ何も変わっていない

歩けないのと喋れないのを除けば

そんなの、べつに大したことじゃないや

加夏子の中で、その二つはさして重大な事では無かった。

普通ならそれだけで生きる希望を根こそぎ奪われてしまっても不思議ではない。

実はそこに異常な心の働きの加わっているという自覚が、彼女の中からはスッポリと抜け落ちていた。

◇

病院食と違いボリューム豊かな夕食にお腹が少し苦しくなった加夏子は、腹ごなしにリビング脇のスロープから庭へ出てみた。

潮の匂いがする夜風に髪がなびくに任せていると、庭に面した路上に人影が動いた。

全身の毛が逆さに立ち上がった。

「(…だれ…)」

「もしかして… カナちゃん、なのか？」

「(…憲一、くん?)」

加夏子は目を見開いた。

長身。ソフトな声。濃い色のジャケットを羽織った、ガッシリとしたシルエット。

海外留学へ出たきりずっと会っていなかった隣家の幼馴染みが、二年前より大人になった姿でそこに立っていた。

ケンちゃん…

ケンちゃんだ！！

夢中で車椅子のホイールを回し庭の端まで来ると、柵越しに身を乗り出してひしと抱きついた。

会いたかった

あいたかったよ

おかえりケンちゃん

声を出さずただただ涙を流して抱きついている加夏子の背を、彼…速水憲一は優しく撫でた。

「帰国したばかりなんだ。ゴメンよ、ずっと連絡しないで」

加夏子が激しく首を振った。

「事情があって帰ってこれなかったんだ。親の勝手なんだけどね。もしかしてと思って外へ出てみたらカナちゃんがいた。よかったよ、ホントに… ゴメン」

頭を下げる憲一に加夏子はもう一度首を振った。

とにかく再会できたこと、それが嬉しかったのだ。

だが。

「大変だったね。相手は通り魔だったんだろ？ ひどいことしやがって」

えっ？

◇

父さんがロンドンまで国際電話をかけてきたんだ

カナちゃんが大変だと

予備校の帰りに通り魔に襲われて切られたって

重傷で命の危険もあるって

飛んで帰りたかった

でも飛行機の席がなかなか取れなくて

そのうちにまた連絡があって

命は助かったけど足が動かないと伝えてきた

御見舞いには必ず行くからお前はしっかり勉強を続けろ

そんな事言ってきた

何度もなんども帰ってこようとしたんだ

その度に止められて、挙げ句『今帰国したら学費は出さないぞっ！』て

まったく何考えてんだか

やっと帰国したら今度は病院の名前も教えてくれないんだ
おかしいよ

でもやっと会えた…
ヨカット

憲一の話を知る加夏子の思考は凍り付いていた。

なに、それ
ワタシ事故で入院してたんだよ
パパやママだって怪我しちゃって、救急車だって来て、おまわりサンがたくさんいて…いて…運ばれて…ストレッチャー…

警官…
 会話…
 無線の…

.....

◇

「被害者は女性、えー、学生証から確認、〇〇高校の生徒、えー、氏名は清水 加夏子サン、17歳。鋭利な刀状の凶器と思われます、背後から斜めにキズあり、えー、只今から搬送します。重傷です。…はい、はい、事情聴取は出来ません、は？ 無理です、今すぐ運ばないと危ないと隊員が… だから！ 無理だと言ってるだろう！！ 犯人？ そんなモノとっくに逃げてるよ！ 応援の要請はどうなってるんだ！？」

喫茶店の前の暗い路地。
首を回すと警官が一人、無線に向かって叫んでいた。
手も足も動かない。横にされ縛られ宙に浮いている、へんな感覚。

「搬送先は〇〇病院です、警察も同行しますか？」

救急隊員が息せき切って警官に聞いた。

「アァ、俺が行こう。他の者は現場保存と事情聴取だ」
「では早く乗って！」

◇

見知らぬ映像が脳裏を流れてゆく。
その時…

バンッと何かの弾ける音がすると、失われた記憶の奔流が凄まじい勢いで溢れ出してきた。

駄目、そこを開けちゃだめ
思い出しちゃダメなんだって

それ以上喋らないで、ワタシに見せないで、アレを…あれだけは駄目っ！！

背中に激痛が走った。

傾き倒れてゆく世界の隅を、黒づくめの男が走り抜ける。

切長の冷たい目がこっちを一瞥してニヤリと笑った。

絶叫とともに憲一を突き飛ばした加夏子は、車椅子からころげ落ちて失神した。

悪夢が蘇った。

第六章

夜の病院には不自然な静けさがある。

広大な敷地に反比例して、そこには人間の生活する音、それにつきまとうように沸き起こる種々雑多な背景音が欠け落ちている。

墓地の不気味なまでの静寂とも違う人工的な沈黙が、毎夜繰り返されるのだ。

秋の訪れと共に首筋を撫でるようになった、少し冷たさを感じさせる夜風に襟を立てながら通用口を出てきた男がいた。

警備員に挨拶を交すと表門を目指して歩き出す。

もう三年、か

何年通っても、このビョウインのフニキって奴には慣れやしない

ヤレヤレ…

帰りに一杯やる店を頭に思い描きながら、銀さんは足を早めようとした。

「ん？」

表門に続くエントランスの途中、中庭の芝生に立つ街灯の下に人影がひとつ。

真っ直ぐに立ったまま動かない。

顔を天に向け、星を見ているようにも見える。だがその表情は厳しく険しい。

「ヨウ坊や、今夜はこんな時間に天体観測かい？」

空など見える筈が無いのは百も承知で、銀さんはその影…殉に話し掛けた。

「判ってましたよ、銀さん。『声』が聞こえたから。今から飲みに行くんでしょ？」

ゆっくりと顔を降ろし殉が銀さんの方へと向き直った。

この坊やはいつもこうだと銀さんは思った。

目が見えなくとも、相手へ向かい話すのが礼儀だとチャンと知っている。

「ホメてくれるのは嬉しいけど、飲み仲間が待ってるんじゃないですか？」

「そんな事まで『聞く』こたあないぜ」

銀さんは、ジュンの持つ特殊な力にはもう慣れていた。

照れながら問い返す。

「坊やこそ、こんな時間に何してんだ？ 随分キツイ顔をしてたぜ」

ジュンの顔から笑みが消えた。

「イヤな… 嫌な感じがするんだ。何だか判らないんだけど」

銀さんの表情も曇った。
殉の予感はずと言っている程当たるのを彼は知っていた。
その時だった。

「っ！！」

殉が耳を押さえて蹲った。

「おいっ？ どうした！」

銀さんは慌てて駆け寄った。

「声が…悲鳴が…聴こえる…ヒドい…」

突然の出来事にうろたえながらも、頭を振って苦しむジュンを彼はしっかり抱きかかえた。

「しっかりしろ！ オイツ！」

「…壊れた…カナちゃんが壊れた…」

小さく痙攣を始めた殉を肩に担ぎ、目を吊り上げた銀さんは今来た道を走りだした。

◇

何も見えぬ、聞こえぬ漆黒の路を加夏子は歩いていた。

灯り一つささない。
そのくせ、時々ボウと何かが視界の隅をかすめ消えてゆく。

風景であったような
人か獣の姿であったような

恐ろしい程の孤独感が彼女を押し包む。
助けを呼びたくとも、ここには誰も居ない事を彼女は知っていた。
ここは彼女がよく知る場所、永い間つむぎ続けてきた鳶の牢獄だった。

意識する事無く封印してきた忌まわしい記憶。
その扉が開かれた時、加夏子は逃げ出したのだ。
誰も追ってこない、それ故に誰一人居ないこの場所へ。
絶対の安全があった。
それは同時に完全な孤絶をも意味した。
夢中で心の牢獄に逃げ込んだ彼女がそれを理解するには、その心は余りに幼く、繊細に過ぎた。

だれか…
誰かいらないの？
ワタシはここよ

パパ、ママッ
センセイ、衣笠さん、銀さん
ケンちゃん
ジュン

どうして誰も返事してくれないのっ？
出して、ワタシを此処からだしてえー！！

………

叫び声が虚空に木霊する。
正真正銘のひとりぼっちだった。

あてどなく歩き出した。
足許だけが鮮明に見えた。
重く厚く積もった枯葉が、泥田のように続いている。
少しずつ沈み始めていた。
足首から脛、やがて膝までズブズブと枯葉の中に沈み込んでゆく。

やがて歩く事すら出来なくなった。

胸から首まで埋まってしまうと、自由になるものは二つしかなくなった。
見るのと、考えるのと。

加夏子は必死に思いを巡らせた。
大事な何かをうまく思い出せなかった。思考が定まらない。

暫くして人がひとり、こちらに来るのが見えた。
ゆっくりとズームのように、その姿が大きく鮮明になる。

ジュン！

その名前を口にした瞬間、何事も無かったかのように加夏子は路の上に立っていた。
しっかりと堅い路面を、うつ向いて立つ殉に向かって駆け寄った。

ジュン
来てくれたんだね
ワタシ…わたしね…

彼が顔を上げる。
細い目がニヤリと笑った。

『あの男』の顔をした殉は、絶叫する加夏子をメッタ斬りに刻んでいった…

◇

倒れた殉を追うように病院へ搬送されてきた加夏子は、すぐさまERに担ぎ込まれた。
命の灯が、消えかけていた。

第七章

集中治療室（ICU）の前に立つ人影が、二つ。
窓から漏れる明かりがうっすらと半身を照らしていた。

恒彦と憲一だった。

「僕が余計な事を言わなければ、彼女は…」

「いい、済んだ事だ。君は知らなかったんだからな」

「しかし…」

「遅かれ早かれ、カナは思い出さねばならなかったんだ。いつまでも偽りの平穏の中で暮らすのはカナ自身の為にならない、それは判っていた事なんだ」

沈みきった顔で傍らに立つ憲一を振り返ることもせず、恒彦はICUに横たわる娘の姿を凝視していた。
固く握られた拳がミシミシと音を立てる。

「このままでもいいんじゃないかと何度も思ったよ。加夏子があ的事件を忘れていたら、不自由な軀のままでも、私や紗季子が一生、あの子の支えになってやればそれでいいと… だがな、ひとひとり生きてゆかねばならないんだ。あの子の一生が終るその日まで、私達が付き添ってやる訳にはいかないんだよ。いつかは先に逝かねばならない。だが…」

ゴンッ！

恒彦の大ぶりの拳がICUのぶ厚いガラスを叩いた。

「君の帰国は速水君から聞いて知っていた。止めるべきだったよ。甘かった」

後悔と懺悔の入り混じった、血を吐くようなひと言だった。

暫くして医師が一人、ICUから出てきてマスクを外した。

「先生、娘は…」

感情を押し殺した声で恒彦は医師に尋ねた。

「既に三回、蘇生処置を施しています。残念ですが、この様なケースは現代医学では対処し切れません。最悪の事態も覚悟しておいて下さい」

沈痛そうな顔に、お手上げの四文字を張り付けた医師が告げる。

「それが医者と言うセリフかぁ！ 何とかせんか、娘を助ける！ 助けるんだぁ！！」

抑えていた感情が一気に爆発した。

絞め殺さんばかりの勢いで恒彦が白衣の襟を絞め上げる。

止めに入った憲一を跳ね飛ばした彼は鬼の形相であった。

ヤメテッ！

廊下の隅から声があがった。
待ち合いのソファに俯いて座ったままだった紗季子の叫びだった。

「…止めてください、アナタ…」

幽鬼のような顔のままジッと恒彦を見ている。
彼の動きが止まった。

その時。
足音が近づいてきた。
銀さんと、彼に支えられた殉だった。

「僕に… ボクにやらせて下さい」

三人が三人とも殉を見た。

.....

そうではなかった。
虚ろだった紗季子の目が大きく見開かれていた。
殉の隣りで、銀さんもまた凍りついたように立ちすくんでいた。

◇

ベットに横たわる加夏子。
その横に置かれた椅子に、膝を揃えて背をピンと伸ばした殉が瞑目して座っている。
既に15分が経過していた。

「いきなり現れて『任せてくれ』って。彼も患者ですよ？ 顔色だって酷く悪いし…」

そう恒彦へ問掛けた憲一自身、今は藁にもすがりたい気持ちだった。

「医者がさじを投げたんだ。相手が死神でも取引するよ、今は」

恒彦もまた、憲一と同じ気持ちであった。
困惑した表情の中に、微かな望みにしがみつくと必死さが見え隠れしていた。

「彼は何をしようとしているんだ」
「多分、お嬢さんの心の中に入ろうとしてるんじゃないかと思う」

恒彦に問われ、さっきから妙に緊張した表情の銀さんが答えた。

「そんな事が出来るのかね？ あの半病人のような少年に」

「判らねえ。確かにあの坊やには不思議な力がある。現場で何度もそれらしい場面を目にしてきた。だか死にそうな子を蘇らせたなんて事は無かった」

憲一がはっと顔をあげた。

「もしかして…サイコイン…なのか」

「なんだ憲一くん、そのサイコ何とかというのは」

「サイコロジカル・インターフィアランス（精神干渉）。大学で以前、心理学の教授が特殊事例の一つとして講義した事がありました。他人と同調し、そこに何がしかの影響を及ぼす人間がいる。現象としては様々ですが、彼等の行いを総称して精神干渉、サイコインと呼ぶそうです」

「スプーン曲げみたいなもんか」

落胆した様子で恒彦が言った。

「超能力とは違うそうです。教授は言っていました、ある意味『常能力』である、と」

「…コーヒー、買ってきますね」

紗季子がゆらりと立ち上がると、精気の無い足取りで自販機コーナーへ歩き出した。ふらふらと廊下の奥に消えてゆく。

「俺も一度、当直の所へ戻ります。清水さん、坊やを信じて、ここは任せてやって下さい」

一礼すると、銀さんも紗季子の後を追うように暗い廊下を歩き去っていった。残された恒彦と憲一は、ただ祈るしかなかった。

◇

廊下の突き当たり。そこを折れて少しいった所にある、非常灯の下の自販機前。歩いてきた銀さんの前に、小柄な和服の女性が立っていた。

紗季子だった。

「こんな所で会うとは思わなかったわ、久我さん」

「サキ…」

二人を囲む空間だけが、鈍く時を凍らせていた。

銀さんと、紗季子。

どちらも、相手の目を底まで覗き込むように見つめ合ったままジッと動かなかった。先に口を開いたのは銀さんだった。

「…元気、だったか？」

紗季子が固い表情のまま微笑む。

「おかげさまで…ってというのはおかしいわね、勝手に居なくなったひとには」

「…」

「6年、かしら」

「7年だ」

「そう」

感心無さげに目をそらすと、ハンドバックから細いメンソールの煙草を取り出し火をつけた。

先程までの脆く崩れ落ちてしまいそうな佇まいの下から、何処か下卑たふてぶてしさのようなものが姿を現していた。

「タバコ、まだ吸ってるのか」

「余計な御世話。7年で変わるものもあれば、変わらないものもあるのよ」

「俺は…」

言い淀む銀さんに構わず、紗季子が言葉を続けた。

「あの日、貴方は死んだと思った。ビールでも買いに行くようにフラリと部屋から出て行って、それっきり。店にも来ない。電話も何も繋がりがりゃしない。夜が怖かった… 真っ暗な部屋で枕を抱えて、帰らないかも知れない男を待つ女の気持ちって知ってる？」

フウ〜っと煙を吐き出す。

「そして翌朝の新聞。『中華街で発砲事件。死者、負傷者合わせて9人』私がどんな気持ちでそれを読んだか、アナタにはわからないでしょうね」

紗季子の目の光が強くなった。

「あの時、死んだよ。ここに居るのは生まれ変わりか、死にぞこないなのか、俺にも判らねえ」

非常灯が照らす銀さんの横顔には、疲れ切った老人のように深い皺が刻まれていた。

「結婚…したんだな。まさかあの嬢ちゃんの母親がサキだとは思わなかったよ」

「一年も入院してたのに気付かないなんて、へんね。主人はお店の常連だった。奥さんを病気で無くしたの。男を無くした私と関係が出来るまで、それ程時間はかからなかった」

短くもない煙草を灰皿に捻り消し、紗季子は銀さんに背を向けた。

「突然、10歳の子の親になっちゃったのよ。おかしいでしょ？ あの子、とてもいい娘だった。後妻の私を実の親のように慕ってくれた。それなのに…それなのに、どうしてこんな事に…」

ぽつん

ぽつん、ぽつん

暗い廊下に、雨粒のような染みがふたつ、みつつ。

静かに落ちては小さな染みを作っていた。

紗季子の涙だった。

気がつくと、銀さんは紗季子を後ろから抱きしめていた。

大丈夫

大丈夫だって…

第八章

それは未知の経験だった。

今日まで他人の『心の声』を遠く近く聴き続けてきたが、心の中にまで入り込もうなどという事を殉は考えた事すら無かった。

彼にとって『心の声』とは、いわば通りすがりの道に面した家々から漏れ聞こえてくる団欒や喧騒の音と同じものであった。

時に関心を持ち聞き耳を立てる事はあっても、門をくぐり、家の壁や窓に耳を押し当ててむさぼり聞くものでは決して無かった。

ましてやそれ以上の事をするとなると、もはや敷地に入り込むどころの騒ぎではない。

勝手に玄関から奥に上がり込むに等しかった。

だが今、彼は加夏子の内なる迷宮を進んでいる。

自分と加夏子が強くシンクロしているという確信が殉にはあった。

それが皮肉な運命から生じたものだという自覚は、まだなかったにせよ。

◇

まるで密林だった。

出鱈目に密集した木々、幹の見えぬほど絡まり合った藁は、加夏子の内面を彼が視覚化したイメージだと判っていても邪魔で、前進を阻む障害物に違いなかった。

藁の棘は、日本刀の切っ先の形をしている。

背筋に冷たいものを感じながら殉は先を急いだ。

切り傷だらけになりながら夢中で藁の森を進んでゆくうちに、いきなり何も無い空間に出た。

いた

ポツンと独り加夏子が立っていた。学生服が簾のようにズタズタだ。

白い肌に張り付いた布の残骸が奇妙なデザインの服のように見える。

殉は近づくと、加夏子の肩を掴み強く揺さぶった。

「カナちゃん、僕だ、ジュンだよ！ 助けに来た。帰るんだ、こんな所にいちゃいけない！」

加夏子の虚ろな目が落ちる程見開かれた。

「イヤァ！ もう許して、私を斬らないで！ お願いだから来ないでえ！！」

「なに言ってるんだ、僕だよ、忘れちゃったのか？！」

激しく暴れる加夏子を殉は強く抱き締めた。

ひしと抱き、動きが収まるまで待っていた。

不意に腕の中の抵抗が消えた。

血の気が失せた加夏子の腕がすうっと持ち上がる。

「アレハ、アナタ？」

殉は加夏子の指差す方を見た。
長身の男が立っている。その手に、真っ赤に染まった刀がひとつ。

喉の奥が凍りついた。

兄さん…どうして…

◇

風などないのに、微かに揺らいでいるように見えた。
加夏子の記憶が造り出したその男は、

痩せた長身
黒衣
切長の目
酷薄な唇
手に提げた刀

それ以外の細部は全てぼやけ、周囲の闇と交わるかのようにディテールがはっきりしなかった。

時折、男の周囲が光る。
青、赤、黄…
花火のような刹那の光の中に、幾つもの光景が浮かんで消える。
全てが、目の前に立つ男の映像だった。

喉にわだかまる呼気の塊を殉は飲み込んだ。
彼は盲目のままこの世に生を受けた。生身の目で世界を見た事が無いと加夏子に語ったのは嘘ではない。
だが彼は、この世界を全く『視た』事が無い訳ではなかった。
ごくまれに『声』と同じく他人の視覚から情報を得る事があったのだ。

当たり前の風景では無い。
自分のものではない目… 他人の意識やその状態…
視覚以外の五感から流れ込んでくる様々な情報…
それらが幾重にも重なり混じり合った、歪んだ世界の姿。
何の前触れも無しに頭に浮かぶ『世界』を、幼い頃から今日まで彼は嫌悪してきた。
こんなに醜く歪んだ世界を直視しなくてよい自分の境遇に、密かに感謝すらしていた。

そんな彼が鮮明に覚えている数少ない映像の一つが、唯一の庇護者であった兄の姿だった。
弟に見せるべく、鏡の前に立ち微動だにせず自らを凝視する兄の姿を、彼は尊敬と羨望と共に心の奥深くに刻み込んでいたのだ。

今、目の前に立つ男の姿は、細部こそはっきりしないものの彼の兄の姿に余りにも酷似していた。
何よりも切長の目に宿る強烈な意思の光が、それが長らく会っていないたった一人の彼の肉親である事を殉に告げていた。

判らない

あれは確かに兄さんだ

でも…でも…

嘘だ

「兄さんが… 兄さんがカナちゃんを、こんな酷い目にあわせたっていうのか。嘘だっ！！！」

男が薄く笑う。

それは殉の知る、孤独と慈愛を背負った優しい兄の笑みでは決してなかった。

乾いた、狼の目。

「お前は兄さんなんかじゃない！ お前はカナちゃんを食い尽そうとしている食人鬼だ！！」

強い怒りの念が沸き起こる。

すると男の姿が一瞬、大きく揺らいで見えた。

もしかして…

そうか！

殉は思念を凝らし男を睨みつけた。

消えろ

きえろ！

きえてしまえ！

きえろキエロキエロ、きえろお～！！

口ウソクの炎のように、殉の思念が男の姿を大きく揺らした。

殉は気づいたのだ。

ここはカナちゃんの心の中

そして彼女は、無意識にせよ僕がここまで入り込む事を許した

僕らの意識が強く同調していなければ、こんな事は出来なかった

それなら僕が直接、彼女の意識に影響を与える事も出来る筈ではないか

ユラユラと右に左に揺れる男に、殉はありったけの思念をぶつけ続けた。

悪夢の形が陽炎のように薄らいでくる。

ここへたどり着く途中で見た、鶯の模様にしか見えなかった加夏子の断片的な記憶。

それが、殉の向かおうとしている場所がどんな所なのかを教えてくれた。

ここは恐らく、加夏子にとって最後の避難所だったのだろう。

長い間彼女は、ここへ逃げ込む事でおぞましい過去からの迫害を逃れてきたのだ。

だがその記憶が何かの拍子に戻ってしまい、同時にあの男は、彼女の最も中心となるこの場所に居座ってしまったのだ。

もうここは避難所では無い。屠殺場だ。

際限無く切り刻まれ殺され続ける地獄から逃れる為、彼女の肉体は生命活動を止めようとしていた。

そんな事はさせない
あと、あと少し…

渾身の念を殉が放つ。
朧になった男の姿が、その力で霧散した。

やったぞっ！

◇

薄明るくなった闇の中、じっと動かない加夏子を抱いて殉は立っていた。

「もう大丈夫。怖いものなんてもう何もないから。帰ろう。みんな待ってる」

そっと腕の中の加夏子に話しかけた。
身じろぎもしなかった加夏子が、糸に引かれたように顔を上げる。

殉の背に戦慄が走った。

「イルジャン、ココニ」

加夏子の右手が刃と化して殉の腹に突き刺さっていた。

「か…カナ…ちゃ…ん…？」

気がつくと殉は、黒衣を着て手に刀を掲げていた。

「違う… 僕はあいつじゃない、アイツは僕の兄さんなんかじゃない！ 違う、ちがうんだああ！！」

… ヒ、ヒ、ヒャ～ハハハハハ …

狂気をはらんだ哄笑が響き渡った。

第九章

安らかな寝顔だった。

あの夜からもう三日が過ぎていた。

ベットの脇に腰掛けた紗季子は、目を醒まさぬ娘の髪を指で撫でてみた。

艶やかな黒髪が指先をくすぐった。

よく判りもしない原因で死にかかっていたというのに、何をもって助かったと言えるのか

峠を越えたようだと言った医師の言葉も、彼女の不安を拭ってはくれなかった。

あの時、加夏子の隣に座り、一心不乱に祈りを捧げる司祭のように全身を汗まみれにして、あげく大量の血を吐いて別の病室に運ばれていった少年がいた。

彼が何をしたのか、憲一の説明を聞いたところで紗季子にはよく判らなかった。

判らなかったが。

あの夜、彼が加夏子を瀕死の状態から救ってくれたという事を、紗季子は疑っていなかった。

お願い、目を開けて

カナ…

◇

髪を撫で続ける紗季子の後ろでドアの開く音がした。

「お嬢さんの様子はいかがですか、清水さん」

看護師が一人、検査セットを手に紗季子の脇へ来た。

恵美子だった。

「御主人が戻られたら一度、御休みになられた方がいいのでは？ もうずっと付き添っていらっしゃいますし。軀がもちませんよ」

「ありがとう、衣笠さん。私は大丈夫」

そう答えた紗季子の目の下には、ファンデーションでは隠し切れない程ハッキリと隈が出ていた。

疲れ切っている…

しっかりと背を張ってはいるが、いつ疲労と心労で倒れてもおかしくないと恵美子は思った。

空きのベットがひとつ必要になりそう

点滴のブドウ糖が1パッケージ、いえもう一つ…

私情に流されない自分が恵美子は時々嫌になる。

看護師としては有用な資質なのだろう

でもこんな時、励ましてあげるような言葉の一つも掛けてあげたっていいのではないか

だが彼女は、それをしなかった。

「無理は禁物ですからね」

殊更に事務的な口調で言い、恵美子は手を伸ばして体温計を差し込もうとした。
その腕が思いもかけず強い力で握られた。

「えっ?!」

「今、動いた…動いたんです!」

興奮して恵美子の手を握り締める紗季子の後ろで、ゆっくりと加夏子が目を開けた。

…アイツ、ヤツツケテヤツタ…

しわがれた声が虚ろに響いた。

◇

ゆったりと広い部屋。

総木目張の内装にマホガニーの机と豪華なソファが一組。
相応の金がかかっているのが一目で判る作りだった。

机の向こうから、病院長がまだ若い医師に向かい尋ねた。

「足のほうはマダ駄目なのかね?」

「ええ、言語機能には全く障害は残っていません、テストでの受け答えもしっかりしています。脚部の痛覚検査も低数値ですが反応を見せていますし、医学的な見地からは健康体と言っても差し支え無いと思われれます。しかし…」

「動かん、か」

フゥ〜と大きく溜め息をついた病院長はシガーボックスに手を伸ばし、葉巻を一本取り出すと吸い口を切りながら言った。

「あの娘の入院も一年を越えた。一定の治療成果を出せたのは喜ばしい事だが、そろそろ次の段階について考えた方が
良いのではないかね」

「次の…段階、とは?」

言葉の意図をはかりかねた医師が困惑気味に聞き返した。

葉巻特有のトロリとした煙を吐き、茫々とした目で病院長が医師を見る。

「外科療法から心理療法に重点を移すという事だよ。精神科の九十九君は確か君の同期だったな。今後は彼をあの娘の担
当にしようと思う。ご苦労だったな」

「待って下さい!」

医師が慌てて病院長の言葉を遮る。

「覚醒後の様子が以前と異なります。妙に感情の起伏が激しくなったと言うか、攻撃的になったと言うか」
「だから精神的なケアが必要だと言ってるのだ。君は一体、何を聞いていたんだ？ 医学的には健康体だとさっき口にしたのも君じゃないか」
「『見なくても構わない』と言ったのです。何かを見落している可能性があります。大脳器質の損傷かも知れません。精神科よりも脳神経科に預けるのが先でしょう」
「これは決定事項だ」
「しかし院長！」
「…清水氏はこの一年、入院費用の他にも多額の寄付を当病院に寄越してきた。我々としては、氏の期待に沿えるよう最大限の努力をもって治療にあたらねばならん。心理療法は時間がかかる、早く始めるに越した事はない。要件は以上だ。下がってよろしい」

もはやこちらを見もしない院長に頭を下げ、若い医師は部屋を後にした。
強く握ったままの手を白衣のポケットに突っ込み廊下を歩きだす。

強欲ジジイめ、まだむしり取るつもりだ
あの娘は患者じゃなく金ズルか

彼は擦れ違った恵美子にも気が付かなかった。

◇

別館の外れまで来て、若い医師はその部屋へ入っていった。
精神科の診察室。目当ての人物はいつも通りそこにいた。

「何だよ～その辛気臭い顔は。まあ座れや」

ズイと診察用の椅子が目の前に押し出された。

「単刀直入に言う。お前わかってるのか？ 今この段階で彼女の主治医になるのがどういう意味か」
「ナニナニィ～、もしかしてキミ、銭ゲバ院長の陰謀とかナンとか思っちゃったりしてるのお～？」

腰を下ろそうとした医師はギクリとし、目の前の友人の顔をまじまじと見た。

「まったくお前って奴は… そんな情報どっから仕込んでくるんだ？ 九十九」
「だぁ～て、そんなの見てればわかるじゃん」

クシャクシャの頭をボリボリと搔きながら、九十九医師は机の上の封筒を指差した。

「こんなのどお～するのよお～てカンジ？ 成果があったって言ってもさ、アレじゃん、俺らなんにもしてないのと同じじゃん」
「なぁ長官。前にもアドバイスを貰った事はあったが、今の彼女の状態、お前ならどう見る？」

それまでチャラチャラと軽薄に見えていた九十九が、カルテを手にした途端、別人に変貌した。
黒縁メガネの奥から鋭い眼光が溢れ出し、顔付きも厳しくなる。

納豆がいきなり一流フランス料理に変貌したかのようであった。

「この所見が正確だとして、自閉症ライクな状態から長時間のコーマ（昏睡状態）を経て到った現状は、統合失調症のクランケに見られる症状によく似ている」

検査結果の報告書をめくる手が忙しく左右に動く。

「統合失調症の原因が様々なのは君も知っての通りだ。多くは精神疾患だが、極く稀に肉体的欠陥に起因するものがある。君が危惧しているのはそのケースだろう」

バサリと書類を机に投げ出し、九十九は医師に向き直った。

「自閉症から統合失調症への移行、か。あり得ないケースだ」

「だがな長官」

「いい加減そのあだ名は止めてくれないか。五十六なんて名前、頼んでつけてもらった訳じゃない」

父親が旧日本帝国海軍のファンで、子供にまで司令長官の名前をつけたという話を学生時代、彼は九十九から散々聞かされていた。

それで、ついたアダナが『長官』

「今から診察に行く。自分の目で確かめたい」

険しい表情のまま九十九が椅子から立ち上がった。

第十章

九十九たち二人が病室に入ると、少女の髪をとかしていた看護師が気配に気付いて振り返った。

「あら先生、診察には少し早いではありませんか？ 九十九先生まで御一緒なんて」

衣笠恵美子が若い医師を少しだけ睨むようにしながら言った。

「キヌちゃん…いやエミ…ああ衣笠君、今日から清水さんの主治医は彼が務める事になった。しっかりサポートしてくれたまえ」

わざとらしく咳払いをして、彼は傍らに立つ九十九を紹介した。

「今後はメンタルケアが主体になるのですか？ 彼女にはまだフィジカルケアが必要だと思うのですが」

「エ〜ミちゃん！ そんなに堅苦しく考えちゃだ〜めだって、リハビリはこれまで通りやってくからさあ〜、よろしく頼むよ〜」

「コラ九十九！ 少しは場所ってものをわきまえろ、患者の前だぞ！」

「ハイハイ、気をつけますよ〜」

漂々とした足取りで病室の窓際まで進むと、どこかおどけたステップでクルリと振り向いた九十九が、背を向けていた加夏子の顔を正面から覗き込んだ。

「君がウワサのお姫サマかい？」

うつ向き、髪をとかせるに任せていた加夏子がゆっくりと顔をあげた。

「清水 加夏子です」

しっかりとした口調。

険のある、だがどこか戸惑いを含んだ端正な顔。

瞬かない瞳。

九十九が加夏子を凝視する。

一秒の何分の一に満たない時間、二人の周りで空気が凍りついた。

「…ウン、なかなかの美人ちゃんだな。今日から僕が君の担当だ。ヨロシクね♪」

加夏子の肩を軽く叩き、九十九は車椅子の脇をすり抜けた。

そのまま病室の出口へ向かう。

今しがた見せた緊張は微塵もなかった。

「かるいヒト。でも嘘。心にメスを持ってる。ワタシ嘘つきは嫌い」

加夏子が呟く。

九十九が足を停めた。

「長官、と呼んでくれ。長い付き合いの者は皆、僕をそう呼んでいる」

暫くの間、黙って背を向けていた彼が加夏子に告げた。
若い医師が顔をしかめた。

「ちょうかん？」

加夏子が首を傾げて聞き返す。

「君とは長い付き合いになりそうだからね、じゃ」

そのまま振り向きもせず、九十九は病室を後にした。

真剣勝負になるな

白衣のポケットに手を突っ込み歩く九十九は、もう笑っていなかった。

◇

今日のリハビリも終わった
いつもと変わらず、滞り無く

清水加夏子のリハビリメニューは今まで通りに続けていた
主治医が変わろうが、物理療法を続ける限り俺達トレーナーの役割は何も変わらん

変わったのはあの娘だ

口をきけるようになったのは結構なんだが、まるで何かが抜け落ちちまったみたいに、虚ろでいる時間が増えた気がする
それでも聞かれた事にはちゃんと返事するし、メニューも以前より積極的にこなしているように見える
見掛け上は、な

だが手応えを感じない

口もきけず無表情だった頃の方が、拒否にせよ諦めにせよ内面の葛藤って奴をどこかに感じとれた
それが今じゃ、まるでじゃじゃ馬がイイこちゃんを装って周囲を欺いているかのような印象ばかり強い

いや、それも違う

悪意や作為は感じられない
強いて言うなら…

目が、冷めているのだ

まるで何もかもお見通しだと言わんばかりの、冷たくて乾いた目
そして時折見せる、年不相応な老いた表情
あの娘はあんなじゃなかった筈だ、一体、何がどうなっちまったんだ
それとも、変わっちまったのは俺の方なのか

トレーニング室の器具を片付けながら、銀さんは物想いに耽っていた。

仲間達は珍しく寡黙な彼を気遣ったのか、パラパラと声を掛け、そっとその場を後にしていた。

あの晩、俺は紗季子を抱き締めた

見ちゃいられなかった

あの気丈な紗季子があんなに泣いて、今にもポッキリ折れちまいそうで、そうせずにはいられなかった
抑え、隠し続けてきた色々な想いが、あの晩を境に俺の中へ戻ってきちまったような気がする

だかアイツは、今じゃ他人の女房だ

そして俺にはアイツを想う資格は無い

あの娘…

加夏子の視線に、俺は自分の中身を見抜かれたような気分になっちまったんじゃないか
それで変だなんて感じたんじゃないか

マットの上にあぐらをかいて、銀さんはとめどなく考え続けていた。

ふと人の気配がした。

「聞こえましたよ、銀さんの声。酷く悲しそうだった」

「もういいのか」

「ええ。どうにか、ね」

少しやつれ、寂し気に微笑む殉の姿が、いつの間にか戸口の脇にあった。

◇

数日後。病院の裏手、雑木林の前。

ひとしきり強く吹いた冷たい風が、まだ幾らかは残っていた木々の葉を散らす。

斜めに降りしきる赤茶色の落葉が、車椅子の少女を覆い包んでいた。

薄い毛布のかかった膝には詩集が一冊。

ページは閉じられたままだ。

彼女の目もまた開く気配は無い。

舞い散る落葉以外、静止した世界に足を踏み入れてくる者がいた。

「ヤァ」

穏やかな声に、微かな緊張が隠れていた。

「なんだか、ひさしぶりに会ったみたいだな。へんだね、ずっとおなじ病院に居るのにさ」

劇場の幕があくように、少女の瞳がゆっくりと開いた。

詩集の上に重ねられていた両の手がスーと車椅子のホイールにかかると、落葉を踏む音も立てずユルリと彼のほうへ向きを変えた。

「ひさしぶりよ、殉君。あなたと会うのは」

少女…清水加夏子が低く答えた。

「……………」

言葉はそこで途切れてしまう。

向かい合ったまま、気まずさとも緊張ともつかぬ時間が流れていった。

風がまたひとつ、二人の間を抜けてゆく。

「知ってるよ。あの夜、あなたがワタシを助けてくれたこと。良くは覚えていないけど、たぶんワタシ死んでた、あなたが来なかったら。感謝してる」

淡々と、事実だけを読みあげるように加夏子が言った。

「感謝だなんて」

殉は何と言っていいか判らなかった。

加夏子は変わってしまった。

それは判っていた事だったが、改めて目にする現実は何となく脱力感を殉にもたらした。

「ステキな声だ。初めて聞いたよ、カナちゃんの声。やっぱり耳で聴く声はいいな、ボクは…」

「信じられない、あなたが」

会話を繋ごうとする殉の言葉を、加夏子が厳しい口調で遮った。

「あなたは隠している。ワタシをこんな目に合わせたあの男と、あなたは関係がある。それだけはハッキリ判る、覚えていなくても判る」

「カナちゃん」

「気安く呼ばないで！ …駄目なの。私の中の何かがあるあなたがあなたを拒むの、近寄るなって叫ぶのよ！ だからもう会いに来ないでっ！！」

「カナちゃん！」

声のする方へ歩み寄った殉は手探りで加夏子の肩を掴んだ。

その時だった。

…ウゼェんだよ…ころすぞこのクソガキ…

変貌は一瞬だった。

第十一章

殉は自分の耳を疑った。

加夏子の口から、こんな下品で強烈な言葉が発せられた事が俄かには信じられなかった。彼の目がもし見えていたなら、現実は更に過酷なものであったろう。

つぶらな瞳は裂けた如く釣り上がり、半開きの口からは牙が生えているかのように歯がゾロリと覗いている。目尻や口許には老婆のような皺が幾本も走り、涎まで垂らしていた。

赤味ひとつ差さない顔の白さだけが、残された彼女の痕跡だった。

耳障りな叫びを喉から噴き上げ、加夏子が殉の襟首を下からわし掴みにした。

「なっ!？」

そのまま引き寄せ、顎に額を思い切り打ちつけた。もんどりうって吹き飛んだ彼を血走った双眼が見下ろす。パツクリと切れた額からダラダラと血が流れていた。

仰向けに倒れていた殉がノロノロと身をよじり、落葉だらけになりながら手と膝で躰を起こした。

「…どう…して…?…」

何が起こったか理解出来ぬまま、彼の手はガサガサと落葉の中を掻き回した。

コ・レ・カ・イ・?

いつの間にか殉に手の届く所まで車椅子を動かしていた加夏子が、右手の白く長い棒をヒラヒラと振ってみせた。殉の杖だった。

ビシッ!!

足許に蹲る殉へ向け、頭といわず躰といわず杖を降り下ろす。狂ったように何度も何度も杖を叩きつける加夏子の目には、異常な光が爛々と灯っていた。折り畳み用に作られた杖は加夏子の猛打にも折れず、かえって鞭のように殉の躰に食い込み、無数の打撲痕を刻んでゆく。

「やめて、止めるんだカナちゃん! こんな…どうしちゃったんだっ!？」

遂に杖の先端が砕け散った時、殉の右手がガシッと白い凶器を掴んだ。涎を撒き散らしながら、加夏子はその手に噛みつく。

ブシュ

くぐもった音が聞こえるのと同時に、白眼を剥いた加夏子が車椅子に倒れ込んだ。

「エクソシストの時間は終りだよ、お姫サマ」

片手に高圧噴射式の注射器を掲げた医師が、車椅子の背後に立っていた。

「…だれ？」

「大変だったね～堀川クン。だいじょ～ぶ？」

医師は殉に、精神科の九十九だと名乗った。

◇

グッタリと車椅子の背に身を預けた加夏子が運ばれてきた時、恵美子は丁度、病室のベットを整えている所であった。

「カナちゃん?!」

「だぁ～いじょうぶだって、少しヤンチャが過ぎてたんでね、コレでオネンネしてもらっただけだからさ」

九十九は白衣のポケットから拳銃型の注射器を取り出して、フゥ～っと息をかける。

「また医局に内緒で持ち出しましたね、鎮静剤は麻薬扱いなんですよ。いい加減ちゃんと申請して頂けませんか？」

怖い目で恵美子が睨む。

「だぁ～ってさぁ～、ウチの病院ってメンドクサイじゃん、そーいう手続きっていのさ～」

「どこでも同じです」

だらしなくモジモジする九十九の姿はユーモラスを通り越し滑稽ですらあったが、恵美子は堅い表情を崩さなかった。

「とにかく、この娘をベットへ」

面倒くさそうに手伝う九十九の動きを、それとなく恵美子は観察した。

見事だった。

抱え方

恵美子とのタイミングの合わせ方

横たえる際の細心の心配り

なまなかの看護師では及ばぬ程の繊細な動きが、ダラけた所作に隠れていた。

「ホヘエ～、けっこう重いな～お姫サマは～」

相変わらずおどけた顔をして九十九が言う。

このヒト、どういう人なんだ…

じっと睨んで動かない恵美子に気付いた九十九が声を発した。

「どしたのお～エミちゃん、顔がコワイねえ～」

「…注射器の事は伏せておきます」

「そりゃド～モ」

「ここ暫く、先生の機転でカナちゃんの感情の爆発から難を逃れた看護師は何人も居ます。彼女がまるで統合失調症のような症状をみせているのは、私達の間では有名な話です」

「ほう」

九十九が目を細めた。

「だから、先生のなさっている事をとやかく言うつもりはありません。ただ…」

「ただ？」

「貴方の考えている事が判りません。隔離するでもなく、野放しにするでもなく… 一体、この娘をどうしようというのですか？」

普段は冷静な恵美子の声が大きくなった。

九十九が、不意にニヤリと笑う。

こわい…

首筋に鳥肌がたつのを、恵美子は抑えられなかった。

◇

「先生はそうやって、鎮静剤で彼女を抑えるだけ。少なくとも、今までは」

首筋を伝う寒々しさを押し退け恵美子は言った。

「ふん。で？」

「具体的な治療はいつ始められるのでしょうか。先生に意見出来る立場でないのは判っています。しかしこれでは、この娘はまるで晒しものではありませんか？ 勝手気ままに暴走を繰り返し、それ以外の時は冷たく醒めた目で他人を見透かす。この娘は本来、そんな人間ではありません。以前、感情的になって私に食事のトレイをぶつけた時だって、運悪く切れてしまった私の額の傷を見て青くなっていた位ですから」

「治療ならもう始まっているよ」

「えっ？」

「何故、彼女は唐突に狂暴な振る舞いをするようになったと思う？」

「それは… やはりあの晩、この娘を変えてしまうような何かがあって…」

恵美子は言葉を濁した。

問い詰めた筈が、立場が逆転していた。

「棚上げにお手挙げ。僕達の置かれた状況さ。判るかい」

「はあ…」

とっさに言葉が見付からなかった。

九十九の言っている意味がよく判らなかつたのだ。

「痛覚検査の結果を聞いたかい？ 足だけでなく腕や躰の一部にも行われているのだが、パスこそしているものの結果は全て最低値を示していたよ」

手近にあったパイプ椅子を引き寄せまたがると、背もたれに両肘を置いた九十九は覗き込むように恵美子と向かい合った。

「これが何を意味するか。どうだい？」

「判りません」

それを聞き、何やら納得したような面持ちで九十九が断言した。

「情緒麻痺だよ。しかも飛びきりいびつな形の、ね」

人間はねえ…と、九十九が続けた。

大きな衝撃や攻撃を受けると、心の働きを自動的に抑え込む事でダメージを避けるのさと、教師のようなもの言いで目前の恵美子に言って聞かせた。

本来は情動そのものを抑制しダメージの蓄積を回避するのが情緒麻痺の筈なのに、患者がこれ程の凶暴性を示すというのは、暴れる事自体が患者自身を守っているのに他ならないのだ…と。

「外見では判らない。唯一、判断する方法は痛覚検査だけだ。情緒麻痺に陥った人間は痛みに対し極端に鈍感になる。思い当たるフシがあるんじゃないかい」

恵美子はハツとなった。

そう言えば、あれ程注射を嫌っていた加夏子が、最近は顔色一つ変えずにそれを受けるさまに酷い違和感を覚えた事があった。

「だとしても、それが先生の治療とどう関係あるのですか？」

恵美子も九十九の顔を覗き込んだ。

第十二章

中庭に置かれたベンチに腰を降ろし、恵美子は足許の落葉を靴の先で軽くつついてみた。乾いた音を立てて枯葉が形を崩す。

戸惑いと、それとは別の感情が彼女の中で複雑に絡みあっていた。九十九との会話が、まだ耳の奥に残っていた。

◇

「統合失調症と判断しがちな彼女の症状は、フェイクだ」

「フェイク？」

「我々を袋小路に誘い込む罫さ。勿論、あのお姫サマが意図的にやっているという意味じゃあない。こっちが勝手にミスジャッジを下しているに過ぎないんだがね」

パイプ椅子を木馬のように前後に揺すりながら、九十九は暗く熱の籠った口調で続けた。

「ある日突然、訳も判らずこうなってしまったんじゃない。少なくとも始まりはハッキリしている。あの夜、だ。そしてそれに関わった人間…」

九十九が指を一つ立て、ユックリと恵美子に向ける。

「わたし、ですか？ わたしがなにか知ってる？」

「ま～さかあ～、でも誰がどう繋がっているか、エミちゃんは判ってるんじゃない？」

いきなりC調に戻った九十九が崩れた笑顔で笑った。目だけが全く笑っていなかった。

そう…
ワタシは知ってる…

だが恵美子は、それを口にしなかった。
答えない恵美子に九十九が言う。

「『棚上げ』というのはね、彼女があの日、心的ショックから自らの心を封じた事を言ってるんだ。僕らはそれを診ながら、なにも出来ずにお手挙げ、と。滑稽だと思わないかい？」

「…」

「人の心は容易に正体を見せない。誰もが、自分をいつわる事については巧まざる一流詐欺師なんだよ。だが僕は騙せない。全ての鍵を握るのはあの少年だ」

「…」

「彼女を野放しにしているのはね、奇形化したトラウマが噴き出すのに任せて、心的な障壁の弱まる時期を待ってるからさ。ガードが下がった頃を見計らい、彼を彼女にぶつける。面白いものが見られるかも知れないよ」

「…先生はまるでゲームでも楽しんでいらっしゃるようですね。それは医師として、あってはならない姿勢ではないですか」

重い口を開き、恵美子はやっと反論した。

「仕事は楽しまなきゃ。医者はね、治療を『趣味』にしてもいいんだよ」

笑わない目をした九十九が、更に大きく笑ってみせた。

「趣味、ですって？」

恵美子は耳を疑った。

「それじゃ先生は、彼女を趣味で治療すると言うのですか？ 自分のことだけ考えて主治医を引き受けたとおっしゃるのですか！ そんなことが許されるとでも思っているのですかっ！！」

椅子を揺らすのを止め、九十九がユラリと立ち上がる。

ゆっくりと両手を白衣のポケットに入れた彼からは、いつの間にか笑みが完全に消えていた。

「ああ。その趣味が患者の利害と一致するなら何の問題もない。医療の歴史がそれを証明している」

厳かに、だが少しの人間味も見せず九十九は恵美子に宣告した。

「今はまだその時期では無い。今日の有り様を見れば明白だ。衣笠クン、君には大事な役を演じてもらう。二人を監視、来るべき日まで引き離し、その時が来たら接触させる。二人きりで、だ」

瞬きもせずこちらを覗き込んでくる九十九の前で、彼女は射すくめられ身動きがとれなかった。

へびに睨まれた蛙…

いや、先生はまるでメフィストフェレスのようだ
地獄の知恵を授ける、悪魔の王

「ど、どうしてワタシが？」

唾を飲み込もうとしたが、口の中がカラカラに乾いていた。

「担当じゃないか。それにキミも知りたいんだろ？ あの少年の『力の秘密』を。もしかすると君の恋人も回復する望みがあるかも知れないからねえ」

九十九が唇の両端をずいと引き上げてみせた。

V字を描く悪魔の笑みだった。

今度こそ恵美子は驚愕した。

どうしてしってるの！？

「全部、調査済みだ。君がどうして看護師を志したか。どうやって彼女の担当になったか。そして彼、堀川殉の能力に尋常でない興味をしめすのか。助きたいんだろ？ 若年性アルツハイマーの彼氏を」

…もう何も言えなかった。

全てを見抜かれた恵美子には、九十九の言葉に従うしかなかった。

◇

ベンチに座ったまま恵美子は空を仰いだ。
寒さの強い冬の空は、雲一つなく澄み渡っている。

「こんな所でたそがれてるなんて。らしくないぜ、エミちゃん」

ダミ声がすぐ近くから響いた。
視線を下ろした恵美子の目に、見慣れた男の姿が映った。

「銀…さん…」

立ち上がった恵美子は、銀さんに抱きつくと人目もはばからず泣き始めた。
まるで幼ない子供のように。

第十三章

恵美子が九十九に従うと決めた日から一ヶ月が過ぎた。

清水加夏子と堀川殉、二人が近づく事のないよう病院内での動きをそれとなく見張り、距離を開ける。広い施設とは言え、限られた範囲でそれを実行するには恵美子一人では難しかった。

あの日…

ひとしきり泣きじゃくった後で彼女は、事情を話し銀さんに協力を頼んだのだった。

◇

「気が乗らねえよ、いくらエミちゃんの頼みでも、そいつぁチョットなあ…」

「駄目、ですか？」

泣き腫らした目で恵美子は銀さんを見上げた。

「そんな目で見ろなよ。ただでさえこんな所でオイオイ泣かれて抱きつかれて、オマケにそんなすがりつく目で御願いなんかされてるのを誰かが見たら、絶対にオレたち何かあったって誤解されちまうじゃないか」

むず痒い顔をして銀さんが言った。

「意外だな、銀さんってそんな事、あんまり気にしないかと思ってた。私、無理な御願いしてるって判ってます。でも、こんなこと話せるの銀さんしか居なくて」

「そりゃな、『患者を見張れ、気付かれないように隔離？しろ』なんて、エミちゃんにしたら嫌だったろうよ。いつも誰に対しても一所懸命だからな。治療の為とはいえ、九十九先生も酷な事を言いつけやがる」

恵美子は全てを打ち明けた訳ではなかった。

この密約に、彼女自身の意志もまた加わっている事を。

そしてそれが、看護師としての矜持と責めぎ合っている事を。

「気は進まねえ、進まねえが… 今日のような出来事がこの先も続くなら、さしもの王子さまただでは済むまい。それでも諦めるような奴じゃないし。ここは先生の言う通りにするべきなのかも知れないな」

ハァとひとつ溜め息をつき、銀さんは恵美子の肩をポンと叩いた。

「協力するよ。どれだけの事が出来るかは判らんがね」

「…アリガトウ、銀さん」

両手を揃え、恵美子は深々と頭を下げた。

よせやいと頭を搔いて、銀さんがヒラヒラと手を振りながら言った。

自分も正直、あの子たちとどう接していいのか判らないんだと。

◇

クリスマスも近くなったそんなある日、小児病棟に入院してきた少女がいた。

その子の存在が、凍りついた殉と加夏子の歯車を再び回し始めるとは、まだ誰も気付いていなかった。

◇

年が暮れ、年が明けた。

清水加夏子は、彼女を取り巻く環境ともども何一つ変わらぬまま、冷たい春のただ中に居た。
相変わらず突発的な暴力を振るう彼女を医者も看護師も忌避し、今では誰も積極的に関わろうとしない。
主治医の九十九と担当看護師の恵美子、そしてリハビリトレーナーの銀さんだけが彼女と接し続けていた。

それぞれが異なる動機から。
異なる思惑から。

彼らに共通しているのは、それが加夏子の為でなく自分の、もしくは自分の大事な人間の為だという事だけだった。

加夏子は孤立無縁だった。
例えそれが、自ら招いた事態であったとしても。

◇

「フウ〜…」

夕日が朱々と染め上げた病院の中庭、人影の途絶えたエントランス脇のベンチに長々と軀を伸ばした銀さんは煙草の煙を夕暮れの空に向かって吹き上げた。
ここ暫くの間に、澱のような疲労が軀の底に溜まってきているのを感じていた。

こんな事をしているからだと、茜空にボヤクかのように銀さんはひとりごちた。

恵美子の涙にほだされて、加夏子と殉をさりげなく遠ざけるよう腐心しながら今日まで来たが、これが本当に治療になっているのだろうか？

坊やだって馬鹿じゃない

ましてやあの子には他人の心の声を聞き取る特別な力がある

俺達の考えている事など、とうの昔に知っているだろう

それでも尚、あのお嬢に自分が何をしてやれるのかを必死で探していやがる

俺は何をしている？

何をしてやれる？

わからねえよ

袋小路だ

萎え切った心を抱えた銀さんには、今の状況と自分自身を呪うしか術が無かった。

九十九…

あの若造、いったい何を企んでやがる…

その時ふと唄が聞こえてきた。わらべ唄だった。

とお～りゃんせ と～りゃんせ

ベンチから身を起こした銀さんの目に、小さな女の子の姿が映った。
球の替わりだろうか、サッカーボールを右手でつく幼女の影が長く伸びている。
左手の袖には中身が無い。
去年、入院してきた娘だった。
名前は確か…

「みーちゃん」

銀さんはその子の呼び名を口にした。
無心にサッカーボールをついていた少女がこちらを向くと、満面の笑みで応える。

勘のいい子だ、もしかするとこの子も…

そんな事を考えながら、銀さんはベンチから身を起こした。
「こんにちは、おじちゃん」

歩いてくる銀さんに、少女はペコリと頭を下げた。

「もう暗くなるぞ、そろそろ病室に帰らなきゃなあ」
「でも、もうちょっとだけ… 一緒にやろうよ」

銀さんの頬が崩れた。

「あのなあ、日が暮れると怖あ～い鬼がうろつきだすんだぞ。俺はまだ鬼に食われたくねえよ」

ガシガシとショートカットの頭を乱暴に撫でる。

「へいきだよ、ウチ、ひとより食べるとこ少ないモン♪」

銀さんの手が止まった。

「ねえ遊ぼう、もうチョットだけ。ネッ」

銀さんの戸惑いを、少女の無邪気な笑顔が遮る。

「……よし、遊ぶか」
「やったあ！！」
「いいか、チョットだけだからな」
「うんっ」

器用に片腕でボールを拾う姿を眺めながら、銀さんは少女がここへ来た時の事を思い出していた。
名前は佐野 碧。

歳は確か10歳くらいだったか。
小学校4年生だと聞いていたから、それ位であろう。
随分、回復したものだ。

年の瀬も近い都心の私鉄線で昨年起こった大規模な脱線・転覆事故。
死者約130名、重軽傷者300名以上という大事故の、彼女は被災者の一人だった。
頭部打撲、片腕切断の重傷患者として救急搬送されてきたのだったが、助からなかった被災者も数多くいた。

この娘はまだ運がいい方だ、腕一本無くすだけで済んだのだから

彼が直接関わったのは僅かな時間でしかなかったのだが、気にかけていた時間はそれよりも多かった。
彼女の両親は二人とも、その時に亡くなっている。

こんな小さな子がこれから、たった一人でどうやって生きてゆくのだろう

痛ましい思いに捉われながら、ふと街灯の下の影に気がついた。
暴れ出す前の、アノ怖い顔をした加夏子だった。

マズイぞ…

「みーちゃん、戻る時間だ」
「え～もう～」
「ホラ、あのおねえちゃん怖い顔してるだろう？ 約束守らない悪い子がいるとね、あのおねえちゃん、ホントに鬼みたいに怒っちゃうんだぞ」

碧がくるりと振り向き加夏子を見る。
不思議そうな顔で言った。

「…あのおねえちゃん…泣いてる…」

銀さんはギクリと身を強ばらせた。
「泣いて…いるって？」

半端な中腰のまま、銀さんは加夏子の姿に釘づけとなっていた。

背を伸ばし、ジッとこちらを見つめている加夏子の額には、深い一筋の皺が刻まれている。
険を宿す眼差し。
両の手がゆっくりと車椅子のホイールを回す。

狂的な力を秘めているとはいえ所詮は女の子の腕力、暴れたとしても抑え込めない事はない。
今までも何度か、彼女の暴発を止めた事はあった。
でも銀さんは、加夏子にこれ以上騒ぎを起こして欲しくはなかったし、何より彼女のあんな姿を見たくはなかったのだ。

だが今、碧が言った『泣いている』とは一体…

ゆっくりと、車椅子が二人の方へ近寄る。

銀さんは加夏子の視界から碧を覆い隠すようにして二人の間に立ちはだかった。

「よう、詩集を読むにはチト遅い時間だな、嬢ちゃん」

「…こんばんは、久我さん…」

加夏子の口調が、あの夜の紗季子…加夏子の母親のそれに酷似しているような気がして、銀さんは言葉が続かなくなっ
てしまった。

彼女が知る筈の無い、彼と、彼女の母親の過去を見透かされたような、そんな気分になってしまったのだ。

ワタシは知ってるの
あなたが隠していること
あなたがやってきたこと
何もかも

瞬かぬ眼差しを受け続ける銀さんは、額から汗が浮き出るのを感じていた。

「こんな時間に、そんな怪我人を遊ばせておいていいのかしら？」

「……………」

「いい加減ね、あなたも。この病院も。胸が悪くなる」

「おねえちゃん、おじちゃんを叱らないで。ウチが遊ぼっていったんだよ」

碧が銀さんの後ろから顔を覗かせて言った。

加夏子の目がつり上がる。

「ガキは黙ってる！」

いきなり膝の詩集を投げつけてきた。

凄まじい勢いで宙を飛んだ詩集は銀さんに命中し、バラバラにちぎれ飛んだ。

「おいつ、よせ！」

銀さんが加夏子を押しえつけようとした時だった。

「おねえちゃんだって、あんな暗い所でエンエン泣いてたじゃん！ おとなのくせにカッコわるいよ！ ウチちゃんと聞
こえたんだからね！！」

「ワタシが…泣いて…？」

加夏子の動きが止まった。

「そうだよ、ウチ聞こえたもん」

銀さんの後ろに隠れたままの碧が言う。

「うるさい位え～んえ～んて、すごく気になったよ」

「嘘よ」

「ホントだもん！」

「うそっ！」

「ホントだもんっ！！」

むきになって碧にくっつかかる加夏子。

これまたむきになって言い返す碧。

妙な展開に、銀さん一人が置いてけぼりとなっていた。

二人の女の子に挟まれた形の彼は、出した手のやり場に困ったあげく、両手で頭をかきながら顔をしかめる位しかやる事がなかった。

どうなってるんだい、こりゃあ

だが彼は二人の間を離れなかった。

確かに、先程の殺気じみた険しさは加夏子の表情から消えていた。

今はそう…まるで姉妹の口喧嘩といったところであろうか。

油断は出来ない。いつまた彼女が爆発するか、彼女自身ですら判りはしないのだ。

それでも、銀さんは加夏子の様子が今までと何か違うようで、それが何処とはなく好ましいと感じ、二人が喚き合うに任せておいたのだった。

そういえば、前はよくあの坊やと一緒にいる時、こんな風にふくれっ面してたよな

殉の事に思い当たった瞬間、目の前の光景に忘れていた疑問が再び銀さんの脳裏に浮かび上がった。

聞こえた…って、言ってたよな？

俺には何にも聞こえなかったぞ

あの時、加夏子はキレそうな顔でジッとこちらを見ていた

俺も気が付いたが…

声ひとつあげていなかったぜ

もしかして、この娘…本当に…

「なによこのコ！ もうっ！」

「へーんだ、イジっぱり！」

「なんですって!？」

いつの間にか銀さんの前に回り込んでいた碧に向かい、加夏子が勢いよく右手を振り上げた。

しまった！！

ぺしっ

加夏子の掌が、髪がめくれた碧のおでこを弾いた。

「なまいき言う子はおしおきだからねっ」

「いったあ〜…」

大袈裟に額を両手で押さえてみせた碧が、指の間から加夏子を覗いてペロリと舌を出す。つられて加夏子が微笑み、やがて声を上げて笑いだした。碧もケラケラと笑いだす。

加夏子が笑っている…

痺れるような想いで銀さんは彼女の声を聴いた。

初めて聞く、加夏子の笑い声だった。

◇

「笑っていた？ 彼女が」

「はい」

デスクに向かい忙しくカルテに目を通していた九十九医師が椅子ごと恵美子に振り返った。思い切り背中を丸め、猫科の動物のように恵美子の顔を視線で舐めあげる。嫌悪感が蟻の大群となって背筋を這い上ってくるのを感じ、恵美子は小さく身震いをした。

「フフウ〜ン… なかなか面白い。子供、か。そう来たか」

ネットリと笑う九十九の顔は、恵美子でなくともいやらしいと感じたであろう。

「やけに楽しそうですね、先生。子供との交流が心を開くきっかけになるなんて、ありふれた話なのではないですか？」

皮肉を込めて恵美子は聞いた。

「ありふれた経緯じゃつまあ〜んないかな、エ〜ミちゃんはさあ〜」

黄色がかった眼球が容赦無く視線をまわりつかせてくる。変質者じみていた。

「そんなつもりじゃ…」

「まあいって。君の関心はあの娘じゃなくて、彼女のボーイフレンドの方なんだからさあ」

恵美子は顔が怒気をはらむのを感じた。看護師としてのプライドを、今の九十九の言葉は酷く傷付けていた。だがその指摘は…間違っていない。

「それにしても早かったな」

「何が、でしょう」

「ガードを下げ始める時期がだよ。決まってるじゃん！」

まだ判らないのかと言わんばかりの言い種であった。

清水加夏子が自ら封印した心…九十九は『棚上げ』と表現していた…を再び開け放つそのタイミングを、彼と恵美子は

息を殺すように待ち続けてきたのだ。

「納得出来ない点はあるが、チャンスだ。もう少し様子を見てアレを仕掛けてみよう」

九十九の目の澱みが硬玉の鋭い光に変わる。眠り猫から、獲物を得た虎の目へ。

ゴクリと唾を飲み、恵美子が頷く。

彼女もまた、自分の成すべき事を想い描いていた。

第十四章

銀さんの『声』が聞こえた。

昼休み

病院裏の雑木林

通用口から小道が続いてる

話したい事があるんだ

来てくれ

ここは小児病棟。

トレーニング室は敷地の反対側にある。銀さんはそこに居る筈だ。

随分と離れているが、殉の能力を知った上で、よほど強く『叫んで』いるようであった。

繰り返し繰り返し、野太いダミ声が殉の脳裏に響き渡る。

こちらから返事は出来ないから仕方ない事ではあるが、幾度も続く木霊のような声に、彼は少し閉口していた。

トランシーバーじゃないんだから、後で話しに来てくれればいいのに

ひとしきり『声』は続き、やがてピタリと聞こえなくなった。

後にはノイズのような種々雑多な音が聞こえてくるだけ。

他愛ないお喋りを続ける殉の顔に、僅かな憂いの表情が浮かんできたのに気付く子供はいなかった。

普通じゃなかった、さっきの『声』は

訴えるような…誰にも聞かれないような…切実な想いに彩られた『声』

何かあったんだ、きっと

殉は抱えていた子供をそっと降ろすと、ちょっとだけ微笑んで病室を出ようとした。

その時だった。

「（おじちゃん、おにいちゃんを呼んでたんだよ！ あんなにおっきな声で！ 聞こえてたんでしょ？ おにいちゃんの声もちゃんと聞こえたもん！）」

女の子の音がキンキンと頭の中に鳴り響いた。

ドキリとして思わず振り返る。盲目の殉にはその子の顔など判る筈も無いのだが、反射的に振り返ってしまったのだ。

「ウチだよ。おにいちゃん」

今度は生身の声が聞こえた。

下の方から、柔らかな小さい手が殉の右手を引っ張った。

「君は…」

「やだなあ、さっき一緒に折り紙したよ」

「確か…碧…ちゃん？」

「うん、みーちゃんてイイよ♪」

少しずつ、少しずつ胸が熱くなってくる。

殉にとって初めての、同じ力を持つ者との出会いであった。

◇

三本目の煙草を携帯灰皿にねじ込んだ頃、ゆっくりと歩み寄る人影に気付いた銀さんは、もたれかかっていた木から軀を起こした。

「こっちだ、坊や」

「こんな風呼び出すなんて、銀さんらしくないですね」

「悪いな、人に知られず坊やを呼ぶのに、こんな方法しか思いつかなかったんだ。ちゃんと聞こえてたみたいだな」

「凄いダミ声で、ね」

笑いながら殉が言った。

「あれか、心の声って～のは、普段の声とおんなじに聞こえるものなのか？」

「ええ、モチロン」

「そっかあ～」

白衣のポケットに両手を突っ込んで、ブラブラと殉の周りを銀さんは歩き始めた。

「こうやって二人きりで話すのは久しぶりだな」

「あの夜以来ですよ」

「大事な話がある。誰にも聞かせられない話かな」

いつも飄々とした風情の銀さんに似合わぬ、重く沈んだ声だった。

「衣笠さんや九十九先生に、でしょ？」

「…やっぱり知ってやがったか。俺が何で坊やとお嬢を会わせないようにしてたか、とっくにお見通しだったんだろ」

銀さんの声が沈み込んでいた。

殉に対して明らかに負い目を感じている、そんな声であった。

少しの沈黙の後、殉が口を開いた。

「カナちゃんの治療に必要だったんですよね。僕は超能力者じゃない、みんなの『声』を少しだけ聞くだけ… だからそれ位しか知りません」

「すまねえ」

見えぬと判っていながら、銀さんは殉へ向かい深々と頭を下げた。

この子はみんな知っている、知ってて知らぬ振りをしている

このむくつけき年上の友人を傷付けないように

それが銀さんには痛い程判った。

こんな少年に気を遣わせている自分が恥ずかしかった。

情けねえ…

「そんなことないですよ、銀サン」

殉が微笑みながら銀さんの手を握った。

「あなたが僕を、いつでも見守っていてくれた事…知ってました。お礼をいうなら僕の方ですって。情けないなんて思わないで下さい」

頭を下げたままの銀さんの背を、殉は何度も撫で続けた。

すまねえ

すまねえ…

二人の目の端に、高く昇った太陽が光の欠片を照り映した。

◇

杖を手にたたずむ殉の脇で、枯れ木の根に腰を下ろした銀さんが訥々と話し始めた。

「お嬢があんなになって、俺は戸惑ってた。口はばったいが、これでもニンゲンって奴は色々見てきたつもりだった。だがありゃあいけねえ」

パッケージのひと振りて煙草を出すと、軽くくわえて火をつけた。

澄んだ金属音がジッポから響く。

「正直、お手上げだった。坊やもそうだろう？ 俺に出来る事と言えば、おとなしくしている時にさっさとリハビリを終える事と、暴れたらとり抑える事、それ位だ。前のように、口がきけなくても何かを話しかけようとしていたあの娘は、どこか知らない所へいっちゃった」

「それは…僕のせいです。多分」

「なあ、あの夜いったい何があったんだ？ 今まで何度も、お前は曖昧に笑って答えようとしなかった。聞きてえ、いや聞かせてもらうぜ、今日こそ」

「話があるって呼び出したのは銀さんじゃないんですか、ヤダなあもう」

今度は笑って逃げられなかった。

殉を斜め下から真っ直ぐに睨む銀さんの目からは、盲目の殉ですら感じとれる程凄まじい気が放たれていたのだ。曖昧な返事を許さない、有無を言わせぬ気迫。

無言のまま時間が過ぎ、殉が折れた。

「…まるで鶯の密林みたいでした、彼女の心の中は…」

ゆっくりと殉が話し始める。

そこで傷だらけの加夏子を見つけたこと
彼女を苦しめていたものを見つけたこと
それが彼女を襲った者の姿をした、彼女自身のトラウマであったこと
そして…

それが彼の兄とうり二つの姿形をしていたこと

銀さんが目を見開き、唾を飲んだ。

「カナちゃんは結局、あの男と僕を同一視して、僕を刺す事で恐怖を克服したんです。でもその代わりに誰も信じなくなりました。それは多分、あの時の恐怖の裏返しなんじゃないかと思います。あの暴れようも同じでしょう」

「あの夜、血を吐いて倒れたのは…」

「彼女の中で刺されたから。心と軀って、嫌になる程結びついてますからね」

僕のせいなんですよと、自嘲気味な笑いを浮かべて話す殉の横顔は何ともいえず淋しそうであった。

僕があの時、動揺さえしなければ…

僕のせいなんです

「なあ。そいつは本当にお前の兄さんだったのか？」

少しの間を置いて、銀さんが聞いた。

第十五章

殉はその時に見た男の特徴を、一つ一つ挙げていった。

切れ長の、意思の強そうな目
V字に釣り上がった唇
風になびく痩せた長身
黒ずくめの衣服
握られた刀

「似ていたんです、兄さんに」
「でもよ、確かお前の目は生まれつき…」
「兄さんの目で、兄さん自身を見た事があるんです。随分と昔ですが」
「そんな事も出来るのか」

驚いた声で銀さんが聞いた。

「めったにありませんし、やろうと思っても出来ませんよ」
「フム。そんなものかね。俺にはよく判らねえな」

溜め息と一緒に煙を吐き出す。

「カナちゃんは辛いと言ってた、辛いから近寄るなど。彼女にあの夜の記憶はないと聞きました。きっと心のどこかで、あの男…兄さんに似たアイツと僕に何か関係があると判っているんです。だから」
「お前を避ける、と？」

殉が頷く。

「お嬢、泣いてたそうだな」
「え？」
「俺には聞こえなかったが、泣いてたらしい。ある子が教えてくれたよ。もしかすると、お嬢はずっと心の中で泣き続けていたのかも知れねえな」
「銀さん、それって…」
「その後笑ったのさ、屈託無く。俺は初めて見たよ、お嬢の笑顔。それで決まったんだ、九十九先生がお前とお嬢を…」
「それって、みーちゃんの事じゃないですか？！」

杖を放り出した殉が屈み込んで銀さんの肩をガツシと掴んだ。

「イテッ！ おい、何だいきなり？！」
「みーちゃんが、碧ちゃんが銀さんにそう言ったんじゃないですか？！」
「そうだな、そうだよ！ お前あの子を知ってるのか？」
「あの子は普通じゃない、あの子は僕と同じなんです！ 仲間なんですよ！ 心の声が聞こえる仲間なんです！！」
「判った、わかったから手を離せて」

興奮した殉の手を肩から引き剥がすと、その手を握り締めたまま銀さんが言った。

「俺ももしやと思ったが、やっぱりそうなんだな。いいか坊や、この事は誰にも言うんじゃねえぞ。九十九先生はな、お前とお嬢を使って実験をしてるんだ」

「実験？ 実験って…」

殉の顔に戸惑いが浮かんだ。

「サイコイン能力者を使った実験的治療。俺もエミちゃんも、そのチームの一員という訳さ」

これが話したかった事なのかと殉は思った。

◇

「おはよう、殉くん」

白く長い病院の廊下で恵美子が声をかけてきた。

殉の背中が一瞬、ピクリと反応する。

「おはようございます、衣笠さん」

ゆっくりと振り返る殉の顔は、いつもと変わらぬ微笑を浮かべていた。

「ちょっと、いいかな？」

「ええ、何ですか」

きた…

銀さんの言った通りだ

恵美子の言葉に備え、殉は心の中で身構えた。

「今度の月曜日なんだけど、リハビリの後、彼女…清水加夏子さんに会ってくれないかな」

「カナちゃんに？ でも今彼女は…」

「そう、手のつけられない暴力癖で誰からも敬遠されてる。貴方自身も被害者の一人よね」

「被害者だなんて… あの時は九十九先生に助けてもらいましたが」

「彼女に変化が現れたの。ついこの間の話よ。笑ったの、あの娘が」

「笑ったんですか？ カナちゃんが」

「そうなの、笑ったのよ。それでね…」

恵美子が少しの間、言い淀むような仕草を見せた。

「今なら、貴方と加夏子ちゃんを会わせる事が出来るわ。今までは貴方の身を案じて、彼女を貴方に近付けないようにしてきたけど、今ならきっと」

「気のせいかな。僕から会いに行くのも出来なかったような気がするのですが。検査だとか何だとか、その都度色々な事があって」

「それは…知らない。偶然じゃない？ 私達は加夏子ちゃんの方だけを見てたから」

「わたし、たち？」

恵美子の顔がスーッと白くなる。

「それはともかく。月曜日はマズいな、僕、また一時帰宅しようと思うんです」

「そ、そう。じゃあ月曜日は無理よね。いつなら大丈夫？」

「その一週間後なら、たぶん」

「なら、その頃をお願いする。頼むわね。加夏子ちゃんの回復は、恐らくあなたにかかっていると思う」

「判りました、衣笠さん」

歩き去る恵美子の足音を見送りながら、殉は銀さんの言葉を思い出していた。

お嬢と会うなら、誰にも知られず、誰も居ない所がいい

病院は駄目だ。恐らく途中で邪魔が入る

それはお前達の為にならねえ事だ

坊やもそんな事は望むまい

それから…

みーちゃんの事、あの二人に勘づかれるな

一人きりの廊下で、殉はゆっくりと頷いた。

◇

父親としては当然の困惑であった。

原因不明のまま死にかかった一人娘が昏睡状態から目覚め、同時に失語症からも回復したと喜んだのもつかの間、相対した彼女は何処か薄ら寒い目をして自分を睨みつける、彼の知らない別人のような存在になってしまっていた。

それでも暫くの間はよかった。

違和感を残しながらも、少なくとも外見上は従順な反応しかみせなかったから。

そのうちに始まった。

何の予兆もなく、見境いもなく、誰かれ構わず暴力を振るうようになったのだ。

尋常な暴れ方ではない。

殴る叩く、それだけでは済まない。

手近な物はすべて凶器に変わり、止めようと近づく者には頭突きに搔きむしり、あげく嘔みついた。

恒彦の両手にも、既に幾つもの嘔み跡が深々と刻まれていた。

左の頬には爪で抉られた三条の筋がピンク色の傷跡として残っている。身を反らすのがあと少し遅ければ、左目をやられていただろう。

それでも週に三回は見舞いを欠かさなかった。

こんな状態だからこそ、他の者に娘を任せ切る事は彼には出来なかったのだ。

「今日は良い知らせがありますよ、清水さん」

院長室のソファーに座った恒彦に、ピシりと糊の利いた白衣を纏った病院長が葉巻を勧めた。

「イヤ、私はけっこう。それよりも良い知らせとは何でしょう。『今日は機嫌もよく一度も暴れませんでした』などという話はいい加減聞き飽きましたぞ」

「いやいや、これは手厳しいですな」

悪びれた様子もなく、彼の向かいに腰を降ろした病院長はカッターで吸い口を挟みながら言った。

「笑いましたよ、お嬢さんが」

「わらった…加夏子が…それは本当か？」

「はい。そのように報告を受けております。お嬢さんの状態は当院の治療チームの尽力により着実に改善へと向かっておりますよ、御喜び下さい」

病院長が人を呼び、清水氏を病室までご案内なさいといつけた。

院長室を後にしながら、恒彦は走りだしてしまいそうな自分を抑えるのに必死だった。

加夏子

カナコ

やっただ

これで紗季子も呼べる

「…清水さん、お話があります…」

先に立って歩いていた男が振り返り、恒彦の顔をじっと覗き込んだ。

銀さんだった。

第十六章

「なあ、そろそろいいんじゃないか？」

いつものごとく、夕暮れどきの中庭のベンチで煙草をくゆらせながら、銀さんは目の前の白衣の女性に尋ねた。

「何が、ですか？」

恵美子が小首を傾げ聞き返す。

ふんぞり返って煙を吹き上げる銀さんの表情は茫々としていたが、目は優しくはなかった。

「俺はお嬢を助けたい。エミちゃんに協力もしたい。だがそっちははチト違うようだ」

「どういう意味ですか」

「そういう意味だ」

銀さんが指で煙草をはじく。

綺麗な放物線を描いて吸いながら灰皿に飛び込んだ。

「俺が、ただエミちゃんに泣きつかれたというだけで今日まで、黙ってあの二人の監視と隔離を続けてきたと思ってたのか？ 悪いがそれ程、俺もお人よしでもマヌケでもねえぜ。狙いはあの坊やか」

「な…何ですか急に、銀さんの言ってる事、よく判らないですよ」

動揺と困惑の入り混じった顔で恵美子が言い返す。

「ワリィな」

パンという衝撃を頬に感じた次の瞬間、恵美子は地面に膝をついていた。

ベンチから立ち上がった銀さんが仁王立ちして見下ろしている。

「シラぁ切るのも相手次第だせ。以前から坊やの不思議な力に随分とご執心だったじゃねえか。あの若造の医者と組んで治療に利用しようとも思ってたか？ お嬢はどうでもいいのか！？ あんた看護師だろうが、答えろっ！！」

人が変わったかのような銀さんの形相だった。

頬に手をあてうずくまっていた恵美子が、ボソリと言葉を吐いた。

「…何が悪いんです」

「？」

「利用して何が悪いんですかっ！ 彼のあの力があれば、加夏子ちゃんだって昔のように戻れるかも知れないんですよっ！ ほかの人だって…あのひとだって…その何処が悪いっていうんですかぁ！！」

キッと顔をあげ銀さんを睨むと、恵美子が叫んだ。

「だからワタシは九十九さんに協力した！ それで全てがいい方へ向かうと信じた！ そのドコがいけないっていうんですか！ 銀さんがワタシを責める理由が何処にあるっていうんですかぁぁー！！」

「その坊やの力が、お嬢をあんなにってしまったんだ。知ってたかい？」

ハッとした恵美子の言葉が止んだ。

「聞いたんだ。あの晩、お嬢とあの坊やの間に何があったのか」

「……………」

ゆっくりとしゃがみ込んだ銀さんが、真正面から恵美子の目を覗き込んだ。

「知りたいかい？」

涙目の恵美子がコクンと頷く。

「確かにあの夜、お嬢を救ったのはあの坊やさ。何がきっかけかは知らないが、あの傷を負った時の事を、その時の恐怖を思い出して、そこから命ごと逃げ出そうとしたらしい。よほど怖かったんだろうな、可哀想に」

痛ましい表情のまま銀さんが続けた。

「だがな、よりにもよってお嬢は、自分を助けにきた坊やとキチガイ野郎を混同しちゃったんだよ」

「えっ？」

「何でそんな事になっちゃったかは判らねえ… ヒトの心の奥底のことなんて俺には想像もつかねえし、坊やにだってあんな経験は初めてだったらしいからな」

銀さんは、あえて殉から聞いた事実を伏せた。

「そんな…そんなことって…」

恵美子の視線が激しく揺れる。

「なあエミちゃん、よく考えてみな。坊やのあの力は治療なんぞに使える代物じゃねえ、それどころかひとつ間違えれば他人を破滅させるトンでもねえ爆弾になりかねないんだ」

銀さんの言葉が熱を帯びる。

「もうよさないか、こんな風にあの二人をイジくり回すのは。もう止めようぜ」

「でも…でも…あの子が接した患者はみんな嘘みたいに回復して…そうよ、回復したじゃない！ あのコやっぱり出来るのよ！ そうでしょ銀さん?!」

まだわかんねえのか！

両肩をガッシリと掴んだ銀さんが、目を覚ませと言わんばかりに恵美子の体を激しく揺さぶった。

「みんなが治ったのは坊やの『あの力』のせいなんかじゃねえ！ 誰もかれもみんな愛おしくて、助けたり支えたりしなきゃいられねえあのオセツカイでトンでもなく優しい坊やの心根に触れたからなんだ！ みんな自分で立ち直ったん

だよっ！　それが判んねえのか！！」

鬼瓦のような顔のまま銀さんは恵美子を揺さぶっていた。

少しずつ、少しずつ銀さんの動きが遅くなり、やがて止まった。

顔を上げた恵美子は、今度は真っ直ぐに銀さんを見つめていた。

◇

恵美子達が並んで歩く廊下の向こう、西日の差し込む明かりとりの大きな窓に、腕を組んで寄りかかった九十九の姿があった。

「やぁお二人さん、手に手をとってお散歩ですか？」

固い表情のまま歩いてきた二人に、薄笑いの九十九が話し掛けた。

「つまらない冗談ですね、先生」

「おや？　今日は随分とっつけんどんですねえ」

笑い顔はそのままだが、九十九はいつものようなC調になる事無く、交互に二人を見つめていた。

「丁度いい。先生に話しておきたい事があるんだ、清水加夏子の件で」

銀さんが挑みかかるように口を開いた。

「それと堀川君の事について、ですね」

「察しがいいな、なら話が早い。あの二人にこれ以上…」

「『干渉するな、二人に任せておけ、治療に堀川殉を利用するな、彼の能力を試すな』久我さんのおっしゃりたいのは、だいたいそんなところでしょう」

一気に押し切ろうとしていた銀さんは、九十九に機先を制され言葉に詰まってしまう。

「危惧はもっともです、久我さん。ただ貴方も衣笠君も、ひとつ大変な誤解をしている。私は彼…堀川殉のサイコイン能力には何の興味も無い」

恵美子の顔色が変わった。

てめえ…聞いてやがったのか！！

怒気を張らんでグッと一回り大きくなった銀さんの軀が一步前へと踏み出そうとした刹那…

カッシャァァーン！

九十九の手からメガネが床に落ち砕け散った。

銀さんの足が止まった。

「盗み聞きは趣味じゃありません、偶然ですよ」

屈み込んでガラスの破片を拾い集めながら九十九が言った。

「僕の興味はただ一つ。人間の心。それだけです」

「こころ？」

「アァ〜ア、このロイドお気に入りだったんだけどなあ〜」

破片をハンカチに包み、フレームだけになった丸眼鏡を片手に立ち上がった九十九はゆっくりと二人に向き直った。

「僕はね、清水加夏子の『心』と戦っているんです。戦争と言ってもいい。今まで我々は負け続けてきた。これは総力戦なんです。使える武器は多い程いい。僕にとって堀川君はそれだけの存在です、だが衣笠君にとっては違うですよ」

視線を回しながらレンズの無い眼鏡をかけた。

「どういう意味なんだ？エミちゃん」

銀さんも恵美子に向き直った。

彼女はね、どうしても堀川君の力が必要なんですよ

彼の能力の秘密を解き明かし、利用する

それが駄目なら彼自身を実験台にする事もいとわない理由があるんです

レンズの無い眼鏡の奥で、九十九の眼光が徐々に強くなる。

「そういえばさっき『あのひと』とか言ってたよな。それが何か関係あるのか？」

俯いてしまった恵美子を銀さんが問い詰めた。

「なあエミちゃん、何か他人に言えないような事情でもあるのか。水臭いじゃねえか、言ってくれよ」

僕から言いませんか

別に秘密にする事でもないでしょうと九十九が口を開こうとした時、恵美子が顔を上げキッパリとした口調で言った。

先生は黙っていて下さい

これは私の問題ですから

「…婚約していたんです、私達。今から四年程前の事でした…」

一言々々、嘸み締めるようにしながら恵美子は銀さんに向かって話し始めた。

「彼は古い和菓子屋さんの二代目、私はそこを覇にしていた旅館の女将の次女。家同士も仲がよくて、私達は当然のように結婚するものだと思ってた。彼に症状が現れた、あの日までは」

「症状？ エミちゃんの彼氏が病気だったって話なのか」

「酷かった。あれ程急に症状が進むのはとても稀だと言われて、でもそんな言葉は何の慰めにもならなかった。一年も経たない内に、彼の記憶の大半は失われてしまったの」

「おい、そりゃあ…」

「激症性若年アルツハイマー、めったに起こらない病気です。私も実例にお目にかかった事はありません」

九十九が脇から補足した。

「母は、跡を継ぐまでの社会勉強だと言って私が看護学校に進むのを認めてくれてた。私も最初は安っぽいヒューマニズムから看護師を志していた。でもあの時私は誓ったの、治療法を探す…一生かけても私が彼を治す、治してみせるって！」

言葉を吐き出した恵美子の顔は激情で歪んでいた。

「あのひとを治す為なら何だってする！ 悪魔がいるなら取引したっていい！ 私は…私には、それが全てなの！ それしかないのよ！ だから！！」

「だから九十九先生の言いなりになった、って事か」

フゥ〜と銀さんが息をついた。

西日は夕日に変わりつつあった。

「そういう訳で、彼女には大事な役目を担ってもらっています。少なくとも私達二人の利害は一致している。貴方はどうですか？ 久我銀次さん」

ズンと斬り込む重さで、九十九が問いかけた。

「俺はあの二人にとって一番いい結果を出してやりたい、それだけだ」

「なら問題無い。一緒にやりましょう」

「断る」

「ほう、何故？」

九十九の口の端がクイツと釣り上がった。

「先生、あんたにとって今が戦争だというのは判る。精神科の医者だからな。でも俺はトレーナーだ、心って奴が切った貼ったで何とか出来るとは思っちゃいない。あの二人は自分達で答えをださなきゃならない。そういう定めなんだ」

「定め、ですか。えらく芝居がかってますね」

「そんなんじゃねえ、そんな生易しいもんじゃねえんだ、あいつらはなあ！…」

.....

そこから先を銀さんは言う事が出来なかった。

言えば殉も加夏子も、今とは違う嵐の中に巻き込まれてしまうから。

「久 我さん。彼女と堀川君を私達の監視下で引き合わせます。万が一、彼のサイコインが前回のように彼女の深層意識に障害を与えそうになったとしても、コント ロールされた環境ならば被害は最小限に抑えられる。彼女の心の障壁を突破する、これはまたとないチャンスです。この事は決定事項として了承願いますよ」

「しかし」

「堀川君が一時帰宅から戻り次第、とりかかるつもりです。協力するしないは御自由にして頂いて結構。でも何も出来ず頭を抱えているよりは、私達と一緒にやった方がよほどいい結果を残せると思いますけどね」

こいつ、俺まで見張っていたのか
この分じゃエミちゃんの事情も何もかも、全部知った上で仲間にしたんだろう

「…好きにしたらいい。その時がきたら考えるさ」
「いいでしょう。では後程、戦場で」

二人に背を向けた九十九は、ゆっくりと廊下を遠ざかっていった。

「ワザと、だ」
「え？」
「眼鏡を割って俺の気を殺いだ。恐ろしくケンカ慣れしてやがる。一体どういう男なんだ」
「…」
「いいぜ、エミちゃん。迷うなら迷えよ。自分のやらなきゃならない事が何なのか、よく考えな。俺は自分に出来る事をやる」
「銀さん…」

恵美子はそれ以上、口を開こうとはしなかった。

◇

三日後の朝、堀川殉が一時帰宅していった。

第十七章

いきなりでビックリしたわよ

あなたのお父さんから、一日だけ家に戻したいと申し出があって
今のあなたなら大丈夫だろうと九十九先生も外出を許可してくれたの
ただし、家族以外の人とは接触を持つては駄目よ

エントランスで一人、迎えの車を待ちながら加夏子は恵美子のお話をボンヤリと思い返していた。

家族以外の人、ね

誰もかれもおんなじなのに

ありきたりで薄っぺらな言葉に、少し前なら不快感が必ず大爆発していたであろう自分が、こんな所でのんびりとそれを
思い出しているのが不思議であった。

過激な情動が影を潜めた分、色々な事がどうでもよくなっていた。

医者も家族も、勝手にやりたいようにやっているだけだ。

そこに自分は居ない。

それが彼女の目に映る周囲の景色であったのだ。

「おね～えちゃん！」

トンッと車椅子の背を叩いたのは碧だった。

「こら、脅かそうなんて10年早いわよ」

「なーんだ、つまんなーい」

紺色のシャツに白いダウンのベストを着た碧が、後ろでニコニコ笑っていた。

自然と笑みが沸いてくる。

不思議なコ…

初めて会った時からスルリと私の心の中に入り込んできた。

でもそれが全然、不快じゃない。

むしろ暖かく懐かしいような感じがして、このコといると笑顔になってしまう。

「おねえちゃん、退院しちゃうの？」

「ウウン、そうじゃないのよ。パパがね、ちょっとだけおうちに帰ってきてって言ってるの。それでね」

「じゃあ、また戻ってくるんだ」

「そう、すぐに」

「じゃあ帰ってきたら、ウチと折り紙しようよっ！ ウチ、カエルが折れるようになったんだよ」

「すごいじゃない、じゃ、約束ね」

左の小指を差し上げた加夏子は、慌てて右手に変えた。

碧の短い髪が、シャツの左袖と一緒に風になびいていた。

エントランスを白いクラウンがこちらに向かってるのが見えた時、強烈な既視感が加夏子を襲った。
どこかで似たような光景を見た事があると、加夏子は碧の存在すら忘れてその時の事を思いだそうとしていた。

駄目、思い出せない…

「それ、殉にいちゃんの事だよ」

小さな右手を加夏子の肩に添えた碧が言った。

「みーちゃん…あなた…」

加夏子は穴があく程、碧の顔を見つめた。

◇

久しぶりの自分の部屋だった。
明るい木目の机、小さなスタンド、座り慣れた椅子。
淡い花柄の壁紙は入院前と少しも変わっていない。

変わったのはワタシね
それとも、本当のものが見えるようになったのかな
じゃあ何故、今まで判らなかったの
本当のものって何？
ワタシって何？

一階には両親が居る筈であったが、物音は聞こえてこない。
寒さが冷たく締め上げた夜の街は、しんとして静まり返っていた。
夕食後、階段の簡易エスカレーターで二階に上がった加夏子を気遣い、母が顔を覗かせたのが2時間ほど前。それからずっと一人きりの部屋でスタンドの灯りを見つめ続けていた。

やる事も、やりたい事も無い

彼女から望んだ帰宅ではなかった。
父のたったの願いで実現した今回の一時帰宅は、加夏子にとって不可解であり鬱陶しくもあった。
あれだけ切望した家族の温もりも今は白々しく感じる。

どうでもいいや
怒り狂うのにも、もう飽きちゃった
ひとりでいられればそれで充分
そう、一人がいい…

荒野にゆきたいと、ふと加夏子は思った。
そこかしこに得体の知れない生き物の骨が転がっているような、草も生えない石ころだらけの荒野。
何の表情も見せない風がただビュウビュウと吹き荒んでいるだけの荒れ野が今の自分には似合っていると、虚ろな目で

乏しいスタンドの光を眺めながら、加夏子はひとつ溜息をついた。

彼女の周囲は皆、大変な間違いを犯していた。

清水加夏子の精神は、決してガードを下げた訳でも回復への緩やかな過程についた訳でもなかったのだ。

加夏子の冷ややかで醒めた眼差しも、いつ飛び出すか判らない暴力も、全てが自分と世界との関わりを見つめ直し再構築しようとする彼女なりの葛藤であり足掻きであったのだ。

他人がどう思おうと、その結果どれ程自分が忌避されようとも、加夏子は壊れてしまった自分と世界との繋がりを手探りしながら必死に探していたのだ。

だがその想いは、碧の出現で足場を失ってしまった。

癒される事は、張りを失う事に等しい。

残されたのは自分自身への果てしない嫌悪感だけ。

加夏子の精神は今、崩壊の危機に晒されていたのだった。

◇

一階で電話が鳴るのが聞こえた。

階段を登る重い足音がすると、ドアをノックして恒彦が顔を出した。

「カナ、電話だぞ。堀川君から」

「え…」

電話の子機を渡すと、恒彦は部屋に入らずドアを閉めた。

加夏子は車椅子のホイールを押して窓際まで進むと、おずおずとそれを耳に当てた。

「もし…もし？」

「やあ」

彼女とは対照的に屈託無く響く声。

「ヤアって…こんな時間になに？」

「チョット、ね。話があるんだ」

「ワタシにはないよ、別に」

戸惑いながらも、加夏子は拒否の態度を崩さなかった。

「明日、会えないかな」

「明日は病院に戻るの。他にやる事も無いけど、わざわざあなたに会いに行く理由も無い」

「君は僕と会わなきゃならない、会って、ちゃんと話をしなきゃならない。君自身の為に」

「ワタシのため？ なにそれ、あなた何様のつもり？！ なにしようっての！」

「何もしない、何もしないよ。でも君は知らなきゃならないんだ、あの夜、自分に何が起きたのかを」

「そんな必要ない、あなたは助けてくれたかも知れない、けどそれだけじゃない！ あなたはワタシに何かした、お得意の心を覗くいやらしい力で。そうよ…あなたは私を汚した！ 誰も来ない、誰の邪魔も入らない暗い洞穴みたいな場所で、あなたはワタシを犯したの！ カラダも心も覚えてる！ 虫酸が走るのよ！」

「聞いてくれカナちゃん」

「気安く呼ばないで！ 言ったでしょう、ワタシに近づかないでって！！」

叫ぶように言うと、加夏子は電話を切った。

荒い呼吸を整え子機を膝に置き、薄いカーテンに覆われた窓を暫くの間ボンヤリと眺めていた。

ふと何かを感じてカーテンをめくってみる。

二階から見下ろす道路の街灯が、細い影を作っていた。

殉

ゆっくりと手を持ち上げる彼を、路面の影が真似る。

また電話が鳴った。

「…いたんだ、ずっと、そこに」

「みーちゃんが言った。おねえちゃん、淋しいんだよって。同じなんだ、あの子と僕は」

「おなじ…」

「あの子にも聞こえたんだよ、カナちゃんの『声』が」

「それじゃあワタシ」

「みーちゃんの気持ちが届くなら、僕だって。大丈夫だから」

行くよと言って、殉は携帯を切った。

部屋の外で聞いていた恒彦が、足音を潜ませて階段を降りていった。

第十八章

「あなた、本当にいいの？」

オンザロックのグラスを差し出しながら、清水紗季子は夫の恒彦に聞いた。

ついさっき家を訪ねてきたのは、あの夜に血を吐いて運ばれていった少年であったのだ。

その事も紗季子を驚かせたが、夫がまるで予期していたかのように彼を招き入れた事が、彼女には驚きと同時に不審でもあった。

「お前には話していなかったが、今夜彼がここを訪ねてくるのは予定通りの事なんだ」

「予定通りですって？」

「ああ。この間見舞いに行った時、加夏子のリハビリ担当に相談を受けたんだ。お前も会った事があるだろう。トレーナーの久我さんだよ」

酒のつまみを皿に盛り付けていた紗季子の背がぴくりと動いた。

「ん？ どうかしたか」

「いえ、別になにも」

表情を変えず、紗季子は恒彦の前に皿を置いた。

「彼とじっくり話したんだ。加夏子が何故、あんな風になってしまったのか。何故今、あの子の暴発が収まりつつあるのか」

「それであるひと…久我さんは何て？」

「彼もあの少年から聞いたのだそうだが、要は加夏子が自分で恐怖に打ち勝ったって事らしい。その代わり他人への強烈な不審を抱え込んでしまったと。あの夜、堀川というあの少年が吐血したのは加夏子の『攻撃』をモロに受けてしまったのが原因らしい。そしてそれは加夏子の誤解から生じていると。それを解かねば、根本的な解決にはならないと彼は言っていた」

「でも今は良くなっているのじゃありません？ 確かに少し元気が無いみたいだけど、嘔みついたり引っ掻いたり、殴ったりもしないじゃないですか」

「あの子が心を開くきっかけになったのは、同じ入院患者の女の子と出会ったかららしい。だがな、その子もあの少年と同じような力を持っているようなんだ。何と言ったかな…」

「サイコイン」

「それだ。加夏子の心の根っこの部分を治すには、どうしてもその力が必要だと。そしてそれは、あの彼でなくてはならないと、そう言っていたんだ。私はその言葉を信じた」

「そうですか。あのひとがそんなことを」

ほっそりとした指で胸元を包むようにした紗季子が、仰ぐように二階を見た。

加夏子と殉が向かい合っているであろう部屋を。

「みーちゃんに会ったの。パパやママが迎えにきてくれるのを待ってたとき」

加夏子がようやく口を開いた。

殉は部屋に入ったときそのまま、戸口の脇に立ち長い沈黙が終わるその時を待っていた。

「ワタシ判った気がした。あの子も殉と同じなんだって。都合良すぎるよね」

「都合がいい？」

「だってそうじゃない。口もきけずふさぎ込んでたワタシの前に現れたのがあなた、嫌われ者の暴力女になったワタシに怖がらず近づいてきたのがあの子。出来すぎてるわ。安っぽい小説みたい」

「君はみーちゃんも、僕みたいにいやらしい奴だと思うのか？ 他人の心に土足で踏み込む覗き屋だと」

加夏子が小さく首を振る。

「不思議だった。何であの子といると穏やかな気分になるのか判らなかつた。ワタシひとりっ子だから知らなかつたけど、妹がいるってこういう事なのかなって。当たり前のようにワタシを受け入れてくれる存在、でも親とも友達とも恋人とも違う。兄弟とか姉妹って、きっとこんなものなんでしょうね」

「僕にも兄さんがいる」

「そう」

感心無さげに、加夏子は殉の言葉を流してみせた。

「あの子にも力があるなら、ワタシをそんな気分させるのなんて簡単だったでしょうね。あなたもそうだった。ワタシにいろんな夢を見させてくれた。でも全部嘘、見せかけの飾り物でしかなかった」

「それは違う」

「どう違うってゆうのよ」

思わず前に踏み出した殉を、クルリと車椅子を回した加夏子が真正面から睨んだ。

「知らないって事が…知らなかつたって事が、どれだけみじめで怖くて情け無くて、それから腹立たしい事が、あなたに判る？ 目が覚めてからずっとよ、顔を見れば誰もかれも隠し事をしてる、口ではいい事ばかり言って、目の奥に違う光がある。ワタシが睨むとみんな視線を外す、口ごもる、嘘つきだらけだった！」

加夏子の表情が、またあの狂気の老婆に変わろうとしていた。

「だまそうってそうはいくか！ ワタシは…アタシはもう誰にも騙されない！ ダレにも傷なんかつけさせない！ アタシは、アタシは！！！」

加夏子の右手が机の鏡を掴むと、高々と振り上げた。

バッキャアアアーン！！

ガラスの碎け散る音が夜の住宅街に響き渡った。

「あなたっ！」

紗季子が叫ぶ。

恒彦の巨体がソファをに蹴り飛ばし、階段を踏み抜く勢いで二階へ駆け上がった。
ドアノブをわしづかみにして一気に部屋へ飛び込もうとした、そのとき。

「いいよ、やれよ！ 遠慮しないでぶつけろよ！ ちゃんと見えてるよな、覗き屋のボクなんかと違ってみんな見えるんだろ？ やれよ！！」

ドア越しに聞こえてきた殉の罵声が、彼の手を止めた。
薄く開いた隙間から中の様子を伺う。
死角にいる二人の姿は見えなかったが、張りつめた緊迫感が漂ってきた。

もう1度、今度は陶器の割れるような音が響き、飛び散った破片が恒彦の足下にも飛んできた。
淡い空色の欠片。加夏子のお気に入りのペン立ての無惨な姿であった。

「どうした？ どうしてぶつけないんだ。僕にはよけられないんだぞ。僕が憎いんだろ？ 君を汚した僕が憎くてしょうがないんだろ！ 僕はここにいるぞ！！」

ガシャン！ ガシャンッ！！

車椅子のぶつかる音。
くぐもった殉の呻き声。

「わからない！ わからないんだよぉ！！ アタシなんにも覚えてないんだ、でもアンタがいるとキモいんだ！ ムカついて自分が止められないんだ！ 何とかして…なんとかしろよぉ！ 助けてよぉぉ！！」

ドアを開けると、殉の胸ぐらを両手で握りしめ、鳩尾の辺りに額を埋めた加夏子が叫びながら泣いていた。

「カナちゃん…君の言う通りだ、みんな僕がいけないんだ。話してあげる、あの時僕が何を見て、君になにがあったのか」

殉がゆっくりとこちらを振り向いた。
瞬かない青い瞳から一筋、透明なしずくが滑り落ちるのを恒彦は見た。
彼はそっとドアを閉め、部屋を後にした。

階段の途中で心配そうに二階を見上げていた紗季子に、恒彦は声を掛けた。

「任そう、彼に。大丈夫だよ、きっと」

紗季子が小さく頷いた。

第十九章

怖かったんだね

君の心の中は棘だらけの森みたいだったよ
ギザギザで、ひどく暗かった

胸ぐらを固く握り締めたままの加夏子の肩をそっと両手で抱くと、殉は落ち着いた口調で語り始めた。

「辿り着いたのは、大きさも判らない広い場所だった。多分、カナちゃんの心の一番奥深い所だったんだろう。そこで傷だらけの君を見つけた…初めて見たよ、カナちゃんの顔。前から想像してたんだ、どんなコなんだろうかって…」

殉が軽く微笑んでみせた。

加夏子が顔をあげ殉を見上げた。

「君はボロボロの姿で、必死に助けを求めている。君をそんなにした奴もそこに居た。恐怖の形…それは刀を手にした男の姿をしていた。そして…」

殉が言い淀んだ。

「そいつは、僕の兄さんそっくりだったんだ」

加夏子の目が張り裂けんばかりに見開かれた。

「そんな…だって、あなた目が…」

「見えるんだ、誰かの目に映ったものを。その人の心に映った映像を。兄さんは鏡に映った自分を僕に見せてくれた事があった。アイツの姿は、その時の兄さんによく似ていたんだ。それで僕は動揺した」

「ジュンのお兄さんが、私を」

「そうじゃない！ そうじゃないんだ、ただ似ていたというだけなんだよ。でも僕は動揺し混乱した。他人の心に深く入り込んでいれば、相手にもこちらの心が影響を与えてしまうんだろう。僕が一瞬でもアイツを兄さんだと思ってしまったことで、君は僕とアイツが一緒の存在か、それとも仲間じゃないかと思いついてしまっ たんだよ」

殉は必死に訴えた。

「信じて欲しい、カナちゃん。アイツは僕の兄さんなんかじゃない！ アイツと僕は何も関係がないんだ。アイツはもう何処にもいない。もう怖がらなくていいんだ！ 他人を疑わなくていいんだ！」

「…無理よ…」

「カナちゃん！」

「どうしろっていうの！？ 自分でも抑えようがないのよ、頭でいくら思っても駄目なの！ 軀の奥の奥から、般若みたいなアタシがいつでも顔を覗かせてる、自分でも止められない！！」

「方法はある。僕を、もう一度カナちゃんの中に潜らせて欲しい」

信じてくれるなら…

殉の手に力が込められた。

◇

時計は零時を差し示そうとしていた。
カツ、カツという音だけが響く部屋の中。
向き合った二人は微動だにしない。

加夏子は、ベッドの端に腰掛けた殉の前で目をつむっていた。両手は膝の上でしっかりと握られている。
殉もまた瞑目していた。殆ど暖房の効いていない部屋で、彼の額にはうっすらと汗が浮かんでいた。

かれこれ3時間が過ぎていた。
あまりにも静かな様子に不安をかきたてられた恒彦達が恐る恐る部屋を覗いた時、二人は既に彫像と化していた。
加夏子も殉も、恒彦や紗季子が部屋に入ってきたことに気付いていない。意識すら無かった。
瞑想で言う完全な三昧境にあったのだ。

誘ったのは殉だった。

「い いかい、これからカナちゃんとシンクロする。この前は僕自身、訳も判らないまま君の中に入っていった。君と強い絆が生じていたのを感じていたから、あんな 無茶をやってしまった。でも今度は違う。君は僕を拒んでいる。そこに入ってゆくのは多分、もの凄く強い抵抗にあうと思うんだ。正直、たどり着けるかどうか 自信が無い。でも僕は信じてる、カナちゃんが本当の自分を取り戻そうとしてる事を。そこには必ず僕のいる場所がある事を」

離れていていいよと言うと、殉は加夏子の車椅子を押してベッドの傍へゆき、自分は浅く腰掛けると静かに目を閉じた。

間を置かず猛烈な眠気に襲われた加夏子も、あらがう事なく瞳を閉じた。
時間は意味を成さなくなっていた。

◇

「あなた…病院に連絡したほうが…」

生きている人間とは思えない二人を前に、不安をかき立てられた紗季子が恒彦の背を押す。

「待つんだ、サキ。久我さんが言った、『ギリギリまで二人に干渉しないでくれ』と。心の中の事なんて私達には判らない、だが彼は…堀川君は、前回の失敗で学んだ筈だ。だから任せよう。彼を信じよう」

そう言う恒彦自身、強く嚙んだ唇の端に血を滲ませていた。

このひとも戦っているんだ
カナと一緒に

恒彦のさまを見た紗季子は、恒彦の背を押す手を放した。

私も一緒に戦う
このひとや、血を吐いてまでカナを救おうとしてくれた彼と
お願い、加夏子を助けて

お願い

神さま…

久我さん…

紗季子の手は真っ白になるまで握り締められていた。

◇

目を閉じ、自分の頭の天辺から首、背骨に沿ってゆっくりと下に向かい沈み込んでいった。

意識を光る球体としてイメージした殉は、徐々に徐々に、深海潜水艇が海溝に潜ってゆくように、それを軀の底の方へと沈ませてゆく。

呼吸のリズムは加夏子に合わせ、だが少しずつ遅くしてゆくと、球体が沈むに従い今度は加夏子の呼吸が殉のリズムと同調してくる。

誰に教わった方法でもなかった。

幼い頃、たらい回しにされた親戚の家で、盲目の殉には赤子をあやす位の事しか出来なかった。

ぐずって泣き止まぬ赤ん坊を寝かしつけるのが、いつもの殉の役目だったのだ。

そんな日々を繰り返すうち、彼は奇妙な特技を身につけた。

どんなに癪の強い子でも、殉が添い寝してやるとピタリと泣き止んで、やがて二人ともスヤスヤと気持ち良さげに眠ってしまうのだ。

成長し、サトリとして親戚達に忌避されるようになるまで、殉は子守の名人として重宝されていたのだった。

無我夢中だった前回と違い、今度は始めから自分の意志で、覚醒している相手の心の中に入り込んでゆかねばならない。どうすればそんな事が出来るのか。

殉が思いついたのは、子供の頃に散々やったこの方法だった。

いや、正確にはそれしか思いつかなかったと言うべきであろう。

こんな事を日常的に行ってきた訳でもなく、ましてや専門的な訓練など受けた事も無い殉にとって、加夏子とシンクロするにはこの方法しか選択の余地が無かったのだ。

殉は知らなかったが、チベット密教において『夢見の法』とされる修行法と彼のそれは酷似したものであった。

密教僧達はこの方法を用い、自らの夢の中へ、自我を保ったまま入っていったという。

異世界を自在に飛び回り、言い伝えでは現実の肉体もまた夢と共に宙を舞ったといわれている。

殉は加夏子と一緒に深い眠りに落ちた。

眠りながら、尚かつ彼は『目覚めて』いた。

暗黒の中を下降する彼の意識は、緩やかな螺旋を描きながら、それを探していた。

どこだ

どこにあるんだ、彼女の「扉」は

闇の底は永久に無いかのように、どこまで下っても見えてこない。

萎えそうになる自分を叱咤しながら、殉は更に深く深く、暗闇を潜っていった。

第二十章

心、とは何であるか。

古来より多くの賢者、覚者が呻吟し、今尚答えの出ない人類の永遠の命題である。

ある者はそれを神の祝福の証といい、ある者は人と獣を分かち境界であると説く。心とは魂そのものであると誰かが言えば、そんなオカルティックなものではない、もっと普遍的な人間の徳性の表れだと異を唱える者が出る。

かくして百花繚乱の議論は、確たる結論のひとつも出せぬまま現在まで続けられてきた。

最新の大脳生理学は、心が莫大な量の神経細胞網、ニューラルネットワークにより構築された高度な情報処理系の、幾つかの領域に分かれて相互に監視・干渉・補助を行う過程で生じた脳内システムの錯覚…『我思う 故に我あり』という有名な言葉を借りるならば、『我を我と認識する我は 既に我とは別の我である』とでも言い表す事が出来る…である可能性を示唆している。

肉体と脳を切り離して考えられないように、脳もまた肉体の存在を前提としなければ、その能力について説明する事は出来ない。そういう意味では、例え靈魂というものが未知の形で死後、存在するものであったとしても、肉体という自在に動くセンサー群を喪っている時点で、それは既に人間とは違うものであると言えるであろう。

極めて乱暴かつ簡単に心というものを定義するなら、それは数多くの神経細胞の発する信号の無限に近い組み合わせと言う事が出来る。

人が決して他者そのものになれないのは、一つには肉体の性能に個体差があり過ぎるという点があげられるが、生物学的に互換性があり又、通信手段は必ずしもテレパシーなどという未知の能力を必要とせず、互いの感覚器に情報を与えあえば事足りるので大きな障害にはならない。

(顔をしかめ、それを見るときといった行為は立派な通信の一形態である)

問題は、互いの持つ莫大な各種信号に同期する事が事実上不可能であるという点にある。

殉のサイコインという能力にしても、同期出来る相手の情報、信号量は全体のほんの僅かにしか過ぎず、ただそれが常人より多いというだけに過ぎないのだ。

今、彼は加夏子という情報の一端に自分のそれを重ね、別の情報群にアクセスしようとしていた。

だがそれは、彼を頑なに拒むものであったのだ。

◇

ここまではうまくいっているようだ、そう思う殉の意識は、既に光球ではなく人の形をしていた。

更に下へと目を凝らす。

見えてきた。

黒いだけだった闇に濃淡が生じていた。

変化の兆候だ。

『扉』への微かな期待を胸に、殉は頭を下げ、スカイダイビングの急降下のような姿勢をとった。

グンと勢いがついた、次の瞬間。

避ける間もなく突っ込んだ。

生暖かい灰色がかった極彩色が巨大なプロブとなって吹き上げてきた。目眩がする程の猛烈な悪臭と全身を覆う不快なドロドロに押し流され、もみくちゃにされ、猛烈な勢いで遙か上方に吹き飛ばされそうになる。気持ちの悪い未消化物のようなものが穴という穴から入り込んできた。

抗いたくても、しがみつく物も踏ん張る足場も無い。ここはイメージの世界なのだ。

イメージの世界

そうか

「逃げないぞ！ ぜったいに！！」

強く念じて四肢を張り顔を上げた。

眼球の表面にまでヌルリと流れる粘液の気味悪さに吐きそうになりながら、やっぱり見えるという事はイイことないんだなあと場違いな想いを抱いてみる。

奔流がふいに消えた。

漆黒の空間に、再び一人ぼっちで取り残された殉は、手足の緊張を解いて辺りを見回してみた。

ふと背後に気配を感じて振り返った殉は、喉の奥から心臓が飛び出そうになった。

…目、だ…

全てを覆い尽くすかのような目、いや目玉が彼を見下ろしていた。

巨大な虹彩が彼に向かって引き窄められる。血走った、敵意に満ちた目。

全身に立った鳥肌が皮膚を突き破って飛び散りそうになる。

びりびり、ぱりぱりぱり

音を立てて巨大な目玉が真ん中から裂けてゆく。

ぱっくりとあいた。

ズラリと並んだ、出鱈目に生えた牙

おうわあああああああああ～！！！！

頭の皮がめくり上がる程口を開け殉は絶叫した。

◇

突然、のけぞるようにベッドへ倒れ滅茶苦茶に軀をよじり始めた殉を見た恒彦は、慌てて彼の両腕を掴み押さえつけようとした。

もの凄いや力でベッドから跳ね上がろうとする殉に覆い被さりながら叫ぶ。

「サキ！病院に電話しろ！今すぐっ！！」

紗季子が駆け出そうとして止まる。

「あなた…」

加夏子が、うっすらと笑っていた。

暗い笑みを浮かべている加夏子を見た紗季子は、階下へ向いかけた足を止めた。

「どうした?! 早く病院へ電話を!!」

「だめよ…あなた…だってこれじゃ…」

棒のように立ちつくしながら、紗季子は加夏子が目覚めたあの日の事を思い出していた。

アイツ、ヤッツケタ

焦点の定まらない目で虚空を睨みながら、加夏子は今と同じ笑みを浮かべ、そう一言呟いたのだ。

あの時と同じだ

ここで止めたら、加夏子は今までと何も変わらない

何一つよくなんかなりはしない

躊躇いがちにベットの方へ向きを変えると、紗季子は跳ね回る殉と恒彦の身体の上に覆い被さった。

夢中で夫のシャツの端を掴んでしがみつく。

「何やってんだバカ! いいから電話しろ!」

「駄目なの! 彼じゃなきゃ駄目なのよ! ここで駄目ならこの先いつまで経ってもカナはダメなままなの!! 今しかないのよ!!」

親子亀のロデオよろしく上下左右に揺さぶられながら、それでも紗季子は恒彦の背から落ちなかった。

カナちゃん!

カナちゃん!!

カナちゃあああーん!!!

愛娘の名を必死になって連呼する。

殉を抑えつける手を離すに離せず、紗季子を背中から降ろす事も出来ない恒彦も、いつしか彼女と一緒に娘の名を叫んでいた。

加夏子っ!

かなこおおー!!

…少しずつ、少しずつ殉の動きが収まってくる。

やがて静かになった。

「どうにか収まったようだ、な」

「ええ」

肩で息をしながら、恒彦は紗季子を背から降ろした。

グチャグチャに乱れた髪をうなじに押さえつけ、紗季子は殉を見下ろした。

彼の顔からは苦悶の表情が消え、口元には微かに笑みさえ浮かんでいた。

すうっと両手が持ち上がり、宙に向かって差し出される。

加夏子の方へ向き直ると、今度は逆に彼女の額に深い皺が走っていた。

イヤイヤをするように首を左右に振る。

「なにが…起こっているのかしら」

「俺も知りたいよ」

何か飲み物を持ってきましょうと言い、紗季子は一階へ降りるとバッグから携帯電話を取り出し、病院の番号をプッシュした。

「もしもし、夜分にすみません。その、娘の事で至急、連絡をとりたい人がいるんです。ええ。お願いします」

名前を告げると、紗季子は電話を切った。

第二十一章

長い牙
鋭い牙
曲がりくねった牙
汚れ欠けたノコギリ状の牙

ありとあらゆる牙が殉の身体を貫いていた。
ザグザグと咀嚼音が鳴る。
殉の両足は噛み砕かれ、胴体はひと噛みごとに潰れ、気味の悪い腸をはみ出させていた。
生きながら喰われる激痛に絶叫し、両腕で滅茶苦茶に『邪悪な口』を叩き続ける殉を、『魔眼』が笑いながら見下ろしていた。

精神世界で身体を傷付けられるのは心を直接破壊されるのに等しい。
殉が廃人と化するのには時間の問題でしかなかった。

だ…め…だ…
………
………
…

爪の先程残っていた殉の意識が、微かに響く音を聴いた。

人…おんなの…ヒト…の…こえ…

それは少しずつ、だが確実に大きくなっていった。
『邪悪な口』の動きが、声の広がりと共に鈍くなってくる。
やがて声はデュエットのように高く低く響き始めた。
細く通った女性の声。
野太い男性の声。

声は、名を呼んでいた。

…
………
………ちゃ～ん…
…カナちゃ～ん…
カナちゃああ～んっ！！

…
………
………こお～…
…加夏子お～…
かなこおお～！！！！

『邪悪な口』の動きが止まった。
胸から下を挽き肉にされた殉は、牙の端に引っかかった状態でダラリと垂れ下がっていた。

生暖かい液体が顔を打ち、僅かに残った意識が戻る。
ひどくしょっぱい。気力を振り絞り重い瞼を持ち上げた。

『魔眼』が、泣いていた。

巨大な眼球に、涙があとからあとから溢れ出しこぼれ落ちてくる。
どしゃ降りの雨に打たれるように濡れそぼちながら、殉は『魔眼』に向け両手を差し上げた。
痛みは消えている。
暖かい…

『邪悪な口』が消え去り、虚空に横たわった殉は元の姿に戻っていたが、彼はそれすら気付いていなかった。奇妙な至福感に包まれ、ほんのりと笑みを浮かべながら、それに手を差し伸べる。

『魔眼』は、いつしか小さな光の点へと変わっていた。
小刻みに振動しながら、右へ左へ宙を漂っている。
夏の夜の蛍のように、はかなくフラフラと飛び回る光。

『扉』だった。

戯れるように光を追い、殉が両の掌にそれを包み込むと、暗黒の風景に変化が生じた。

自分が遂に辿り着いた事を、彼は知った。

◇

奇妙な風景だった。
草木は生えている。
だが動くものは無い。
虫一匹すらない。

思慮無く作られたテーマパークのような。
砂漠に置かれた箱庭のような。
無風。乾いた空気。

コントラストばかり強い、どこか人工的な虚偽に彩られた場所。
目に優しい緑が幾らあっても、豊かな印象は一つも持てなかった。

彼女はそこにいた。

殉は慎重に足を進めた。
あの時の愚だけは避けねばならない。
三度目の正直は無いだろう、たぶん。

加夏子は地べたに座り込み、抱えた両膝に顎をのせてボンヤリと遠くを眺めていた。
あと数歩で手が届く所まで来ると、殉は足を止め、彼女のうなじの辺りを見下ろした。

「来ちゃったんだね」

わずかに顔を動かし、加夏子が肩ごしに呟いた。

「うん」

「来て欲しくなかった」

「うん」

「あのまま嘔み潰してしまえばよかったかもね」

「うん」

「そのつもりだった。ホントだよ。でも出来なかった。声がしたから。パパとママの声…なんか嬉しかったな」

黒髪に半分隠れた端正な顔が淋し気に微笑んだ。

「どうでもよくなっちゃったのよ。喰い殺したいほど憎かったあなたの事も、ね」

「…」

「ホント、もういいやってカンジ。ほっといてくれないかな。ワタシここにいる。ここでこうやって、バカみたい
にずうーっと死ぬまで座ってるから」

「みんな待ってるんだ、君を。どうしてそんなこと」

「信じられないから」

加夏子がゆっくりと顔をあげた。

酷く哀しい表情で殉を見つめる。

「悪いことなんて何もしなかった。でも本当のママは病気で死んじゃった。誰にも意地悪なんてしなかった。でも斬られた、顔も知らない男に。素敵な男の子と知り合えた。でも喋る事も歩く事も出来ない。その子は私を助けようとしてくれた。でもその子のお兄さんと、私を斬ったあの男はそっくりだった」

「カナちゃん…」

「どうして私、こんな目に合うんだろ。たぶんこれからもずっと、こんな事が繰り返されるんだ。いつまでも、ずっといつまでも」

「そんなことない」

「もういいの。明日なんて信じられない…ここで骨になるまで座ってればいいの」

そんなことないっ！

殉が叫んだ。

「待ってるひとがいる、帰る家がある、君にはあるんだよ！居場所が…君が居てもいい場所がちゃんとあるんだっ！」

激昂しそうになる声を必死に抑えつけながら、殉は加夏子に向かい言葉をぶつけ続けた。

「今までのがなんだっていうんだ？君はちゃんと生きてきたじゃないか。いろんな事があって、ペシャンコに押し潰されそうになっても、君は君のままで今までやってきたんじゃないか。初めて会ったあの日、君は坂道が登れなくて困

ってた。嫌になってた。でも今みたいに投げやりじゃなかった！ 僕が手を貸したのは 偶然なんかじゃない、君が自分の『声』で呼んだんだ！ 一緒に坂道を進んでくれる誰かを！！」

殉は必死だった。

ここで加夏子を連れて帰れなければ、彼女の人格は確実に崩壊してしまう。

生の営みを、そこに生じる他者との交わりを否定し、拒否し、この無味乾燥な世界に閉じこもるといふのなら、現実世界での彼女の居場所は廃人専用のホスピスか、良くて精神病院の隔離病棟でしかない。

いけないんだ

こんな所にいちゃいけない

絶対にダメだ！

「カナちゃん、かえろう。みんなの所へ。大丈夫だから」

「…嫌。あそこには何も無い。あるのは苦しみだけ…もういいから帰って。一人で帰って。かえってよおお！！」

全ての景色が、ミイラのように色褪せ朽ちてゆく。

草木は枯れ、建物は轟音と共に崩れ落ちてゆく。

地震のような地鳴りが響き、大地は滅茶苦茶に裂けてゆく。

『内面世界の崩壊（インナー・ハルマゲドン）』と呼ぶにふさわしい壮絶な破壊が起きていた。

立っている事すら出来ず、殉は這いずりながら加夏子に手を伸ばした。

パツクリと地面が口を開ける。

轟という響きと共に、加夏子の小さな身体が亀裂の奥へと落ちていった。

くそおお～！！

殉はジャンプして加夏子の腕を掴んだ。

ダラリとぶら下がった加夏子。

視線は亀裂の奥、深淵を覗き込んだまま動かない。

「帰るんだ…みんなが…ボクがキミを待ってるんだ！ いっちゃダメだ！ カナちゃん、キミが好きなんだ！！」

帰るぞおー！！

かなあああああー！！！！

ピクリと加夏子の身体が動いた。

第二十二章

恒彦はハッキリと見た。

仰臥した殉の手首の辺りが急激に変色しドス黒い痣が浮かび上がってくるのを。
剛力で握り締められたように、痣は指の一本々々まではっきり判る人の手の形をしていた。

「これは…」

はふうっ

反りかえった殉が、肺の空気を吐き出す音を口から漏らすとバツタリとベットに沈み動かなくなる。

ガタンッ！

前のめりに倒れ込んだ加夏子が車椅子から床へと崩れ落ちた。

「カナちゃん！」

紗季子が血相を変えて加夏子を抱き起こす。

「あなた！ カナちゃんが、カナちゃんが！！」

恒彦は殉の脇から飛び降り娘のそばへ駆け寄った。
彼女の右手は何かを握った形のまま硬直している。

「息をしてないぞ」

「そんな…どうすれば…カナちゃああんっ！！」

「落ち着け！人工呼吸…心臓マッサージ…とにかく何でもやるんだ！ お前は救急車を早くっ！！」

言うなり恒彦は、紗季子の腕の中から加夏子をひっぺがし、床に横たえるとマウスツーマウスで人工呼吸を始めた。
吹き込む。離す。また息を吹き込む。

チラリと横目で見上げると、狼狽しきった紗季子は呆然と立ち尽くしていた。

「電話だサキィィー！！！」

恒彦の、家をも揺るがす大喝に我を取り戻した紗季子は、狭い階段を駆け降りた。
和服の裾が足に絡まり、転んだ紗季子は数段を残して階段を真っ逆さまに落ちてしまった。

◇

短い間だが、気絶していたようだ。
紗季子は壁に手をつけて起きあがろうとした。
頭が酷く痛む。額に手を当てると真っ赤に染まっていた。

転落した時ぶついたらしい。

ピンポン

間抜けなドアチャイムの音。

紗季子はヨロリと立ち上がった。

鉄芯を脳天から打ち込まれるような痛みに唇を噛んで堪えながら、フラフラと玄関へ向かい鍵を開ける。

銀さんが立っていた。

右手にAEDを、左肩には救急キットのバッグを下げた銀さんは目を見開いて目の前の女を見つめた。

「サキ。おまえ」

「くが…さん…カナが…」

すっと倒れ込む紗季子の小柄な身体を、銀さんの太い腕がガッシリと支えた。

「おい！ しっかりしろ！ 二人はどこだ?!」

「…かい…二階に…息、してないの…お願い…はやく…」

銀さんは物も言わず、紗季子を横抱きにすると階段を駆け登った。

◇

「久我さん？ どうして…」

顔を朱に染めた妻と、それを脇に抱えて部屋に入ってきた男の姿に当惑した恒彦の動きが止まった。

「説明は後で、清水さん。手を止めないで」

加夏子の足下に紗季子をそっと降ろすと、銀さんは手早く傷の状態を確かめた。

「大丈夫だ、瘤の上が切れてるから派手に血が出たが。ここを抑えて」

救急キットから取り出した止血帯で頭の半分を覆うと、紗季子の手をとって傷口の辺りに添えさせる。

虚ろな眼差しを向けた紗季子は、されるがままに頭を抑えた。

「そっちはどうですか？」

「駄目だ、呼吸が戻らん」

「これを」

AEDの箱を開き電極を取り出す。

「服を脱がせて。胸と脇腹に電極を貼るんです、箱の裏に絵があるからその通りにして下さい」

「わかった」

加夏子を恒彦に任せ、銀さんは殉の状態を確認した。

「こっちもバイタルが弱い。お嬢の状態と一緒だ。いや、同調しているんだろう」

「同調？」

「この有様なら、多分。あの時もそうだった」

「それじゃあ、二人は今」

「蘇生を急ぎましょう。恐らくお嬢のバイタルに彼も引きずられている。ボタンを押して」

恒彦がAEDのスイッチを入れる。

女性のアナウンスが合成音声で流れ、高電圧のチャージが始まる。

「離れて！ 清水さん」

恒彦が加夏子の脇から離れた。

紗季子は横になったまま眺めている。

チャージ音が高まった。

いっかいめのそせいです

ドンッ！

加夏子と殉の身体が同時に跳ね上がった。

じょうたいをみています

そのままおまちください

穏やかだが暖かみの無い合成音声で、蘇生状態を診断中だと告げた。

恒彦も紗季子も、銀さんも固唾を飲んで結果を待った。

加夏子、しっかりしろ

カナちゃん

帰ってこい、二人とも

三人の願いをよそに、再びチャージ音が低く鳴り始める。

銀さんは立ち上がると、ベットに横たわった殉の上から覆いかぶさり叩きつけるように言った。

「連れてこい！ 引っ張りあげろ！ お前なら出来る筈だ！ お嬢と一緒に帰ってこいっ！！」

にかいめのそせいです

ドンッ！！

その時、跳ね上がった殉がクワッと目を見開いた。

あ…あ…

ブルブルと震える殉の腕が、天井に向かって持ち上がる。瞳孔は激しく拡大と収縮を繰り返していた。

「どうした？ 俺が判るか？！ おい、しっかりしろ！！」

銀さんは懸命に話しかけた。

殉の腕が限界まで伸ばされる。

銀さんは見た。

腕についた痣がグニャリとへこむのを。

その時何故、加夏子の方を振り向いたのが彼自身にも判らなかった。

鉤型に硬直していた加夏子の手が瞬間、こぶしとなって握り締められた。

がはあっ！！

吐き出すような呼吸音と共に、殉がもの凄い勢いで腕を引き降ろした。肘が手首の近くまで深々とベッドにめり込む。

…

……ピン…

……ピン、ピン…

……ピン、ピン、ピン、ピン…

AEDの電子音が、規則正しく心拍をモニターし始めた。

でんきよくをはずしてください

でんきよくをはずしてください

でんきよくを…

加夏子の脇に屈み込んで電極を外した銀さんは、ゆっくりとAEDのスイッチを切った。

「やった…のか？」

「判りません、まだ」

恒彦の問いに、彼もそう答えるしかなかった。

後ろで誰かが動く気配がして振り返った恒彦は、物憂げに身体を起こす少年の姿に思わず声をあげた。

「きみっ！ 大丈夫なのか？！」

紗季子も銀さんも吊られてベッドの方を見る。

「…なん、とか…カナちゃんは？」

う、うう～ん

小さく唸った加夏子が目を開く。

「カナ！ パパだよ、判るか！？」

「ここ…わたしの…部屋…だよね？」

「そうだ！ そうだよ！！ どこか痛くないか？ 寒くないか？ もう大丈夫だからなあ！！」

ガッシリと抱きしめられ何度も何度も身体をゆさぶられながら、加夏子は父親の肩越しにベッドの殉を見ていた。

「おかえり、カナちゃん。悪い夢は終わったよ」

「じゅん」

大粒の涙が、後から後から溢れ出て加夏子の頬を、恒彦の肩を濡らしていた。

「やったのか、坊や？」

銀さんの言葉に、殉は晴れ晴れとした笑顔で返した。

「ええ、たぶん」

「多分だあ？ そのわりにヤスッキリした顔してるじゃねえか」

緊張から解かれ、銀さんもいつもの口調に戻っていた。

見えぬ目で加夏子を見る。

彼女も照れたように微笑み返した。

夜が、明けようとしていた。

◇

「さあ、いこうか」

器具をまとめた銀さんが声をかけた。

加夏子を車椅子に座らせていた恒彦が、ベッドの脇に戻ると殉に手を貸し立ち上がらせる。

「僕は大丈夫ですから、加夏子さんについててあげて下さい」

渡された杖を抱え、左手で壁を探りながらドアの方へと歩く。

「下で待ってて、ジュン」

「うん、待ってる」

紗季子がフラリとついてゆく。

「お二人に何か飲み物でも出してやってくれ、わたしも喉がカラカラだ。階段に気をつけてなあ！」

簡易エスカレーターの固定器具を解く恒彦の声は弾んでいた。

ソファに殉を座らせた銀さんは、思い詰めたような目でジッとこちらを見つめている紗季子に気づいた。

「どうしたサ…清水さん、何かありましたか？」

「……」

「あの…清水…さん…？」

物もいわず紗季子が銀さんの胸に飛び込んできた。

「来てくれたんだ！ あの子が危なくなったらちゃんと…待ってた、アタシ待ってたんだよお！！」

銀さんのぶ厚い胸板にむしゃぶりつき、何度も顔を擦りつける。

「ちょっと！ おい、どうしたんだ？ よせたら、離れて…離れろよ！」

「またアタシを置いてっちゃうの？ イヤだ！ 連れてってよ、アタシとあの子も一緒に連れてって！！」

「バカ！」

バシッ！

紗季子の頬が鳴った。

「アタマ打って混乱してるんだ。目えさせ！ ここはお前の家で、ダンナもいて、あの子はダンナとお前の子じゃないか！ しっかりしろ！！」

え…

だってあたし…

アンタがいなくなって…

けっこん…ムスメ…あのヒト…

「戻るぞ、長いは無用だ」

「銀さん」

「ナンも言うな！ ほら立て」

モーター音がして、恒彦達が二階から降りてくる気配がした。

「悪いが失礼します！ 今夜の事はまた後日に、じゃあ！！」

殉を引きずるように玄関を飛び出した銀さんは、停めてあったワゴンに彼を押し込むと脱兎のように運転席へ駆け込みキーを回した。

「ジュン！」

「ゴメン、病院で待ってる！ まってるから！！」

玄関から聞こえてきた加夏子の声に大声で答えた途端、殉は座席に背中を抑えつけられた。

派手な音を立てて急発進したワゴンは、夜明けの町並みの中みるみる遠ざかっていった。

第二十三章

まるで夏本番じゃないか

まだ5月だってのに、冗談じゃないぞ

くたびれた背広を手に、男は病院へ向かう長く緩やかな坂道を歩いていた。

吹き出した汗を黄色く変色したハンカチで必死に拭いながら、こんな坂の上に病院を建てた関係者全員を胸の中で呪っていた。

あの事件を担当した時から1年以上も経つというのに、この坂を登るのはこれが二度目だ
たったの二度だけ

いくら捜査本部が異例の短期間で解散したからといっても

いくら自分が当時はペーペーだったからといっても

ガイシャに会ったのがたったの一回で、それも先輩の御供で話すらしてないなんて

んなのは刑事の仕事じゃねえ

形の上では継続捜査となったが、実の所は迷宮入り決定だ

今じゃ署内で話題になる事すら稀になっちまった

暇を見つけてはコツコツと調べ続けてきた

血の滲むような思いをして、念願叶ってやっと刑事になったんだ

その初めての事件であんな挫折を味わわれて黙って泣き寝入りなんぞ、俺は絶対にしないぞ

デカ人生の始まりでけっつまずいた、この借りは必ず返してやるからな

男の決意はそれ自体が呪詛と言ってもよかった。

病院というより宮殿の入り口と言った方がふさわしいような豪華な正門をくぐると、広々とした中庭には患者や見舞いの客、職員達がそれぞれ思い思いに時間を過ごしていた。

目的の病棟を探しあぐねていると、丁度あちらから白衣に身を包んだ男が歩いてきた。

ガッシリとした体躯。セパレートタイプの白衣。ひとめで医者でなく理学療養士か何かだと判る姿だった。

「すみません、B棟ってのはどっちになりますかね？」

聞かれた中年男が怪訝そうな目でこちらを見る。

「ああ、怪しいモンじゃないよ。ホラ」

警察手帳を見せた。

中年男の顔に過剰な緊張が走ったのを、彼は見逃さなかった。

「XX警察署の柴田ってモンです。今日は折り入って話を聞きたい人がいてね、久しぶりに訪ねてはみたんだが、どうにもここは広くてねえ」

「B棟ならその角を曲がって左だ。すぐ判るよ。じゃ」

中年男はそそくさとその場を後にした。

あの男、どこかで…

軽い引っかかりを感じながら、柴田刑事はB棟を目指して歩き始めた。

◇

「ねえジュン」

「なに？」

「そろそろ聞かせてくれないかなあ〜」

「なにを？」

「ワタシ今度はちゃんと覚えてるよ、あの時ジュンが言ってくれたこと」

車椅子を押す殉に、少し甘えた口調で話しかけながら、加夏子は後ろを振り返った。

「いわない」

「どうして？」

「僕も覚えてる、から」

ぶっきらぼうに殉が答える。

「恥ずかしいコトはないのだよ、堀川クン。ワレワレはかなりトクシュなジョーキーにあったのだからして、キミのケツシのкокハクをワガハイはヒジョーにヒョーカしているのだ、ウン」

軽く顎をあげ、ちょっぴり突きだした唇から息を吹きかけるように気取った口調で加夏子が出た。

「なんだよそれ」

「つまり、嬉しかったってこと♪」

「なら素直にそう言えばいいじゃん、調子狂っちゃうなあ」

まばらな人影に遠慮する事もなく、二人は陽光の差し込む廊下をじゃれあうように喋りながら進んでいた。

「ところで、どうしてあの時すぐに帰っちゃったの？ まるで逃げ出したみたいだったよ」

「あ、イヤ、銀さんがね…何だか急ぎの用事だか急患だかがあったみたいで…」

「銀さんってお医者さんじゃないでしょ？ 急患だなんて、ヘンなの」

「僕にもよく判らないんだ、ゴメン」

殉は胸の中で手を合わせていた。

実の所、脇で聞いていた殉にはあらかた見当はついてた。

それだけに、おいそれと加夏子に話す訳にはいかなかったのだ。

「フウ〜ん、まっ、いっか」

加夏子はあっさりと引き下がった。

「キミ、清水加夏子さん、かな？」

おしゃべりに夢中だった二人は、その男が傍に来ていた事に気が付かなかった。

「…はい、そうですけど。どなたですか？」

「いやあ、デート中を邪魔しちゃったかな」

男は下卑た笑いを浮かべ、懐から小さな手帳を取り出して見せた。

「××署の柴田です、お会いするのはこれで二度目だが…覚えちゃいないでしょうねえ」

「警察のひと、ですか」

加夏子の顔に緊張が走った。

◇

廊下の角から、銀さんが三人の方をジッと伺っていた。

その彼をまた伺う者が。

白衣のポケットに両手を突っ込んだ瘦身の男…

九十九は無表情のまま、奥の壁に寄りかかっていた。

◇

「事件のあと足と記憶に障害が残ったんですね。ご愁傷さまで」

最後のひとことに加夏子は露骨に顔を歪めたが、柴田はお構いなしに言葉を続けた。

「先日、善意の一般市民から電話を頂いたんですよ。『あの事件の被害者に記憶が戻ったようだ』と。それで事情を伺いたいと、まあそういう訳で」

蛙のような目で加夏子を舐め回す。

「複数の目撃者がいたが犯人像は霧の中…いや闇の中か、どいつも口を開けば黒い影、黒い影ばかりでね。直接の被害者であるアンタが何も覚えていないんじゃお話にも何もなりゃしないってな具合なんで」

「わたしも見たのは黒い影、それもほんの一瞬でした」

きつい視線で加夏子が返した。

「そう言わずに、何でもいいから思い出してもらえませんか？ 特徴とか臭いとか」

「あの、刑事さん」

殉が初めて口を開いた。

「ん？」

「彼女、まだ記憶が戻ったばかりなんです。これから少しずつ記憶も戻ってくるんじゃないかと思うんです」

「…それで」

「彼女も御両親も、犯人を捕まえて欲しい気持ちは同じです。ここは病院ですし、時間をかけて彼女の記憶が戻るのを待ってあげてくれないでしょうか」

「名前は」

「え？」

「名前は、と聞いているんだ」

ドスの効いた声で柴田が言った。

「堀川です、堀川 殉」

「いい事を教えてやろう。あれからもう1年以上が経った。時間はもう充分に経ってるんだよ。こうしている間にも事件は風化してるんだ。メクラふぜいが聞いた風な口きいてる今もなあ！」

柴田は殉の胸ぐらを掴むと顔の前に引き寄せ、突き放した。

殉はよろめく身体を壁で支える。

「ちょっと！ ジュンは関係無いでしょ！！」

加夏子が車椅子から飛び出さんばかりの勢いで抗議した。

「おっといかん。癖が出ちゃった」

殉に悪かったなと頭を下げ、柴田はまた後日伺いますよと言いその場を後にした。

背中に怒鳴り散らす加夏子の声を聞きながら、彼はある事を思い出していた。

容疑者候補に一人、面白い男がいたことを。

自衛隊あたり

民間警備会社のOB

マシンのような殺傷術を身につけた男

完璧なアリバイ

名前は確か……

ホリカワ

柴田は振り返り、ギラリと牙を剥いた。

第二十四章

いつもと変わらぬ夕暮れどき。

ベンチで一服する銀さんの隣には、珍しい人物が座っていた。

「ああいう形で私をだし抜くとは思いませんでしたよ」

九十九はずり落ちてくる丸眼鏡を押し上げながら言った。

汗ばむ程の陽気に顔をしかめながらも、銀さんの方は見ようもしない。

「ケッ、よくいうぜ。おおかた遠くから俺を見張ってたんだろよ」

「まっさかあ〜！ ボクそんなに暇人じゃあないですって」

心底驚いたような顔をしてみせた九十九は、しれっとしてその後を続けた。

「ボクが監視してたのは清水家のほうですよ」

「あの家を見張ってたのか？」

「ええ、朝までね」

「じゃあ…全部知ってて…お前は」

銀さんは絶句した。

堀川君が来るかも知れないとは思っていたんですがねと、呆気にとられている銀さんを尻目に彼は言葉を続けた。

「まさか貴方が、あんな重装備で登場するとは。あげく血相変えて朝の街を大爆走では、咎める前に笑っちゃいました。察するに久我さん、清水家の方と個人的な繋がりでもあるようですね。で、堀川君がああタイミングで一時的帰宅したのも、清水家を訪ねたのも貴方の差し金でしょう」

「そこまで判ってて何で止めなかったんだ？ 簡単だろうが」

「気が変わったんです。お手並みを見たくなくなった」

「リスクは大きかったんだぞ。それでもか」

「リスク無しで得られるものなぞ有りません」

「…」

「まあ、次もあるでしょうし。楽しみはとっておくとしますか」

「次って。お嬢はあの通りピンピンしてるじゃないか」

銀さんが顔を曇らせた。

「終わってませんよ。まだ」

ポン、ッポポン

二人の足下にボールが転がってきた。

「ボールとってくださいーい！」

「みーちゃん、また鞠つきかい？」

「サッカーだよお、やだなあ」

元気良く走り寄ってきた碧は、二人にペコリと頭を下げてボールを受け取った。

「おねえちゃんなら大丈夫だよ。そんなに先生を疑っちゃ駄目だからね！ 『こいつコイツ』って、もうバンバン聞こえてくるんだから」

「判ったから、あっちで遊んでな」

答えてから、銀さんはギクリとして思わず九十九の方を見た。
怖い顔が、少女の後ろ姿をジッと睨んでいる。

しまった…

九十九は、ボールを蹴って遊んでいる碧をジッと睨んでいた。

「なるほど。そういう事だったか」

ややあって九十九が口を開く。

「ガードが下がるのが思ったより早かったのは、あの子の力のせい…成る程な」
「お前、まさか坊やの時のように、みーちゃんを使って何かやろうってんじゃないだろうな」
「あの能力自体に興味は無いと、以前にも言った筈です。必要があれば別ですがね」

意地の悪い笑いを浮かべて、その日初めて九十九は銀さんを正面から見た。

「坊やだって酷い目にあっただ、あんな子供に耐えられる訳がねえじゃないか！」
「おちついてくださいよお～、やるなんて言ってないじゃないですかあ～」

またいつものC調に戻った九十九が銀さんの激しい口調を丸め込む。

こいつ、コロコロ調子を変えやがって
いつもこれで、こっちはペースを狂わされるんだ

「それに久我さん、心配事をあまり増やさない方がいいんじゃないですか」
「…？ どういう意味だ」
「刑事が来てましたね、今日」

銀さんの顔色が変わるのを確かめてから、九十九はゆっくりと言葉を繋いだ。

「貴方に興味が出てきてね、調べてみたんですよ、経歴を。履歴書は綺麗なモンでした。まっさらで」
「それだけじゃないだろう」
「知り合いに、こういった事を調べるのが得意な人がいてね。動いてもらいました」

久我銀次 43歳

元 広域暴力団山下会系墨田組若頭

7年前に近隣組織の組長、及び組員を横浜中華街にて拳銃で射殺

自らも4発の銃弾を浴びて負傷、意識不明のまま逮捕される

計画性の無い偶発的事件と判断され、初犯という事もあり刑はこの手の事件としては異例な程軽かった

出所後の消息は不明

「…もういいだろう」

乾いた声で銀さんが言った。

「刑事は苦手、って訳ですね」

「ああ」

指の間から、煙草の灰がゴソッと落ちて道に砕けた。

◇

午後6時58分。

成田空港到着ロビー。

長身、瘦身の男がゲートから足を踏み出した。

傷跡だらけの顔にアイパッチ。

一般客は皆、男の周りを大きく迂回してそそくさと手荷物預かり所へと急いでいた。

久しぶりだな

男は体重が無いかのように、ユラリと歩き出す。

◇

衣笠恵美子の変化は、今では誰の目にも明らかであった。

最近の彼女は必要以上に寡黙で、仕事の合間にもじっと思い詰めたような表情を崩さない。

「なあエミちゃん、最近疲れてるんじゃないか？ 他のナース達も心配してるよ」

若い医師はカルテの整理をしながら、後ろに立つ恵美子にさりげなく話し掛けてみた。

「聞き間違いでしょう、先生の」

「間違い？ 何が？」

「心配じゃなくて怖がっているのよ、あの人たち」

「あのなあ」

回転椅子ごとクルリと振り向くと、彼は真正面から恵美子を見た。

顔の至る所に陰があった。眼の周囲、頬、こめかみ。

顔色もすぐれない。

ろくに寝ていないし食べていないのは医者でなくとも一目で判る顔だった。

「悩みがあるなら言ってみないか。長官に何か言われたのかい？ あの娘、清水さんの様子だってすっかり良くなったし、以前なら自分の事のように喜んでいて笑じゃないか。今の君はまるで、たちの悪いものにでもとり憑かれているみたいだぜ」

「九十九先生はいいんです、もう。私、見つけましたから」

「見つけたって…」

恵美子は黙ったまま部屋を出ていった。

彼は腕組みしたまま、深く溜息をついてドアの方を眺めるしかなかった。

九十九

長官よお

お前の患者、一人増えちまったんじゃないか

◇

「ふえっくしょんっ！！」

特大のくしゃみに顔をしかめる九十九に、ベッドに腰掛けた加夏子は思わず笑ってしまった。

「長官、風邪ですかぁ？」

「おおかた悪友が噂でもしてるんだらう。僕の事はいいから、テストを続けるよ」

「ハァ～イ」

定期的に行っている心理テストを、慣れた様子で加夏子はこなし終えた。

10分とかかかっていない。

「ところでボーイフレンドはどうしたんだい？ 昨日からまだ一度も姿を見せていないじゃないか。も～しかしてえ～ケンカしちゃったのかなぁ～？」

「また帰宅中ですよ。お兄さんが久しぶりに帰国したとかで。先生、ちょっとヤラシイ」

加夏子がふくれて見せた。

暴力癖が消えた彼女は、今は主治医の九十九とも打ち解けていた。

「そう…お兄さんがね…」

テスト用紙をまとめていた九十九の手が少しだけ止まり、またせわしなく動き出した。

第二十五章

十畳のロフトは、ひとりで暮らすには広すぎた。

家よりも病院にいる時間のほうがどんどん長くなっている。
一時帰宅するたび殉は、少しずつだが体力の低下を感じるようになってきていた。

だだっ広い部屋に置かれた大型水槽。
その中にある数匹の金魚達が殉の姿を見つけて水面まであがってきた。
手さぐりで袋を取り、僅かに傾けて少量の餌を蒔く。入れ過ぎは水質を悪化させるので厳禁だった。
入院中は大家さんに面倒を見てもらっているのだから、殉は水槽の汚れには人一倍敏感だった。

手を差し込み、ガラスをなぞって苔の状態を測ってみる。
金魚達が甘えるように殉の指をつついた。
ふっと殉が微笑む。

おまえたちが元気だと、僕もうれしいよ

今、水槽に居るのはもう三世代目の魚達だった。

この子達が星になる頃、僕はまだここにいられるだろうか…

机の上から鍵をとり上げると、薄手のニットを着て殉は部屋を後にした。

◇

港に面した公園はすっかり闇の底に沈んでいた。
地元では有名な観光スポットだが、平日という事もあり、人影はアベックがまばらに居る程度であった。
殉は杖をつきながら、今は碇を降ろして海上ホテルとなった客船の前までゆっくりと歩いてきた。
潮風が少し冷たい。

すぐそばに気配がした。

「(…何処から来ん、何処へか去らん…)」

懐かしい『声』。

「おかえり、兄さん。久しぶりだね、本当に」
「殉。元気そうだな」

杖を持つのと反対の手がしっかりと握られた。
力強く、カサカサと乾いた、でも暖かい手。

「今度は随分、長かったね。何処へ行っていたの？」
「中東」

ボソリと殉の兄が呟いた。

兄の心の中に異国の言葉が渦巻いているのを殉は聞いた。

その多くが苦悶の叫びであることに気付いた彼は、微かに眉をしかめて言った。

「また戦いに行ってきたんだね。人が、いっぱい死んだんだ」

「今度の戦いはキツかった、色々、な」

手をもたれと顔を触らせられた。

殉が息を呑んだ。

「右目をなくした。あと一つでお前と同じだ」

「烈にいさん…」

離れたベンチで居眠りをしていた男が、帽子の隙間から二人の方をじっと見ていた。

柴田だった。

◇

病院から駅までの道のりは、住宅街を抜けてしまうとちょっとした田園風景となる。

気恥ずかしさを引きずりながら、その道を銀さんは歩いていた。

隣を静々と進む和服の女性を見る、たったそれだけの事に気力を振り絞らなければならない自分が情けなかった。

「ありがとう、送ってくれて。まだ夕暮れどきだけど、ひとり歩きするにはチョットさみしい道だし。助かったわ」

「タクシー来るまで待ってりゃいいじゃねえか、歩くなんてらしくないぜ」

「うん、なんとなく、ね」

軽く笑いながら紗季子が銀さんを見る。

顔に血が昇ってくるのを感じて、彼はますます不機嫌になった。

クソッ！ ガキじゃねえんだぞ

「このあいだはゴメンナサイ。頭を打ったせいだと判っているけど、あの日、玄関に立っていた貴方を見た時、わたし…」

「よせよ。お前は夢中だったんだ。娘を助けたい一心で目の前の俺にすがりついた。それだけさ。お前は母親なんだよ。加夏子ちゃんの」

クシャクシャのピースに火をつけると、大きく吸い込んで煙を空に吹き上げた。

「旦那とはちゃんと打ち合わせしたようだな。ドンピシャのタイミングだったぜ」

「え？」

紗季子が驚いて足を止めた。

「えってお前、俺が病院に待機してるって旦那に聞いてたんじゃないのか？」

「あの時はとっさに…お医者前は何も出来なかったし…それでわたし、貴方の名前を…」

「それじゃあ」

思わず銀さんも正面から紗季子を見た。

景色の一部と化したかのように静止した男と女の間を、夜の気配を含んだ風が渡ってゆく。

細い糸を手繰るように、二つの影が一步を…

♪チャラチャンチャン、チャラララチャンチャン～

安物の合成音で「唐獅子牡丹」のメロディーが鳴り響いた。

舌打ちした銀さんが携帯電話を取り出し耳に当てた。一瞬で顔つきが変わる。

「どうしたの？」

紗季子が心配そうに訊ねた。

「小児病棟の患者が一人、見当たらないそうだ。今、職員総出で捜してる。俺も行かなきゃ」

言うなり今来た道を走り出した。

「久我さん！」

「すまねえ！ 駅まではすぐだ、じゃあな！！」

どんどん遠ざかる後ろ姿に、紗季子が小さく、あんた…と呟いた。

◇

息せき切って門をくぐった銀さんの目に白衣を着た仲間の姿が飛び込んできた。

「おいサブ！ いなくなったのは誰なんだ！？」

「銀さん、どこほっつき歩いてたんですか？ もうてんやわんやで大騒ぎ…」

「んな事あ見れば判るわ！ だれだと聞いているんじゃないか！！」

喧嘩でも売るような勢いで、銀さんは一番近くにいた若者の白衣の胸倉をむんずと締め上げた。

「はやく言わんかい！！」

「そっそれがグエ…みどりちゃんですよ…片腕のグエエ～…」

「なんだと」

目を白黒させて半死半生になっている若者の言葉を聞いた銀さんの顔色が、同じ位青くなった。

あの子が勝手に何処かへ行ってしまいう訳がない

病室でも、もっと小さな子の面倒や身の周りの世話を焼いているあの子には、ハンデを負っている自分達の立場が外の世界でいかに弱く脆いものかという事が良く判っていた筈だ

何かがあったのだ

何か非常な事が

ふと思い立ち、銀さんは襟に食い込ませた手を離して病棟の方へと走りだした。

「どこ行くんですかぁ〜…ゲホゲホ」

恐怖の首締めからやっと解放された若者が、ほうほうのていで声を掛けた。

ナースステーション！

銀さんの声が響き、遠ざかる。

◇

東京駅。17:30発岡山行き新幹線の車内。

少し不安気な顔をした佐野碧が窓側の椅子に座っていた。

「ねえ、ほんとにいいの？ 病院抜け出しちゃって。いくら大人が一緒だからって、ウチやっぱりよくないと思うよ、こういうの」

「大丈夫。せんせいや病院のひとには、おねえちゃんからちゃんと伝えてあるから。あなたは何も心配しなくていいのよ」

「でも」

碧は隣の女の顔を見上げた。

彼女の頭の中には、意味の判らない様々な『声』が渦を巻いていた。

あのひと…とか、病気が…とか、好き…とか、嫌とか

「さあ、もう出るわよ」

「うん…」

藍色のスーツに身を包んだ衣笠恵美子が、碧の肩にサマーセーターをかけて中身の無い片袖を隠した。

第二十六章

加夏子は何の迷いもなく行動に移っていた。

早朝に、看護師や医者の見回りの無い時間を見計らって病院を抜け出したのだ。

彼女にとって佐野碧は妹同然の存在だった。何もせずただ待つなんて事は考えられなかったのだ。

タクシーを使い駅まで出ると切符を買った。所持金は僅かだったが、頼りになる援軍はすぐ近くにいる筈だった。ひとつ隣の、コンビニ位しかない駅に降りると、久しく使った事の無い携帯電話を取り出し番号をプッシュした。入院中にも使えるように恒彦が買い与えたPHSだったが、電波はちゃんと届いているようだ。

「もしもし」

「ジュン、あたしよ。カナ」

「カナちゃん？ どうしたの、こんなに朝早く。僕なら明日には戻るから」

「みーちゃんが…碧ちゃんが行方不明になっちゃったの！」

「なんだって!？」

「昨日から病院じゅうが何だか騒がしくて、わたし他の患者さんとかに聞いてみたの。そしたら…」

「みーちゃんが居なくなってた、そうなんだね」

「衣笠さんは風邪でお休みだし、銀さんには怖い顔でスルーされちゃうし。お願い、協力して。一緒にみーちゃんを捜して！」

「わかった、わかったけど…捜すといったって一体どこを捜せばいいんだ？」

「それが判れば苦労しないわ。どうすればいい？」

「そういわれてもなあ～」

電話の向こうで殉が沈黙した。

とにかく迎えにきて

わたし、XX駅の裏手にいるから

電話を切ると、しばらく考え込んでから加夏子は再びボタンを押した。

「お姫サマかい。散歩にしちゃ随分と遠手したね。今どこ？」

「長官…九十九先生。わたし碧ちゃんを捜さなきゃならないの。馬鹿な事してるって判ってる、でもお願い！ 先生なら何か知ってるんじゃないですか？ 病院の関係者だし…何でもいいんです！ 知ってたら教えて下さい！ 帰ったらいっぱい叱ってもいいですから！」

九十九はすぐには答えなかった。

加夏子は息を止め、電話から声がするのを待っていた。

「君にはまだ治療が必要だ」

「えっ？」

「でもそれは、病院では出来ない類いのものかも知れない。いいだろう、行きなさい」

あの子を連れ去ったのは、衣笠君だよ

九十九の声は、どこかむなしさを含んでいた。

◇

「外出は私が許可しました。間接的治療の一環と御考え下さい」

院長室の一角で、九十九は病院長と対峙していた。

「これで二人目だぞ、九十九君。一体どうなっとるのかね！ 騒ぎが漏れないうちに早く連れ戻してきたまえ」
「ですから、清水氏の御令嬢については正式な許可を与えた上での外出だと申し上げます。御両親には私から了解を頂くつもりです。もう一人の方については、これは私の守備範囲では…」
「もうひとり？ ああ、あの片腕の子供か。そんなのは後回しでいい。清水加夏子が最優先だ」

ロイド眼鏡の奥で、九十九の目がすっと窄む。

「入院患者に事件が起これば当院の評判はガタ落ちですよ。病院が実際の成果よりも評判で成り立っている事は、院長もよく御存知な筈ですが」
「それがどうした」
「消えたのは二名、うち一名は私の監督下にあります。捜索に力を入れねばならないのは残り一名の方でしょう。最近、刑事もウロウロしているようすし」
「けっけ、刑事だとお！？」

過度に血色の良い院長の巨大な頭頂部から、堰を切ったように汗が吹き出した。

「ええ。このままだと痛くもない腹を探られるんじゃないですか」

意地悪そうに九十九がニヤリと笑う。

「うむう〜…」

しきりに汗を拭う病院長を冷やかに見下ろしながら、九十九は次のカードを切った。

「マスコミはセンセーショナルな話題に飢えていますからねえ。入院中の子供を連れ去ったのが看護師の一人だったなんて事が判ったら、とてもとても」
「何だと！ 今なんと行った！？」
「看護師ですよ。衣笠恵美子。清水加夏子の担当でもありましたからね、私もよく知っています」
「何処へいったか、それも判るといのかね」
「ええ、だいたいのところは」
「よろしい。この件は君に一任する。警察より早く子供の身柄を確保したまえ」
「それだけですか？」
「うまくいったら、それなりの待遇を約束しよう。何なら一筆書いてもいい」
「そうして頂けると助かります。それでは」

軽く頭をさげ退出しようとする九十九の背に院長のダミ声が投げられた。

しくじるなよ、九十九

もししくじったら…
判ってるだろうな！

背を向けたまま軽く手を挙げると、九十九は院長室を出た。

狸親父め

まあいい、面白くなりそうだからな

◇

殉と加夏子は向かい合って列車に揺られていた。
勿論、佐野碧を探す為であった。

車窓の外を流れる見知らぬ景色。
ありふれた四人掛けのボックス席。
通路を転がる空き缶。

「こういう時、車椅子って不便というか邪魔よね。折り畳みだけどさ」

「…」

「新幹線の方が早いけど、しょうがないな。ジュンだってそんなにお金、もってる訳じゃないし」

「…」

「なんか、ちょっとイイよね、二人で電車って。駆け落ちみたいで」

「…」

「ねえ、どうしたの？ 駅出てからずっとだよ。難しい顔して黙り込んで」

加夏子の声が聞こえていないかのように、殉は視線を落としたまま黙りこくっていた。
出発する直前、加夏子の乗車を手伝ってもらう為に駅員を呼びにいった際、彼を呼び止めた者がいたのだ。

◇

「殉」

「兄さん？ どうしたんだい、いきなり」

「事情は判ってる。女の子を捜しに行くんだろ」

「うん」

「遠出をするな、と言ったところで聞くような奴じゃないよな。昔から頑固だったし」

「兄さんだって。僕が何と言ったって自分の道をゆくでしょ？ 同じだよ、兄弟だし」

「そうだったな」

くっくと小さな笑い声が聞こえたと思うと、殉の手に紙幣の固まりが握らされた。

「何かあったら迷わず俺を呼べ。見かけはどうかあれ、お前の身体はもう…」

「それ以上は言わないで。判ってるよ、自分のことは、自分が一番ね」

「そうか」

兄の心に音が響いているのを殉は聞いた。

低く、哀しみに満ちたコントラバスの音。

自衛隊に入る前、兄がよく練習していたのを彼は思い出した。

「あれがお前の連れか？」

聞かれて殉ははっと我に返った。

「うん、足が不自由で大変なんだけど、碧ちゃんを捜すって言ってきかないんだ。僕がついててやらなきゃ」

「好き、なのか」

「…うん…僕、決めたんだ。生きてる限り彼女を、加夏子ちゃんを守るって」

かな…こ…だと？！

コントラバスの音が、オーケストラを丸ごと押し潰したような凄まじい轟音に一瞬で変わった。

「車椅子…下半身不随…あの女は、もしかして清水加夏子なのか…」

「そうだよ、兄さん知ってるの？」

棒のように立ちつくしている兄の姿が見えるようだった。

それ程に傍らの気配は硬直し、凍りついていた。

◇

怒った訳でも、いじけてすねたりした訳でもなかった。

加夏子はただそっと、向かいの席で黙りこくる殉の頬に触れただけだった。

俯き続けていた顔がはっと上向く。

「何を悩んでるか知らない。聞かない。私にはジュンがいる。それで充分。でもワタシが話しかけたらこっちを向いて。じゃないと寂しい」

「カナちゃん…」

「カナって呼んでいいよ。そのへんのバカップルより沢山、いろんなこと乗り越えてきたんだよ。わたしたち、一緒にさ」

殉は言葉を返せなかった。

加夏子の言葉は、心の暗雲を払う暖かな光そのものだった。

だらしないなあ、僕は

彼女を守るって決めたんだろ

だったら何も考えることないや

カッコ悪いな

「…ごめん。ちょっと考え事してたんだ。もう大丈夫」

「かんがえごと？ だいじょーぶ？ ナァ～ニそれ、ジュンっぽくないぞお」

加夏子が屈託無く笑った。

釣られて殉も微笑む。

「そうだな、らしくないね、こんなの」

「そ〜だよ〜、銀さんや九十九先生がいたら笑われちゃってるトコだぞお」

包み込むように殉が加夏子を抱きしめる。

言葉が止まった。

「今、好きだって言ったらカナはどうする」

「…こうする…」

身体を離した加夏子の唇だけが殉のそれに重なる。

柔らかな想いが、殉から最後の躊躇いを拭い去っていった。

◇

殉と加夏子が西を目指していた、その頃。

渋谷駅前。スクランブル交差点。

慌ただしく道を渡る人、人、人…

その中に三つの人影があった。どの影も動かない。

「久しぶりだな、鴉」

影の一つが口を開いた。

「お前か」

もう一つの影が答える。

「1年も何処をほっつき歩いてたんだ？ ライオットガンは応えただろうに」

その影はくわえていた煙草を向かいの影に放る。

胸元にぶつかった煙草が火の粉を散らして路上に落ちた。

「あれでくたばるとは思っちゃいないだろうが」

その影は足下の煙草をにじり潰した。

「俺とはまだ、だったな。やるか？ ここで」

沈黙を守っていたもう一つのガッシリした影がぼそりと言った。

「止めておこう。他にやらなきゃならん事があるんでな」

「貴様に『殺し』以外でやる事なんぞあるのか。お楽しみなら後にしろ」

「ある。楽しみじゃないが、な」

それ以上、どの影も動かさず話さなかった。

信号が変わる。

促されるように、三つの影はその場から離れていった。

第二十七章

内海に沿って広がったそこは、潮風が路地の隅まで撫で抜けるような、そんな街であった。尾道というその駅に降り立った殉は、車椅子を押しながら辺りの気配を感じてみた。

すぐ側に港。潮の匂いが濃い。

寂れた駅前の反対側は、なだらかな傾斜の山間に民家や寺の類が点在している。

「尾道城。昔、瀬戸内を根城にしていた海賊があそこに城を建てて、自分達の縄張りに睨みをきかせていたんだって。海賊と言っても、領主が土地を束ねたように、海が自分達の領土だったのよ」

勾配を増してそびえ立つ山の手の頂上に見える小さな城を見上げながら加夏子が言った。

「へえ～、物知りなんだね、カナは」

殉の呟きを聞いた加夏子がクスリと小さく笑った。

「え？ ぼく何か変なこと言った？」

「ウウン、そうじゃないの。そうじゃないんだけど」

少しずつ笑いが大きくなるのを抑えようとしながら殉を覗き込む。

「キスの効き目、あり過ぎかなあ～て」

「??？」

「だってジュンったら、『物知りなんだね、カナは』なんて言うんだもん。ナンカもうすっかり俺の女、みたいじゃない」

「え…だ…だって君が言ったんじゃないか、『カナって呼べ』って。ポ、ぼくはだから…」

抑えきれなくなった加夏子が大笑いし始めた。

ひとしきり笑った加夏子は、まだヒクヒク引きつりながら優しい声を発した。

「いいの、とっても新鮮。ケンちゃんだってワタシを呼び捨てにした事なかったし」

「ケンちゃんって…病院に来てた大学生くらいの人？」

「そう。幼なじみなんだ。好きだった…昔」

虚を突かれて殉が黙り込む。

「あこがれ、だったのかなあ。何時も側に居てくれるカッコいい幼なじみ。恋してると思っちゃうよね普通」

港からの潮風に髪をなびかせながら、加夏子は呆々と島影を眺めていた。

「違うの。人を好きになるって、すぐそばの誰かと当たり前みたいにくっつく事なんかじゃない。出会って、戦って、判り合って。それでやっとスタート地点。それをワタシに教えてくれたのは貴方よ、ジュン」

「カナ…」

向かい合う二人に、漁師姿の男が近付いてきた。

◇

色褪せたウィンドブレーカーの襟元に下げたタオルで汗を拭いながら、ニコニコと愛想良く話しかけてきたのは初老の男だった。

くたびれた長靴が乾いた路面に足音を吸い込ませている。

「観光ですかの、車椅子じゃあ難儀じゃろうに」

「…こんにちは」

怪訝そうな顔で、それでも礼儀正しく挨拶をした加夏子をジロジロと眺め回した男は、顔を上げて今度は殉の方を向いた。

「目が見えんのかい、こっちも難儀じゃの」

「…ハア…」

殉は殉で、毒気を抜かれたような声で返答する。

勿論、それだけではなかった。

「おじいさんは漁師？」

「ホウホウ、こりゃまた勘のいい子じゃな。判るんけ？」

「聞こえるんです。ザバァ〜ンザバァ〜ンて波の音。ヒュンヒュンいってるのは潮風…船で鳴ってる風の音なのかな？」

殉は男の『心の音』を聴いていた。

「ホウホウ、これはこれは…」

初老の男は嬉しそうに目を細めた。

幾条も刻まれた皺の中に目が埋まってしまったようになる。

「めしいたモンには時々、わしらにゃあ見えぬもの、聞こえぬものを感じる奴がいるが、あんたもそうなんかのう。珍しい事もあるもんじゃて、この間はこんな小さな子じゃったが」

男の最後の言葉に、二人は同時に反応した。

「小さい子！？」

「ちいさな子ですって！？」

「オヤ、どうした。顔色が変わりましたぞ」

初老の男が少し驚いたように言った。

「僕たち人を捜しにきたんです。小学生くらい女の子…もしかして見かけたんじゃないですか？ 知ってたら教えて下さい！」

殉は声のする方へ両手を伸ばした。空を切る。

男の身長は150cmもなかった。

思いもかけず力強い手が殉の両手をガッシリと捉えた。

ゆっくりと痩せて枯れた肩に置かれる。

「随分と深刻そうじゃの。ワシでいいなら手伝っちゃるけん。あのチビちゃんを捜しとるのか？」

「あの子は…碧ちゃんは病院から連れていかれたんです、早く探し出さないと！ おじいさん、知ってる事があるなら教えて下さい！！」

「あの子は私の妹みたいなものなんです、お願いします！！」

加夏子も殉と一緒にあって男へ向かい頭を下げた。

男が照れくさそうに首筋を掻いた。



何年ぶりだろう

ここに立ち、眼下に広がる海の、終わりの果てを目で追うのは

いつも、いつまでもそうしていた

彼と二人、他愛もない言葉を交わしながら飽く事を知らなかった

いつまでも続くと思っていた幸せな日々…

小石に躓くように簡単に、それは終わった

あの時から、私の旅は始まった

あての無い、取り戻せるかも判らないものを探す旅が

私が見つけたものは、この旅の終わりを見せてくれるのかしら

求めていた答えを指し示してくれるのかしら

本当に…本当に…

緩い風がふわりと髪を巻き上げる。

彼女は瞬きもせず、ただただ遠くへと視線を彷徨わせていた。

「…さ…ん…おじょうさ～ん…」

高台の後ろ、下へと通じる細い小道の向こうから彼女を呼ぶ声が聞こえた。

「だれ？ ツネさん？」

「へい。そちらにおいで」

海に背を向け林を覗む彼女のの前へ、幾らかかからぬうちに白い割烹着姿の男が現れた。

「やっぱりココでやしたか。この坂あ、そろそろあっしにゃキツくなってきましたな」

「ツネさん、どうしたの？ そろそろ調理場も忙しいんじゃない」
「へえ、まあそうなんです。何やらね、捜してるんですよ、お嬢さんを」
「捜してる？ 誰が？」
「少し前に男が来たんで。東京から来たって言ってました。おかみさんが対応してましたが…こんなモン置いてきましたぜ」

割烹着姿の男は小さな紙片を渡してきた。

「やたら図体のガッチリした、ブルドックみたいな顔した奴や。探偵だとかぬかしてたが、ありゃあどう見ても悪人の面だあ」

紙片を見た。
何の飾りも無い白い紙に、三行だけ。

K & M探偵社
北山 謙二
03-xxxx-xxxx

「この人、もう帰った？」
「へえ。『暫くこっちにいる事になりそうだから、安い宿があったら紹介してくれ』なんてぬかしやがった。ウチあ旅館ですぜ！ おかみさんも御立腹でしょうに」

彼女…衣笠恵美子は黙って名刺を視線を落としていた。

「おじょうさん、東京で何かあったんけ？ あっしでよけりゃあ相談に…」
「何もないわ。教えてくれて有り難う、もう戻っていいから」

にべもなく答え、恵美子はまた海に見える方へと歩きだした。

急がなきゃ

細く白い指の間で、名刺がクシャクシャに握り潰された。

第二十八章

やたらと横に長い土地だ
どこもかしこも寺、寺、寺…
俺は坊さんじゃねえぞマツタク

ぶつくさとぼやきながら、北山は山間の道を駅の方へと歩いていた。

野郎、てめえだけ美味しい所を持ってくつもりだな
俺だってあの害鳥野郎とは因縁があるって一のに、なあ～にが

『女の子の確保が最優先です』

だ
優等生ぶっててもテメエが一番、アイツと遣り合いたがってんじゃねえか
そもそもあの会社は俺のモンだろうに、何時からあんな若造に指図されるようになったんだ
クソッ！

共同経営者への呪いの言葉をで唱えながら、ついてくる猫やら鳩やりに蹴りのポーズを見舞ってみせた。
よほど人に慣れているのか、猫も鳩もその程度では逃げ出さない。
相変わらず北山の後ろをトコトコと付いてきた。

とうとう畜生共にもなめられたか
情けねえなあ

まるで北山の声が聞こえたかのように、唐突に携帯電話の着信音が鳴り響いた。

「オウ」
「北サン、今どこですか？」
「尾道にゃあ着いてるぜ。今しがた誘拐容疑者の実家にも顔を出してきた。お高くとまった女将に冷たくあしらわれて、猫やら鳩やらになぐさめられてるところさ。うらやましいだろ」
「衣笠恵美子が実家へ女の子を置くとは考えられません。どこか別の、誰にも知られてない場所でしょう。そこは彼女の地元だ。顔は知られ過ぎてる」

電話の相手は北山の嫌みなど聞いていないかのようにだった。

「そんな初歩的なアドバイスをこの俺様にする為に、わざわざ乏しい経費を削って携帯に掛けてきたのかテメエは？
俺の忍耐にも限度ってモンが…」
「どうしたんですか北サン？ もしかして怒ってるんですか」
「おお、判るか！ 俺は今すこぶる機嫌が悪い！！」

顔の真ん前にかざした携帯に吐き捨てるように北山が怒鳴った。

「…鴉が消えました。所在が掴めません」

電話の向こうから冷やかな声が響いた。

「なんだと…」

「僕もそちらに合流します。奴は弟の後を追ったのかも知れない」

「…」

「今は女の子の捜索が第一です。すぐにこちらを出ます。連絡は到着後に。じゃ」

北山が言い返す暇も無く、それだけ言って電話は切られた。

◇

「どのくらい離れているんですか？ 衣笠さんちの旅館って」

「あと3つ坂を越えて、地藏さまの裏手を回り込んだ辺りだったかの。きついじゃろうが辛抱しちくれ」

「3つ…坂3つ、ですか」

大汗をかきながら車椅子を押す殉は心底しんどそうであった。

「ゴメンね、ジュン」

「なあに、これくらい…どうってこと…ないや」

「フォッホッホ、椅子を押すのは兄さんの役目らしいからのう。すまんが年寄りには道案内だけさせてもらうけ。もう昔みたいな力はないけん」

老人は口で言うより闊達な歩調でスタスタと先を歩いてゆく。

「あっ、ここ左ね。ねえジュン、衣笠さんはどうして碧ちゃんを連れていったりしたのかな」

「ボクにも…わかんない…わかんないけど、碧ちゃんじゃなきゃいけない理由があるとしたら…」

「あるとしたら？」

「サイコイン…これしかない」

加夏子が一瞬、息を呑んだ。

「あ のチビちゃんと会ったのも駅前だったか。酷く右膝が痛んだんじゃが漁休むわけにもいかんでな、びっこも引かずに餌運んどったんじゃ。したっけジツとこっちを見て『おじいさん、足、痛いの？』といいおった。わしゃあビックリしたぞ、ビックリしたが嬉しかった。婆さんが死んでもう何年も経ったからな、誰かに案じてもらえるなんぞ久しくなかったからのう。売店にいた女がこっちを見とったが、あれが衣笠さんとこの末娘だったか。おおきくなったもんじゃ」

背を向けて歩きながら、老人は誰に聞かせるでもなく話し続けていた。

つづれ折りの道を曲がろうとした時、坂の上から男が一人、歩いてきた。

グレーの背広を肩にかけ、額に汗を浮かべたその男は不機嫌そうな顔で三人を一瞥すると、俯いたまますれ違い坂を下っていった。何匹かの猫と鳩が男の後ろをついてゆく。

変な光景だった。

「なんか感じわるいね、今の人」

「ダメだよカナ、聞こえちゃうじゃないか」

「大丈夫だって。それにあの人、なんかこの辺りの人じゃないみたい」

「まさか。想像力逞しすぎだよ」

「そうかなあ」

車椅子から身を乗り出し、加夏子は後ろを振り返ってみた。
角を抜けた男の姿はもう見えなくなっていた。

◇

トボトボと坂道を歩いていた北山が、ふと足を止めた。

車椅子の女…

杖を持った少年…

まさか

ガバッと振り返った。

驚いた猫が飛びずさり、鳩が数羽、空に舞い上がった。

◇

坂を上りきったところにある、小さいが品良く纏められた庭園を抜けた所が目当ての旅館であった。
玄関までの道には小砂利が敷いてあり、やっと苦行から解放された筈の殉はもうひと汗かかされる羽目になった。

「ねえジュン、聞こえてる？ あと少しよ」

「…ハアハア…も…もうダメ…」

「頑張って、あとチョットだから」

青息吐息で何とか旅館の入口まで車椅子を押した殉は、精魂尽き果ててへたりこんでしまう。

「大丈夫？」

「な、なんとか」

殉をいたわる加夏子の脇へ老人がやってきて、ここがそうじゃよと声を掛けた。

「兄さん大丈夫かいのう」

「ワタシってきます。おじいさん、ジュンのこと見ててくれませんか」

「引き受けた、いっといで」

ホイールを回して玄関の引き戸まで行くと、手を伸ばして開けた戸口の中へ向かい加夏子は勢いよく叫んだ。

すみませーん！

ごめんくださあーい！！

途端に足音が響き、仲居風の中年女が顔を見せた。

「鈴木さまですね。ようこそいらっしゃいました。御嬢様ですか、係の者が伺っている筈ですのにとんだ失礼を。今、人を呼びますので暫くお待ち下さい…チョット！ 誰かおらんね！」

「あ、アノ、ワタシ鈴木じゃあないんですけど」

「えっ？ 違うの？ じゃあ富沢さんとこの…」

「それもチガイマス、ワタシひとを捜しにきたんです、ここが実家だと聞いたので…」

「お客じゃないのかい！？ なら裏口から来てくれんと困るわ」

「何ですか。騒がしいですよ」

奥から和服姿の女性がゆっくりと歩み出てきた。

白いかすりの着物。

高く結い上げた髪と凜とした佇まいが、彼女こそこの女将だと見る者に教えていた。

ママに似てるな…

加夏子は少しの間、ポカンと彼女を見つめていた。

「お嬢さん、人を捜しているとおっしゃってましたわね。娘の…恵美子の事かしら」

「そうです。でもどうして」

「貴方で二人目ですよ。今日、あの子を訪ねてきたのは」

微笑んで女将は言った。

「お連れさんもいらっしゃるようですし、兎に角おあがりなさいな。さあ」

女将は仲居に、車椅子を中へ挙げるように言うと、裾を返して奥へと歩き出した。

第二十九章

車椅子を上げる従業員達は手慣れた様子で、青い顔の殉はそれ以上の肉体労働を強いられる事は無かった。老人はいつの間にやら姿を消している。案内されたのは立派な客室だった。

「ジュン、まだ気分悪い？」

「少し楽になったよ」

「ワタシ、このままジュンがどうにかなっちゃうんじゃないかって心配だったよ」

「大丈夫。こんな見知らぬ土地にカナだけ残していくなんて絶対にしないから」

入り口の襖が開くと、顔を伏せた女将が膝をついていた。軽く会釈し、そのまま部屋の中へと進むと二人の真正面に座る。ゆっくりと顔を上げた。

「当館の女将を務めております衣笠貴子と申します。あいにく娘は出掛けていておりません。御用件はわたくしが承ります」

「ワタシ清水です、清水加夏子。彼は友達の堀川殉。私達、同じ病院に入院してた女の子を捜しに来ました」

「それは遠くから大変な事です」

「その子を連れていったのは恵美子さんなんです。女将さん、何か知ってる事ありませんか？」

二人を見据える貴子の目は清流の中の岩のようだった。綺麗だが微塵のゆらぎも見せない。

「少し前に、やはり東京からお見えになった方が娘を訪ねてきました。同じように、娘が女の子を連れていったと言っていました、わたくしには俄かには信じられません」

「証人ならいます。同じ病院の先生がそうだと教えてくれました。衣笠さんの実家がこちらだと教えてくれたのもその先生です」

「随分とその方をお信じになられているのですね。貴女はその先生とやらが嘘や憶測を言っていたとは思わないのですか？　そもそも貴女は患者さんでしょうに、どうやってこんな遠くまでその子を捜しに来たのかしら。入院する程の病気なら旅行の許可も出ないと普通は考えますわ」

「ワタシたちが嘘を言っているというんですか」

「今、初めて会った方を信用しろというほうが無茶だとは思いませんか、清水さん」

加夏子は言葉に詰まった。

…あの男…今度はこんな手を使って…

…手回しがよすぎじゃない…

…恵美子ったら、どこへ行ったのかしら…

…帰ってきたら話を…

貴子の目が驚きで見開かれた。

呟いた殉が顔をあげる。

「たぶんこれが、衣笠さんが碧ちゃんを連れ出した理由だと思います」

「そんな…あなた一体?…」

「見ての通り、ただのめくらです。チョット変わってますが」

心の中を覗かれて平気でいられる人間は少ない。

そして動揺した者は、内にしまっていた秘密を心の表まで引っ張りだしてしまう。

とっさに心を隠せる人間など居ないに等しい。

殉は貴子の『声』を聴き続けていた。渦巻く言葉の奔流を。

秀司、という名前が頻繁に現れては消えてゆく。

秀司さん

婚約

壊れてしまった

秀司

あの娘、まだ彼を… しゅうじ

嘘よ

何の関係が

見つけるまで帰らない

シュウジ

見つけたの?

この子達は何者

あの探偵

本当なの?

秀司さん

恵美子

「秀司さん、と言うのですね、恵美子さんのフィアンセ。その人の所に行っているんじゃないですか」

貴子は今度こそ声も出せなかった。

「碧ちゃんも殉と同じ事が出来るんです。私、入院中に色々あってチョットおかしくなっていた時期があったんです。自分の中に閉じ籠もって誰も寄せ付けなかった。私をそこから助け出してくれたのが殉と碧ちゃんだったんです。誰にも聞こえない私の『声』を聞いて、手を差し伸べてくれたんです」

十畳の和室をしばし沈黙が支配した。窓の外には穏やかな青空が広がっている。

貴子の目が、徐々に平静を取り戻してきた。

気丈な女性なのだろう、暫くすると最初の動揺は拭ったように消え、二人を見つめる表情は凜とした女将のそれに戻っていた。

「堀川さん、でしたか。貴方が普通の方と違うという事は判りました。貴方がおっしゃるように、その碧ちゃんという女の子も普通ではないのでしょうか。ですが、それだけでは娘が誘拐まがいの真似をしたという事にはなりませんよ。理由がありません」

「僕たちにもそれが判らないんです。碧ちゃんであればならない理由の一つしかありません、でも、恵美子さんはそれをどうしたいのか。まさか見せ物にする訳じゃないでしょうし、僕たちの知ってる彼女は患者をそんな風に扱う人では絶対にありませんでした」

「なら尚のことおかしいんじゃないですか」

「…その人、病気なんですか？ 恵美子さんの恋人…」

加夏子がボソリと言った。

貴子の表情が曇る。

「どうしてそう思うのかしら」

「判りません、ただそう感じたんです。ジュンが名前を口にした時の女将さんの顔、驚いてたケド、何だかすごく複雑そう。母がよくそんな顔をしてワタンを見てたからかな」

貴子は視線を殉に振った。彼はもう口を開こうとはしなかった。

目の光が弱まり、溜息と共に彼女は口を開いた。

「どうやら、貴方達に隠し事は出来ないようですね」

「やっぱりそうなんですか」

「若年性アルツハイマー。手の打ちようがなかったのよ。あの子、随分苦しんだの。私も」

沈んだ声で貴子が言った。

「もしかして、恵美子さんは碧ちゃんを使ってその人を治そうとしてるんじゃないかしら。ジュンが私にしてくれたように。きっとそうよ」

「それは無理。あの病気は頭の中を壊してしまう。一度壊れた脳細胞は元には戻らないって、お医者さまもおっしゃっていたわ。恵美子は看護師です、そのことは私以上に判っている筈よ」

「でもそうとしか考えられないじゃないですか！」

加夏子は必死に食い下がった。

掴みかけた手掛かりの糸を切られまいと、貴子へ向かい矢継ぎ早に言葉をぶつける。

困ったような顔で貴子がそれを受け流す。

「…それ、出来るかも知れない…」

殉がボソリと口を開いた。

「前に聞いた事がある。脳の細胞はもの凄い数があって、壊れても他の部分がそれを補うって。それに普段使われていない細胞だけ数えたら国家予算も真っ青なんだって。もしその一部でも呼び起こす事が出来れば、もしかすると」

「ジュン、あなた何処でそんな事教えてもらったの？」

「九十九先生がね。お昼休みに、中庭の芝生の所で」

まじまじと顔を覗き込んでくる加夏子に彼は微笑んでみせた。

「本当に… ほんとにそんな事が出来ると、あなたは思っているの？」

ひたと殉を見据えた貴子の目は恐ろしいまでに真剣だった。

「多分、無理でしょう。僕には」

殉はあっさりと言ったのけた。

「でも恵美子さんはそう思わなかったんじゃないかな。ほんの少しでも可能性に賭けた。碧ちゃんを連れてゆく理由としては充分です」

座敷は再び、重苦しい静寂に包まれた。

第三十章

所轄の助けを得られないのは不利だなと、土産屋の連なる通りをブラブラと歩きながら柴田は考えていた。

休暇を取った上での行動では、さほど思い切った事が出来る訳でもない。

土地勘の無い街。

情報を得るにもひと苦労しなければならない余所者の自分。

経費で落とせない、あれやこれや。

将来、警察をリタイヤする時が来ても興信所勤めだけは御免被りたいものだ

所詮は桜の代紋頼みの稼業なのだという自覚はあった。

もとより正義感から警察官を志した訳などなく、退屈な会社勤めは出来そうも無いという軽い気持ちで採用試験を受けただけなのに、気がつけば現場の水に慣れ空気に染まり、意地のようなものまでいつの間にか抱え込んでここまで来てしまった。

しょっぱながいけなかったんだ

やっと辿り着いた刑事という肩書きを堪能しようとしてた矢先の、あの事件…

影の通り魔

闇男

商売しか頭のない新聞も雑誌も、人斬り野郎にミステリアスな名前を与えて書き立て、世間も乗せられて騒ぎ立てる。腹が立った。

犯人を挙げられない警察の無能に対する非難にでなく、騒ぎ立てている連中全てに、だ。

必ず犯人を見つけ出し、この身体の奥の奥に溜まった反吐を、世の中全部に…いやその前にあの外道に向かい吐きつけて、俺は大声で笑ってやる

擦れ違った男が一瞬、怪訝な顔でこっちを見たような気がした。

たぶん顔を歪ませて笑う俺を見たからだろう。

我ながら嫌な癖だ

嫌な顔だ

柴田は目についた店に足を進めていった。

◇

今しがた擦れ違った相手に微かな『臭い』を感じた男は、暫く歩いた後さりげなく振り返った。

そいつは丁度、土産屋に入ってゆくところであった。

刑事、か…

姿が見えなくなるのを待って、男はジャケットの懐から携帯電話を取り出した。

「北さん、俺です。尾道に入りました」

「やけに早えじゃないか。自家用機でも乗ってきたか？」

「まさか。今どこですか」

「引き返してる。見たんだ。ありゃあ多分、鴉の弟だ」

「刑事らしい男を見かけました。地元の警察という感じじゃなかったです」

「そうか。とりあえずそれは置いとけ。例の旅館の前で待ってる、合流しろ」

「了解」

携帯を切り、男はきびすを返した。

◇

旅館を後にした殉と加夏子の前に、薄影が二つ、たそがれの空を背に立っていた。

中背のがっしりした影と、それより頭一つ分背の高いスラリとした影。

「だれ？」

加夏子の声に応えず、影は更に近付いてきた。

「どうしたの？ 誰かいるの？」

「ジュン」

彼女の声に緊張と不安を感じ、殉は車椅子の取手を強く握りしめた。

影が二人の男になった。

「あなたは…」

肉厚の中年男を見て加夏子が声を漏らす。

坂道で擦れ違った、あの男だった。

「覚えていたかい。いい記憶力だなお嬢ちゃん」

中年男が言った。

「俺たち人を捜してる。一人はお嬢ちゃん達が捜してるのと同じ、もう一人は…まあいい、とにかく一緒に来てくれ、時間が惜しい」

「名乗りもしない人と一緒になんかいけません。あなたたち誰なの？ 私達に何の用？」

「歩きながら話すさ、さあ」

「止めてください！」

手摺りに掛けてきた手を、反射的に加夏子が払った。

彼女の動きを察知した殉も大きく右腕を横になぐ。

中年男の頬に当たった。

「ホウ、さすが鴉の弟だな。血は争えねえか」

「鴉って何ですか？ 彼女イヤがってるじゃないですか！ ちゃんと話も出来ないんですか？ みっともないですよ！」

「なんだとお」

止めようとする長身の男を置き去りにし、中年男が殉の襟首をわし掴みにした。
その時。

ざわ

いつの間にか旅館の玄関脇に現れた白服の男達が、手に手に棒やら大根やら包丁やらを持って周りを取り囲んでいた。
中央にはあの漁師の老人と、板長らしき男が立っている。

「うちの客人に手え出すなら、ただじゃ済ませねえぜ」

「ツネさん、荒事はいかんぞ」

「わかってらあ」

ツネと呼ばれた男が柳包丁で肩を叩きながら前へ出た。

「お嬢の知り合い…それもこんな子供を、大人二人がかりで連れてこうなんざ見逃せねえぜテメェら」

包丁を中年男の顔面に突き出す。

誰にも見えなかった。

次の瞬間、包丁を持つ右手ごと肩関節を極めた長身の男が、もがく板長を抑えながら初めて口を開いた。

「すみません。危害を加えるつもりはないんです。マッタク…北さん血の気が多過ぎるからこうなっちゃうんですよ」

長身の男は、涼し気な目で周囲を一瞥すると殉と加夏子に向き直った。

「真山といいます」

◇

小さな喫茶店で、四人は向かい合っていた。

加夏子と殉が肩を並べてちょこんと座っている前で、北山がふてくされた態度でふんぞり返っている。

真山は両肘をテーブルにつき二人を静かに見ている。組んだ指越しに覗くまなざしは傍々としていて、何を想っているのか伺い知れない。

「君達には悪いことをしたね」

「もういいんです。真山さんは悪い人じゃないみたいだし…」

言いながら加夏子が北山の方をチラリと睨んだ。

「北さん、いつまで臍曲げてるんですか。彼のいいぐさじゃないが『みっともない』ですよ」

真山に言われ、ぶほうと一つ牛のような溜め息を吐き出した北山は、モゾモゾと椅子に座り直すと大仰に頭を下げた。

「スマン」

言ったそばから顔を上げ、二人をぎょろりと睨む。

「だがなあ、そんなに俺は悪人面に見えるかね？ そりゃやり方が強引だったのは認めるが」
「見えるわよ、普通に極ワル親父ってカンジ」

加夏子はきつい視線を緩めようともせず北山を睨み返した。

「極ワルねえ…きつついなあ、最近の若いコは」
「若くなくてもおんなじです」
「やれやれ…」

苦虫を噛み潰したような顔で、北山が派手に頭を掻いた。

殉は、加夏子と北山の遣り取りを聞いていないかのように真山の座っている方から顔を逸らさなかった。
1分もしないうち、彼の表情が不審と驚愕で歪んでくる。

聞こえない。

『声』が、何も聞こえないのだ。
聞こえてくるのは、静かな雑踏…とでも言えばいいのだろうか、まるで高速道路を遠くに見下ろす丘の上で聞こえる夜の街の音のようなもの。心の声は欠片も響いては来なかった。

こんな事は…こんな人は、今まで会ったことがない

「何か『聞こえた』かい、堀川くん」

組んだ指越しに、染み入るような笑顔をゆっくりと浮かべて真山が訊ねた。
加夏子と北山が弾かれたように二人の方を見る。

「…夜。夜の街の音、かな…あとは何も…」
「そうか」

僕もまだ捨てたもんじゃないなと微笑みながら、真山はゆっくりと本題を切り出した。

「僕らが捜しているのは、あの女の子と、君のお兄さんなんだよ」

真山がポツポツと話し始めた。

◇

僕は以前、ある警備会社にいた
名前位は聞いた事があるだろう、大手のセキュリティサービスだ
僕はそこで、ある特殊な部署に所属していたんだ
君達が見かけるような、道路工事や駐車場の誘導をやってるような人達とは違う

現金輸送？ あれはあれで大変な仕事だが、それでも一般的業務って奴さ
要人警護？ ハハ、テレビの観過ぎだぞ
エライ人はみんな自腹で警護人を雇っているもんだ

僕が相手にしていたのは、異常犯罪者さ
世にいうストーカーって奴だ
被害者を守り、連中を捕縛して犯行を防ぐ、それが僕たちストーカーストッパー、略称SSの仕事だった

ここまで話すと、真山はテーブルに置かれたコップの水を一口飲んだ。それを食い入るように加夏子が見つめている。

「…そう。君の事件が起きた時、あの店に僕も居たんだ。相棒と一緒に。そして奴に一瞬の隙を突かれた。君がそんな姿になったのは僕達のミスなんだよ」

「あの時、あそこに？」

「スマナイ」

今度は真山が、加夏子に向かって深々と頭を下げた。

「あの頃…毎日お見舞いにくてくれた人がいた…全然知らないひと…雨の日はズブ濡れになって…あの人は？」

「酒井 俊一。当時の僕の相棒だ」

◇

「奴って、あの男って誰なんですか？」

沈黙を守っていた殉が突然、大声で真山を問い詰めた。

「真山さんは知ってるでしょ？！ 教えて下さい！」

「それは今も判らないんだ、あの事件は恐らく迷宮入りになるだろう」

「嘘 だ！ 真山さんは知ってる筈だ！ 北山さんだって！ さっき言ったじゃないですか、『君の兄さんを捜している』って！ あれは何なんですか？！ 碧ちゃん の事と兄さんは何の関係もないじゃないですか！ カナがここにいるから、僕といるから、ここまで来たんじゃないですか！？ 教えてくださいっ！」

加夏子ですら初めて見る形相で、殉は真山にくっつかかっていた。

「僕の『声』は聞こえるかい」

静かに真山が問うた。

席を蹴り立たんばかりだった殉の興奮が、少しずつ収まってくる。

やがて大人しく答えた。

「…いいえ…」

「それが僕の返事、だ」

君の兄さんの件は別の話だ

僕も、ここにいる北山さんも、君の兄さんと命を取り合った仲なのさ

懐かしい話でもするように真山が言った。

第三十一章

「命を？」

「そうだ。君も自分の兄弟が何をしているのか知っているだろう」

「兄は…自衛隊を除隊した後、暫く音信が途絶えて…その後は…」

「フリーランスの傭兵になった」

加夏子が驚いた様子で真山を、そして殉を見た。

「傭兵って、お金で雇われて戦争するっていうアレ？」

殉は何も言わなかった。

「それって人殺しじゃん！ ジュンは何とも思わないの！？ アナタのお兄さん、人を殺してお金を稼いでるんだよっ！」

「…」

「ジュン！！」

「…」

「清水さん、彼の入院費用をあの男が負担していて、その金は奴が汚い仕事で稼いだものだとしても、それは彼のせいじゃ無い」

「でも…でもさ！…」

「知ってた。兄さんは心を隠したりはしなかったから」

顔を起こし、真山の方を真っ直ぐに見つめるようにしながら殉が口を開いた。

「会う度に悲鳴が聞こえた。ああ、また沢山、人が死んだんだなって。恐ろしい光景が見える時もあった。飛び散った手足…潰れた身体…いろんなモノを垂れ流しながら助けを求める人…みんな兄さんが見てきたものだ。でも僕は兄さんを止めたりしなかった」

「なんで？ なんで止めてくれって言わなかったの？！」

「それが兄さんの選んだ道だから」

キッパリと殉が言い放った。

「烈兄さんは、闘うことでしか生きられなかった。あのまま日本に居たら絶対、兄さんは狂っていた。無差別に誰かを襲っていたかも知れない。でもそんな事は出来なかった…兄さんには無抵抗な人間を殺すなんて事は死んでも出来なかったんだ！ だから！！…」

「君はお兄さんを信じているんだね」

抑揚の無い、でも何処か優しげな声で真山が言った。

「彼は傭兵になる前、僕と同じSSだった。そこで犯罪者狩りをしていた。彼もかつてはこの国の平和を影から支えていたんだ。でも退職後、国の組織に雇われていた時期があってね。彼のせいで亡くなった女性が居たんだ。僕は彼女の警護担当、そして北山さんは、僕の依頼で彼女の死の真相を探っていたんだよ」

ふうと一息を漏らす。

「そして、僕や北山さんは君の兄さんと闘ったって訳さ。そしてまだ、決着は着いていない」

彼は君を追ってここに来ている筈だ。

真山の言葉は断言だった。

喫茶店での4人の話し合いは結局、それから1時間とかからなかった。

告白と確認と、情報交換。

4人はそれぞれの想いを抱きながら店を出、別れていった。

◇

なんでいわなかった？

滝のような汗を拭きながら、北山は隣りを歩く真山に聞いた。

「いずれは判る事じゃねえか。早い方が本人達のためだと思うがね」

「北さんは何で言わなかったんですか？」

「おれは、アレだ…タイミングっていつのか、それが何ともなあ…」

「じゃあ、僕もそれです」

「ああ？」

「『タイミングが悪い』、そういう事にしときましようよ」

「お前おちょくってんのか」

「誰を？」

「北山探偵事務所代表の俺さまを、だ！」

「今はK&M探偵社ですよ。すぐ忘れるんだから」

「あのなあ」

こめかみに青筋を立ててきた北山に向かい、足を止めた真山が真顔で言った。

「下手に動揺させるより今のままの方が、彼らと鴉が接触する確率は高くなります。ルアーより生き餌のほうが餌としちゃ食いがいいじゃないですか」

「お前、そんな事を考えてたのか？」

真山の言葉に、北山の青筋が引っ込んだ。

「俺はてっきり…」

「あの二人に同情した、と？」

真山が足下に視線を落とした。

「いずれ判る事なら、自分達で真実を知ればいい。泣くのも絶望するのも、それは彼ら自身が決める事です。僕は鴉が憎い。彼らの置かれた立場と僕の想いは、所詮相入れないものでしかないんです」

「真山…」

「それに奴との事は、僕らの個人的問題です。今回の依頼とは関係無い。人捜しには目玉は多い方が有利じゃないですか

」

再び顔を上げた真山の声はサッパリとしていた。

「さあ、こっちも早々に引き上げて作戦を立て直しましょう。早く見つけないとアイツも困るだろうし」

「アイツって、あいつか？」

「そ、依頼主」

ひとつ振り返り、行きましょうかと北山を促して真山は陽の落ち始めた道をまた歩き始めた。

◇

「あのオヤジ、やな感じだったな。ブスツとしっ放しだったし」

殉の代わりに汗だくになって車椅子を押してくれた北山に、加夏子は相変わらず悪態をついていた。

「そんな事言うなよ。僕の具合を心配して車椅子押すの代わってくれたじゃないか。たぶん、あの人なりのお詫びのつもりだったのさ」

「それより、別れ際に真山さんと何話してたの？」

「うん、チョット、ね」

今夜の宿。ひなびた旅館。

玄関で加夏子をおぶり部屋へ向かう殉は無表情だった。

◇

部屋は六畳ほどのこじんまりしたものだった。宿泊客も彼らのほかには見当たらなかった。

衣笠恵美子の実家とは比ぶべくもなかったが、宿の主人の人当たりの良さと、素泊まりの客にわざわざ出してくれた盆の上の和菓子が、へとへと二人を癒してくれた。

「潮風。大好きなんだ、私」

開け放った縁側に横座りした加夏子が、暗くなった瀬戸内の海を眺めながら風に髪をなびかせていた。

遠くに漁火がふたつ見える。

「女将さん、いかにもあの旦那さんの奥さんって感じだったね」

手探りでお茶をいれながら殉が答える。

少ない手荷物には部屋の隅に纏め、二人共、備え付けの浴衣に着替えていた。

食事は持ち込みの弁当だったが、入浴は交代で済ませていた。

旅館の主人は、年若く不自由な二人を心配し親身になって世話してくれていた。

「お風呂どうしようかって心配してたんだ。でも女将さんがいてくれたんで助かった」

やや小太りの女将は、足の不自由な彼女をたすき掛けの勇ましい姿で浴場までおぶってゆき、大丈夫だよと言いながら身体を綺麗に洗ってくれたのだ。

ウチにもアンタとおない歳位の娘がいてねえ

歌手になるって東京に行ったきりだけど、ちゃんと便りは寄越してくれるんですよ

誰に似たんだか頑固者で、有名になるまで帰って来ないなんて言ってたケド、毎月、仕送りしてくるのよ
そんなんせんでもええのに

眼鏡を曇らせながら一所懸命洗ってくれた女将が、そんな事を話してくれたのだと加夏子は殉に言った。

「いい女将さんで幸せ者だなあ、娘さんもお主人も」

「ジュンは思い出す？ ご両親のこと」

「顔も見たことないよ」

加夏子が黙った。

「生まれつき目が見えないってのも悪い事ばかりじゃないな。昔を思い出して悲しくなったりしないし」

「そんな…」

「僕の肉親は兄さんだけだった。昔も、今も」

両腕で這いずりながら加夏子が殉のそばまで来た。

飛びかかるように殉に抱きつく。

不意をくらって殉は畳の上に押し倒された。

「みて。わたしをみて、ジュン」

「見えないよ、僕には」

加夏子に組み敷かれた殉は、横を向いて顔をそらせた。

「見えなくても見えるの！！」

柔らかい、重い身体がドサリと落ちてきて、殉の頭が細い腕に抱えられた。

胸に押しつけられた二つのふくらみが、彼の心臓を痛い程締め付けた。

唇が重なり、柔らかいものが歯の間から侵入してくる。

殉は何も考えずそれを迎えた。

おずおずと触れ合っていた舌が、やがて2匹の蛇のようにうねり、互いに絡まり合う。

鼻息だけが小さな部屋に響く。

身体を入れ換え、殉が加夏子を組み敷いた。貪りあう二つの唇は離れない。

背中をまさぐっていた殉の手が、華奢な肩を辿って胸の膨らみに触れた。

ビクリと動きが止まる。

ゆっくりと唇を、身体を離れた。

息を弾ませながら加夏子を見下ろす形になった。

眉間に皺をよせ、思うように走れないマラソンランナーのような顔をした殉の頬を、加夏子の掌が下から優しく撫でた。

「…ゴメン…」

「どうして謝るの」

頬の手が殉の右手をとり、自分の頬へと触れさせた。

額から鼻梁、瞼。

「判るでしょ」

「知ってる」

「心の中の影じゃない、これが、わたし」

顎から首筋を通り、そっと左の胸に重ねた。

「私、いつだってドキドキしてるんだよ。ジュンと一緒にの時はいつも。何処でも行く。あなたと一緒になら、どこまででも行ける。一人じゃない、ジュンも、ワタシも」

「カナ…」

.....

タンタン！！

扉を叩く音に、二人はバネ人形のように飛び起きた。

おでこと顎がその拍子にけっこうな勢いでぶつかった。

「ポットのお湯を換えに…アラ？ どうしたん？」

部屋の真ん中で、顔をしかめて額や顎をさすっている二人を見た女将がニヤリと笑った。

「ハハア〜ん、不粋な真似しちゃったみたいね。いいからいいから、換えのポットはここに置いていくわね、じゃ、お邪魔サマア〜」

意味深な笑みを浮かべ、やけにゆっくりと扉を閉めて女将が出ていった。

顔を見合わせた二人は、どちらともなく小さく吹き出して、やがてカラカラと笑いだした。

◇

港。

女と、数人の男。

薄灯りの下で、年長らしい男に女が分厚い封筒を渡していた。

「じゃ、頼んだわよ」

「ヘィ。お嬢さんには世話んなつとりますし、こんなにもらっちゃあ申し訳ねえくらいで」

「気持ちよ。気をつけて。特に探偵の方は」

「此処あ俺達の庭ですぜ、余所モンに好き勝手にゃあさせねえ」

ドスの利いた声で男が答える。

黒い群れが輪になって封筒の中身を確認始めた脇で、女はひとつ石ころを蹴った。

ポチャン

べた凧の海に、波紋が広がってゆく。

あと少し

邪魔はさせない

女…衣笠恵美子が、刺すような目で沖を睨んだ。

第三十二章

尾道について二日目の朝。

「とりあえず、どうする？」

「とりあえず、あそこへ行こう。真山さん達と落ち合うのは夕方だし、もしかすると衣笠さんが戻ってきてるかも知れないからね」

宿を出た二人は、商店街から住宅の点在する山の手へ向かう小道を進んでいた。

「『通いつめれば情も湧く』かな」

「何それ？」

「パパが言ってた。ママをそれで口説き落としたんだって。二人とも」

「もてるんだね、カナのパパは。同じ男としては羨ましいよ」

「ワタシだけじゃ不満なの？」

「とんでもない。充分過ぎてバチが当たっちゃう」

昨日の打ち合わせで、衣笠恵美子のかつての婚約者、乃木秀司の現在の所在について真山達が調べる事になっていた。専門家である彼らが調べた方が早いであろうと真山達の申し出に同意した二人であったが、勿論、他人任せにしたまま待つ気は無かった。

真山さんも言ってたじゃないか、『素人である君達の眼力に期待してる』って

僕達も、出来る事をやろうよ

昨夜のチョット恥ずかしいハプニングの後、布団を引くのを手伝いながら殉は加夏子に言っていた。加夏子も同意し、明日はもう1度、あの旅館へ行こうかと布団の中で話ながら眠りに落ちたのだった。

「あの坂をまた登るのはシンドいなあ」

「愚痴るな、青年。…でも、また具合が悪くなったら言ってね、私、自分で漕げるから」

「大丈夫。僕そんなに弱くないよ」

「ホント？」

「たぶん」

つづれ坂の1つ目に差し掛かった辺りで、殉が車椅子を止めた。

後ろを振り仰いだ加夏子の目に、険しい表情の殉の顔が飛び込んできた。

「どうしたの？」

「…聞こえる…怖い声が…喚いてる…」

曲がり角の雑木林の中から男達が現れた。

日焼けした、屈強な男が4人。

ゆっくりと二人の方へ歩いて来る。

「坊や達、ちょ〜と付き合ってくれんかなあ」

背の低い男が、4人の中から一歩踏み出して言った。

「なんなんですか、私達、行く所があるんです。通してください」

「そりゃ出来ねえ相談だ、悪いが一緒に来てもらうぜ。オイ！」

小男のひと声で、凄まじい凶体をした男が前に歩み出てきた。

加夏子の車椅子を殉から奪おうとする。

「何するんですっ！」

殉が大男の手首を握った。

褐色の腕はびくともしなかった。

よく陽に焼けてはいたが、漁師だとしたらあまりにも不釣り合いな太さであり硬さだった。

目が見えていたら殉は更に驚いていたであろう。

膨れ上がった上半身に、異様な短足。

瘤のような両肩の間に申し訳程度に乗っている頭は、小さな穴のような目で彼を見下ろしていた。

まるで蟹だった。

蟹男は殉を振り解くでもなく、ゆっくりと車椅子を押すとリーダーらしき男の所までやってきた。

彼が車椅子を奪い、向きを変えた動作だけで殉は弾き飛ばされ尻餅をついていた。

「やめろっ！ カナあ！」

「ジュン！」

加夏子は車椅子の把手を握る手を、腕を、身を振ってメチャクチャにひっぱたいたが、蟹男は何の反応も見せない。蚊に刺された程も応えていないようであった。

「人質はひとりでいい。お前らその坊やを適当にいたぶっとけ。なに、殺しあしねえよ。いくぞ、ヨシオ」

「ウン」

「待てえ！ かなあぁあー！！」

声のする方へ、殉が必死に這いずってゆく。

その手が踏みつけられた。

絶叫が迸る。

「やめてっ！ やめてよっ！ ジュンに乱暴しないでっ！」

車椅子から半狂乱で転げ落ちそうになった加夏子を、ヨシオと呼ばれた蟹男が片手でひょいと担ぎ上げた。

ジタバタする姿を惚けた顔で眺めている。

「ん？ どうした」

「このコ、いやがってる…」

「ああ？ んな事あどうでもいい、とっとと引き上げるぞ」

じれた様子で、リーダー格の男が言った。

「おんなのこいじめるの、よくないよ」

「てめえ…俺に逆らおうってのか」

男のひと睨みで蟹男はシュンとなり、とぼとぼと雑木林の奥へ歩き出す。
その後を男が素早く追っていった。

「さあて、久しぶりのおもちゃだ、タップリ遊ばせてもらうか」

残った男達の一人が、片手を抱えてうずくまる殉の襟を掴んで引きずり起こした。
もう一人の男は、ポケットに両手を突っ込んでニタニタと笑っている。

「このあいだのボクシングみたか？ ありやなっちゃいねえよな。パンチって一のはこう…」

ズボムッ

殉の口から反吐が吹き出した。

「…こう、腰がはいってなきやあ駄目よ」

「俺にもやらせろ」

………

強く、軽く、また強く。

袋叩きが10分程続いた。

男が手を放すと、ぼろ雑巾のように殉が崩れ落ちた。

「いい汗かいたぜ、これ位でいいだろ。いこうぜ」

男が未練がましく殉の腹に蹴りをいれた。横たわった殉は微かに呻き声を出し身を振る。

「ほほっ、コイツまだ動けるぜえ」

…が…な…ご…

がえ…ぜ…

虫のように、男のズボンの端を掴んだ殉がにじり上がってくる。ノロノロと。ジリジリと。

立った。

「よっしゃ！ 抑えとるけん、お前キメたれや」

「でもよう、これ以上やったらヤバいんじゃないか」

もう一人の男が躊躇った。

「見てみい！ まだ元気じゃ、死にゃあしねえべ。お前がやらないなら俺がやっちゃる！！」

躊躇っていた男が、仕方無く殉の肩を両手で掴んだ。
大袈裟なフォームで、もう一人がパンチを殉の顔面に向けて放った。

◇

殉の意識は殆ど残っていなかった。

全身が脈打っていた。もう立っているか這いつくばっているかも判らない。
轟音が世界を覆っている。

ちくしょう

チクショウ

こんな奴らに

かな

加夏子を想った瞬間、それが起こった。
真っ暗な映画館で突然、上映が始まった時のように。
目の眩む光と、映像。
見知らぬ男が拳をくり出してくる。
酷くゆっくり、と。

上体を傾けた。飛んできた手首を掴む。
拳は真っ直ぐに向かってきて、映像があらぬ方向を滅茶苦茶に映した。
そして暗転…

◇

「な！？」

男は驚愕した。
瀕死に見えた少年が寸前でパンチをかわし、勢い余った拳は思い切り後ろの男の顔面を打ち抜いてしまったのだ。吹っ飛んだ男は泡を吹いて悶絶している。
それだけではなかった。
傷だらけの手が彼の手首を掴み、ヒョイと捻る。
冗談のように身体が前のめりになり、顔面から地面に叩きつけられたのだ。

殉は知りもしなかった。
それが、衣笠恵美子の実家の旅館前で真山がやってみせた合気道の技である事を。
ただ、無意識が身体を勝手に動かした事も。

「野郎お～」

膝をついた殉に向かい、顔を拭いながら男が立ち上がった。怒りで目が据わっている。
その時。

オイ

振り向いた男の意識が消し飛んだ。
一瞬の間に二発の蹴りを受け吹き飛んだ男の顔は無惨にひしゃげ潰れていた。

「しっかりしろ、殉」

堀川烈が、そこに居た。

第三十三章

「だ…れ…にい…ざ…ん？…」

「喋るな」

堀川は素早く殉の身体を調べた。

「肋骨が左二本、右一本折れてる。右手は挫傷と複雑骨折。内臓破裂はないようだ」

右膝の裏から手を差し入れて軽く持ち上げ、ふくらはぎを撫でたあと太股の脇を下から上へ圧してゆく。それが済むと左足へ。殉が醜く腫れた顔を歪める。

「ぐう」

「歩くのは無理だな」

横抱きに持ち上げ、道端の平らな草むらまで運ぶと彼はそっと殉の身体を横たえた。

「このまま担いでいって病院に放り込んでやろうか。お前は命を縮めている、確実に」

膝をついた堀川は、片方だけ残った目で弟を見下ろしていた。

「まだやるのか」

「…」

「あの娘がそんなに大事か」

「…」

腫れ上がったまぶたの隙間から、殉も見えぬ目で兄を見上げた。数瞬の間。視線がぶつかり、押し合う。

すっと立ち上がった堀川が背を向けた。

「好きにしろ」

それだけ言い、ゆっくりと歩き出す。

暫くすれば人が来る

それまで寝ている

遠ざかる声が告げた。

顔もあげられぬまま、殉は目を閉じた。

「（生きていて欲しい…少しでも長く…）」

『声』は、ただそれだけを繰り返し、やがて途絶えた。

腫れて熱をもった頬が濡れるのを感じながら、殉は意識を失った。

◇

…

……

……い……

……お…い……

………おいつ………

「オイッ！ しっかりしろ、オイッ！！」

乱暴に身体を揺さぶられ、殉はようやく目覚めた。

「北山…さん？…どうして…」

「そりゃこっちのセリフだ、何があった？ 鴉は、お前の兄貴は何処いった！？」

「にい…さん、が？」

「野郎どうやったんだか、俺の携帯に電話してきやがった。ここにいるってな」

「そう…ですか」

「そこにのびてる奴らは何だ？ お前がやったのか？ あのじゃじゃ馬、じゃねえ加夏子って娘はどうした？ それにお前のそのざまは」

「…カナ…大変だ、カナを捜して！ さらわれたんだ、追いかけてなきゃ！」

「動くな。訳わからんが、とにかく応援がいる。ちょっと待ってろ」

北山は取り出した携帯電話を素早くプッシュした。

「真山か、俺だ！ 今すぐ来い！！」

怒鳴るように言うと電話を切り視線を飛ばした。

堀川の去っていった道の向こうへ。

◇

網やら漁具やらの道具が雑然と放り込まれた小屋の片隅で加夏子はもがいていた。

足を縛るロープの端は柱に結びつけられていた。

両手の自由は利いたが、歩く事の出来ぬ加夏子に自力での脱出は無理であった。

それでも何とかロープを解こうと、叩いたり引っ張ったり、拳げ句噛みついたりもしてみた。

が、船舶用の頑丈なロープはびくともしない。

辺りを見回してみる。

何か役に立ちそうなものはないかと探してみたが、さすがにそんな都合のいいものは無かった。

こんなとき、ドラマや映画だといひカンジに刃物とかライターとか見つかるんだけど

駄目だよ、やっぱり

殉、大丈夫かな

気掛かりなのは、男二人に殴られていた殉の事ばかりではなかった。

アイツら、何で私をさらったりしたのかな

人質とか言ってたけど…

私達がいろんな事調べたら困る人がいるってこと？

調べられたら困るひと…

衣笠さん

まさか

私と殉に出来るのなんて、たかが知れてる

じゃあ私は、真山さん達の足止めするために？

そこまでして彼を助けたいっていの？

彼女の知る衣笠恵美子は、断じてあんな破落戸どもと一緒にって他人を傷つける人間ではなかった。

でも同時に、好きなひとを助けるためにはなりふり構わぬ彼女の気持ちも痛い程判った。

わかるよ、わたしだって…

でも、殉にもしもの事があつたら絶対に許さない！

その時、建て付けの悪い引き戸が酷い音を立てて開いた。

窮屈そうに身を屈めた蟹男が、食事の載った盆を持って入ってきた。

「ごはん、もってきた」

ドスドスと足を進めると、加夏子の前にそっと盆を置いた。

「たべないと、おなか、すいちゃうよ」

巨体からは想像も出来ない幼い声で加夏子に言った。

「あなたたち、殉をどうしたの？ ここはどこ？ ワタシをどうしようっていの？！」

「ぼく、むずかしいこと、わかんない」

蟹男は点のような目を細くした。

どうやらそれが彼の困った表情らしいと判った加夏子は、蟹男を睨むのを止め、少しだけ優しい声を掛けてみた。

「あなた、名前は何ていの？」

「ぼく、ヨシオ。おねえちゃんは何てなまえなの？」

「加夏子。カ・ナ・コ」

蟹男が嬉しそうに笑った。

◇

傷ついた殉を真山に任せ北山は尾道の街に飛び出していった。
殉から事情を聞いた瞬間、彼の脳は昇ってきた血で膨れ上がっていたのだ。

こんな子供をいのように痛ぶりがあって…
あげく歩けない女の子をさらうだと！？
クソ外道が！！

自分が加夏子を捜すと言った真山を無視し脱兎のごとく走り出した彼の背を見送りながら、真山は殉をおぶってゆっくりと立ち上がった。

「あぁなったら北さんは誰にも止められないからなあ」
「北山さん、凄く怒ってた」
「何か聞こえたのか？」
「泣き叫ぶような凄まじい『声』が。他に何も聞こえないほど」
「そうか…」

北さんは昔、子供を亡くしているんだ
トレーラーに追突されたとか言ってたよ
奥さんも、その時一緒に、ね

ぽつりと真山が言った。

「子供だの家族だのが絡むといつも人が変わる。どこかで他人じゃあないんだろう、あの人には」
「真山さん、僕は大丈夫です、北山さんを追い掛けて…カナを助けに行ってください」

真山が背に回していた手を離した。
不意に滑り落ちた足が地に着くのと、殉が呻いて倒れ込むのは同時だった。

「そんなザマで歩いて帰るつもりか？ 出来もしないことを口にするんじゃない」

冷やかな目で見下ろしながら、厳しい口調で真山が言い放った。

「今は傷の手当てが先だ。加夏子ちゃんは必ず連れ戻す、怪我人は足手まといなだけだ。待てないならそこで寝てるんだな」
「…真山…さん…兄に、似てます…ね…」

苦痛に顔をしかめながら殉が言い返す。

「僕が、アイツに？」

立ち上がろうと殉が下から手を伸ばした。
真山は不用意にその手を握った。

がくっ

膝が折れかかる。

とっさに手首を返し『気』を抜いた真山が驚きで目を見開いた。

「真山さんの真似だけど、これくらいなら…僕だって…」

「…あの旅館の前で。そうか、君は感じる事が出来るんだな、こういうものを」

「さっきは殴ってくる相手も見えました、たぶん、僕を押さえつけていた奴の見たものが見えたんです」

「なるほど、そりゃ凄い。だが」

今度は真山がねじるように捻り返すと、殉がうつ伏せに潰れた。

「真似だけじゃ使えぬ技だ、君には素質があるよ。でも生兵法は怪我の元だぞ」

もう一度、殉をおぶり直しながら真山は薄く笑った。

心配するな

北さんの頭は血が昇っている位で丁度、働きが良くなるのさ

信じて、任せろ

第三十四章

「お前、北山…」

「柴犬か」

港へと抜ける十字路。

時折、トラックが走る以外はがらんとした通りのど真ん中で、柴田刑事と北山は鉢合わせした。

「真山が見かけた刑事ってのは、さてはお前か。ワン公ふぜいが尾道くんだりまで何の用だ」

「ゴロツキ探偵ごときに話す事なんぞあるか、アンタこそ血相変えて何してる」

ズカズカと互いに歩み寄り、額のぶつからんばかりの距離でギリギリと視線をねじ込み合う。

「ここは管轄外だろ、とっとと消えな。お前がうろつくとロクな事にならねえ」

「そっちこそ。どうせつまらん仕事だろうが。お上に向かって『ゴミ漁りの邪魔だ』とはいい度胸だ。ぶち込むぞ」

「やってみな青二才」

「吠えるなよジジイ」

……

つかの間、睨み合った。

北山が一步さがり背を向ける。

「わめくだけわめいて退散か？」

「今、お前に構っている暇はねえ」

走り出そうとした北山がふと足を止め、ゆっくりと柴田の方へ向き直った。

「なんだ、まだ吠え足りな…」

「おもしろい事を教えてやる。東京から旅行に来ている若者二人が暴漢に襲われた。一人は重傷、一人は拉致された」

「何だと？」

「東京と違ってデカイ顔は出来んだろうが、所轄とつるむくらいなら何とかなるだろ。どうする？ 事件だぜ」

「フカすな。貴様の寝言など信じてるのか」

「その辺の大きめの病院に電話してみな。かなり酷くやられてたからな。堀川って坊やだ」

その名を聞いた柴田の肩が、ぴくりと動いた。

「それを早く言え」

「あん？」

「いい事を教えてもらった。ひとつ貸しとくぜ、オッサン」

言い終わらぬうちに、今度は柴田が北山に背を向け早足で歩き出した。

「なんだ？ えらく簡単に食いついたな…まあいいか」

あの外道どもの狙いは、俺達をお嬢の捜索に向かわせ足止めする事だろう

柴田の奴が地元警察を動かしてくれれば、少なくとも真山は自由に動き回れることになる
傷付いた坊やの警護もしてくれるだろう
俺は…

北山は港の奥へと視線を飛ばし、両手を重ねバキボキと指を鳴らした。

さてと
白馬の騎士ってがらじゃないが
いくか

沖にぼつんと浮いた小島。それが彼の目当てだった。

◇

「碧ちゃん、大丈夫？」

椅子に仰臥し、あえぐ碧の額を濡れタオルで拭いながら、恵美子は良心の呵責と闘っていた。

こんな小さな子になにさせてるんだろ
もがいて、苦しんで…
それでも何とか秀司さんを助け出そうとしてくれている
私、この子にこれほどの苦痛を強いる資格があるの？

碧の顔色は紙のように白く、拭っても拭っても玉のような汗が額に吹き出してきた。
誰かが見たら、あまりにも明白な死相におじけをふるったかも知れない。
それでも恵美子は止めなかった。

あと、少し
あともうちょっとで、彼は昔のように微笑みかけてくれる
何も無かったように話しかけてくれる
あとチョットなんだ
この子が苦しむのも、あとチョットだけ

目を開けた碧が、憔悴し切った顔でニコリと恵美子に笑いかけた。

「…だいじょうぶだよ。あと少しでおにいちゃんのいる所まで行けそう。でもちょっと休ませて。ワタシ疲れちゃった…
」
「わかった。少し休もう。まだ時間はあるから」

碧のけなげな言葉に恵美子は泣きそうになった

この子はこの子なりに、事情を理解し、自分に出来る事をやろうとしている
難しいことは判らなくても、自分が誘拐同然に連れ出された事くらいは判っている筈だ
それでも、この子は協力してくれた
いいえ、これはもう協力なんて生易しいものじゃない

献身…いきどおり…

多分、私の『声』を聞いたのだろう

そしてこの子なりに理解した、私のことを

碧ちゃんには、たとえそれが自分の事でなくとも『大切なひとを失う』というのが許せなかったのかもしれない

くるしい

この子だけじゃない、やらせている私も彼女以上に苦しい

でも…でも、やらなきゃ

やるんだ

恵美子は立ち上がり窓のカーテンを開けた。

瀬戸内を一望にする景色を眺めながら、想いは別な所へとんでいた。

碧がその窓をじっと睨んでいた事に、恵美子は気づかなかった。

◇

尾道市内。某病院。

殉をかつぎ込んだ真山は、ベッドに寝かされた彼を見届けると外へ飛び出てゆこうとした。

「待って！ 今、何か見えた」

殉の言葉に、ドアに手を掛けた真山が振り返る。

「景色…海が見える…ここは？…」

真山は慌ててベッド脇の椅子を引き寄せた。

◇

ぽつんと1つだけある明かり取りの小窓。

差し込む陽光も、壁の隙間から漏れてくる光も、いつの間にか弱々しい紅色に変わってきていた。

もうすぐ陽が沈むんだ

加夏子は溜息をついた。

何とかしなければと思っても、ここから逃げ出す方法など思いつかなかった。

思いつかないまま時間だけが過ぎてゆく。

さかな、おいしかったな

こんな状況でも、しっかり出された物は平らげる自分がちょっぴり情けなかった。

ううん、食べなきゃ

腹が減っては道草もできないって言うじゃない

あれ？ 道草…だったよね？

妙なところで思考が堂々巡りを始めた加夏子の耳に、またあの酷い音が飛び込んできた。
蟹男…ヨシオが戸口に立っていた。

「ちょっとはやいけど、よるごはん、もってきた」

「ありがとう。でもまだお腹すいてないよ」

「でもおねえちゃん、ずっと小屋のなかにいたらおなかすいちゃう。ボク、じっとしてるとおなかすくし」

加夏子は苦笑した。

ヨシオとの会話で、自分をさらったのが誰かを知った。

地元の漁師。でも漁るのは魚だけではない。ヤクザの下請けで密輸まがいの事も平気でやる。

多分この辺りでは鼻つまみ者の集まりなのだろう。

あの時、加夏子をさらうよう指示していた年輩の男がヨシオの父親だという事も判った。

そして、今自分の目の前にいる異形の蟹男、ヨシオが何の悪意も抱いていない事も理解出来たのだ。

このコは、父親の言うがままになってるだけだ

見かけはかなりグロいけど…

本当は悪事なんかに関わるような子じゃない、優しい子なんだ

何とかしてあげなきゃ

自分の立場も忘れ思った瞬間、加夏子の脳裏に1つのアイデアが閃いた。

「ねえヨシオ、私と一緒に外に出ない？」

「え？」

「ヨシオは今までどんな所にいった？ 遊園地とか見た事ある？」

「ボク船しか知らない。とうちゃんが『いっしょにこい！』って。可愛いものもいっぱいみた、いやなかんじだった」

ヨシオが、ただでさえ小さな目を更に小さくすぼめた。

「ボク、海、きらいだ」

「行こうよ！ 連れてってあげる、楽しいところへ。嫌な事ばかりじゃないんだよ」

加夏子はヨシオにむけて手を差しのべた。

第三十五章

連中、この辺りじゃ有名らしいな

ボートの船外機を操りながら北山は思っていた。

船を借りる際、今向かっている小島の所有者が衣笠恵美子の実家である事を知った。

これでバッチリ繋がったという訳だ

蛇の道は何とやら

何かやらかしや裏の世界じゃ筒抜けだぜ

情報源になるものはどの街でも変わらなかった。いかがわしい店、いかがわしい人間。

そして、いかがわしい噂。

足跡も消せないトーシロどもめ

キッチリとオトシマエつけてもらうぜ

入り江らしき場所に向け、殊更に派手なエンジン音を鳴り響かせ進む北山は、浅く唇を舐め島を睨んだ。

◇

「おいテツ、あれ見ろや」

「なんね？」

岩場の後ろの林で焚き火にあたっていた男が、奥の木の影で用を足していた若い方の男に声を掛けた。

見張りと言っても真似事のようなもの、誰が来る筈も無いとたかをくくってはいたが、警察は別だ。

傷害事件で引っ張られるのには全員が馴れっこであっても、邪魔されるのは迷惑だった。

そんな時はとっとと逃げるに限る。

だが…

「なんぞ人が一人、乗っとるだけじゃのう」

「おお、なにかの？」

ボートは、岩場の向こうへ回り込むように入り江の方へと姿を消した。

「こんなちっこい島に用のある奴といやあ、あれしかねえべ」

「だな。ふん捕まえるぞ、テツ」

「俺あ面倒臭いの嫌だ」

「なあに、ゴタゴタするようなら錨結んで沈めちまえばいいだけよ。いくぞ」

焚き火を手早く消し、二人は入り江へと走り始めた。

◇

同じ頃。

「こらあ！ ヨシオ、なにしとる！」

地響きを立てて小屋から出てきたヨシオに、年輩の男…ヨシオの父親だった…が真っ赤になって怒鳴った。

「さらってきた女だぞ、外に出してどうする！」

「…」

「ヨシオッ！！」

「…ボク、おねえちゃんといっしょに行く…」

「あんだとお？」

加夏子を肩に座らせ、ヨシオはじっと父親を見下ろした。

「とうちゃん、いけないことばかりしてる。ガマンしろ、そうすればいつかたのしいところにつれてってやるって、そればっか。ボクいっぱいがまんしたよ、でももうヤダ！ 船も海もきらいだ、おねえちゃんといっしょに行く！」

「このアホガキが」

男が座っていた後ろから長く細いものを取り出した。ゆっくりと構える。

水中銃。加夏子がヨシオの首にしがみつく。

「育ててやった恩も忘れやがって。これでもくらえ！」

ガシュ！

あっけない程簡単に、銃はヨシオの腹に突き立った。

「ヨシオッ！？」

加夏子が真っ青になる。ヨシオは呆けた顔で、腹から生えた銃の柄を見下ろしていた。

やおら柄を掴む。

「ダメッ！ 抜いちゃダメだよ！」

「…いたい…」

嫌な音を立てて銃が引き抜かれた。

濃い血臭と一緒に鮮血が吹き出し、うねうねとした腸がはみ出してくる。

「どおだ！ 思い知ったかこのクソガキ！ 恩知らずのバケモノめ！ てめえが…」

呪詛の言葉は最後まで続かなかった。

引き抜いた銃を持ちかえたヨシオがずんずんと進むと、横一文字に男を払ったのだ。

長大な銃の先端が男の顔面を襲い、血飛沫と共に男は木立の奥へ吹き飛んでいった。

地響きを立てて、ヨシオが膝を地におとした。

加夏子は転がり落ち、したたかに大地へ叩きつけられた。

◇

…

……

………

?!

つかの間朦朧としていた加夏子が顔を上げると、真っ赤に染まった手で腹を押さえているヨシオの姿が目飛び込んできた。

「ヨシオ！ しっかりしてヨシオッ！！」

夢中でヨシオの側に這い寄る。

「おねえちゃん…いたいよう…」

「大丈夫、だいじょうぶだから。待ってて」

加夏子は躊躇い無く白いブラウスを脱ぐと、歯で引き裂いては結び、長い包帯状の布を作った。

「手をどけて」

「うん」

ヨシオが素直に両手を降ろす。

出血が再び、猛烈な勢いで始まった。

瞬間、吐きそうになる。

ぎりっと歯を噛みしめて耐え、はみ出した腸を腹部へ押し込めると、傷口を抑えながら手製の包帯を何周も何周もヨシオの腹に巻いていった。

巻いてゆくそばから布は赤く染まっていった。

「これでよし。もう大丈夫だよ」

「ほんと？」

「うん、でもチョットひどい怪我だから、一緒に病院にいこう」

加夏子は努めて明るく言った。

血が止まらない

このままではヨシオはもたないだろう

そして私も…

泣きたい気持ちを押し殺して、加夏子は言った。

「ここからお医者さんのいる所までいける？ お医者さんに看てもらえば、痛いおなかなんてスグになおしてくれるよ」

「ホントに？」

「うん、ホント。私、ヨシオには嘘つかないから」

「じゃあ、いこう」

胴回りを真っ赤に染めたまま、ヨシオは再び加夏子を肩にかつぎ上げ歩き出した。

◇

入り江にはぼつんと一艘、小舟が泊まっているだけであった。

駆けつけた男二人は辺りを見回し、小舟の中を探ってみた。

「なあ～んもねえぞ」

「誰もいねえ。島に来ただけの奴がこんなに早くトングラする訳ない。やっぱあの娘か」

「だな」

「ガス、抜いときな」

若い方の男が船外機のキャップを外した。

そのままスクリューを持ち上げると、逆さになった給油口からガソリンが船内にこぼれ出てくる。

「なにやってる、海に捨てろ」

「面倒じゃ。このまま火、つけちまおうぜ。その方がてっとり早いや」

「このアホ！ こんな所で目立ってどうすんだ」

「でもよう」

ざっ

ざっ！

ざっ！！

小舟に気を取られていた二人の背後から、砂に食い込む足音が響いた。

年嵩の男が振り返ると、砲弾めいた影が突っ込んできたのは同時だった。

猛烈なタックルをくらった男は、ゆうに3 mは吹き飛んで派手な水飛沫の向こうに消えた。

ううおおおらあああー！！！！

「な?!」

凄まじい雄叫びをあげ突っ込んできた影の迫力に若い男がたたらを踏んだ。グラリとバランスが崩れる。

凜猛な一撃を顔面に受け小舟と一緒にひっくり返る。

後はただ、先程の男と同じようにゆらゆらと海面に浮かんでいるだけであった。

「ふう。手応えない連中だな」

北山は腰に手を当てて、死んだように漂う男達を見下ろした。

「この船は駄目だな。まあいい、こいつらの船だってあるだろう」

ザブザブと海に入り、手近に流れ着いた方の男を浜へと引き擦り上げた。年嵩の方の男だった。

俯せに寝かせ、背中の真ん中を踏みつけた。

「ガハッ！」

水を吐き出した男が、苦しそうにむせながら北山を見上げた。

「お目覚めかい？」

「…てめえ…だれ…だ…」

「誰でもいい。聞くのはこっちだ」

男の右手、人差し指の先を狙って踵を踏み降ろす。

そのままギリギリと砂にねじ込んだ。

男の口から絶叫が迸る。

「女の子は何処だ？ 指が残ってるうちに答えな」

中指の後は薬指だった。次は小指。

親指も。

「てめえらがいたぶった坊やはな、もっと酷い事になってるぜ。子供なぶりやがって、早く吐けよクソ野郎」

左手の指が全て砕かれる前に、男は喋りだした。

第三十六章

小さいとはいえ、島はそれなりの大きさがあつた。

入り江の反対側にはテトラポットで組み上げられた小規模な防波堤と漁港。

そこに隣接して建てられた数軒の小屋。

それ以外は鬱蒼とした森が島の中央部に向け小高く盛り上がり、一見して人の住まぬ無人島の景観を呈していた。

ヨシオと加夏子は丁度、その森の真ん中辺りを進んでいた。

「ねえ、こっちに行くと何処にでるの」

加夏子は不安になって訊ねた。

「ふね、あるから」

「船って、さっきの港にもあつたよね。どうしてそれに乗らないの」

「あれ、おじさんたちのふね。かつてにのっちゃいけない」

「おじさんたちって？」

「とうちゃんのもだち。いまは、おさけ飲んでねてる」

「だったらいいじゃない」

加夏子は気が気ではなかつた。

ここが島だというのは判つた。

こんな所には病院どころか民家さえ無いだろう。

下を見れば出血がヨシオのズボンをびっしょりと濡らし、振り返ると道には点々と血の跡が残っていた。

早く病院にいかねばヨシオが危ない。

ひどく急いた加夏子の声に、ヨシオが足を止めた。

小岩のような頭を巡らし、肩に載せた彼女を見上げる。

「ひとのもの勝手につかっちゃいけないんだよ。かあちゃんがいったた」

「おかあ…さん、が？」

「うん」

「ヨシオのおかあさんって、今どこにいるの」

「しんじゃった。ぼくがとうちゃんより背がちっちゃいころに」

「そうなんだ…」

焦燥が固く握らせていた加夏子の手が、ヨシオの首からゆるりと離れ、ごつい頭を優しく撫でた。

「ワタシのお母さんも死んじゃったんだ。今のお母さんは、ホントのお母さんじゃない」

「おねえちゃん、かあちゃんがふたりいるの？」

点のような目を見開いてヨシオが聞いた。

「ウン。でも、今のお母さんも大好きよ、ワタシ」

「いいなあ…ぼくもかあちゃんほしい」

「…」

加夏子は何も言えなくなってしまった。

がさっ

脇の茂みで何かが動く音がした。

「!？」

ビクンと顔を振り、加夏子はそちらを見た。

トラックのハンドルを切ったように、ゆっくりとヨシオが向きを変える。

「なんだぁ？ そのバカでっかいのは」

汗だくの北山が茂みから姿を現した。

「北山さんっ！」

加夏子はヨシオの肩の上で叫んだ。

「来てくれたんだ」

「無事だったようだな、にしてもソイツは…」

ずんと足を踏み変え、ヨシオが北山へ向けて丸太のような腕を突きだした。

「おねえちゃんいじめにきたのか？ あっちいかないとブツ飛ばすぞ！ ぼく強いんだぞっ！！」

「おいおい、ブツとばすってお前、血だらけじゃないか」

血まみれのヨシオが構えるさまは手負いの巨象が向かってくるような迫力があつたが、北山はどこ吹く風で言葉を続けた。

「刺されたのか？ お前」

「いたくなんかないやっ！ おねえちゃんがだいじょうぶっていったもん！！ ちょっとケガしただけだっていったモンっ！！」

加夏子が目を伏せた。

口元を歪ませた北山は、両手をポケットにつっ込んで足元の土を蹴っていた。

ずっと軀が沈む。

次の瞬間、重い音と共にヨシオが真後ろにひっくり返った。

加夏子も振り落とされたが、今度は草の茂っている場所に落ちたおかげで気を失うことはなかった。

したたか背中を打った加夏子が飛び起きると、尻餅をついたヨシオがぼかんとして北山を見上げていた。

自分の体重の2倍はあろうかという相手を、北山のタックルは見事にひっくり返してみせたのだ。

「なにすんのよっ！」

加夏子が叫ぶ。

「動くなボウズ…」

ヒステリックな声に耳も貸さず、かがみ込んだ北山はヨシオの腹に巻かれた布を触り傷の具合を確かめた。

「こりゃマズい。いくら頑丈でもこれじゃ保たん」

「え？」

「出血が酷過ぎる。体力はあるだろうが、保って1時間ってとこだ」

髭面をしかめて北山が呟いた。

「ぼく…ぼく、しんじょうの？」

「ああ、死ぬ。このままじゃな」

不意に猛烈な怒りがこみ上げ、加夏子は目の前の北山に怒鳴った。

「なんでそんなこというのよ！ 死んじょうなんていうのよ！！ ヨシオは大丈夫なんだから！ 助かるんだから！ 勝手に殺すなよっ！！ 死ぬなんていうなよお！！ バカヤロウッ、クソオヤジッ！！ 」

半べそのまま加夏子は怒鳴り続けた。

立ち上がった北山が、ヨシオの頭を撫でながら彼女を見た。

「助けたいか。このボウヤも」

べそかき顔のまま、加夏子が頷いた。

◇

日の沈んだ暗い森の中を三人は進んでいた。

先頭をゆくヨシオの肩には加夏子。

後ろを気にしながら歩く北山の手は、ヨシオのズボンのベルトをしっかりと掴んでいた。

時折、ヨシオの巨体がぐらりと揺らぐ。

そのたびに北山はぐいと足を踏ん張り、彼が倒れないよう支えていた。

「ぼく…ねむい…」

驚くほど弱々しい声でヨシオが呟く。

「寝ちゃダメ！ もうちょっとなんでしょ、船のある所まであとチョットなんだよね？」

答える代わりに、ヨシオはずどんと大地に膝を落とした。

「ヨシオッ！？」

「ぼく…もう、だめ…ねる…」

「ヨシオ？ ヨシオォ！！」

北山に抱き止められた加夏子の目の前で、ヨシオは地響きを立てて俯せに倒れた。

「いやあああ！ ヨシオー！！！」

半狂乱の加夏子をそっと地面に降ろすと、北山は素早くヨシオの側に駆け寄り、うんせと気合いをかけて巨体を仰向けに転がした。

「ボウズ、俺が判るか」

「おじ…ちゃん…？」

「船は何処だ？」

「ここ…おりた…どうくつ…の…なか…」

「よく頑張ったな。お前はここで休んでろ、俺とおねえちゃんが医者を連れてくる」

「ぼく、ねてもいい？」

「ああ、目をつむってジッとしてろ。お腹を押さえて、動くんじゃないぞ」

「…おじちゃん、いいヒトなんだね。ぼく、ジッとしてる…」

「ヨシ、えらいぞ。ヨシオは立派なおとこのこだ」

ヨシオが微かに微笑んだ。

「いくぞ、ここからは俺がおぶってゆく」

立ち上がった北山が加夏子に向かい言った。

「こんな所に置いてったら死んじゃうよ、お願い、ヨシオも連れてって」

「無理だ」

「北山さんっ！」

「悪いが、いくら俺でもこんな馬鹿でかい奴とアンタを纏めて抱えちゃいけねえ。ヨシオを助けたきゃ一刻も早く助けを呼ぶしかない。その為には俺達がここから脱出しなきゃならないんだ」

「そんな！ そんなのってないよ！！」

必死に這いずってきて足にしがみついた加夏子の顔を、屈み込んだ北山は両手でガッシリと挟み込んだ。

「ワガママいうなっ！ 来るのか、こないのかっ！？」

………

少しの沈黙。

やがて加夏子の頭がこくと動いた。

第三十七章

「ちくしょう…」

足下の崖を見下ろし、唸るように北山が呟いた。

ヨシオが教えた洞窟への道は無かった。

登山に使うようなザイルが所々に垂れ下がっているのを見ると、元は岩場の凹凸を利用した階段状の足場だったのだろう。だが今は、途中で顔を覗かせている幾つかの丸太とザイルが切り立った崖の下に散見出来るのみであった。台風か何かの折に崩れてしまったのであろう。

「…」

声も無く周囲を見回す。

他にこの崖を降りられそうな場所は見当たらなかった。

傾斜が比較的緩くなっているここだけが唯一、下へ辿り着ける可能性があったのだ。

「北山…さん…」

おぼわれた加夏子が不安気な声を出した。

「これじゃ船までいけない…」

「降りるぞ」

「え？」

「降りる、と言ったんだ。おっこちないようシッカリつかまってる」

北山はズボンのベルトを腰から抜くと、背に回してから胸の前できつく締め上げた。

虚空に背を向け、足から崖へと踏み出す。

「無理だよ、おっこっちゃうよ！ ほかの道を探そうよ」

「ダメだ」

「北山さんっ！」

「…間に…合わなくなる…ぞ…追っ手もくる…あの坊やも…それでもいいのか…」

少しずつ、身体を崖に這わせながら下へと降りてゆく。

右手が断崖の縁から離れた。

下を見た加夏子が息を飲むのが伝わってくる。

「見るな。目つむって、つかまる事だけ考えてろ」

「もう見ちゃったよ～」

「だったら空でも見てろ」

「そんなぁ…ケータイ小説じゃないんだから」

「なんだ…そりゃ…」

虫が這うように、二人の身体は崖を下っていった。

「車椅子、押してくれてアリガト」

「あん？」

「旅館の帰りだよ、衣笠さんちの」

「あれか、どうってこたないぜ」

「わたし…北山さんって怖い人だと思ってた、エラそうで嫌なオッサンだって…」

「光荣だね」

左手を岩角から放し、次の岩を慎重に掴みながら北山が答えた。

「でも助けに来てくれた。わたしさ…あの…」

「生きてりゃオマエとおない歳くらいかな」

「？」

「子供だよ。俺の子。もう死んじまったがね」

「北山さんって結婚してたんですか？」

少し驚いた口調で加夏子が聞いた。

「ああ…遠い昔のこったけどよ…」

◇

北山と加夏子が決死の脱出行を続けていた、同じ頃。

殉を担ぎこんだ病院を後にした真山は、日の沈んだ尾道の街を抜け山の手に向かい足を早めていた。

うかつだった

いや、向こうが一枚上手だったのか

乃木秀司が入院先から姿を消した所までは判っていた

だが、その行く先を探る暇無く仕掛けてきた清水加夏子の拉致、堀川殉への暴行

みえみえの足止めだ、幼稚過ぎて笑えるほどの

この件を片付けるのに2～3日、それ位の手間と移動時間を使う辺りに対象は居る。

無意識の内にそう思い込んでいた。組みし易い相手と侮っていた。

捜索の視点を遠くへ向ける事に何の疑問も持たなかった。

殉君がいなかったら…

そう思い、真山は腹の底が熱くなった。

プライドが少なからず傷付けられているのが血の熱さから感じられた。

遊んでいたつもりは無い

ここからはこっちも全力でいく

逃がさん

堀川殉がその特異な能力で視たものは、恐らく誘拐された佐野碧が目にした景色、視ていた風景。

それはあの旅館の近辺で見た瀬戸内の眺めと酷似していたのだ。

女の子は、衣笠恵美子の実家のすぐそばに居る

確信だった。

確信が真山をわし掴みにして引きずり歩かせていた。

◇

暗い坂道をみつつ登り、四つ目の坂を登り切れば衣笠恵美子の実家に辿り着くつづれ折りの途中で真山は足を止めた。

殺気。

針のように鋭い殺気が肌に刺さってくる。

刺さるそばから懐かしい痛みを伝えてきた。

身体は自然に構えている。どこへともなく言葉を投げた。

「邪魔するな、鴉。今はお前と遊んでる暇は無い」

「礼をいっておく」

「なに？」

意外な言葉に、真山は傍らの茂みを振り返った。

黒い闇が、更に真っ黒な闇を吐き出した。

「殉を病院に運んだのはお前だろう。すまない」

漆黒の影が二つに折れると、黒装束の堀川烈は頭を下げた。

真山は構えを解かなかった。言葉とは裏腹に、堀川の放つ殺気は些かも衰えていなかったからだ。

「彼はいい男だな。貴様の弟にはもったいない」

「似てないとよく言われたよ、うっとうしい親戚連中にな」

世間話のような会話を交わしながら、二つの影は緩やかな円を描き始めた。

ゆっくりと影が回る。

街灯も無い坂の途中、せいぜい8 m四方程度の空間で、それでも二人の間合いは変わらなかった。

漆黒の男の手から、いつか長く冷たい一条の光が伸びていた。

奇妙な湾曲を持った鉞状の刀。

ククリと呼ばれる異国の山刀であった。

「ククリナイフか」

真山が言った。緊張を隠した口調だった。

東洋の反り返った刀や西洋の直刀に馴れた者には、内側に向かって曲がったその刀身は恐ろしく危険なものであった。

間合いが読めない。

読めたとしても、生と死を分かつ紙一重の所で読み間違える危険を常に秘めた形状だった。

その特異さから、古代より暗殺者が好んで用いたきたのがこの刀であった。

「貴様らしい得物だ」

言ってから、口中が乾き切っているのを真山は感じた。

「これは仲間のものだった」

堀川がボソリと呟く。

「蜂の巣になって死んだよ。そいつは形見だと言ってこれを俺に託した」

「貴様に仲間なんぞいたのか。誰とつるもうと何処だろうと殺せりゃよかったんじゃないのか、鴉！」

真山が吐き捨てた。

言葉と一緒に『気』の塊を眼前の堀川に叩きつける。

普通なら何か…姿勢や気合いや構え…が乱れる程の気を受けても、堀川は微動だにできなかった。

「奴らと一緒に戦い右目をなくした。アラーとやらはこの程度の生け贄で俺を生還させた。どうやら俺にはまだやる事が残っているらしい」

真山は構えを解いた。足の運びが止まる。

自然体。

両手はダラリと軀の脇に垂らしていた。

申し合わせたように堀川の動きも止まった。

.....

「お前を斬りたい」

暫くして堀川が言った。

「だが刀が言ってる、弟を助けろと。力になってやれと」

刀の先で道の彼方を指し示した。

「いけ。旅館の脇の小道を下った所に小屋がある。女はそこだ」

「いいのか？ 決着を着けなくて」

「この件が片付いて殉が無事に東京へ戻ったら、その時殺るさ。いけよ」

「…貸しておくぞ、鴉。東京で会おう」

真山は前だけ睨みながら走り出した。

堀川の脇を擦り抜ける時、彼が小さく呟いた。

腕をあげたな

走り去る真山の後ろ姿を見送るように、能面のような顔が一瞬、歪んだ笑みを浮かべた。

◇

衝動。

右手が、衝動と共に堀川の腕を持ち上げつつあった。

あの男を殺せ

好きなだけなぐれ

切り刻め、血を啜れ

肉を喰らって身体じゅうを朱に染めろ

それがお前だ、『鴉』と呼ばれたお前の本性だ

聞き覚えの無い誰かの声。

ぎりと歯を噛んだ堀川は、沸き上がる衝動に抗しきれず走り去る真山の背にククリナイフを投げようとした。

ガツンという衝撃。

見上げればナイフは右肩の上に浮いていた。

誰かが彼の手を強く掴んでいたのだ。

がっしりと手首を握った腕の付け根を目で追った。

彼の左腕だった。

闇の向こうから、朧気に異国の声が語りかけてくる。

レトウ…

レトウよ…

遙か海原の彼方、東の国の偉大な戦士よ

お前は何の為に

誰のために

刃を振るうか

血を流すか

自分か

それとも…

右手首を握った左腕をゆっくりと降ろしながら、堀川は声の主へ…今はいない戦友へ言葉を返した。

化けてでるのはイスラムの流儀か、アリ

貴様は部族を率いて天国にでも行け

俺は地獄行チケットを予約済みだ

乾いた笑い声が聞こえた。

レトウよ…

貴様が天国を語るか

地獄を語るか

知りもしないものを口にするんじゃない

「なら貴様はどうなんだ！」

ぶんと刃音を立て、叫ぶ堀川が闇を切り裂いた。

「部族を皆殺しにされ、たった三人でアメ公どものベースに殴り込んで、ボロ雑巾のように死んだ貴様はエラそうに俺にあの世を語って聞かせられるというのか！？ 答えろ！ アリッ！！」

黒々と広がる虚空に、堀川の叫び声が突き刺さり吸い込まれてゆく。
声がカラカラと笑った。

レトゥよ…

何処へゆくか、我々には決められぬ

貴様は、貴様の成すべき事を成せ

終わりの日が訪れた、その時に…

また会おう

友よ

声が遠ざかり、消えた。

「友、か…」

真山が走り去った、その道の彼方を見据えながら堀川は苦笑した。

「俺はただの死神だよ、アリ」

眩きながらククリナイフを背中の鞘に納めた。

「弟だけは生き続けて欲しい。だがそれも、死神には過ぎた願いなのかも知れないな」

数瞬の後、彼の姿は闇の中へと溶け込み消えた。

第三十八章

旅館の脇から海へと下ってゆく小道は、よほど目をこらさなければ見つけれぬ程暗がりに溶け込んでいた。

従業員に見つかって、またぞろ先日のような騒ぎになっては元も子もない。

真山は足音を立てぬよう、砂利を敷き詰めた旅館の正面を避け、植え込みの影を慎重に気配を消しながら小道の入り口までたどり着いた。

ふと旅館の窓に目をやった。

ぼつぼつと灯った照明、時折よぎる人影。

漏れ聞こえる泊まり客達の声。

何の関わりも無い者同士がひとところに集い、ある者は喧噪に明け暮れ、ある者はいっときの休息に吐息を漏らし、またある者はじっと夜を見つめる。

宿とは小さな街そのものだと真山は思った。

ストーカー、誘拐犯、そして鴉…

夜の街外れに息を潜めうづくまる者達

僕の相手は、いつもそんな奴らばかりだな

口元に小さく皮肉の笑みを浮かべ、真山は道の奥へと身を踊らせた。

◇

「…秀司…さん？…」

碧の額に濡れ手拭いを置いた恵美子が背後の衣ずれの音に振り返ると、眠っていた筈の乃木秀司が布団から身体を起こして天井を睨んでいた。

くわっと目を見開き、青白い顔を上向けたまま微動だにしない。

「秀司さん、私が判る？ 秀司さんっ！」

病院から連れ出す時に着せたままのスウェットの肩を掴み、恵美子が秀司の身体を揺さぶった。

幾度も幾度も揺さぶり続ける。

がくんっ

シーソーが傾くような勢いで秀司の顔が正面を向いた。

そのままゆっくり、ゆっくりと恵美子の方へ頭を捻る。

恵美子の内から沸き上がる喜びが、喉の途中で凍りついた。

秀司は笑っていた。

満面の笑みの何処にも、何の感情も無い笑顔。

もの凄い笑顔だった。

見る者を震え上がらさずにはいられない、非人間的な笑顔。

身動きひとつ出来ず固まってしまった恵美子の服の裾を、小さな手が引いた。

「…ダメ…離れて…」

横たわっていた碧が懸命に腕を伸ばし、消え入りそうな声で警告した。

「それ…おにいちゃんじゃない…違うところにいっちゃった、途中で…うち、ちからなくて引っ張れなかった…こっちに…」

「ちがうって、それじゃ…」

… ええ～みいいい～ …

笑いながら、秀司は恵美子の腕に喰らいついた。

◇

激痛と驚愕が恵美子から正常な思考を奪っていた。

まるでゾンビのように、血だらけの口で自分の腕の肉を貪る元婚約者…
彼女は、ただ喰われるがままだった。

「しゅうじ…さん…わたしが…わかるのね…よかった…」

ええみいいい

えええええみいいいいい

いいいいいいいいいい

いいいひひひいいいい

あばあぶあ…

乃木秀司は恵美子の目を真っ直ぐに見ながら腕を喰い続けていた。
笑いながら。

「おねえちゃん…ダメだって！ おねえちゃん！！」

必死に起きあがって服を引っ張る碧を恵美子が見る。
微笑んでいた。泣きながら。

「みて、秀司さんが…帰ってきたよ…ほら」

「ちがう！ ちがうよお！ しっかりしてっ！！」

「…こんなに嬉しそうに…しゅうちゃんたら…」

またゆっくりと秀司の方へ顔を向けた。

狭い部屋の中に、もの凄い血臭が立ちこめていた。

碧は身体を捻りベッド代わりのソファから転がり落ちた。

片腕でソファの端を掴み、火のような呼吸を繰り返しながら何とか立ち上がった。

高熱と脱力感、ひっきりなしに続く頭痛で立っている事すら難しかったが、目の前の修羅場を一瞥すると戸口に向かって歩きだした。

壁で身体を支え、何度もつまづき、立ち止まりながらやっとの思いでドアまで辿り着く。

簡単なシリンダーロックの鍵だった。でもそれが開けられない。

視界がグルグルと回り吐き気がこみ上げてくる。

どこが鍵がよくわからなかった。

身体を支える手を壁から放したら立ってられない。

どうすればいいか判らなかった。

ドアにぶつかり、碧はそのままへたり込んだ。

判らないまま、ドアノブらしきものに片方しかない腕を伸ばし必死でがちゃがちゃと捻り、叩く。

不意に鈍い金属音がして、ノブがぽろりと抜け落ち碧の前に転がった。

すっと細く開いたドアの向こうで、会ったことのない男が屈み込んでいた。

素早く中を睨むと、男は一挙動でドアを開け室内に踏み込むと碧を抱きかかえた。

「佐野 碧ちゃんだね？」

男が小声で問う。

碧は首の動きだけで答えた。

「君を連れ戻しにきた。衣笠恵美子はどこにいる？」

「あ…そこ…はやく…おねえちゃんが…」

「ここにいて」

男…真山は碧を床に横たえると、滑るように部屋の中へと踏み込んだ。

◇

目を覆わんばかりの惨状であった。

さすがの真山がつかの間、絶句して立ちすくんでしまう。

だが次の動きは素早かった。

恵美子の背後に三步で近付くと、何気なく右手を前へ差し出したのだ。

血だらけの口を開けたまま乃木秀司の動きが止まった。みるみる顔色が青黒く変わる。

真山の右手は指圧師のように握られ、突き出た親指の先が秀司の鳩尾に深々と突き刺さっていた。

秀司は笑ったままグズグズと床に崩れ落ちた。

「衣笠恵美子、だな」

血だらけの腕を差上げたまま、恵美子は答えなかった。

「彼が乃木秀司か。何があった？」

「…」

「答えたくないならいい。あの子は連れてゆく、君を警察に渡すかどうかは僕の依頼主しだいだ」

手近な救急箱をとり、真山が包帯を傷に巻いてゆく間も恵美子は呆けたように為すがままにされていた。

「これでいい。止血はしたが酷い傷だ。早く医者に見せたほうがいい。いくぞ」

「駄目、思い出してくれたのよやっ！　どんなになったって、絶対においていかないっ！！」

無事なほうの腕で真山を突き飛ばすと、恵美子はうずくまる秀司に覆い被さった。

下から睨みあげる目に尋常でない光が点っていた。

真山は左手を、再びあの指圧のような形…柔術で用いる当身用の拳形で、外傷を与えずに相手の動きを封じるのに使う…に握ると、冷たい目で恵美子を見下ろした。

「理由はどうあれ君は誘拐犯だ。そしてあと少しで傷害罪、下手をすれば殺人罪にもなりかねなかった。あんな小さな子に危険な行為を強要した責任はとってもらおうぞ」

「…何がわかるのよ…」

「？」

「探偵なんかに何がわかるってのよ！　わたしが何故、どうして碧ちゃんを連れ出さなければならなかったか、ここで何をやってたか、あなたなんかに判る訳がない！　どうせ金だけ貰って野良犬みたいにそこらじゅう嗅ぎ回ってたんでしょが！」

「精神的に未熟な子供のサイコインは危険だ、心には光もあれば闇もある…九十九はそう言っていたよ」

冷たい笑みを浮かべる真山の言葉に、恵美子が目を大きく見開いた。

「…あなた…だれなの…」

「僕は真山。九十九君とは古い付き合いでね」

「九十九先生…の？…」

「彼の兄弟子、と言えいいか。跡継ぎは僕かアイツだとよく言われたもんだ。もっとも僕はとっとと就職し、アイツも身体より心に興味があるとかで精神科医を志しちまったんで、結局、僕らのいた道場は潰れてしまったがな」

真山がずっと屈み込んだ。

「お喋りは終わりだ。おとなしく僕と来るかい？　このありさまでは、彼も九十九の所に連れてゆかねばならないだろう。どのみち君一人の手には余る」

「わたし…わたしは…」

恵美子が返事に詰まった

「時間が無い。佐野碧も見たとこ危険な状態だ、嫌なら手荒にやらせてもらうぞ」

左の拳を腰に引き付け、刺すような声で真山が促した。
そのときだった。

うごあああああああー！

悶絶していた筈の秀司が飛び掛ってきた。

「くっ！」

恵美子に注意を向けていた真山は不意をつかれ押し倒された。
首筋に咬みついてこようとする頭を必死に下から押さえる。凄い力だった。
病的な瘦身の何処から湧いてくるのか判らぬ狂的な力で秀司は真山を組み敷き、黄色い歯をがちがちいわせて喰いつこうとしてくる。恐怖の咬みつきを防ぐのに精一杯の真山は、そのまま秀司ともつれ合い床を転げ回った。

！！

立ち上がった恵美子が、部屋の外へと走り出てゆくのが見えた。

逃げる気か！？

真山は、いちかばちか左腕を突き出した。
涎を吹き散らしながら秀司がそれに喰らいつく。
瞬間、開いた右手の指で撫でるように秀司の目を払った。
視界を奪われた秀司の動きが止まる。
抱きしめようとするかのように、真山の両手が左右に大きく開いた。

パン！

掌が頭を挟み込むように打ちつけられると、秀司がどうと真山の上に崩れ落ちた。

八葉（はちよう）の打ち

鼓膜を破り脳に衝撃を与え、一瞬で相手を倒す技であった。

ぐったりともたれかかる身体の下から這い出してきた真山は、荒い息を整えながら足元を見下ろした。
秀司は緩慢な動作で、それでも起き上がろうともがいていた。

こいつをくらっても動けるのか…

人間離れした狂気のタフネスは、真山ですら背筋が薄ら寒くなるものであった。

◇

部屋の入口に、碧を抱きかかえた恵美子が立っていた。

「今よ！ 今ならもう一度潜れる、さあ！」

腕の中の小さな身体を二度、三度と揺さぶる。

「お願い、これが最後よ！ 秀司さんを連れ戻して！ あなたしかいないのよ！！」

「…よせ…」

腕の咬み傷を押さえながら真山が言った。

「まだ判らないのか。よく見ろ、その男も見てみる！ 見るんだっ！！」

立ち上がれずに床でのたくっている秀司を指差した。

「アンタがやってる事はな、とうの昔に壊れちまった男を今度こそどうしようもない程ぶっ壊す為に小さな女の子を壊そうとしている、そういう事なんだよ。何処にも、誰にも救いなんか無い」

「嘘。そんなの嘘よ。あなたが邪魔しなければ…この日のために私は生きてきたの！ 失くしたものを取り戻そうとしちゃいけないっていうの！！ あなたにそれを邪魔する権利があるっていうの！！」

「アンタは失敗した。これ以上は無駄だ」

「無駄かどうかやってみればいい…」

恵美子の目に、もう理性の光は無かった。

腕を押えていた真山の右手が下に降りた。

さっきとは違う形に握られる。

強く握られた拳の真ん中から、中指の第二関節が鋭角に飛び出していた。

中立（なかだて）一本拳。急所を攻め『殺す』為の拳形。

真山の表情から、拭ったように激情が消えていた。

「…狂った元婚約者に肉を喰われてもまだ現実を直視出来ず、犠牲者を増やそうとしている。もう何処までいってもアンタに救いは無い。あるのは埋められぬ自己満足だけだ。今すぐその娘を離せ。離さないなら、僕がここで終わらせる」

能面のような顔で、静かに真山が告げた。

血走った目で素早く辺りを見回した恵美子は、柵の上に置いてあった鋏をひっ掴んだ。

真山はもう何も言わなかった。

ただ滑るように距離を詰める。

鋏が真っ直ぐに突き出された。

半身を捻ってかわした真山の拳が、躊躇い無く恵美子の顔面にめり込んだ。

………

…その声がなければ、間違いなくそうなっていたであろう。

「真山さんっ！」

聞き覚えのある叫び声が、真山の拳を止めた。

「殉くん…」

堀川殉が、入口からこちらを見ていた。

第三十九章

「真山さん…やめて、やっちゃダメだ…」

腕を吊り松葉杖をついた殉は、殆どミイラ男のような姿で傍らの柴田刑事に支えられていた。

「色々と面白い話を聞かせてもらったぜ。誘拐、傷害、児童虐待。所轄の連中もおっつけやって来る、観念しなネエチヤン」

柴田が伝法な口調で言い放つ。

恵美子の手から鋏が落ちると、眉間で止まっている真山の拳を擦り抜けるように、碧を抱えたままズルズルとへたり込んだ。

拳を降ろした真山が、恵美子の腕の中から碧を引き離し抱き上げた。

殉の感じた彼の気配は何処か悲し気であった。

「あんたが北山の相棒か。野郎にゃいい情報をもたらったぜ、礼をいわなきゃな。何処にいる？」

「刑事ですか？ あなたは」

「××署の柴田だ。ま、今は休暇中だがな」

「北さんは、さらわれた加夏子ちゃんを助けに行きましたよ。彼女の居場所はこの女が知っている筈です」

碧を横抱きにしたまま、真山は二人の前まで歩いてきた。

「無茶したな、殉くん。寝てなきゃ駄目じゃないか」

「胸騒ぎが止まらなくて。僕を訊ねてきた柴田さんに御願いしたんです」

「まあいいさ。この子を連れて病院に戻りなさい。僕はまだやる事がある」

殉に告げると、真山は柴田へと向き直った。

「この子達を頼みます。あの二人は…警察に知られてしまっっては引き渡さざるを得ません。不本意ですが」

「アンタ北山の野郎と違って話が出来るらしいな。まっ、こういう事はお上に任せておきな」

歪んだ笑いを浮かべた柴田が答えた。

碧をそっと床に横たえた真山は、呆然と座り込む恵美子に声を掛けた。

「君が雇った連中のアジトは何処だ？」

「…島…瀬戸内の…母が知ってる…」

力無く恵美子が呟いた。

「ありがとう」

そう言うと、真山はすっと立ち上がり部屋の出口へとそのまま歩き去ろうとした。

「真山さん」

殉が呼び止めた。

「なんだ」

「兄と会ったんですね。聞こえたんです、『声』が」

隣の柴田がぎろりと殉を睨んだ。

「隠せないんですね、闘っている時は。いろんな『声』が聞こえましたよ」

「…そうか…」

帰ったら話そう。

そう言って真山は背を向けた。

◇

同じ時間。別の場所。

脱出行を続ける二人。背負われた加夏子と、岩肌を這いずる北山。

残りはあと15mもない筈であったが、暗闇の崖は永遠に奈落へと続いているようであった。

降りれば降りる程、傾斜は急になってきていた。

鼻をつままれても判らぬ程の闇が手がかり一つ、足がかり一つまで隠している。

僅かに残されたザイルの残骸もこれでは何の役にも立たなかった

北山の荒い息づかいは背中に加夏子まで上下させていた。

「北山さん」

「…こえ…かけんな…」

北山は、今はもう落ちぬようにへばり付いているのが精一杯であった。

「こりゃ…ヤバいぜ…」

「北山さん！ ガンバって！！」

「んなところで…くたばって…たまる…！？」

焦って出した足が岩角を捉えられず、ズルズルと二人の身体が絶壁を滑りだした。

「きゃあああ～！！」

うおおおお～るせえぞくらはあああ～！！！！

北山は両手の指を岩肌に叩きつけ、ガリガリと流れる壁面に食い込ませた。

顔面も押しつける。がきつという音と共に落下が止まった。

きつく目を閉じてしがみついていた加夏子は、恐るおそる目を開けてみた。
止まっている。奇跡のようだった。

「き…た…やま…さん…？」
「…ふぁんら」

北山は突き出た岩に噛みついていた。

「ほえたへ…へへ…ほうは、ふへえはほう」
「何いってるかわかんないよう」

言いながら加夏子は、首に回していた手を上に伸ばして岩肌を探った。
指先に触れた突起をつかみ精一杯身体を持ち上げる。

「今のうちにどっかつかんで、早く！」

少しの間ガサガサと手がかりを探っていた北山は、やがてしっかりとホールドを固め顔を起こした。

「ってて、チクショウ、歯が折れちゃった」
「大丈夫？ 痛い？」
「いいオトコが台無しだぜ」
「よかった、大丈夫みたいね」
「あのなぁ…」

擦り傷だらけの顔をしかめながら北山は下を見た。
かすかだが岩場が見える。

「下まであと6～7mってところか」
「まだそんなにあるんだ…」
「この下は真っ直ぐに落ち込んでる。これ以上は降りられねえな」
「…」
「いいか、よく聞け。前に手をまわして、ベルトをほどけ」
「えっ？」
「やるんだ、俺を信じろ」

ベルトが解けた刹那、北山は身を捻って加夏子を抱くと岩壁を蹴った。
二人の身体が虚空に吸い込まれていった。

◇

しばらく気を失っていたようだった。
身体のあちこちがズキズキと痛んだ。すり傷に打撲、きっと服も大変な事になってるだろう。

そうだ、ブラウスやぶいちゃったんだ
やだ、ジャンパーだけなんて

なんでやぶいちゃったんだっけ？

あれ？ なんで？

ここどこ？

………

……

！？

あさってのほうを彷徨っていた思考が焦点を結び、加夏子はがばっと跳ね起きた。
身体じゅうを触りまくる。
痛いことは痛い、特に大きな怪我はしていないようだった。

「そうだ、北山さんが…北山さんっ！」

身を振って辺りを見回すと、すぐ近くに倒れている人影がひとつ。
夢中になって這い寄り、横向きに倒れ込んでいる身体を力一杯揺さぶった。

「北山さん！ きたやまさんっ！！」
「………」
「しっかりして！ 目え開けて！！」
「………ぎゃあぎゃあうるせえなあ、生きてるよ、ちゃんと………」

物憂げに仰向けになると北山がゆっくり起きあがった。だがすぐに顔を歪める。

「生きてた、よかった、アタシでっきり死んじゃったんじゃないかって」
「そんなに殺したいか。嫌われてるな俺は」
「だって極ワルおやじじゃん」

半べそをかきながら悪態を言う加夏子の頭をがしがしと撫で、北山は精一杯笑ってみせた。

「よく助かったね、わたしたち」
「クッション様に感謝しろよ」

冗談を口にしてはみたが、北山は内心、冷や汗を流していた。
彼の右足は奇妙な角度で折れ曲がっていた。

第四十章

ライターの薄明かりの向こう、ぼっかりとあいた洞窟の奥に鬱蒼と漂う船が一隻。
まるで幽霊船にいざなわれるようだった。

服の切れ端で、その辺りの流木を添え木変わりにギチギチに足へ縛りつけた北山が、杭ほどもある木を杖に、加夏子を背負って洞窟を奥へと向かっていた。

虫の歩みより遅い。

目の前の首筋を伝う汗に混じる異様な臭いを、少し前から加夏子はいかいでいた。

怪我人、救急患者…

命に危険の迫る者が共通して漂わせるあの臭い。

病院で散々それに接してきた彼女にはあまりにも明白な兆しであった。

「降ろして。わたしを降ろして、ひとりでいって」

「…」

「北山さん、もういいよ！ 北山さんだけなら何とか逃げられる、御願ひ、もう止めて！！」

「……」

足が止まった。

加夏子がかざしたライターの灯りに照らされ、ゆっくりと振り返った彼の顔は嫌な臭いのする汗でびっしょりと濡れていた。10年もダイエットしたかのように僅かな時間で頬がげっそりと痩けている。

だが。

その幽鬼のような顔が口元をつり上げた。

岩にへばりついた苔のように、とてつもなくしびとくふてぶてしい笑みが黒い横顔に浮かんできた。

「…れ…をだ…と…おも…てる…」

「なに？ なに言ってるかわかんないよ」

「おれは…ばく…だ…」

「??？」

「おれは…ランニングバックだっ！！！」

船までの残り6m程を北山はいきなり走り出した。

文字通りの疾走、折れた骨が皮膚を突き破り血を噴き出していることなどお構いなしの大爆走であった。

船の脇腹に身体ごとぶつかると一気に舷側をわし掴みにする。

額は木造の船にめり込んでいた。

「のぼ…れ…」

「え？」

「登れ…はしごだと思って…いけ…早くっ！」

加夏子は北山の背中を這い上がると、船ペリを越えて向こう側へと落ちた。

腹の底から絞り出すようなうめき声と共に、北山もまた腕の力だけで身体を持ち上げ船内に転がり込んできた。精魂尽きてその場に大の字になる。

「すごい…ひと、なんだね。北山さんって」

ややあって、激しい呼吸を際限無く繰り返す北山を横座りに見下ろしながら呟いた加夏子の声には、怯えと感動が混じり合っていた。

「学生時代はよお…よく走ったぜ、飽きもせず血反吐吐くまで。腕、足、肋骨。骨折なんざ日常茶飯事さ。デカブツどもと来る日も来る日も潰しつぶされ…あの頃に比べりゃこんな怪我…」

大の字のまま、北山は口だけ動かしていた。

「ランニングなんとかって、なに」

「ランニングバック。アメフトのポジションだ」

「アメリカン…フットボール？」

「よく知ってるな」

「パパが昔、アメリカンフットボールの選手だったって。酔っぱらってよく自慢してた」

「ポジションは」

「確か…フルバック…だったかな？」

「そりゃいいガタイしてるだろうな」

「象みたい。おっきくてフカフカしてる」

「ハハ…なら足は俺のほうが上だな」

「北山さん、ほんっと意地っ張りだよ。パパとまで張り合っちゃうなんて」

「ああ。俺は負けるのが大嫌いだ。試合…競争相手…喧嘩…怪我…家族の死。どれもこれも負けたくねえ、絶対に」

少しでも気が紛れたらいいと、薄明かりでもハッキリ判る死相を浮かべた北山の話聞いていた加夏子は、彼の最後の言葉に胸をつかれ口をつぐんだ。

「なあ… 人はいつか死ぬ。こんな当たり前の事はねえ。いちいちガタガタ騒ぐことなんてないんだ。とにかく全力でぶつかって、それでどうなるかなんて俺達考える事じゃねえさ。ぶつかった後の事は、ぶつかってから考えりゃいい…俺はそうやって今日まで来た」

「北山さん…」

「忘れた事なんか一度も無い。今でもあいつらはちゃんと生きてる。目えつぶればすぐに会えるぜ。俺はまたあいつらに会う為、必ず生きて還る。くたばって…たまるか」

震える腕を持ち上げ、北山は船尾の方を指さした。

「あそこに…操舵室がある…這ってって、スターターを捜せ。エンジンをかけるボタンだ。身体を起こせりゃ届く筈だ。おれは…錨をはずす。いけ」

言うと、北山はゆっくりと俯せになって船首の方へと這いずり始めた。

加夏子も同じように這いずりながら船尾を目指した。背後に北山の荒い息が響く。

くたばるか

くたばんねえぞ

チクショウ…

途切れ途切れの、でもひどく力強い呟きを背に、加夏子は操舵室を目指し懸命に這っていった。



どこまでが海か空か判らぬ漆黒の空間を船は走っていた。

舵は加夏子が操っていた。

椅子に座り、舵輪とスロットルレバーで上体を支えるようにして、食い入るように前を睨んでいた。
目指すは小さな灯り。そこにある港。

狭い瀬戸内の海。

夜間である事を差し引いても、普通なら程なく陸地に辿り着ける筈であった。
だが蛇行を繰り返す船は陸へ近付くことすらままならなかった。

追跡する船が、二艘。
追っ手だ。

エンジン音を圧倒するようだった北山の指示が、少しづつ小さく、聴き取り辛くなってきていた。
加夏子はもう無我夢中で舵を操り続けていた。

「あと少しで陸よ、しっかりして！ 北山さんっ！！」

怒鳴りながら大きく左に舵を切る。
小さな漁船が横っ面を張られたようにがくんと傾き進路を曲げる。
飛沫が操舵室まで飛んできた。
北山の返事は無い。

後方から追いかけてきた二隻は、スピードを増して加夏子達の船に並ぼうとしていた。
一隻が進路の内側に回り込んでくる。前へ出てこちらの船足を止めようというのだろう。
20分そこの海上での鬼ごっこが、もう1時間も続いているように加夏子は感じた。

このままじゃだめだ…
いちかばちか
勇気を出せ！

舵を大きく右へ切ると、当て舵をしながら加夏子は船を直進させようとした。
船を操る要領はこの何分かでだいぶ判ってきていた。
スロットルを思い切り前へ突き出す。
船が蹴飛ばされたように加速した。

みるみるうちに黒い船影が迫る。
その影に、港の小さな灯台が見えた。

「いっけえええええー！！！」

舵に噛みつく勢いで加夏子が叫んだ。

ぱんぱんと小さな音が響く。

銃声だと気付く間もなく、船は追っ手のそれと斜めに舷側をぶつけ、酷い衝撃と共にはじき飛ばした。

ひゅんと銃弾が頭上を掠めた。

一発が操舵室のガラスに命中し粉々に弾き飛ばす。

首を縮めて、加夏子はスロットルを力一杯押し続けた。

当たるもんか

あたるもんか！

あたるもんかあー！！

激しく揺れていた灯台がみるみるうちに近付き、激しい衝撃と共に船が浅瀬に乗り上げた。

そのままズルズルと進み傾いて止まる。

防波堤がうっすらと、手の届きそうな所に見えた。

第四十一章

衝撃とともに加夏子は操舵席から放り出された。
舷側に打ちつけられたのも構わず、がばっと身を起こす。

舳先に倒れこんだ人影が見えた。
夢中で這い寄ろうとすると、船の床がぬるりと滑った。

血溜まりに浸かった北山は目を開けたまま動かない。

「北山さんっ！ ついたよ、しっかりして！ なんかいって！！」

身体をゆすり、頬を張ってみたが反応が無い。
どう見ても死んでいた。

仰向けに転がし北山の胸板に耳を当てた。
微かに鼓動が聞こえる。
わずかだが胸も上下していた。

いきてる
息してる
まだ助かる

そのまま起き上がり、舷側のへりに手をかけて下を覗き込んだ。
小さくせわしない波が座礁した船の脇腹をひっきりなしに叩いている。
暫く、波の欠片を眺めていた。

いく

眩き、暗闇の向こう側へ身を躍らせた。

◇

たいしたことない距離が無限のように思えた。
もう何度も溺れかけ、海水をしこたま飲んでいて。
気持ち悪くて吐きそうになりながら、それでも浜らしき方向へ水をかく。
すぐ脇に防波堤が続いていたが、そこへ這い上がる腕力も足も無かった。
張りつめていた気が、ベキベキと音を立てて折れかかっていた。

もうヤダ、もういけない
誰か助けて
御願ひ…おねがい…

いいや
もうやめた
むりだよ、こんなの

しんじゃったほうがいい…

あと、いっかい
あとひとかきしたら、やめる
ゴメンね、パパ、ママ
ヨシオ、北山さん

ジュン…

何かか指先を掠めた。
触ろうとして、また波に飲まれ盛大に海水を飲んでしまった。

砂
すなだ

もみくちやにされながら、それでも必死に水をかき頭をあげて前を見た。
海岸がすぐそこにあった。

◇

気が付くと、浜にべったりと横たわっていた。
不意に吐き気に襲われ、俯せになり凄い量の海水を吐いた。
それで頭がしゃっきりした。

沖へと目を向けると、様子を伺っていた二艘の船がこちらへ近付いてきていた。
男が一人、海へ入ってロープを引きずっている。

つかまる？
冗談じゃない！
みんなを助けなきゃ…アタシがいかなきゃ…

必死に砂を掴み前へと這いずる。

もっと…
もっとはやく！
もっともっとはやくっ！！
おそいぞクラァ～！！！！！！

加夏子は気がついていなかった。
自分がいつの間にか、四つ足で砂を蹴っていた事を。

◇

防波堤へと続く波乗り道路へ鋭くハンドルを切り込んだ真山は、数秒も経たずブレーキを蹴り込んだ。

海上で不規則な動きを繰り返していた小さな漁灯を横目で追いながらここまで来た。

先頭を走っていた灯りの1つが沖へと伸びた防波堤の端にぶつかるように止まった時、猛然とスピードを上げて突っ込んでいったのだ。

さえない色のブルーバードが、低く茂った草むらに頭を埋めて止まる。

安全ベルトを跳ね上げ、蹴り飛ばすようにドアを開けた。

凸凹に前輪をとられ、つんのめるように傾いた車のドアは引っかかって半分しか開かなかったが、飛び越えるように外へ出た真山はすぐさま走り出した。

朧気に船の形が見えた。

北山が乗っている事を真山は疑わなかった。

あんな無茶な操船をこんな真っ暗闇でやらかすのは一人しかいない

それだけの危険を犯すのなら、あの船に清水加夏子が一緒に乗っている可能性が高い
急がなきゃ

草地在砂に変わった。

足が酷く重く感じる。

後から来たもう一艘が、浜の近くまで寄せてきて男を一人降ろすのが見えた。

恐ろしく遠く感じていた距離が、ぐんぐんと縮まってきていた。

船上で棒のようなものを構える姿まで見える。

銃か！？

膝を折り砂浜に伏せようとした刹那、黒い塊がもの凄い勢いでぶつかってきた。

さすがの真山が、へたり込むように砂地へ尻を落とした。

「…真山…さん？」

塊が声を発した。

「君は…加夏子ちゃんか？」

「ヨシオが…北山さんが…早く、はやくしないとっ！」

「きみ…あ…足…アシ…」

恐らくは切羽詰まった状況にも関わらず、真山は呆けたように加夏子の足を指さしていた。

挑みかかるように真山にしがみついた加夏子は、腕を、肩を掴んでにじり上がり、座り込んだ真山の視線の上へと身体を
ずりあげた。真山を見下ろし吠えるように訴えかける。

何度も、何度も。

「早く、はやく！ はやくうー！！」

「わかった！ 判ったから落ち着け！！」

なだめる彼の耳元を何かがかすめた。

パン

間の抜けた炸裂音がすぐ後に続いた。

銃声に我を取り戻した真山は、半立ちの加夏子を抱え倒すように砂浜へ身を伏せ激しく言い放った。

ここにいろ、動くなよ！

◇

海水が、真山から神速の足を奪っていた。

腰近くまで海につかりながら、重い身体をしゃにむに近い方の船へと押し出していった。

飛んでくる弾丸は、身体を掠めたかと思うとひどく遠くに水飛沫を立てた。

あたったら運が悪いと思え

すぐ目の前で傾いて停まっている船にたどり着く、ただそれだけを真山は念じ続けた。

幸い追っ手とは反対側にかしいでいる船の横腹に手がかかる所まで来ると、彼は舷側からズルズルと這い上がった。姿勢を低くして追っ手の方を伺う。

男が更に数人、船から降りてくるのが見えた。

膝立ちに近い姿勢のまま、真山は素早く船首へと回り込んだ。反対側の船縁近くに人影が1つ。

横たわったままピクリとも動かない。

「北さん！ 真山です、やられたんですか？ 北さんっ！！」

返事はない。

「北さん、しっかりして下さい！ きた…さ…！？」

虚ろに開かれた目が真山を見ていた。

何も見えていない目であった。

空気がコンクリートと化した。

自分の息が止まっているのを真山は不思議な気分で感じていた。

まただ

また、死んだ

おれはどれだけ死体を視りゃいいんだ

おれは…おれは…

派手な水音を立てて男達が近寄ってきた。

手に手に棍棒やらナイフやらを握っている。

真山は棒立ちになっていた。

「おうクラッ！ てめえは何だ！ おんなをどこやった！ ああ！？！」

真っ先に船へ上がってきた大柄な男が、右手の手斧を振りながら肩をいからせ真山に詰め寄った。

ゆっくりと真山が顔をあげた。

上背はそこそだが細身の彼を『たいしたことない相手』と見てくっつかかった男は、一生を後悔して過ごす羽目になった。

人差し指と中指が、眼球へ。

左の低い蹴りが、右膝関節へ。

右手首が奇妙な形に折り畳まれ、首にぐるりと巻かれる。

そのまま顔面から床へ。

何が起こったか判らぬまま、男は残りの人生を病院のベッドで過ごす不具者に一瞬で成り果てた。

後から上がってきた破落戸どもが怯む。

暗闇の底で、真山の双眼が怪しく光っていた。

◇

海の上では、怒号も悲鳴も煙のようにかき消される。

一方的な虐殺が終わるまで、幾らも時間はかからなかった。

第四十二章

真山が走り去ってからしばらくして、加夏子は浜から身体を起こした。

銃声がして押し倒されて、砂に顔を埋め息を潜めているうちにアドレナリンは潮が引くように冷め、自分を見つめる余裕が生まれた。

暗い沖へ目をやる。

傾いた船。少し離れた所にもう一艘の影。

他には何も見えない。真山も、追ってきた連中の姿も。

浜風と潮騒の音だけが辺りを埋め尽くしていた。

ふらりと立ってみた。

立って初めて、自分が立っている事に気がついた。

「たってる…うそ…」

足を踏みだそうとして派手に転んだ。

まるでよちよち歩きの赤ん坊のように、足は思い通りに動いてくれなかった。

加夏子の受けた傷は脊椎の神経束を圧迫し運動機能に障害を与えていたが、骨片は手術で除去されていた。元々足自体には何の損傷も無かったのだが、彼女が受けた心の傷が、足に動くことを忘れさせていたのだ。

加夏子の主治医である九十九医師はかつて、リハビリトレーナーの久我に『まだ終わっていない』と告げた事があったが、それはこの事を指していたのだ。

だが今、彼女を呪縛していた心の枷は吹き飛んだ。

親しい者達の命の危急が、忘れかけていた本能を呼び覚ましたのだ。

それは覚醒の歓喜と共に叫んでいた。

たて

あるけ

はしれ

吠えろ

そして救え

と。

加夏子はもういちど立ち上がった。

一歩

二歩

三歩

引きずるように足を踏み出す。

助けたいひとのために。

たすけなければならない人達のために。

そして自分の…

波打ち際が少しづつ近付いてきた。
向こうから何かがやってくる。
ザブザブと音を立てて。

追っ手かもしれないなどと加夏子は考えなかった。
ただただ憑かれたように海へと歩き続ける。
前へ。ただ、前へ。

音が形を成してきた。
ひと…誰かを背負った人影。
真山だった。北山をおぶっていた。

「真山さんっ！」
「…しんじまった…北さんが…死んじまったよお…」

まるで幼な児のように泣きじゃくりながら真山は浜へとあがってきた。

「ちがうっ！ ちがうよ、まだ生きてる！ よく見てっ！！」

棒のように立ち尽くす真山に、必死の形相の加夏子がしがみついた。

「生きてるよっ！！」

◇

翌日の午後。
痩せぎすの男が、潮の香りのきつい風を巻くように病院前の坂を登っていた。
幾度かハンカチで額を押さえると、丸眼鏡の奥から茫々としたまなざしを白い建物へと向けた。

やれやれ、やっと着いたか…

だるそうに呟いた男は、よろよろと病院の入り口へ向け歩きだした。

◇

同じ日。
尾道市民病院。3 X X号室。
ドアを空けて顔を出したのは真山と柴田刑事だった。

「意識が戻らなきゃ事情聴取って訳にはいかねえか」
「開放性骨折で出血多量、縛った足は敗血症になりかかっていた。他にも大小の骨折と全身打撲…よく生きてたものです」

どこか呆れた口調で、真山は隣りを歩く柴田に言葉を返した。

「まあなんだ、あんなゴキブリおやじでも生きててもらわにゃ役に立たねえからな。何にせよ、まずはメデタシってとこか」

「フフ…」

「なんでい、気持ち悪い笑い声だしやがって」

ギョ口目を剥いて柴田が真山を睨みつけた。

「柴田さん、何だかんだ言っても北さんの事、心配だったんじゃないですか」

「あん？」

「ICUの前で洗い顔してウロウロしてましたよね」

「フン、俺も聞いたぜ、あのお嬢ちゃんからよ。お前ガキみたいにオィオィ泣きながら野郎おぶってきたんだってな」

「それは…その…」

カウンターを喰らった真山が口籠もる。

「野郎の寝言、聞いたか」

「？」

「女房と子供の名前だ。あれは」

廊下の角まで来ても柴田は曲がらず、正面の明かり取りの窓に背を向け寄りかかった。

「俺がまだペーペーだった頃の話だ。酷い事故だったよ。首都高での多重衝突。渋滞のケツに大型トレーラーが突っ込んで10台が炎上。被害者は誰も助からなかった。アイツの女房と娘も、な」

天井を見上げた柴田は、誰にともなく呟いた。

「野郎、何度も何度も警察に来て『犯人を出せ、ブチ殺してやるっ！』って吠えてたよ。手がつけれなくて留置所に放り込んだら、奴、鉄格子ひん曲げやがった。怖かったぜ、あん時はよ」

ひきつった顔を真山に向けた。

少しして、笑っているのだと真山は気がついた。

「青かったんだな俺も。あのオッサンとはその頃からの腐れ縁さ」

その時、二人に男が歩み寄ってきた。

「どうやらケリはついたようですね、先輩」

「おまえ…」

真山が目を見開いた。

九十九医師は穏やかな笑顔を浮かべながら真山と柴田に歩み寄り、軽く会釈をした。

「来てたのか」

「先輩を信用してなかった訳じゃないですからね」

「クライアントは大事にするさ」

真山も軽く微笑みながら、窓に寄りかかっている柴田を紹介した。

「病院で一度、お見かけしましたよ」

「あんた、医者か？」

「清水加夏子の主治医です」

「ほう、あのお嬢ちゃんのね」

値踏みするように、柴田は九十九の爪先から脳天辺まで視線で嘗め回した。

九十九は砕けた口調などおくびにも出さず、淡々と語り出した。

「幾つか病室を回ってきましたよ。堀川君の怪我はそれなりに酷いですが、ちゃんと直るものばかりです。移動出来るようになったら東京で静養させますよ、もっとも彼の場合は他に問題があるのですが…」

微かに眉をしかめた真山の脇からギョロ目を剥いた柴田が口を出そうとしたが、九十九は無視して言葉を続けた。

「あ の大きな子、清水加夏子はヨシオと呼んでいましたが、大量の血液を失った筈なのにピンシャンしています。輸血は膨大でしたがね。北山さんもタフですが、彼 の場合は異常です。ある種の『先祖返り』みたいなものかも知れません。今は麻酔で眠っていますが、あの巨体で14歳とは…」

少し呆れたように頭を一つ掻いた。

「佐野碧は極度に衰弱していて、予断を許さない状態です。何とか持ちこたえて欲しいですが、乃木秀司は今の所、手の付けようがありません。彼の家族の了解が得られれば東京へ転院させようかと考えています」

「彼を、東京へ？」

ちょっと驚いて、真山は九十九を見た。

「ええ。経緯はどうあれ、彼はアルツハイマー患者が辿る病状の逆へと向かってる。今は見当も付きませんが、何らかの治療方法を確立出来るかも知れません」

「あの女が聞いたら泣いて喜びそうだな。奴はどうした？ 怪我が酷くてまだ取り調べも出来ないそうじゃないか」

柴田が皮肉な調子で口を挟んだ。

「…衣笠君、ですか…」

九十九が眉をしかめ、ゆっくりとロイド眼鏡を外す。

畳んだ眼鏡を縦に握り反対側の肩口をスツとなぞった。

「看護師は続けられないでしょうね」

第四十三章

加夏子は、碧の眠るベッドの脇にずっと座っていた。

一つしかない手を握り、もう片方の手で額や頬を拭っていた。
酸素マスク越しの呼吸が荒く、か細く、波のように繰り返される。
祈るしかなかった。

もう何度、殉と碧の病室を行き来したか。
おかげで足が少しは動くようにはなったが、杖をつきながら歩く彼女に歩行の喜びはなかった。

みどりちゃん
みどりちゃん
しっかりして
おねえちゃんがついてるから

お願い、もう一度わたしに笑いかけて
いつものように抱きついて
大丈夫だから

殉も心配だったが、ここの医者から怪我はちゃんと直ると聞かされ、少しだけ安心出来た。
その分、気持ちは容態の悪い碧へとどうしても向いてしまう。
目の前であえいでいるのを見れば尚更だった。

ふと背後に気配を感じて振り向いた。

病院服。ぼさぼさの髪。悲しげな眼差し。
戸口にもたれかかった反対側の袖には中身が無かった。

「…みどりちゃん…」

衣笠恵美子が、よろよるとベッドの方へと歩いてきた。

「わたしがこの子を…こんな目に…」

残った手を、すぐるように碧へ差し出した。

ばしっ

その手をカ一杯払った加夏子は鬼のような目で恵美子を睨んだ。

「こうなる事はわかってたでしょ、今更なによっ！ 良心が痛むなんて言わないでよねっ！！ アナタ自分の為にこの子を犠牲にしたのよ！！ こんな小さい…こんない子を…ふざけるなあっ！！！」

がばと立ち上がり胸ぐらを握りしめた加夏子は、振り壊すように恵美子を揺さぶった。

「腕が痛い？ そうだよ、人の痛みなんかより自分の腕が、自分の恋人が大事だよ、その為には他人がどうなろうと知ったこっちゃないでしょ？！ 彼氏に腕を喰いちぎられた気分はどうよ、気持ちいいよね？ いいよね！？ ざまあみろこのヤロオー！！！」

振り回すだけに飽きたらず、加夏子は恵美子の身体を壁に叩きつけた。
何度も、なんども。

「なにが看護師よ！ なにがりハビリよ！ あんたサイテーだっ！！ どっか行って死ねっ、しんじゃえっ！！」

駆けつけた真山達が二人を引き離すまで、恵美子はなすがままにされていた。

◇

出歩いては駄目ですよと、恵美子の身体をベッドに横たえながら九十九は言った。
激昂した加夏子から三人がかりで彼女を引き剥がし、ようやく自分の病室まで連れてきたところであった。柴田と真山は、加夏子と共に佐野碧の病室に残っていた。

「…君の方が早く気付くとはね。君があの子を連れて姿を消したのは丁度、友人から君について相談されていた時だった。アイツ心配してたぜ、君のこと」

九十九が若い医師の名を口にしても、恵美子はただ無表情に天井を見上げるだけであった。

「佐野碧と堀川殉、この二人に同じ能力があると判った時点で君にも監視を付けるべきだった。君にはファンが多いようだからね、久我さんあたりなら喜んで協力してくれただろうよ。」

乾いた目で見下ろしていた九十九が、恵美子の横たわるベッドの端に腰掛けた。

「今、君には何も無い。君はしくじった。リスクを負い、法に背き、たぶん自分の中にあるものにも背いた。その結果がこれだ。成果も無い。満足感も無い。後悔と慚愧と無力感に苛まれている筈さ。違うかい？」

恵美子は瞬きもせず天井を見続けた。

「これから君にどんな罰が与えられるのか、医者である僕には判らないし興味も無い。腕一本喪う事で、君は十分に罪を償ったと思えなくもない。だがそんな事はたぶん、どうでもいい事なんだろう。大事なのは二つ。君は看護師から、手帳の世話にならなきゃいけない身体障害者になったって事。そしてもう一つ…乃木修司の症状に日本屈指の精神科医が興味を持ったって事」

瞬かない瞳が、ゆっくりと九十九を見た。

「…つまり、この僕が、さ…」

恵美子の目を真っ直ぐに見つめながら、九十九は初めて、染み入るような笑顔を浮かべた。

「彼を東京へ連れてゆく。僕に出来るのは、もうそれだけだ」

それだけ言うと、九十九はじっと恵美子を見つめ、それ以上何かを口にすることは無かった。

ただ静かに恵美子の髪を撫でた。
何度も何度も、繰り返し、繰り返し飽くことなく。

いつしか、恵美子の目尻から透き通った光がいく筋も流れ落ち、ベットの縁に吸い込まれていった。
止まらず、ただ静かに。

◇

やあ〜れやれっと
さすがにチト疲れたなあ

病院の正面玄関を背に、転がるように沈みつつある夕日を眺めながら九十九は坂を下っていた。
尾道に着いて早々、加夏子や殉、それ以外の病人・怪我人を何人も見て回り、地元警察の簡単な事情聴取…とは言え、色々な点をうまくぼかして答えねばならなかったが…に対応し、残してきた仕事の為の連絡を幾つもとり、院長への現状報告を行い、今夜の宿を確保し、等々。
デスクワークの多い彼にとっては骨の折れる一日であった。

これ全部真山さんに押しつけたら、三日としないで発狂してただろうな
ああ見えて先輩、けっこう面倒臭がり屋だし

昔からこまごました事は僕の方が得意だったっけ
道場を継がなかったのだから結局、他人に教えるのがまどろっこしくてやられてなかったからだし
でもまあ、やりたいこと優先させてとっとと辞めた僕も先輩と同類ってとこか

さてと、今夜の食事はどうするかな…

海が近い街の魚料理は旨いのだろうかなどとボンヤリ考えながら猫背気味にふらふら歩いていた九十九の足が、街灯の下を過ぎた所でピタリと止まった。
飄々とした顔つきが一瞬で別人に変わる。

気配。
感じた事の無い異様な気配が肌を撫で上げた。

こちらに向けられたものではなかった。
例えるなら、移動中の猛獣に森の中ですれ違ったような感覚。
否応無しに生存本能が悲鳴をあげていた。

何かを見た訳でもなく気配の漂ってくる方向へ構えたのは、かつて真山と共に××道場の竜虎と称された九十九の非凡さ故であった。

気配が、止まった。
肌を刺す感覚が急に強くなる。
相手もこちらを認識したのだと判ると同時に、九十九の背がぐうっと伸びた。
真っ直ぐに立ち、眼鏡を取って街灯脇の薄暗がりをじっと見つめた。

……

やがて影が一つ、ゆっくりと姿を現した。

「殉の病院にいた医者か」

影が言葉を発した。

「あなたは」

「兄貴だよ」

「…堀川…烈…」

低く呟き、九十九が唾を一つ飲み込んだ。

「この薄明かりで見分けられるほど顔を晒したことはなかった筈だがな。俺を知ってるのか？」

薄い唇の端を少しだけ持ち上げ、堀川が一步近付いてきた。

目を細めた九十九の眼光が鋭くなる。

「お前、ただの医者じゃないな」

第四十四章

細身の影が、ゆっくり九十九の左へ回り込んでゆく。
猫科の猛獣が獲物の値踏みをする時のように、しなやかな弧を描いて歩く。
足音は聞こえない。

九十九は最初の位置から動かない。
堀川の動きに合わせて首だけを巡らす。
両手は身体の脇へだらりと垂らしていた。

九十九の視界一杯まで回り込んだ堀川が更に一步を踏みだそうとした時、不意に九十九が口を開いた。

「ああ～あ、そうか！」

「？」

堀川の足が止まった。

「驚きましたよ。弟さんのお見舞いに行く途中だったんですね」

身体の向きを変え堀川に正対した九十九は、先程までの表情が嘘のように満面の笑みを浮かべていた。

「いやあ、殉君から色々とおっかない人だって聞いてたもんで、緊張しちゃいましたよ」

頭を掻きながら無造作に堀川に歩み寄った。

ずっと三步の距離を下がった堀川の細い目が見開かれていた。

「おや？ どうしました」

「…その歩法、見た事がある…」

「はあ？ 何のことでしょう」

尚も近寄ろうとする九十九を鈍色の切っ先が制した。
堀川の手には巨大なククリナイフが握られていた。

「動くな。間合いを盗んだな、真山の奴とそっくりだ。あいつと知り合いか？」

「さて、何のことやら」

「とぼけるなよ。奴の技はよく知ってる。構え。身のこなし。今見せた歩法。そっくりだ」

「…」

「どうやら、思わぬ所でいい獲物に会えたようだな」

九十九はまだ微笑んでいた。
堀川が音も無く斬撃の間合いに迫ろうとした、その時。

突然、眼の前に乱舞した無数の白い影をククリナイフで薙ぎ払った堀川の前には誰も居なかった。

後ろを振り返ると、スーツケースをひっ担いだ九十九が脱兎のごとく走り去る姿があった。

もうかなりの距離を走っている。
走りながら、片方の手をひらひらと振っていた。

さいならあ～
またこんどお～

遠くなる声に舌打ちをし、堀川はナイフを背の鞆に収め道に散らばった紙片を拾った。
歓楽街に貼ってあるキャバクラやらの電話番号が書かれた紙を、顔をしかめて握りつぶす。

「とぼけた野郎だ」

東京での楽しみが増えたなと呟いた堀川は、ゆっくりと坂を登り始めた。

◇

殉は杖を突きながら玄関を出た。

真山から荒れ狂った加夏子の様子を聞かされ、矢も盾もたまらず病室を抜け出したのだった。
碧の部屋にも、ヨシオというあの大男の部屋にも彼女の姿はなかった。
外へと出てはみたものの、こんな勝手の判らない所で加夏子の行きそうな場所の見当などつきようもなかった。

あてどなく勘を働かせても、捜す相手が見つかる筈もない。
途方にくれて歩いたその先に芝の感触があった。こんもり盛り上がった向こうは、坂の下へと続いているようだった。
殉は真っ直ぐに歩いていった。

◇

夕暮れ。
赤が黒に飲み込まれようとするそのあわいに、膝を抱えた加夏子が座り込んでいた。
気配が伝わってくる。

加夏子を心の牢獄から救い出した時。
あの時も彼女は、今と同じようにうずくまっていた。
奇妙な感覚を覚えながら、殉は加夏子の背後に歩み寄っていった。

「カナ…」
「…」
「碧ちゃん、少し落ち着いたみたいだよ。何とか持ち直してくれるかもって、お医者さんも言った」
「…」
「大丈夫だよ。あの娘、強いコだもん。このままどうにかなっちゃう訳なんかないよ」
「…わたし…」
「ん？」
「わかる。衣笠さんの気持ち、すっごく判るの。わたしだって…殉を助ける為だったら、衣笠さんとおんなじこと、してたと思う…」

殉は答えなかった。

「でも…でも駄目！ 許せない！ 自分が苦しんだり苦労するならいい！ でも碧ちゃんはなんにも関係ないんだよ！ ただ殉とおんなじ力をもってるってだけだよ！ こんな目にあう理由なんてないじゃん！！ そんなの、誰かの勝手な理由じゃん！！ そんなのってワタシ！…わたし…駄目だよお…」

自分でも何を言っているか判らなくなっている加夏子の肩を、隣りに腰を降ろした殉が深く抱き込んだ。

「誰にも、どうしようもなかったんだよ。みんながみんな良かれと思って動いてた。僕たちはたぶん、それに立ち会っただけなんだよ」

「じゅん…」

加夏子が幼子のように殉に抱きついた。

その時だった。

「殉」

「にいさん」

殉の腕の中で、崩れ落ちそうだった加夏子の気配が氷のように堅くなった。

あなた…あのときの…

全身を硬直させている加夏子の隣りで、殉もまた言葉を凍りつかせていた。

「兄さん…なんで…」

問いに答えず、無表情なまま堀川は二人に歩み寄ってきた。

加夏子がいやいやをするように首を振り、座ったまま後ずさりを始めた。

がばと立ち上がり走って逃げ出そうとする。

「動くな」

威圧的でもなく、大声でもない堀川のひとことで加夏子の足が止まった。

走りだそうとした時の姿勢のまま、加夏子はぎくしゃくと首を回し後ろを見た。

堀川は夕日を背に、ただうっすらと立っていた。

「座れ。殉もいるだろう」

殉もいるというその言葉が衝動を抑えた。

腰を抜かすように加夏子はその場にへたり込んだ。

「どうしてここにきたの兄さん?! こんな事しちゃあ…」

「知ってるんだろ。何もかも」

殉を見る加夏子の目が張り裂けんばかりに見開かれた。

「…信じたくなかった…」

殉の声は沈みきっていた。

二人の前まで来ると、堀川は片膝をついて屈み込み二つの顔を交互に眺めた。

「清水 加夏子」

「…」

「二年前、お前を斬ったのは、おれだ」

「……」

「お前と殉が…皮肉だな」

……

「やっぱり、そうだったんだ」

こわばった表情のまま、加夏子が口を開いた。

「いつ？ いつからなの、殉」

「碧ちゃんのいた、あの小屋で。真山さんは本気で衣笠さんを殴り殺そうとしてた。止めに入る直前に聞こえたんだ、もの凄い、けだもののような『声』が。そして…」

見えたんだ

真山さんが見たもの

背中から斬られた、カナ

倒れ込む君の隣りを駆け抜けた影

一瞬の横顔

兄さん、あなただった

殉が重い視線を兄へ振り向けた。

「僕を見送りに駅へ来た時。あの時から感じていたよ。兄さんも気が付いたんだよね、あの時。自分が傷つけたのがカナだったって」

「…詫びは言わん。あれは仕事だった。それだけだ」

「それだけ？ それだけですって！？ 自分が何したかわかってるの！ アタシ死ぬところだった！ 口も利けなくなった！ 歩けなくなった！ みんなアナタのせいよ！！」

「だが死んじゃいない。死ぬように斬ってもいない。死ぬのはお前じゃない、清水 加夏子」

死ぬのは…

堀川の声は重かった。

第四十五章

言っちゃ駄目だ
兄さんっ

「死ななきゃならないのは…」

隻眼が加夏子を睨んだ。

「いうなあー！！」

殉が頭から堀川の胸元に突っ込んだ。
無茶苦茶に手足を振り、叩き、叫んだ。
次の言葉を言わせまいとするかのように。

押し包むように堀川が殉を抱きかかえる。
それでも尚、ありったけの声で喚き身悶えし続けた。

「いうなあ！ にいさああ～ん！！ うああああ～！！！！」

殉、だ

殉の声が止んだ。
三つの影の間隙を、宵闇が埋めてゆく。

◇

「わからない」

加夏子がぼつり、言葉をこぼした。

「も うわからない。わたしを斬ったのがあなた、あなたは殉のおにいさん、殉はわたしの大好きなひと…その殉が死ぬって…何なの？ 何が起こるの？ 何でこんな こと聞かされるの？ なんてこうなっちゃうのよ！ ねえ…教えて、誰でもいいから！ なんか言ってよ！ こたえてよおー！！」

「僕の身体、もう駄目なんだ」

堀川の腕の中から乾いた声が響く。

「そんな風に生まれちゃったんだよ。だからお医者にも治せない。この歳まで生きてこられたのも、奇跡みたいなもんだって言われた」

「そんな…そんなのって…」

「知られたくなかった」

「何人も殺してきた、闘いの中で。人は簡単に死ぬ。だが簡単に死ねない者もいる。殉がそうだ。お前は俺を死ぬまで憎めばいい、だがお前は、好きな男の死に向き合えるか？ 目をそらさず最後まで見届けられるのか？」

腕をほどいて堀川が立ち上がった。

殉は力なく俯き、膝を落としたままだった。

「弟はお前を選んだ。清水 加夏子。あとはお前次第だ。俺を憎むように殉を憎むか、それとも最後まで共に生きてみるか。すきなほうを選べ」

堀川はすっと後ろを向くと、そのまま宵闇の向こうへ消えていった。

あとには、もうどっぴりと闇に包まれた二人が動かずにいるだけであった。

◇

ふえっくしょん！

やっと市街地まで辿り着いた九十九は、盛大なくしゃみと共に今夜の宿を見上げた。

「CAEBV（慢性活動性EBウイルス感染症）、か…」

誰に言うでもなく呟いた。

空はもう真っ暗だった。

◇

一週間が過ぎ、佐野碧の容態は快方へと向かっていた。

重傷の北山とヨシオ、そして物言わぬ廃人御一行様（これ程徹底的に人体を破壊出来るのは鬼かゴジラかと医師達は噂していたが、患者はみな尾道では名の知れた悪党ばかりで、同情する者は一人もいなかった。勿論、真山を告発する者などいる筈もなかった）を残し、殉と加夏子は東京へ帰る日を迎えた。

まだ傷が癒えない殉は碧と車両での移動、加夏子は九十九と列車での帰京となった。

真山と柴田刑事は北山に付き添い、もうしばらく尾道に残るとの事だった。

「気を…つけて、ね」

「うん」

病院前のエントランス。しばしの別れ。

加夏子の言葉も、殉の態度も、どこかたどたどしくごちなかった。

あの日、殉の兄が告げたひとことが二人の間に溝を作っていた。

突きつけられた現実を受け止め切れない心が、互いに正面から向き合う事を躊躇させていた。

「いろんなこと、あったね」

「うん」

「いっぱいありすぎて、ワタシ、何がなんだかわからなくなっちゃった」

「…」

「すこし、一人で考えてみるね」

「…うん」

「東京に帰ったら、はなそう。ふたりで」

「…」

殉は加夏子と目を合わそうとしなかった。

加夏子も。

◇

「さ、いくよ」

暫くして迎えに来た九十九に促され、加夏子はタクシーの後部座席に乗り込んだ。

「帰りは新幹線だ。少しは眠れるだろう」

杖を脇に立てかけ、九十九が優しく声を掛けた。

タクシーがゆっくりと走り出す。

「よく見ておきなさい、この景色を。君を連れだし、引きずり回し、そして連れ戻したこの場所を。忘れないよう胸に刻んでおくんだ。ここが君を変えた場所だ。もう二度と同じ景色を見る事はない。次に見る時は全く違うものになっているだろう」

九十九はいつになく饒舌だった。

「人も場所も、思い出と一緒にうつろってゆく。君はたぶん、普通の人の何年分もの体験をここでした。それはいつかきっと君の宝物になるだろう。だから、忘れないで欲しい」

そこまで言って九十九は口を閉じた。

不意に加夏子が振り返った。

ウィンドウをおろし、窓から身を乗り出すと声を限りに叫んだ。

じゅ——んっ！

まってる！ まってるからあああ～！！

◇

仕事が減ったのは、いい事なのか、悪い事なのか

担当が終わった夕刻、いつも通り銀さんは中庭のベンチで煙草をふかしていた。

お嬢が歩けるようになったのはケッコウなこった

まだ杖の助けが必要だが、ありゃあもう大丈夫だ
街を闊歩出来るようになるのもそう遠い日の事じゃねえだろう
自宅からの通院に切り替えたのもいい訓練になる筈だ
だがなあ…

ふんぞりかえって煙を吹き上げながら銀さんは顔をしかめた。

いったいどうしちまったってんだ？
あんなに頼りにしてた坊やと、なんでひとことも口をきかねえんだ？
いや、『口をきかない』んじゃない
避けてるんだ、二人とも
まるでボクサーみてえに相手を伺ってやがる
尾道なんて田舎で、いったい何があったってんだ

渋い顔で煙草をふかし続ける銀さんの隣りに、細身の白衣が腰を降ろした。

「いつ見てもいかつい顔ですねえ～」
「るせえ。テメエがなんも教えねえからだ」
「知りたいんですか、尾道での事」

九十九は銀さんが手にしたピースをさっと取り、手慣れた手つきで一本振り出した。

「おまえタバコ吸うのか？」
「気が重い話をする時だけですが、ね」

火を催促する九十九に、銀さんはライターを差し出した。

「ブロイラーという精神科医が、統合失調症の予後について纏めたものがあります」

煙を吐き出しながら九十九が言った。

急に発病、急に人格崩壊 5～15%
慢性的経過から崩壊 10～20%
急性から慢性軽症 5%以下
慢性経過から慢性軽症 5～10%
急性を繰り返しつつ崩壊 5%以下
急性を繰り返しつつ慢性軽症 30～40%
1回か数回の急性ののち治癒 20～35%

「清水さんの場合、急性を繰り返しつつ慢性軽症の分類にあてはまるでしょうね。尾道でもけっこう暴れましたから。
それがいい方向に作用して、彼女の足は動くようになりましたが」

「んな事はどうでもいい！ …いや、どうでもよくはないんだが、それよりあの二人に何があったんだ？ なんて二人して敬遠してる？ エミちゃんの事と関係あるんだろ、もったいぶってねえで教えろ！」

九十九はもうひとふかし煙草を吸うと、指で弾いた。

「彼…もう長くはないかも知れないんです」

第四十六章

「なん…だって？」

銀さんは思わずベンチから立ち上がった。

「何故だ？ どこが悪いんだ？ 病名は！？」

「C A E B V。あちらでやった精密検査で判かりました」

九十九は、また煙草をくゆらせた。

「C A…なんだ、そりゃ」

舌をもつれさせながら銀さんがまた聞いた。

「慢性活動性エプスタイン・パールウィルス感染症。平たく言えばヘルペスです」

「ヘルペスって、あの口の周りやらに出来るブツブツの病気か？」

「ええ」

「そんなもんで坊やが死んでしまうってのか！」

上から怒鳴りつけるように銀さんが叫ぶ。

風が流れた。

九十九が顔をあげ銀さんを見た。

「E B ウィルスはガンマヘルペスウィルス亜科に属し、通常はヒトB細胞へ感染、リンパ球を攻撃します。伝染性単核症の病原体として、たいていは幼少期に経口感染、そのまま長期間体内に潜伏します。普通なら大した事にはなりません、ちょっと重めの風邪程度です。普通なら、ね」

「確かに坊やは普通じゃない。普通じゃないが…」

「そういう意味ではないんです。私達はE B ウィルスを、常在菌と同様に体内に住まわせています。普通の人間にはE B ウィルスに対する抗体があるんです。でも、ごくまれに抗体を持たないで生まれてくる者がいる。彼がそうなのです」

そこまで言うと、九十九は2本目の煙草を催促した。

銀さんは、今度は黙って火を差し出した。

「だが…だがよ、たかがヘルペスじゃねえか。なんか治療があんだろ！」

「ありません」

「お前、精神科じゃねえか！ もっとよお、もっと詳しい腕のいい医者だっているだろ！」

「精神科医だって医者の方端くれですよ。C A E B Vは極めて発症例の少ない病気です。研究も進んでいない、治療法さえ殆ど確立されていません。お手上げなんですよ、今の医学では」

「…」

「彼はずっと入退院を繰り返してきました。生まれつき身体が弱いというのは、C A E B Vでは致命的です。循環器、消化器、呼吸器、全てが壊れてゆく。3つ以上でM O F（多臓器不全）、6つ壊れれば、もう…」

「やめろっ！！」

銀さんの拳が、ベンチの背もたれを叩き割った。
飛んだ血が九十九の頬に付き、涙のように垂れ落ちた。

◇

「あなた…」
「うん…」
恒彦と紗季子は、リビングで頭を抱えていた。

加夏子が姿を消した時は誘拐かと狼狽したが、病院からは開放療法という治療の一環で同行者付きの小旅行だと聞かされ、親の了解も無く連れ出した事に腹を立てつつも納得した。
2週間近く待たされ我慢の限界にきた頃、主治医の九十九に伴われふらりと帰ってきた娘の姿を見て二人は狂喜した。

立っている。
歩いている。

杖をついてはいたが、間違いなく加夏子は自力で歩行していた。2年ぶりの立ち姿だった。
連絡がなかった事も忘れ、二人はそれこそ涙を流して喜んだものだ。
だが。

加夏子の様子が変わった。
以前のように凶暴になったり、捨てばちな虚無感を漂わせたりという訳ではない。
じっと考え込んだり、部屋に籠もる時間がいやに長くなった。
広島でのことは、聞いてもあいまいにはぐらかすばかりで話そうとはしなかった。

病院からは、予後のケアも含め引き続き通院を続けるよう言われていたが、今の加夏子の様子は、二人には病気でなく何か違うものだと思えてならなかった。

「カナちゃん、何かすごく悩んでいるみたい」

テーブルに水割りを置きながら紗季子が言った。

「ああ。だが何も言ってくれない。前はなんでも話してくれたじゃないか、そうだろ？」
「ええ、そうね。でも考えたの。あのコもう18よ。親に話せない悩みがあったって不思議じゃない。今までいい子過ぎたのよ。私達、それが当たり前だと思い込んでた」
「そうかなあ〜」
「そうよ」
「ならどうすりゃいい！」

ヤケクソのように言い、恒彦は水割りを飲み干すとグラスをテーブルへ叩きつけた。

「…私、話してみます」
「話す気のない相手だぞ、こっちがいくらくっちゃべっても無駄だ」
「自分の娘よ、悩みがあるなら聞いてあげるのが親じゃない？」
「甘いぞサキ、人間なんてそんなもんだ。娘だろうと誰だろうと、隠しておきたい事をベラベラ喋る奴なんていない」

恒彦は断言した。

「商談じゃないのよ、あなた。大事な娘のことなのよ」

「しかし…」

「私を口説いたとき、そんな事考えてた？」

紗季子がニッコリと笑った。

その時、階段を降りる音が聞こえてきた。

「どうした、もうすぐ晩ご飯だぞ」

「ちょっと散歩してくるね」

伏せ目がちに告げ、加夏子は立ち止まらずに玄関へと歩いていった。

「あなた」

「…」

紗季子に促されても、恒彦は腰を上げられずソファーでもぞもぞしていた。

「いい、私が聞きます」

しびれを切らした紗季子が玄関へ向かおうとした時、がばっと恒彦が立ち上がった。

「わたしがいく」

紗季子を制すると、大股でリビングを出ていった。

残された紗季子は、困ったような顔で微笑んでいた。

◇

「か、カナ。もう日が落ちる、散歩はやめといたらどうだ？」

「なに、パパ？ どしたの」

「あ、いや、歩くのは…アレだ、訓練になっていい事だ」

「ならいいじゃん」

「そうだな、いいコトだ、はっ、ハハハハハッ！」

小首を傾げた加夏子は、靴を履き終わると杖を手に玄関を出ようとした。

「待て！ 待ってくれ！」

「だから、なに？」

やおら胡座をかくと、両膝に手を当てて恒彦は娘を睨んだ。

「…あかし、何かわるいことしちゃった？」

恒彦の迫力に押された加夏子は、訳がわからないまま小声で聞いた。

「ああ、したとも！！　パパはなあ…ママもだが、お前が心配なんだ。帰ってきてからずっと、お前は悩んでいるようだった。パパは怖くて聞けなかった。スマン」

恒彦は深々と頭を下げた。

「無理には聞かん、だがな、自分一人でどうにもならない悩みなら、パパやママに手助けさせてくれないか？　怒りゃしない、責めたりもしない、みんなで一緒に考えよう、な？」

恒彦の巨体が、すがりつくように加夏子を見上げた。

「…パパ」

「なんだ？」

「優子ママが死んじゃった時、パパは悲しかった？」

思いもかけない問いに恒彦は絶句した。

清水優子。加夏子の実の母であり、病死した恒彦の前妻の名前だった。

紗季子が後妻に入った頃、よく加夏子が口にした言葉。

もうしばらく聞いていなかった言葉だった。

「…辛かった。パパ、おいおい泣いたよ。何も手につかなかった。消えてしまいたかった」

「そうだよね。消えなくなっちゃうよね」

小さく答え、加夏子は玄関を出た。

恒彦はただ見送るしかなかった。

第四十七章

住宅街の坂を登りしばらく歩いたところに、港を一望する小綺麗な公園があった。

有名な観光スポットとして訪れる人も多かったが、平日の夕方では地元の住民が犬の散歩にくるか、まばらにアベックが肩を並べている程度であった。

辺りに誰もいないベンチに腰掛け、加夏子は港の景色をぼんやりと眺めていた。

赤から灰色に変わりつつある空が、忘れたいあの日の言葉を思い出させた。

死なねばならないのは…

殉、だ

片目の男、殉の兄の声。

ボクの身体、もう駄目なんだ…

乾いた殉の声。

考えさせて、と言った。

まってる、殉に告げた。

でも何を話せばいい？

何をしてあげればいい？

わたしなんかは何ができるの？

考えても考えてもわからなかった。

わからないまま再会し、どうしようもないまま日々が過ぎていった。

何も手につかなかった

消えてしまいたかった…

さっき聞いた父親の言葉が胸に染みた。

わたしも、おんなじ

なにも手につかない

消えちゃいたい

殉のいない世界なんて…わたし…

「カナちゃん」

声をかけられ振り返ると、紗季子が立っていた。

振り向いた加夏子を見て、微笑んでいた紗季子の顔が強ばった。

「泣いてるの？」

言われて初めて、両の頬がびしょびしょに濡れている事に気が付いた。

慌てて乱暴に拭いながら、どうしたのとぶっきらぼうに聞き返した。

紗季子はすぐには答えなかった。

ただじっと娘を眺めていた。

「パパと結婚する前、まだお店に勤めていた頃、そんな風に泣く娘を沢山みた。みんな優しい娘だった。そしてみんな、大切なヒトをなくして泣いてた。理由は色々だったけど… とてもきれいで、哀しい涙だったわよ」

少しして、紗季子は優しい声で言った。

「なにがあったの？ もしかすると、あの目の見えない男の子のことなのかしら」

紗季子の問いに加夏子は答えなかった。

「…オンナってね、いつもオトコに泣かされるの。ううん、そうじゃない、オトコの為に泣いてあげるの。そうやって、自分の哀しみとオトコの哀しみを、一緒に土に還してあげるの」

アナタの涙は、誰の哀しみを還してあげるのかしら

紗季子の言葉に、今度こそ加夏子は泣き崩れた。

◇

翌日。

杖にかけける体重が減っているのを感じながら、加夏子は病院への道を歩いていた。

心は決まった

もう泣きはしない

何も出来なくてもいい、最後の最後まで殉に付き添い、一緒に歩く

昨日、夕暮れ時の公園でかけられた紗季子の言葉に思い切り泣き、家へ帰ってから全てを打ち明けた。

恒彦も紗季子も驚き複雑な顔をしたが、二人とも何一つ強制したり意見したりはしなかった。

お前の思うようにしなさい

なにがあっても、わたしたちはお前を支えてやる

だから、まけるな

カナちゃん

いってきなさい

自分の心をそのまま、はなしてらっしゃい

あなたの言葉を彼も待ってるはずよ

両親の言葉が心底、嬉しかった。

自分が一人きりでない事をこれ程意識したのは初めてであった。

考えてみれば、いつも誰かに見守られていた。

一人で生きてきたと自惚れる愚かさとは無縁であったが、身近なものを見落とさない聡明さを得ようと努力したりする事

も無かった。

良くも悪くも、ありきたりな女子高生だった。

でもそんな自分は終わってしまったのだ。

寒風のなか顔を上げて進む彼女は、『少女』から『女』への階段を確実に登りつつあった。

加夏子自身に自覚は無かったにせよ…

そこに辛い結末が待っているにせよ…

◇

正門をくぐり、緩い傾斜のあるエントランスを登り始めると、病院の玄関前に長身の白衣姿が立っているのが見えた。

近づくまでもなく、加夏子にはその人影が九十九だと判った。

歩みを進めるたび、九十九の姿が鮮明になってくる。

両手を後ろに組み真っ直ぐに立ち尽くす彼の姿はまるで、何かを告げるべく人々の前に現れた預言者のように重々しい雰囲気を感じていた。

話しかける事を躊躇わせる厳しい表情は、普段の飄々とした彼とは別人のようであった。

「…長官…」

「来たね」

「なにかあったんですか？ こんなところで…」

「昨夜、堀川君が倒れた」

「え？」

「今 ICU にいる。高熱で意識不明、呼吸困難、肝機能も低下している」

「そんな！」

加夏子は絶句した。

「予断を許さない状況だ。万が一のことも考えられる。覚悟しておきなさい」

加夏子の手から杖が落ちた。

◇

駆けつけた ICU の前で、佐野碧が心配そうに座っていた。

「おねえちゃん」

「…」

加夏子は何も言わずにガラス窓へ貼り付いた。

酸素マスクをつけ、チューブとコードを体中に這わせた殉の姿は、奇妙な虫に寄ってたかって血を吸われているように見えた。

額に皺を寄せ苦し気な呼吸を繰り返すたび、マスクの内側が白く曇る。

「じゅん…」

加夏子は言葉もなかった。

自分が躊躇している間に、殉の肉体は確実に病に蝕まれていた。

もっと早く気持ちを決めていれば、こうなる前にもっと沢山、話す事があった筈だ。

悲しみより後悔が加夏子を押し潰した。

「おねえちゃん、泣かないで。お兄ちゃん、ちゃんと判ってるよ、おねえちゃんが来たこと」

「え？」

「いっばいってる、『カナ、ごめん』って。何度もなんども」

「ゴメン？」

「『ぼくが弱いから何も言えなかった。僕のために泣かないで』ってってる」

「碧ちゃん、聞こえるのね」

「ウン。ここでずっとおはなししてた。絶対、おねえちゃんが来ると思ったから」

加夏子は泣きたくなかった。

悲しいからではない。

こんなになってまで自分を気遣ってくれている殉と、ひたすら自分が来るのを待っていた碧の気持ちに泣きたくなかったのだ。

「お兄ちゃんがどこかへいっちゃいそうになったら、ウチが連れ戻す」

まだ幼さの残る顔に決意を滲ませ、碧が加夏子に言った。

「パパもママも弟もみんな死んじゃった、電車のなかでつぶされて。もうあんなのイヤッ！　ウチ、ゼツタイに嫌だから！！」

ひとつしかない手でスカートの端を握り締めながら、碧が叫ぶように言った。

「碧ちゃん、殉にサイコインする気なの？」

「ウチ、恵美子お姉ちゃんの大好きなヒト、連れてこれなかった。恵美子お姉ちゃん、すごく哀しそうだった。加夏子お姉ちゃんまで、あんな風に哀しくさせたくない」

そう言った直後、碧がはっと顔を上げ加夏子を見た。

「どうしたの？」

「今、お兄ちゃんが言った。『まだいかない、大丈夫、そこでまってて』って」

目を見開いた加夏子の眼前で、医師と看護婦が慌ただしく動き始めた。

第四十八章

加夏子の後ろ姿に何の言葉もかけられなかった九十九は、額に深い皺を寄せてゆっくりとICUへ向かう廊下を歩いていた。

こういう時、精神科ってのは無力だな
いや、例え専門医でもこのケースじゃ…

溜息をついて角を曲がった彼の足が止まった。
入り口の脇に、人影がひとつ。
長身が陽炎のようにゆらいでいた。

「あなたは…」
「お前か」

ICUのドアを睨み、振り向きもせず堀川烈はボソリと答えた。

「何もせんよ。そう身構えるな」

言われて九十九は、無意識に構えをとっていた自分に気付いた。

「ハハ。お恥ずかしい」

頭を掻き、苦笑しながら構えを解いた。
それ以上近付きもしなかったが。

「来ちまったな、この日が」
「…」

「2年前、殉をここへ転院させた。それからすぐ俺は日本を離れ中東へ飛んだ。殺しても殺してもケリのつかない泥沼の戦場で、頭に浮かぶのはいつも弟の事だった」

「中東…イラク、ですか」
「砂の海に片目を落としてきたよ」

そう言うと、堀川は初めて九十九の方へと顔を向けた。

「出ようぜ、センセイ。先客がいるようだしな」

顎をしゃくって堀川が歩きだす。
脇を擦り抜ける時、微かに触れた腕に電流が流れたような気がして、九十九は小さく身震いをしながら後をついていった。

◇

ひとしきり医者と看護師がばたばたと走り回った後、ICUの中は唐突に静かになった。
規則正しく、低く鳴る機械のモニター音。
横たわる殉の表情が心なしに穏やかになったような気がして、加夏子は外に出てきた医師にかぶりつくように尋ねた。

「せんせい！　じゅんはどうなったんですか！？　たすかったの？　せんせいっ！！」

「血圧と心拍数は正常値近くまできています。チェーンストークも収まったし、バイタルは落ち着きつつある。危ない所は抜けたようです」

医師は意味のよく判らない言葉を口にした。

「じゃあ…じゃあ、殉はもう大丈夫なんですか？」

「今のところは。色々な臓器に障害が出てきています。MOF（多臓器不全）の初期から中期と診断して間違い無いでしょう」

「それじゃあ」

「残念ですが、小康状態はそう続きません、。あと一週間か…二週間か…」

医師が目を伏せた。

◇

病院裏の雑木林。

まだ日も高い時間だが、この辺りは木々が立て込んでいて関係者でも滅多に立ち入ってこない場所だった。その小道を二人の男が歩いてゆく。

堀川と九十九。

少し離れて進める互いの歩みに、張りつめた空気がまとわりついていた。

どちらともなく足を止めたのは、木立越しに病棟の屋上がやっと覗いている辺りだった。

階段の踊り場ほどの空き地。ゆっくりと堀川が振り返った。

「おあつらえむきだ」

「…」

「あのときはうまく煙に巻いてくれたな、センセイ」

「やるのですか、ここで」

愚問と知りつつ、九十九は足場を確かめながら聞いた。

「楽しみにとおいたよ」

堀川が背の鞘から山刀を抜いた。

冷たい光を放つ刃を脇に垂らす。

「今日は勘弁って訳にはいかないんですかね」

「ぬかせ」

口をV字につり上げ堀川が笑いかけた。

笑みが凍った。

魔法のように九十九が目前に立っていたのだ。

一瞬の間を盗み距離を詰めた彼の歩法はまるで瞬間移動だった。

下段から擦り上げた山刀と九十九の拳が交錯した。
弾き飛ばされるように二人が飛びずさる。

どちらも膝をついていた。
堀川も九十九も、合わせ鏡のように胸を押さえている。
九十九の白衣の胸元が朱に染まっているのだけが違っていた。

「…やりますね、一本とられましたよ…」
「いまのは…何だ？ 真山と違うな」
「先輩より勉強してますから」

ふらつきながら九十九が立ち上がった。

「さっきの構え、無形の位（むぎょうのくらい）ですね。柳生新陰流ですか」
「合気にこんな強烈な当ては無い筈だが」

堀川も立ち上がる。

「貴方と親戚筋ですよ。心眼流です」

柳生心眼流。
帯刀を前提とした日本古流体術の中で異彩を放つ流派。
激しい突き蹴りはまるで中国拳法のそれを思わせるものだった。

「わざとセラミックに当てたな。余裕かましがって」

言って、堀川がひとしきりむせ込んだ。
彼の胸と脇腹には外科手術でセラミック装甲が埋め込まれていたが、九十九の打撃の威力はそれを貫通しダメージを与えていた。

「甲冑武者の中身を壊す。『鎧通し』という秘技なんです。タフなひとだ」
「面白い奴だな、オマエ」

ゆらぐ堀川は刃を逆手に持ち変えると、すっと背の鞘へ収めた。

「今日はここまでだ」
「助かります。今は他にやらなきゃならない事がありますから」

少しの間対峙した二人は、やがて静かにその場から立ち去っていった。

◇

ここ、どこだっけ？

殉はゆっくりと目をあけた。
微かな期待が形になる。

「おはよう、じゅん」
「カナ…」
「そろそろ起きるかな、って。見にきたよ」
「いつ？」
「さっき」
「目のした黒いよ」
「え？」

加夏子は慌てて両目の周りをゴシゴシと擦った。

「ねて、ないんだね」
「だ〜いじょうぶ！ ジュンだってもう全然へーきだって先生も言ってた、あしたになったら散歩だってできちゃうよ」

おどけた顔で両手をはたはたさせながら、加夏子は笑ってみせた。

「ワ タシ深刻になり過ぎちゃってさあ、なんか気まずくてジュンと面と向かって話せなかったけど、しょうがないよね？ いきなり歩けるようになっちゃったし、ジュンや北山さんやヨシオは大怪我しちゃったし、碧ちゃんはあんな目にあっちゃったし、フツウひいちゃうよね？ ジュンだってそう思うでしょ？ ねっ！ それでワタシさ…」

堰を切ったように喋りまくる加夏子の顔を、殉は微笑みながら黙って見ていた。
それから10分程しても、彼女の話は止まらなかった。
話題はありとあらゆる方向へと飛んだが、加夏子は3つだけ決して触れなかった。

衣笠恵美子のこと。
殉の兄、堀川烈のこと。
そして殉の病状のこと。

「カナ」
「え？ なになに？ それがさあモウおっかしいのよ！ パパがね…」
「僕、あとどれくらいだって？」

怒濤のお喋りがピタリと止まった。

「ありがとう。元気づけようとしてくれて。でも自分の事ぐらい判ってるよ、いくら僕がニブくてもさ」
「…あと…1週間か2週間…かもって…」

止まった時の滑稽な姿のまま話す加夏子の声は、別人のようにかすれていた。

「カナが来たって、碧ちゃんが『心の声』で教えてくれた時、ボクは必死に願った。あとチョット、あとほんの少しでもいい、生きていたい、カナと話したいって。そしたらね、聞こえたんだ。僕の『声』が」

話していた時の勢いのまま宙に挙げていた腕をおろし、加夏子はゆっくりと殉に向き直った。

「ジュンが、ジュンの声を？」

「うん。『あと少し、ここにいてもいいよ』って。不思議だな」

加夏子はもう何も言わなかった。

ベッドの褥に覆い被さり…

第四十九章

砂利浜特有のガラゴロした音が遠くから聞こえてくる。

静岡県、沼津市。原海岸。

いつか来てみたいと、佐野碧を捜しにゆく車中から見えた景色に加夏子が言った場所に二人は立っていた。

また無断外出であった。

狗が落ち着いてすぐ、加夏子は彼を誘い病院から抜け出したのだった。

二人を心配する人々への裏切りにも等しい暴挙だった。

それでも、やった。

時間がなかった。

「ここ、いいね。潮の香りも濃いし」

杖を手に佇む殉の肩を傍らで支えながら、加夏子は囁くように言葉を発した。

「不思議な音だね、あの音。カラコロガラゴロ、石の鈴みたいだ…」

「いってみる？ 歩きづらいけど」

「うん」

防波堤から踏み出すと、初めは固い土のようだった浜が次第に拳大の砂利を敷き詰めた傾斜となって海へと落ち込んでいった。

一歩進むたび右へよろけ左に傾きながら、二人はようやく波打ち際まで辿り着いた。

冬の海。風が冷たい。

「海、見たかったな。一度でいいから」

「ワタシ見てるよ。ずっと、ずう〜っと遠くまで見える。あれ伊豆半島かな…ね、何か見えてこない？」

「そんなに都合良く見えないって前にもいったじゃないか」

「そっか、ザンネン」

支える手を離さず、加夏子は足下に寄せてきた小さな波に目をやった。

砂利というには大きな石たちが、波に巻かれ無数のダンスを踊っている。

「ちょっとさむいね」

ぽそっと狗が呟いた。

「ウン」

「背中はあるかい、カナがいるから」

「ワタシさむいよ」

「もうチョットかぶさってくれたら、二人ともあったかいよ」

加夏子が後ろから殉を包み込んだ。

胸元で合わさった腕に、狗がそっと片手を重ねた。

「ごめん」

「どうしてあやまるの」

「もっと一緒にいてあげたかった。いたかった。普通の人が妬ましい。こんなこと今まで思ったこともなかったのに。やな奴になっちゃったな、僕」

「ジュンはいいひとすぎる。もっとワガママになっていい、ひとに迷惑かけたっていい」

「今はワガママだよ。勝手に飛び出しちゃったし」

「そうね」

髪をかきあげた加夏子の目に、小さな何かがとまった。

「あれって…」

打ち上げられた木の板。

位牌だった。

「どうしたの、カナ？」

「やだ、こんな所にあるなんて」

不安気に尋ねる殉には答えず、加夏子は波打ち際へ進みそれを拾った。

滲んだ墨の文字を読みとってみる。

「2008年7月30日って、去年の夏か」

「ねえ、なにかあったのかい」

「やなものみつけちゃった。でもなんで」

「魚の死骸か何かかい」

「ちがうの。お位牌」

「海岸に、位牌？」

殉が眉をしかめた。

「ごめん、変なもの拾っちゃって」

「謝ることないよ」

「だって縁起でもないじゃん、殉がこんな時に」

そこまで言って加夏子は口を噤んだ。

「そんなに気をつかわないで。今すぐどうにかなっちゃう訳じゃないんだからさ」

「でも…でもさ」

「ストップ！」

加夏子に向けて指を一本、殉が立ててみせた。

「よそう、もう」

転ばぬよう、ゆっくりゆっくりと加夏子の方へと歩み寄ると、すう〜と殉が手を伸ばした。

「かして」
「あ、うん」

渡された位牌をそっと撫でてみる。

「このひと、どんな想いだっただろう。溺れたのかな。事故なのかな。もっと生きていたかっただろうな、きっと」
「…」

置いてきな、そこに

突然かけられた、聞き覚えのあるダミ声。
殉は加夏子の気配が強まるのを感じた。
声の主が誰かはすぐに判った。

「来たんですね、銀さん」
「まったく、二人とも病院抜け出すのが癖になりやがって」

ざっざと大股で歩いてくると、銀さんはごつい拳を一発ずつ二人の頭に落っことした。

「イタイッ！」
「キャッ！」
「馬鹿野郎！ オトナに心配かけんじゃねえ！！ って、まあよ、じつは知ってて見逃したんだがな」
「いったいなあ…銀さん人が悪いですよ」
「そうよお、目から星でたよ、ホントに」

頭をさすりながら涙目で抗議する二人に軽く笑いかけながら、銀さんは殉の手から位牌を取った。

「お前も馬鹿野郎、だな」

ふうと溜息を漏らして位牌を足下に置くと、低い声でそれに語りかけた。
加夏子が意外そうな顔でそれを見ていた。

「銀さん、知り合いなの？ その位牌の人と」
「まさか」

しゃがみ込んで、位牌の周りに石をつみながら銀さんが呟いた。

「地元の奴ならここじゃ泳がない。こいつはヨソモンだろうよ。俺のダチもよ、ここで死んだんだ」

銀さんが言った。

「友だちって… 銀さんの実家、確か山梨のほうじゃなかったっけ？」

不審気な声で加夏子が聞いた。

「甲府だ。今じゃ誰もいねえが。若い頃、この辺りで暮らしてた。大学行ってたんだぜ、これでも」

「銀さんが大学生、か。チョット想像出来ないな」

殉の声にも少しだけ困惑の色が混じっていた。

「山の方を見てみな、建物が見えるだろう。東海大学の校舎だ。俺はあそこに通ってた」

当時は海洋学部っていう海の専門校だったんだぜと、遠くを眺めながら銀さんが呟いた。

「…いい場所だった。仲間にも恵まれた。みんな親元離れて一人暮らしだった。貧乏学生揃いだったが、毎日バカやって楽しかったよ。元気だけは売る程あったからな」

「この辺りは良く知ってるんですね」

確かめるように殉が聞いた。

「ああ。ここで泳いだこともある。ほんの少しだけだよ」

位牌に石を積み終わった銀さんは、立ち上がると軽く両手をはたいた。

「潜ると、どこまでいっても石だ。それが崖みてえに深い底へと落ち込んで。先も見えない真っ暗な海の底へ、よ」

「なんかコワイな、それ」

加夏子が素直に感想を言った。

「怖い海さ。潮の流れは早い、寄せる波はどんぶかの浜に当たって引き波になる。少しでも浜にかぶってりゃ、海に入ったモンは必ずさらわれて底まで引きずり込まれちゃう。それを知ってるから地元の奴は絶対に泳がない」

「でも銀さん、泳いじゃったんですね」

「坊やくらいの頃は怖いモン知らずだったからな。先輩達から『あそこは人喰い海岸だ、絶対はいるな』と言われてれば言われるほど燃えたよ。うねりの穏やかな日、潮どまりの隙間を狙って泳いだ。自分は間抜けじゃないと信じてた。そして…やっちゃった」

話すのを止め、銀さんがポケットから煙草を取り出した。

うつむき加減に手で覆いながら火をつける。

煙はすぐ風に散った。

「アイツは泳がなかった。止めると怒鳴ったくらいだ。だが俺を見て油断したんだろうな。遊びで叩いたビーチボールが海んなか落ちた時、取りに入って…戻れなくなっちゃったんだ」

加夏子も殉も、何も聞かなかった。

何も言えなかった。

鈍色の雲が、今にも泣き出しそうだった。

第五十章

30分は泳いでた
タフな奴だったよ

銀さんがまた話し始めた。

「最初は笑ってたんだ。流木やらなにやら投げて『つかまれ！』って。そのうちヤバいと思い始めた。拾ってきたロープを投げた奴がいた。短くて役に立たなかった。浜に繋いである小舟を出そうとした奴もいた。繋いだ鎖はびくともしなかった…」

石をひとつ蹴った。

「バカだろ。いいトシした連中が、やったのといえはそんなのばっかしだったんだぜ」

なんて顔をしてるんだろ。
加夏子は思った。

なんて音…吹きすさんで止まない…
殉は銀さんの『心の音』を聞いていた。

「一人、二人、飛び込んだ。引き波の向こうへ行こうとして…そして皆、飲み込まれた…」

銀さんの手から煙草が落ちた。

「二人助かった。後から飛び込んだ奴らだ。一人は水飲んで重体だったが、なんとかかな。でもアイツはとうとう戻れなかった。それから1週間、俺たち浜に寝泊まりして奴を探した。海保の船も出た。それだけやって、見つかったのは結局あいつの海パンだけだった」

沈黙。
風の音だけが三人を取り囲んでいた。

「あれから海が怖くてよ。そのうち何もかも怖くなって逃げ出した。大学も辞めた。行く先無くなった俺を受け入れたのはヤクザだった」

「えっ!？」
「銀さんが、ヤクザ？」

二人が同時に驚きの声をあげた。

「そうだ。でも結局あそこでも生きてゆけず、流れ流れて今の仕事についた。組も女も捨てて、よ」

自嘲の笑みを貼り付かせたまま、銀さんは二人へ歩み寄ってきた。

「ひとつってな、あっけなく逝っちまうんだ。ピンピンしてた奴が次の瞬間にはもうこの世にいない。神さまってのはつくづく平等さ。平等過ぎて反吐が出るぜ」

二人の頭をガシガシと撫でると、銀さんはきびすを返した。
軽く片手をあげる。

「連れ戻しやしねえよ。好きなだけ彷徨ってこい。何か見つかるかも知れんぜ」
「銀さんっ！」

歩き去ろうとする銀さんの背中へ加夏子が声をあげた。

「銀さんの好きだったひと、それからどうしたの」
「結婚して幸せにしてる。子供もいる」
「会ったの？ そのひとと」
「会ってるよ。何度も」

それ以上は言わず、銀さんは防波堤の方へ歩み去っていった。

◇

影がふたつ。
ぴたりと寄り添い歩道を歩いていた。
暗くなった国道を往来する車のライトが、幾度も照らしては過ぎて行く。

「大丈夫？」
「うん。手足がだるい感じがするけど、チョット風にあたり過ぎたかな」

ニコリと殉が微笑む。
強がりと判っていても、加夏子は彼にそれ以上問うことはしなかった。

「そうね、早くあったかい所にいこ」

そっと背を押し促すと、殉がまたゆっくりと歩き始める。
尾道で加夏子の車椅子を汗だくになりながら押してくれた時の面影はもうなかった。

脇を支えながら、加夏子は悲しかった。
それ以上に、やり場のない憤りが彼女の穏やかな笑みの下で渦巻いていた。

銀さんの言った通りだ
神様は平等過ぎて不公平だ
どうでもいいような人が平気な顔して
殉みたいないいひとがこんな目にあってる

「そんな事考えちゃいけないよ、カナ」

加夏子の『声』を聞いた殉がゆるりと呟いた。
身体は衰弱していても、彼の力は健在だった。

「わかってる。でも抑えられない。聞かれてもいい、殉に隠し事なんて出来ないし」

「カナ…」

「でも最近、ちょっと気がついたんだ。心の声ならなんでもかんでも聞こえる訳じゃないでしょ」

「ラジオみたいな感じかな。チャンネルをちゃんと合わせないと雑音しか聞こえない。だから時々『耳』を塞いじゃうんだ」

「『耳』を、ふさぐ？」

「気持ちの上で、ね。聞かないようにする…いや、本当は聞こえないフリをしてるだけかも知れない。そうやって嫌な事から目を逸らし続けてきたんだよ、ボクは」

自嘲気味に笑う殉の顔には幾筋もの皺が走っていた。

「それ、いけないことなのかしら。人より余計に物事をわかっちゃうって、人より余計に悩みや苦しみを抱えることとおんなじじゃない」

「そう、かもね」

「ジュンはいろんな人たちを支えてきた。助けてきた。だから今度はワタシがジュンを支えてあげる」

添えた手にぐっと力をいれて加夏子が言った。

「ほら、もうすぐ宿だよ。頑張って歩きましょう！」

二人の進む先に、ビジネスホテルの白い壁が宵闇の中、ぼうっと浮かび上がっていた。

◇

ツインの部屋をとることに抵抗はなかった。

初老の従業員は初め、歳若い二人の宿泊を怪訝に思っていたようだが、殉の様子を見て、

「付き添いです」

という加夏子の言葉をあっさりと受け入れた。

三階の角部屋。部屋に入るなり、殉は床に崩れ落ちた。

「ジュン！」

「…大丈夫、ちょっとフラッとただけだから。少し休めば…」

殉の声は弱々しかった。

膝を落とした重い身体を何とか抱え、加夏子は殉をベッドに横たえた。

額に汗を浮かべた青い顔が、少しすると微かな寝息を漏らしてきた。

バスルームで濡らしてきたタオルでそれを拭いながら、加夏子は何も考えまいとしていた。

今は彼の身体だけ心配しよう…

無理だった。

急激に衰弱してゆく殉の姿に罪悪感をおぼえずにはいられなかったのだ。

連れ出したりしなければよかった

そうすれば今頃、ジュンはもっと楽にいられた
わたしがいけないの？

打ち消しても打ち消しても、加夏子の想いは同じところをグルグルと回り続けるだけだった。
夜が、更けていった。

◇

物音ひとつしない、夜の真ん中。

殉は目覚めた。身体が少しだけ軽くなっているのを感じながら。

左腕だけが重かった。

持ち上げようとして、それが重く柔らかいものの下敷きになっていることを知った。

もたれかかったまま眠っていたらしい加夏子が、殉の身動きと一緒に目を覚ました。

「…おきた？ ジュン」

「僕、どれくらい眠ってたの」

「ちょっとだけ… 4時間くらい、かな」

「そばにいてくれたんだね」

返事はなかった。

たださっきよりもっと柔らかいものが殉の唇に重なっただけだった。

「よかった。ずっと見てた。このまま目を開けなかったらどうしよう、ワタシのせいなんじゃないか、ずっとずっとそう思ってた…ワタシ…だから…」

首に手を廻し、加夏子はそっと殉に覆い被さった。

「こんな見も知らない場所で、キミを一人きりにしたりしないよ」

それは殉が尾道で加夏子に言った言葉だった。

華奢な肩を優しく抱きながら、殉はもう片方の手で加夏子の髪を撫でた。

何度も、なんども。

内臓に穴があいたような脱力感をつかの間、殉は忘れた。

第五十一章

ジュン
お願いがあるんだ

永く抱き合った後、ぽつりと加夏子が言った。

「なに、カナ」
「…ワタシを想って。ワタシのことだけ強く想って」
「いつも想ってるよ」
「そうじゃない。ワタシをみて。ワタシを視たいと…それだけを想って。お願い」

突然の言葉に殉が返事をできないでいると、覆い被さっていた加夏子の身体がふいに離れた。

しゆるしゆる
ばさっ

衣擦れの音が深夜の部屋に響く。
やがて足音が離れてゆくと、扉が開く音が聞こえた。

「わたしをみて。なんにもない生まれたままのわたしを。ぜったい見られるから…ジュンが望めば…」

何か言おうとした瞬間、殉の脳裏にまばゆい光が差し込み、次の瞬間…

視ていた。
知らない部屋。バスルーム。
大きな鏡に、覚えのある女の姿。
裸だった。隠そうともしていない。
小振りな乳房も、淡い陰りも、全てをさらけ出していた。

きれいだ

殉は言葉をなくして、頭に浮かぶその映像をくい入るように視ていた。
生まれて初めて視る裸の女性だった。
それは神々しく彼の心に焼き付いた。

視界が回る。
バスルームを出ると、ベットに横たわる自分の姿が映った。
衰弱した自分が酷く惨めな姿に映った。

「どお？ 見えた？」
「女神と奴隷みたいだ、まるで」
「奴隷？」
「ボクは役立たずだね。もうカナを守れそうにないや」
「そんなことない！ ジュンはワタシにイッパイいろんなものをくれた。ワタシ、わたしね…」

自分の姿が迫ってくる。
加夏子が側に来たのは視なくても判った。

あなたが、すき
だから…触れたい…触れてほしい…もっと…

加夏子の手が、殉のシャツのボタンを外していた。
もう視る必要は無かった。

殉はうねりに身を任せた。

◇

ぶええーくしょんっ！

ホテル前の茂みの中で、銀さんは盛大に鼻水をすすり上げた。

ワンカップの日本酒が半分、道にこぼれてしまったのをうらめしそうに眺めて、銀さんはジャケットの裾で顔を拭いた。

二人を置いて立ち去るつもりは、はなから無かった。
遠くから見守る。いつものように。
それだけが今、自分に出来る事だと思い定めていた。

気配

振り返ると、見たことのない男が立っていた。

「？」

銀さんは眉をしかめた。

細身。長身。影のような男。
街灯の薄明かりの下、陽炎のように揺らいでいる。

「誰だ」

銀さんの声がこわばる。影は尋常でない気配を放っていた。
斬った斬られたの世界で生きていた銀さんにとり、間違える筈もない気配だった。

死の際にまつわりつく、気配

「お前こそ、こんな所でなにしてる」

影が口を開いた。

修羅場を踏んできた銀さんですら背筋の寒くなる声だった。

「誰かを見張ってでもいるのか」

「…」

「おおかた地回りか何かか。やっかいごとなら余所でやれ。ここで騒ぎをおこす事は許さん。うせろ」

瘦身の男が銀さんに向かい言い放った。

淡々と告げる言葉に、底知れぬ威圧感が隠れていた。

「お前がタダモンじゃねえのは判る。だが何処の誰かも知らねえ奴に脅されて引き下がる訳にはいかん」

「ほう…」

男がひきつれた笑いを浮かべた。

「騒ぎだと？ 冗談じゃねえ！ 明日もわからねえ二人が今、ここで必死に支えあってんだ。オレはあの病気の坊やに何かあったら飛んでって助けてやらにゃいけねえんだ、邪魔するなっ！！」

「二人…坊や…病気、だと？」

「そうだ！ それがどうした！？」

「お前、殉と清水加夏子を見張っているのか」

「知ってるのか？ あの二人を」

影が灯りの下へ踏み出してきた。

右目のアイパッチに銀さんは初めて気がついた。

「…どうやら、殉が世話になってるようだな」

「アンタ、誰なんだ？」

「堀川烈。殉は俺の弟だ」

「おとうと…」

銀さんは毒気を抜かれて、その男を見た。

まわりつく殺気のような気配は消えていた。

「もうだめなのか、殉は」

殉の兄と名乗った男はするりと銀さんの脇まで来た。

足音はしなかった。

「加夏子ちゃんが坊やを連れ出した。俺は止められなかった。あのまま病院にいても天井眺めながら死ぬのを待つだけだ。思い出ってやつを作らせてやりたかったんだ。だから俺は…」

「いいオトナがストーカーよろしく尾けてきた、か」

「あんただってそうなんじゃないか？ 堀川さん」

「ふっ… 違うない」

堀川は銀さんの手からワンカップを取ると、ひと息で飲み干した。

◇

男が二人、暗がりの茂みの中で腰を降ろしている。
堀川と、銀さん。

近くのコンビニで銀さんが買って来た酒を飲みながら、二人は黙ってホテルの方を見やっていた。

黙々と酒を空けてゆく。
銀さんは日本酒を、堀川はビールを。
どちらも微塵の酔いも見せなかった。

何時間が過ぎただろうか。

「アンタ、ひと、殺しただろ」

不意にぼそりと銀さんが口を開いた。

「ひとりやふたりじゃねえ数だ」

断定だった。

「それがどうした」
「殺し屋って風には見えねえが」
「傭兵が仕事だ」
「それでか…」

堀川のビールが空いた。握りつぶし、放り投げた。
銀さんがコンビニの袋から新しいビールを出して渡すと、堀川が黙って受け取りプルトップを引いた。

「お前もそうだろ」
「あん？」
「殺しをした奴はすぐに判る。臭いがすんだよ。身体じゅうからな」
「へっ…」

ぐびっとワンカップをあおると、銀さんはスルメをくわえた。

「リハビリトレーナーとか言ってたな。何でそんなもん始めたんだ」
「飽きた」
「あきた？」
「チャカでもポントウでもよ、やり合う時あ燃えた。血が沸騰するみてえだった。なんもかんもほっぼり出して逃げ出した俺が唯一、生きてるって実感できたんだ。それがあの日ふっと消えちゃった。対立組織の組長、組員、たった一人で殺っちゃったんだ。俺も撃たれた。これでハクつけて華々しく死ぬ、そう思った。だが死ななかった。目え覚まして、病院の天井見上げて、自分がまだ生きてることに気づいた時、どうでもよくなっちゃったんだ。血が沸騰する事も二度と無かった」

そこまで一気に話すと、銀さんはひとくち日本酒をあおった。

「空っぽだったんだな、お前」

「ああ。傭兵にやそんな事はねーんだろうな。この世は戦争だらけだ。死ぬも殺すも自由自在じゃねえか」

「同じだ」

「？」

「俺も生き残った。無謀な攻撃…確実に死ぬと判っていて突っ込んだ三人のうち、俺だけが」

「で？ アンタどうしたんだ」

「飽きちゃいないが、死んだ奴らがうるさくてかなわん」

「へ、へへへっ」

「何がおかしい」

「アンタみたいな男でも冗談いうんだな」

「冗談、か」

堀川がまたホテルを見上げた。

第五十二章

別の日。別の時間。

都内の某大学病院の応接室。

老齢の教授の前に九十九が座っていた。

「突然押し掛けてしまい、御迷惑をおかけします、先生」

「なァに、元気そうな顔が見られて私も嬉しいよ。ときに今日はこういった用件なのかな？ キミが精神医学に主旨変えてから、私は随分と放置されていたような気がするんだが」

老教授は穏やかな光を湛えた眼差しを九十九に向け、いたずらっぽく微笑んだ。

「出来の悪い生徒でしたから、足を向けづらかったのです。勝手に飛び出してしまいましたし」

「謙遜より冗談に聞こえるよ。キミほど優秀なフェローは数える程しかいなかったのだから」

「恐縮です」

「さて、私もそう時間がある訳ではない。本題に取りかかるとしよう」

そう言って老教授は九十九を促した。

「CAEBVの患者について、治療法の御相談に伺いました」

「ほう。進行の具合は？」

「LPD（リンパ増殖症）の典型的症状から肝機能障害、肺炎などを併発しています。血栓の兆候も見られます」

「日和見症候群からの多臓器不全、か。可哀想だが長くはないな。何故そんなになるまで放っておいたのだね」

「彼は入退院を繰り返してきましたが、2002年以前のRickensonの診断基準ではCAEBVの特定には至らなかったと思われます。私も彼と関わったのはつい最近の事で」

「患者の年齢は？」

「19歳です」

「ふむう…」

老教授は難しい顔でソファから立ち上がると、手を後ろに組んで窓から外を見た。

「CAEBVが重度疾患として認知されるようになったのは、せいぜいここ15年ほどのことだ。世間じゃAIDSのほうが注目されていたからな。CAEBVはさほど耳目を集めてはいなかったし、研究自体も遅々として進まなかった。彼は運が悪かったな」

「やはりもう打つ手は無いのでしょうか」

九十九の声が沈み込んだ。

「聞いた限りでは、半月もたないだろうね」

老教授はきっぱりと言った。

沈黙。空調の音。廊下の人声だけが微かに聞こえてくる。

「やってみるかね。最後の手段だが」

組んだ手を解き、老教授が振り返った。

「え？」

うつむいた顔をがばっと上げた九十九に、老教授は微笑んでみせた。

いいかねと、老教授は言い聞かせるように九十九へ話し始めた。

「CAEBVもAIDSと同様、ウィルスによるリンパ球への攻撃の結果生じる免疫系の異常反応による症例だ。抗原（抗体のもとになる物質）により活性化したキラーT細胞などは普通、一定の時間ののちアポトーシス（自死）により消滅するが、これらの疾患では残留し続け人体に害を成す。異常抗原により不死化したT細胞やNK（ナチュラルキラー）細胞を減少させるか除去出来れば生存の確率は高まる筈だ」

「先生、それは」

「造血幹細胞移植。これしかあるまい」

「骨髄移植ですか。しかし彼は既に…」

「そう。日和見感染症を起こしている。併発している各疾患の緩和と移植を同時にこなすのは不可能に近い。だが可能なら、あるいはな。それに問題はそれだけじゃない」

「ドナー（移植適合者）ですね」

「ああ。今から適合者を探すには時間が足りない。可能性が高いのは肉親だが。彼に係累はいるのかね？」

「両親は他界していますが、兄弟がひとりいます」

「そうか」

傷跡がうずき、九十九はそっと胸に手を置いた。

凄まじい斬撃の記憶が蘇ってくる。

あの男がどれだけ弟を気遣っているか、はたで見えても判る。

だが彼の死生感自分達の想像の範疇を越えている。弟を助ける為とはいえ、素直にベットに横になってくれるような男とは思えなかった。

思えないが…

賭けてみるしかない

九十九はソファから腰をあげた。

「やってみるかね」

「先生。御教授、心から感謝します」

「直接の患者ではない者への所見だ。私は自分の言葉に責任をとる事は出来ない。無責任なアドバイスなのを承知の上で、それでもいくか」

「他に道はありませんので」

「先程も言ったように、移植と治療を同時に進めるのはほぼ不可能だ。君自身、それが判っているからこそ私に会いに来たのだろう？」

「はい。しかし先生に御会いして、やはりその方法しかないと確信しました。やります」

「そうか。変われば変わるものだな」

「？」

「キミは昔から負け戦はやらない主義だったんじゃないかかね」

少しの間を置いて、九十九はゆっくり目の前の人物に答えた。

私は、医者ですから

◇

数日ののち、殉と加夏子は病院へ戻った。

殉はそのまま集中治療室へ放り込まれ、加夏子は言葉を交わす事も出来ないまま家へと連れ戻され両親からこっぴどく叱られた。

言い訳も許さない叱責が一晩中続き、やっと解放されたのは夜が白み始めた頃であった。

二階の部屋へと戻り、ぼうっと明るい窓の外を見ながら、加夏子はいいようのない想いとらわれていた。

哀しみ

悦び

後悔

怒り

希望

絶望

どれも違う。

ただ呆々と広がり、自分を包み込んでいる。

暖かいような、冷たいような、不思議な想い。

あるがままって、こういうことなのかな

想いのたけをぶつけてきた。

思い残したことなどなかった。

この先の結末は、もう意味を成さなかった。

ふたりで、いきた

だから、ふたりで…

机に頬をつけ、まどろみのうちに加夏子は眠りへと落ちていた。

◇

同じ日。東京、北千住の雑居ビルの一室。

額に汗しながら室内のレイアウトを変える真山の顔は不満気だった。

いたい放題の北山の注文、いや指図がエスカレートしてゆくたびに、汗より血管のほうが多く額に浮かび上がってくる。

「いい加減にしてくださいっ！」

とうとう真山が堪忍袋の緒を切った。

「ワガママいい放題じゃないですか、ちょっとは働いてるモンの事も考えてくださいよっ！」

北山は古びたソファにふんぞり返ったままニヤニヤと真山を眺めていた。

「俺あ怪我人だぜ、でけえ声出すと傷に響くじゃねえか。優しく扱え、やさし〜く、な」

「ったく。怪我なんか口実にしたって北さんの考えはミエミエですって」

「おやおや、じゃ言ってみな」

「『いいチャンスだから若造をこき使って鬱憤晴らししてやろう』ってなもんでしょ、どうせ」

「正しくは『アゴでこき使って』だ」

ふてぶてしく笑い、北山が煙草をくわえた。

「たのしいぜ。お前もそのうちやってみな」

「…いつかクロス…」

「ん？ なんか言ったか？」

「いーえ。なんも」

備え付けの電話が鳴った。

「ほれ。ま〜やまくん、電話だぞ！ よい仕事をとってくれたまえよ！」

とりあえず口を縫ってやろうかと本気で考えながら、真山はしぶしぶ受話器を取った。

瞬時に顔つきが変わった。

第五十三章

受話器を握り締め、一言も発することなく彫像のように立ち尽くす真山を見て、いぶかしげに北山が声を掛けた。

「おい、どうした？」

その問いには答えず、やがて真山はゆっくりと受話器を置いた。

何も言わぬままに。

「なんだ？ 誰からだったんだ？ おい真山！」

「…鴉の奴、でした…」

「あんだとっ！？」

北山の顔つきも変わった。

「『約束通り、決着をつけよう』って。果たし合いのつもりなんじゃないか。アイツ意外と古風だな…」

「バカ！ んなこと言ってる場合か。野郎、今度こそ本気でくるぞ。勝てんのか？」

「さあ。負けようとは思いませんが」

「あったりまえだ！ それよか野郎とっつかまえるのが先だろ！ あのじゃじゃ馬ぶった斬ったんだって奴の仕業じゃねえか、おい！ 電話よこせ！！」

「どこにけるんですか」

「とりあえず柴犬のとこだ。かせ！」

机のアドレス帳をひつつかみ柴田刑事の連絡先を探そうとした北山の手を、真山が抑えた。

「なにしやがる」

「…奴、何か今までと違ってました。何てゆうか…サバサバした感じがしましたよ」

「それがどうした！」

「北さん。連絡は待って下さい。いきます」

「なんだって…」

北山が言葉を詰まらせた。

「鴉とは遅かれ早かれ決着をつけなければならない。アイツは僕、裏返しになった僕自身なんです」

しんと静まった面持ちで真山は北山の方を向いた。

「県 中央総合警備保障でSSチームに所属していた時から、鴉との因縁は始まっていた。運命なんて格好いいものじゃないけれど… 僕はあの会社で豪田や酒井、沼田 チーフ、色々な人に出会えた。北さんとも。それが今の僕を作ってくれた。でももし違っていたら、僕が鴉になっていたかも知れない」

「おまえはおまえだ。他の何かになる訳ねえだろが」

「可能性ですよ。アイツは僕の進むかもしれなかった可能性そのものなんです。だから倒さなきゃならない」

「だがな真山…」

「いかせて下さい。場所は晴海埠頭。10時まで待って僕から連絡が無かったら、その時はお任せします」

北山は黙って真山を見た。

変わらぬ顔の裏に、断固とした決意が見え隠れしていた。

暫くの沈黙の後、北山が太い溜息を吐いた。
ジャケットを羽織ると、真山は黙ったままドアを出て行った。

◇

東京。晴海埠頭。
どしゃ降りの中、二つの影が対峙している。
横殴りの雨が辺りの視界を遮っていた。

「お前と初めてやり合ったのがここだ。最初で最後の、狩れなかった獲物。真山、お前と決着をつけるにはここがふさわしい」

怒鳴るように鴉…堀川烈が言った。

「いい～い雨だ。砂漠の雨はケチで気紛れだった、ニッポンてのは悪くない国だな」
「…」

霞む視界の中で、真山はじっと堀川を見ていた。
ククリナイフを手に佇む堀川の姿から、澄んだ殺気が放たれていた。
真山のよく知る、あの黒く澱み折り重なった怨念のような重々しい殺気ではなかった。

「鴉…貴様、何を考えてる」
「？」
「こんな所へわざわざ呼び出してみたり、それに貴様の殺気も。らしくないじゃないか、え？」

堀川は微塵も動かない。

「殺りたきゃ黙って襲ってくりゃいい、それが貴様のやり方だった筈だ。真正面から正々堂々なんてのは俺達SSの流儀じゃない、違うか」
「…俺も、飽きたのかも知れない…」
「なに？」
「なんでもない。さあ、殺ろうぜ」

雨に煙る堀川の姿が、ゆらぐことなく真っ直ぐに近寄ってきた。
雨粒は不思議と堀川の軀にあまり当たってこなかった。

真山は目を剥いた。
斬り捨てられた自分の姿が瞬間、脳裏をかすめた。

◇

どれ位、眠っていたのだろう。
机につっ伏したまま寝ていた加夏子を起こしたのは携帯電話の着信音だった。
外はもうすっかり暗くなっていた。

「もし…もし？」

「お姫サマかい？ 僕だ、九十九だ」

「長官… どしたの？ 殉になにかあったの？」

「その殉君の事なんだが。君のお父上には別途相談したい事もあるが、今は違う。試したい治療法がある。その為には彼のお兄さんの協力が必要なんだ。彼の居場所について君は何か知らないか？ 一刻を争うんだ、知ってる事があったら教えて欲しい」

殉の兄と聞いて、加夏子は一瞬、身体をこわばらせた。

「ごめんなさい。尾道で一度会ってから、ワタシも殉も会ってないんです。どこにいるかも判らない。全然しらないんです」

「そうか」

電話の向こうで、九十九が落胆する様子が伺えた。

…もしかすると、あの人なら…

加夏子は呟いた。

頭には北山の無愛想な顔が浮かんでいた。

◇

都内に入ると天候が激変した。

まるで台風のような豪雨の中を、九十九と加夏子を乗せたクラウンは晴海へと向かっていた。ハンドルを握っているのは恒彦だった。

「先生… 加夏子は置いてきたほうが良かったんじゃないかな」

もう何度目かの愚痴をいいながら、恒彦は前方を睨んでアクセルを踏み続けた。視界は最悪。気を抜けば事故に直結する。

「パパ、ワタシが自分で行くって決めたの。いいから黙って運転にシューチューして」

「しかしなあカナ、お前を斬った奴だぞ、またなにをしでかすか判らんのだぞ」

「その時は私が止めます、清水さん。御心配でしょうが任せて下さい」

「先生が武術の達人だというのは加夏子から聞いています。いますが…」

「奴とは一度戦っています。やりくちは判っていますから」

…

「長官。真山さん大丈夫かしら？ 強いんでしょ、ジュンのお兄さんって」

加夏子の声が曇った。

「強い。もしかすると先輩よりも。僕と先輩の腕の差は殆ど無い筈だ。その僕が奴にはバツサリやられた。殺されはしなかったけどね。マトモにいったら危ない」

「それじゃあ…」

「いいかい。僕らは戦いに行くんじゃない、奴を説得しに行くんだ。それを忘れないでくれ。戦場に立った奴は殉君でも殺すだろう。だから『立たせちゃいけない』んだ。判るね？」

加夏子は小さく頷いた。

「いい子だ。さ、急ぎましょう清水さん」

「おう」

恒彦は更にアクセルを踏み込んだ。

◇

致命傷は負っていなかった。

それでも、かなり深い傷を幾つも受けていた。

堀川の斬撃の速さは真山の反射速度を明らかに上回っていた。

死角を衝く合気道特有の体捌きだけが真山の命綱だった。

だが叩きつける雨が、彼の身体から容赦無く血を流し去ってゆく。
体力とともに。

大きく間合いをとり、真山は息を整えようとした。

荒い呼吸を繰り返しても身体に酸素はとり込まれない。

血が足りなかった。

「そろそろ終わりにするか」

頬の傷から血を流しながら堀川がゆっくりと近付いてくる。

真山のナイフはそれ以外に目立った傷をつけていない。

力の差は歴然としていた。

第五十四章

「腕を上げたとは思ってたが、これほどとはな。今回はいいとこないぜ」

激しく肩を上下させながら真山が言った。

「心配するな。次は無い」

硬玉のような目を瞬くことなく、堀川は真山の前に立った。

「これで終わりだ。なにもかも」

「なにも…かも、だと？」

向き直ろうとして、真山は膝を地に落とした。

足から力が抜けてしまっていた。

道を叩く雨の飛沫が目、口に、容赦無く飛び込んでくる。

「貴様、死ぬ気か」

「死ぬ？ 俺が？」

「蠟燭の最後の輝きって奴だ。命を捨てた者の拳は…剣は、生きようとする者には見切れぬ。俺の師匠がそう言っていた」

「…」

「殉君が死んだら、貴様も死ぬつもりなのか、鴉」

雨がますます強く二人を叩いた。

常人なら目も開けていられない風雨の中で、男達は睨みあっていた。

「俺 は戦いだけを糧に生きてきた。だが何の為に、誰の為に生き残ってきたのか… 今までそんな事は考えたこともなかった。答えは1つだ。殉のため、殉を生かす 為。それしかない。お前の言う通りだ。殉が死ねば生き残る理由も消える。死ぬ気は無いが結局は同じことだ。生存への執念を持たぬ兵士はとっとと死ぬしかない。それが戦場の掟だ」

堀川の声には何の抑揚もなかった。

ただ淡々と事実だけを告げている…そんな感じであった。

「その前に、お前との決着だけはつけておかねばならない。ただ一度、俺が敗北を喫した男。真山 悟。愉しかったぜ」

ククリナイフがゆるりと頭上に降りあげられるのを、真山はただ見ているしかなかった。

反撃する力は残されていなかった。

ここまで、か

悪い人生じゃなかったな

目を閉じ、闇の訪れを待った。

その時だった。

豪雨に割り込むかのように、けたたましいクラクションの音が響き渡った。

「真山さんっ！」

「先輩っ！！」

二人の脇に急停車した白のクラウンから、2つの人影が叫びながら飛び出してきた。

「九十九…加夏子ちゃん…どうして…」

「まだ死なれちゃ困るからですよ、二人ともね」

あっという間にずぶ濡れになりながら、九十九は真山を抱え立ち上がらせた。

「何しにきた。邪魔するなら3人とも斬る」

堀川の声は氷の冷たさだった。

「勝負ありだ、堀川さん」

「…どけ…」

真山を支えながら、九十九は堀川と対峙した。

激しい雨に顔を歪めながら、それでも目線は逸らさなかった。

「貴方は真山悟に勝った。剣を降りおろす必要はない」

「どけ、とiotてる」

「ここからは別の戦いだ。貴方の戦場は終わったんです、おやめなさい」

「戦いがいつ始まり、いつ終わるか、何を勝利と呼ぶのか。誰にも判らん。剥き身の命を戦場に晒した者だけがそれを決める事が出来る。しゃしゃり出れば流れ弾に当たり死ぬだけだ。アンタの事だよ、先生」

無表情なまま、堀川のククリナイフが雨を裂く。

状況終了おおお！！！！

九十九の大喝が、堀川の五体に文字通り炸裂した。

ククリの切っ先が彼の頭で止まった。

三人はそのまま動かなくなった。

「聞いて！ ジュンが助かるかも知れないの！ アナタの骨髄を移植すればジュンを助けられるかもしれないのよ！ こんな所でチャンバラやってる場合じゃないの、お願い、一緒にきてっ！」

動かぬ姿勢のまま、堀川は目だけで加夏子を見た。

「移植か。肉親が一番、適合の可能性が高い。だが100%じゃない。勝算の見えない戦いに興味は無い」

「バカッ！ なにカッコつけてんのよ！ たたかいじゃないの！ 自分の弟の命がかかっているの！ 助けたくないの！？」

「人はいずれ死ぬ。早い遅いか、違いはそれだけだ。俺は忙しい、邪魔するな」

「ふざけんなあ！！」

ずかずかと歩み寄った加夏子が三人の間に割って入ると、切っ先をつかんで引きずり降ろした。

堀川は目を剥いて加夏子を見た。ナイフを引き抜こうとはしなかった。

「戦場だの勝算だの、アナタ自分に酔ってるだけじゃない！ そりゃ世界中どこいってもセンサーしてるわよ、だからなに！？ 誰がアナタみたいな弱っちい男に戦ってくれて頼んだよ！ アタシを斬って、真山さんを斬って… 刀もってなきゃマトモでいられないフニャフニャ男がエラそうに人の生き死になんて口にす るんじゃないわよっ！！」

運転席を出て飛び出そうとした恒彦。

庇おうと足を踏みだしかけた九十九。

傷だらけの真山。

その場の全員があっけにとられて加夏子の啖呵を聞いていた。

おれが…

よわい、だと？

「そうよ！ よわいわよ！ ジュンが死ぬかも知れない、そう思ったらいても立ってもいられなかったんでしょ！？ だから真山さんと呼び出した。この国で、アナタみたいな人と気楽に殺し合っちゃってくれるのなんて真山さんしかいないから、そうでしょ！」

「……………」

「助けりゃいいじゃない！ おとうとなのよ、何が恥ずかしいのよ！？ 何十人、何百人も殺してきて、たったひとりの弟だけ助けようとするのがそんなにみっともないことなの！？ いのちってさ、助けなきゃドンドン死んでっちゃうのよ！ そんな事アタシよりよく知ってるでしょ！！」

洪水のような加夏子の言葉が、豪雨と重なり堀川を叩いた。

誰も動かなかった。

濡れネズミが5匹、埠頭の中程で固まっていた。

堀川の腕から力が抜けた。

加夏子が切っ先を離すのと同時に、鈍色の山刀は小さく飛沫をあげて路面に落ちた。

「…」

堀川が天を仰いだ。何か呟いている。

誰の目にも映らぬ者へ、彼は語りかけていた。

アリ…

やられたよ

こんな小娘に、いいように怒鳴られちゃった

水煙の向こうに影が浮かんだ。

レトウよ

恥じることはない

この世の始まりから、女は強きものなのだ

ケロイドに覆われた醜い顔が苦笑した。

男を産むのは女だ

この世で一番、大地に近き生き物なのだ

わしらにはかなわん。そんな事も知らんのか

やかましい、とっとと成仏しろと堀川が呟くと、影は消え、また別の男の姿が浮かんだ。

迷彩服の若い男。レンジャー訓練中、狂った教官に惨殺された男だった。

陸上自衛隊時代に堀川の部下だった男。

小隊長

自分は小隊長を信じます

一緒に山を降りましょう、あと少しです

…杉山。俺はお前を守れなかった。

それ以上に殺しの悦びを知ってしまった。

馬鹿な男なんだ。もう憑いてくるな。

堀川の言葉に、迷彩服を纏った若者は満面の笑みで答えた。

自分はいつでも小隊長の命令に従います

あなたは、最高の指揮官でした

影は消え、あとは漆黒の闇に雨が吹き荒れるばかりだった。

「堀川…さん？」

加夏子が、天を仰いだままの堀川に声を掛けた。

「いくか。殉が待ってる。満足したよ、俺は」

顔を降ろした堀川は、誰にも見せたことのない静かな笑みを浮かべていた。

第五十五章

九十九の強い提言で実現した治療法は、無茶を通り越し破壊的行為と言えた。

それが通ったのは、病院のスポンサー的存在の清水恒彦による強力なバックアップがあったからに他ならないが、九十九の恩師にあたる某医大教授による学会の押さえ込みが成功した事も大きい。

骨髄移植のドナーは彼の兄が適合者として上げられた。検査の結果、適合率は90%を超えていた。彼は肝臓の移植も辞さなかったが、負担の大きさを考慮し候補外とされた。

そして。

治療とも呼べない無謀な挑戦が始まり、ひと月と半分が過ぎた。

◇

「帰るわよ」

清水紗季子は傍らの娘に声を掛けた。

厳重に隔離された個室。無菌テントの中の殉は昏々と眠っている。

「うん…」

加夏子はじっと殉の横顔を眺めていた。

「今日は顔色がよさそうじゃないか。肝臓のドナーも見つかったことだし、このままうまくすればひよっとするぞ、加夏子」

清水恒彦はことさらに明るい声で言ってみせた。

「見つかったの!？」

「ああ、カナを驚かせようと思ってな。昨日の夜、九十九先生から連絡があったよ」

「それじゃあ…ほんとうに…ホントのほんとに、ジュンは助かるかも知れないのね!」

「そうさ。彼は加夏子の恩人だ。どんな無理をしても助けたいと思ってる」

「そうよ、カナちゃん。わたしだってパパとおんなじ。この子を助けてあげたいと思ってる」

「パパ… ママ… ありがと。二人の、みんなのしてくれた事、本当に感謝してる」

泣きだしそうになる加夏子の背中を、恒彦が優しくさすった。

「さ、今日は家に帰ろう」

三人は加夏子を中心にして一階ロビーへのエレベーターへと向かった。

「あなた。カナちゃんと先に戻ってて」

「どうした? サキ」

「リハビリ経過の確認書、出すの忘れてたの。私、九十九先生の所までいきます。あちらで記入していきますから、あとからタクシーで戻ります」

「わかった。遅くなるなよ」

恒彦達の姿がエレベーターの向こうに消えると、紗季子の顔から笑顔が消えた。
きびすを返し、医務室のある棟とは逆へと進み始める。

小児病棟の向かい側。
リハビリセンターの方へと。

◇

どうなんだろうか

一日のメニューが全て終わったりハビリセンター。
今夜はデートだという若いトレーナーから引き継ぎを受けた銀さんは、器具を所定の場所に戻しながらぼんやりと殉のことを考えていた。

確かに悪くなってはいないようだ
だが良くなってるようにも見えねえ

骨髄移植はうまくいってるようだが、問題は他にも山ほどある
弱りきった内臓、衰えた体力
この先の手術に坊やの身体は耐えられるだろうか

やらなきゃ死ぬのは確実だ
九十九の奴には、素人にゃ判らない勝算があるんだろう

だがなあ
なんかいい予感がしねえんだよな

それにしても九十九の奴め
精神科バカー代だとばかり思ってたが、外科もやりやがるとは
底の知れない奴だ

片づけを終え、照明を落として振り返った銀さんはギクリとして動きを止めた。
出入り口の灯りを背に、小柄な影がひっそりと立っていたのだ。

「だれだ」

こわばった声に答えるように、影はすうと歩み出た。
窓から差す薄明かりが影に色をつける。

「アタシよ、久我さん」
「…サキ…？」

淡い藍色のワンピースを身に着け髪を降ろした紗季子は、別人のように銀さんの目に映った。

いや
別人じゃない
あの頃の…
サキだ

「なにかようか」
「アナタに話があるの」
「改まってなんでい。旦那とお嬢と三人でくりゃいいじゃねえか」
「二人きりで話したかったの…ギン…」

銀さんはもう一度ギクリとした。
思い出す事も無くなっていた遠い昔、自分をその名で呼ぶ女がいた。
街本紗季子。
今は、清水紗季子。

「…思い出しだぜ。まだ持ってたんだ、その服」
「アタシ体型変わらないんだ、あの頃からずっと」
「懐かしい呼び方だな。ちょっとニヤけちまったぜ」
「顔、青いわよ」
「…」

更に数歩、足を進めた紗季子はすれ違うように銀さんと肩を並べた。
暗いリハビリルームの奥へ向け話し出す。

「カナちゃん…あの子、隠してる」
「隠してるって、何をだ」
「買い置きの手拭きが減ってない」
「?どういう意味だ」
「生理、来てないみたいなの」

一瞬、判らなかった言葉の意味が、じわじわと銀さんの脳裏に広がっていった。

「おい、それって…」
「ええ。たぶん」

足元の床がぐにやりとするのを感じ、銀さんは小さくよろめいた。

「なんてこった…沼津に行ったあの時か…しまった…」
「しまった？」
「情けが仇になっちゃった。こうなる事は判りきってた筈なのに…俺は見て見ぬふりを…」
「何か勘違いしてない、ギン」
「かんちがいだって?! どうすんだよ! 二人ともまだ子供だぞ! 一人は死にかけてんだぞ! どうしようってんだよ!!!」
「わからない」
「ほらみろっ! オマエだってそんなじゃないか!」

狼狽し切った銀さんが紗季子に詰め寄った。

「わからないのは、あのヒト…恒彦さんよ」

下からひたと見据える紗季子の目。

掴みかからんばかりだった銀さんの勢いが止まった。

「確かに、あのヒトは彼に恩義を感じてる。だから治療費も負担している。義理堅いのね。昔のアンタと一緒に。でもね」

向きを変え、紗季子が窓へと近付いた。

背を向けたまま話し出す。

「あのヒトはカナちゃんを溺愛してる。事実をありのまま受け止められるかどうか、アタシには判らない」

「…そんな話されたってよ、俺にだって判んねえよ…」

「男ってみんなそうよね。だらしない」

窓を開けると、紗季子はバッグから煙草を取り出し火をつけた。

「たぶん墮ろさせるわ、あのヒト」

「…」

「何も言わないのね」

「なに言えってんだ。それで清水さんの気が済むならそうすりゃいい。お嬢だってまだ若いんだ、よりによって今、子供なんて…」

「やっぱり勘違いしてる、ギン」

外に煙草を捨て振り返った紗季子の目には、火のようにゆらめく光が灯っていた。

ツカツカと歩み寄ってくる。

「アタシは、カナちゃんの好きなようにさせてあげるつもり。産みたいなら産ませてあげる」

「オマエ…」

「あのヒトが反対してもね。あの子にはあんな思いはさせたくないの」

「あんな思い…って、そりゃどういう…」

紗季子は最後まで言わせなかった。

右目の辺りに火花が散って、銀さんはうめきながら片目を押さえた。

「なにしゃあがる！」

小さな拳を突きだしたままの紗季子に怒鳴った。

「アタシ墮ろした。7年前、勝手に死ににいった男の子供をね！！」

第五十六章

「な…ん…だと…？」

銀さんは今度こそ声が出せなくなった。

凍りついた彼のアゴを、今度は紗季子の左の拳が突き上げた。

大人と子供ほど体格差がある筈なのに、銀さんはもんどりうって吹っ飛び床に転がった。

「…どうしようもなかった、一人で育ててく自信も勇気もなかった、頼れる人なんか誰もいなかった…アタシひとりぼっちだったんだ！」

両手の拳をぶるぶると振るわせながら銀さんを見下ろす紗季子の顔半分を髪が覆っている。

「でも忘れた。忘れようわすれようって、毎晩々々ベッドかきむしって、枕を噛んで…やっとなんか、やっとなんかここまで来た。やっとなんかアタシにも家族が出来た。それなのにこんな事になって…アタシまで現れて…アタシがどんな想いで過ごしてきたか、ギン、あんたに判る！？」

尻をついたままの銀さんは、もそもそと向きを変え、床に両手をついて紗季子を見上げた。

「…すまなかった。何も知らなかった。バカだ、おれは…」

それきり二人とも何も言わなくなった。

怖いぐらいの静寂の中、壁の時計の秒針だけが規則正しく小さな音を響かせていた。

少しして、紗季子がゆっくりとしゃがみ込んだ。

拳を開いた手で銀さんの顔をそっと包む。

「バカよ、大馬鹿よ！ …その大馬鹿野郎が忘れられないアタシも…バカ、よ…」

「サキ…」

包み込むように紗季子が銀さんを抱いた。

「あの子を見ていて思い出したの。あの頃、未来なんて見てなかったって。その日その日を必死に生きて…でも楽しかった。安定とか安心なんて何処にも無かったけど、ギンもアタシも生き生きしてた。ちっちゃなボロマンションの部屋が、とってもあったかかった…」

肩口が濡れていた。

床についていた自分の手が持ち上がり紗季子を抱きしめるのを、銀さんは不思議なものを見るような目で眺めていた。

何も考えられないまま紗季子を押し倒し覆い被さった。

形のいい唇に貪りつき、むちゃくちゃに吸った。

紗季子は拒まなかった。

二匹の蛇がいつ果てるともなく絡まりあった。

荒い息のまま身体を離し、スカートの裾に手を差し込もうとした。
目を閉じ、なすがままにされる紗季子の顔が目前にあった。

手が、止まっていた。

銀さんは紗季子の頬をそっと撫でた。

「サキ…」

軽く叩く。紗季子がうっすらと目を開けた。

「目を覚ませ…清水紗季子」

紗季子が、今度はしっかりと開いた目で銀さんをじっと見た。

「オマエにゃいるじゃねえか。しっかり支えてくれるオトコが。血が繋がってなくても慕ってくれる娘が」

「ギン…」

「こんな馬鹿に抱かれようとしてるオマエを見たら判っちまったよ。待ってる奴がいる女に、俺は手なんか出せない…ってな」

そんな資格もないだろと、立ち上がった銀さんは呟いた。

「よそうや。あの二人に昔を重ねるのは。アイツらはこれから乗り越えていかなきゃならない。それを支えていくのが、俺達の『明日』だ」

「…」

「オマエにゃ何の償いもしてやれない。どれだけ詫びても、オマエが味わってきた苦しみをなかったことになんか出来ねえ。だからせめて、俺は加夏子ちゃんを支える。あの子を支えようとしてるオマエを支えてやる。何が出来るかわかんねえがな」

紗季子も立ち上がった。

乱れた襟と胸元を直し、両手で髪を整える。

目は伏せたままだった。

「もう帰れ。家族が待ってる」

「…うん…」

「清水さんがどうするかは判んねえが、オマエたちが本気なら、悪いようにはしないんじゃないかと思う。手に余ったら、俺も呼んでくれ」

紗季子がやっと顔をあげた。

「やってみるわ。その前にカナちゃんとじっくり話さなきゃならないけど」

「大丈夫さ、オマエなら、きっと」

紗季子の背に手を添えながら、銀さんはリハビリルームの出入り口まで彼女を連れていった。

「何かあったら連絡くれ。飛んでくから」

「ありがとう、ギン。…ごめんなさい、アタシ…」

「それ以上いな。閉めらんなくなっちまう」

銀さんはスライド式のドアを閉めた。

完全に閉まる寸前まで、紗季子の視線は銀さんの脳裏に焼き付き続けた。

しばらくの間、銀さんはドアに背を預け天井を見上げていた。

獣の断末魔のような呻きが口から漏れてくる。

う…

う…ぐ…

膝から崩れ落ちた銀さんは、自分の腕に噛みついて嗚咽を押し殺そうとした。

止まらなかった。

余りにも多くの想いが、いつ果てるともなく彼をいたぶり続けていた。

◇

無菌テントの透明なビニール幕越しに、加夏子と殉は視線を交わしあっていた。

目を覚ましていても、殉は言葉を発せる状態ではなかった。

生きている事が奇跡に近かったのだ。

だが、二人に言葉は必要なかった。

話しがあれば『想う』だけでよかった。それだけで殉には『心の声』が届く。

加夏子が失語症から回復するまで、二人はずっとそうやって想いを交わし続けてきたのだ。

「(……)」

先程まで屈託なく話していた加夏子の『声』が途切れ、殉の表情に不安がよぎった。

ど

う

し

た

の

酸素マスクの下で、殉の唇がゆっくりと1つずつ形を作る。それで十分に伝わっていた。

「(ワタシ、ジュンに言わなきゃならないこと、あるんだ)」

な

に

「(ゴメン、もうチョットまって。とっても大事なことなんだ、だから…)」

マスクの下で、殉がうっすらと微笑んだ。小さく首を左右に振ってみせる。

い

い

よ

ま

っ

て

る

それだけ伝えるのにも体力を消耗したのか、息つくような表情から目を閉じた殉はすぐに眠りに落ちた。殉の寝息を確かめ、加夏子は病室を後にした。

昼過ぎの病院の廊下は人もまばらで、どこか空虚だった。

昨夜の事を思い出しながら、加夏子はぼんやりと歩いていた。穏やかに問い詰めてきた紗季子に、あの事を告げたのだ。加夏子の心は決まっていた。

命を繋げる… 殉と、自分と、もうひとつと
誰が何と言おうと、どれ程の困難があっても

でも不安だらけだった。
自分にどこまでやれるか、全く自信などなかった。
紗季子は全部を見通していたかのようだった。
そして加夏子を助けると言ってくれた。

でも、パパは…

最初で最大の難関だった。

どうやって切り抜ければよいか見当もつかなかった。

いつの間にか玄関を出て中庭の芝生まで来ていた。ベンチに座ると溜息がひとつ出た。

空は綺麗に晴れ渡っている。

そのままぼうっと仰いでいた。

ふと、地面が揺れているような感じがした。

第五十七章

一瞬、地震かと思ったが、そうではなかった。

脈打つように規則正しく大地が揺れる。

心なしか近付いてくるようだった。

ベンチの板をぎゅっと握りしめながら、加夏子の心に引っかかってくるものがあった。

あれ？

どこかでこんなこと、あったような

……

地響きが後ろで止まった。

ハッとして思い切り振り返った。

「おね～えちゃん」

「うそ…どうして…」

ふらりと立ち上がった加夏子は、一歩二歩、歩いたと思う間に走り出した。

目の前の肉の壁に身体ごとぶつかり、身体じゅうで抱きついた。

「ヨシオ！ ホントにヨシオだよねっ！？」

「ウン、そだよ。おねえちゃん、あるけるようになったの？」

「そうよ、歩けるようになったんだよ！ ヨシオやみんなのおかげで！！」

佐野碧を追って尾道へ行った加夏子を、衣笠恵美子の依頼でさらったゴロツキ漁師達の仲間。

その人間離れした巨体に無垢な子供の心を宿し、加夏子の脱出に手を貸そうとして実の父親に鉬を打ち込まれ重傷を負った少年。

どこから見ても少年には見えないが、これで14歳の、見かけよりはるかに優しい心を持った加夏子の恩人であった。

尾道を去る時、最後の最後まで気にかかっていた存在…

加夏子は涙が溢れて止まらなかった。

「よかったね、じぶんであるいてゆうえんちとか、いけるんだね」

「うん！ うん！！ でもヨシオ、どうしてここにいるの？ おなかのキズはいいの？」

「だいじょうぶだってセンセイがいった。でね、センセイがいっしょに東京にきてっていったんだ」

「そのセンセイって…」

「僕だよ、お姫サマ」

いつの間にかそばに来ていた九十九が、ヨシオの後ろから声をかけてきた。

「長官」

「驚くほど傷の回復が早くてね。父親が逮捕されて、彼は施設に引き取られる筈だったんだが…まあ、無理だったのは判るよね。それで僕が身元引受人になって、乃木修司と一緒にここへ転院させたのさ」

衣笠恵美子の恋人だった乃木修司は、佐野碧のサイコインでアルツハイマーから回復したものの精神に異常をきたしていた。九十九は彼の担当医でもあったのだ。

「しかし… 偶然っていう名前の神様はホントにいるんだなあ」

九十九が呟いた。

◇

難しい顔で押し黙る恒彦の前に、これまた難しい顔の紗季子が座っていた。
清水家のリビング。どんよりと重苦しい空気が澱み漂っていた。

「こんなことは許さんぞ、サキ」

「許す許さないの問題じゃないのよ、あなた。命の問題なんです」

「『命の問題』って切り出せば俺がスンナリ引っ込むとでも思ったか」

「そうじゃなくて」

ダンッ！！

ごつい拳をテーブルに叩きつけ、恒彦は紗季子の口から出かかった言葉を潰した。

「二人はいくつだ？ 結婚してるのか？ いや結婚出来るのか？ 未成年のくせにやることやって『子供ができました』だと！？ 病人だからってな、やっていいことと悪いことの区別くらいつくだろうが！」

「そんな言い方しなくても…」

「盛りのついた犬猫じゃないんだぞ！ 判らんのか、カナもあの子も！！」

「落ち着いてください、あなた」

「落ち着いてるわいっ！！」

………

「まともにお話できそうもありませんね。わかりました、ワタシも言いたいことだけ言います」

目を細めた紗季子が淡々とした口調で告げた。

「あの子は産むつもりです。ワタシはあの子のしたいようにさせてあげるつもりです。あなたが反対なさるなら、あの子を連れてこの家を出ます」

「…いま何といた」

「ここを出て、加夏子と二人で暮らします。蓄えならありますから」

「そんな事は許さんぞっ！」

「だから、許す許さないの問題ではないとさっきも言いましたよね」

「おまえ自分が何を言ってるのかわかってんのか！？」

「よくわかっています」

「何故だ？ 何故そうなる！？ おまえは加夏子が可愛くないのか！ あの歳で子供なんて、どう考えたっていい訳ない

だろ！ 普通の親なら反対するに決まってるじゃないか！！ それともアレか、後妻のオマエにやたいした事じゃないってのか！？」

紗季子の顔が能面のように無表情になった。

恒彦は瞬時に、自分が決して言うてはならない事を口走ってしまったと悟ったが、もう手遅れだった。

間の抜けた呼び出し音が電話から響いた。
立ち上がった紗季子が受話器を取り上げる。

「病院からです」

受話器を脇に置き、紗季子は黙ったまま奥へと消えた。

◇

山の手の住宅街へ向かう坂道を、異形の大男がズシズシと登っていた。

ゆうに2 mを超えているであろう巨体。
異様な短足の上に映画のハルクのような筋肉だらけの胸、腹、腕。オマケ程度に乗った頭。
肩には女の子を座らせていた。

道行く人は例外無く振り返り、呆れた顔で見上げていた。
映画の撮影か何かと勘違いして写メする者もいた。
キングコングというより、まるで巨大蟹の逆襲とでもいった風情であった。

加夏子は降ろしてくれと何度も言ったが、当のヨシオは点のような目を細めニコニコしながら地響きを立て歩き続けた。その後ろをニヤけた九十九がついてゆく。

「いいなあ、ラクチンで。この坂、けっこうキツイよお～」

いつものC調言葉で九十九が加夏子に話しかけた。

「じゃあ交代しよ」
「乗ってるのはヨシオくんだからなあ～」
「交代してください！ させてくださいっ！ おねがいっ！！」
「君の為にはいいことさ」

加夏子の悲痛な叫びを無視した九十九が前に回り込んだ。

「お腹に負担はかけない方がいいだろう？」
「え…」

加夏子の顔が青くなった。

「長官…知って、るんですか…」

「ある人から聞いた」

「誰？ ママ？」

「違う」

「じゃあ…」

「わけあって名前は言えない。君を見守っている大人の中の一人だとだけ言っておこう」

「誰にも言ったことないのに。ママは気づいてたけど」

「大人をナメんなよ」

九十九が両手でピストルを形作ってみせた。バンバンと撃つ仕草をする。

「僕は賛成も反対もしない。必要な処置や手配を依頼されれば動くだけだ」

「…ごめんなさい…」

「あやまることじゃないさ。他人のそういう事には興味を持たないようにしているんだ」

「どうしてですか？」

「精神科医としての心得、かな」

九十九が気取ってウィンクしてみせた。

「センスとおねえちゃん、なにはなしてるの？ ボクわかんないよ」

「ゴメンゴメン！ ヨシオ、あのね…」

「このまま家まで乗っけてって、て事さ。ヨシオくん」

「ちょっ、長官っ！」

「ウン、いいよ。おねえちゃん、とっても軽いし。ボクだってラクチンだい！」

ヨシオの歩幅が更に増した。

第五十八章

「なんだ、あれは？」

恒彦が啞然として呟いた。

清水家の前。迎えに出た恒彦の目に、ゴジラのごとく歩んでくる巨人の姿が飛び込んできた。遅れて出てきた紗季子も一瞬目を剥いたものの、氷のように冷たい表情は変わらなかった。

近くまで来ると、ヨシオは加夏子をそっと肩から降ろした。

「パパ…ママ…その、ただいま…」

「何やってんだ！ そのデカいのは誰だ！？ 早く降りてきなさいっ！」

一歩二歩、加夏子が二人の方へと歩み寄る。

「あの…あのねパパ…」

「カナちゃん。パパにはワタシから話をしました」

抑揚の無い声で紗季子が告げた。

「そうなんだ」

恒彦はずんずんと加夏子の前まで来ると、やおら頬を平手打ちした。

ばんっ

加夏子が大きくよろけ転びそうになった。

ヨシオが、巨体に似合わぬ敏捷な動きで手を差し伸べ彼女の身体を支えた。

「…墮ろせ…」

「パパっ！」

「一緒に病院へ行ってやる。今なら間に合う。さ、いくぞ」

加夏子の手を引こうとした恒彦の身体が宙に浮き上がった。ヨシオが無造作に引き上げたのだ。

100kg近い恒彦の襟首を掴み片手で持ち上げてみせたヨシオはさながら大魔神であった。

「おじさん、とーちゃんとおんなじだ」

「なっなっ、何なんだお前は！？ 離せ、離さんかコラッ！」

「とーちゃんってみんなこどもをイジメるのかよ？ なぐったり銚うってきたりするのかよ？ とーちゃんなんてイラナイヤッ！ どっかいっちゃえ！！」

ヨシオが恒彦を放り投げた。

大柄な恒彦の身体が玩具のように宙を飛び、向かいのフェンスにぶち当たって落ちた。

殆どワイヤーアクションにしか見えないほど冗談めいた光景だった。

さすがの恒彦が、尻を落としたまま毒気を抜かれた顔でポカンとヨシオを眺めていた。

詰め寄ろうとするヨシオの前を、九十九が塞いだ。

「ヨシオくん。あのヒトはおねえちゃんをイジメたんじゃないよ」

「でもぶった！ オンナのゴぶったりしちやいけないんだよ！ かあちゃんだっていったもん！」

「おねえちゃんはね、叱られただけなんだ」

九十九の眉が曇り、紗季子の表情が動いた。

「おねえちゃん、なにかわるいことしたの？」

点のような目をすぼめてヨシオが九十九に聞いた。

「わるいことじゃない。でも心配させた」

「しんぱいって、なにを？」

「…清水さん」

九十九がヨシオから視線を振った先に居たのは、恒彦ではなかった。

「ヨシオさん…っていうのね。加夏子がお世話になりました」

「おばちゃん、だれ？」

「加夏子の母です」

「おねえちゃんの…かあちゃん…」

紗季子はヨシオを見上げながら話を続けた。

「おねえちゃんね、赤ちゃんがいるのよ」

「あか…ちゃん？」

「そう。赤ちゃん。おねえちゃん、お母さんになるの」

「おねえちゃん、かあちゃんになるんだ。すごいやっ！」

すごいを連発しながらヨシオが跳ね回った。

ちょっとした地震のようだった。

慌てて紗季子がヨシオを制した。

「お願いだから飛ぶのをやめてちょうだい」

「だってすごいじゃん！ おねえちゃん、おねえちゃんなのにかーちゃんになるんだよ！ すごいよ！」

「聞いて！ おねえちゃんのパパはね、お母さんになるのに反対なの。だから怒って叩いたの」

「え？ だって、あかちゃんがいるんでしょ？」

「誰にでもお母さんになれる訳じゃないのよ。ちゃんと大人になって、ちゃんと子供を育てられるようになって初めてお母さんになれるの。おねえちゃんはまだ子供なの」

飛び跳ねるのを止めたヨシオの足に、紗季子がそっと触れた。

「じゃあ、どうするの？」

「おねえちゃんはまだこれから、大人になる勉強を沢山しなきゃならないの。赤ちゃんの面倒ばかり見ていられないのよ

。だからワタシが手伝ってあげる」

「おばちゃんが？」

「そうよ」

「おばちゃん、またかあちゃんになるんだ」

「え？」

「おねえちゃんと、あかちゃんと、ふたりのかあちゃんになるんだよね。おばちゃんもすごいや！」

ヨシオの言葉に、紗季子がふっと微笑みを漏らした。

そのまま尻餅をついている恒彦へ声を掛けた。

「『二人のかあちゃんになる』ですって。ワタシまた親になるのよ。それも二度とも自分のお腹を痛めた子じゃない。一人も二人もおんなじじゃないかしら？」

恒彦はただ、無然として聞いていた。

◇

玄関口で見送る加夏子達に、九十九は穏やかに微笑みかけた。

「まあいろいろあるでしょうが、いちおうは収まったみたいですし、私はここで失礼させていただきます」

「長官、ヨシオ、ありがとう」

加夏子は深々と二人に頭を下げた。

「…にしても、この大男、いやヨシオくんか、彼が肝臓移植のドナーとはな…」

なんだかすっかり勢いの失せた恒彦が、加夏子の後ろからぼそりと声を掛けた。

「偶然という名の神様って、ほんとにいるようですよ、清水さん」

病院で加夏子に言ったのと同じ事を九十九が言った。

微かに振動音がした。

「九十九です」

ポケットから出した携帯電話を耳に当てた九十九の表情がみるみる険しくなった。

「長官、なにかあったの？」

「殉君の容態が急変した」

「えっ！」

「すぐ戻らなきゃならない。君は家で待っていなさい」

「なにいつてるの！ いくわよっ！！」

「駄目だ」

「なんで！？」

「自分がどんな身体か、言わなきゃわからんかね」

何か言い返そうとした加夏子が言葉に詰まった。

その細い肩をぽんとひとつ、九十九が叩いた。

「僕に任せて。大丈夫、必ず何とかする」

「ちょうかん…」

「そんな顔をするんじゃない。君はもう一人じゃないんだ。強くなりなさい」

「…」

「じゃ、失礼します」

九十九は来た道を走り出した。

「ぼく、おねえちゃんといっしょにいるよ」

巨体をすぼめるように前かがみになったヨシオが、上から加夏子を見下ろしていた。

「ぼくのおうち、まだきまってないんだって。センセイいそがしいってあんまりあいてしてくれないし」

「ありがとう、ヨシオ。いてくれていいのよ、うちに」

「ホント？」

「うん。今はワタシも待ってなきゃいけないし、ヨシオがいてくれたら心強いわ。いいでしょ？ パパ」

「あ…お、おう、俺はいいぞ。サキ、お前はどうか？」

紗季子がクスリと笑った。

「調子いいわね、あなたったら」

「そんなことはない」

「いいわよ、またあなたが手をあげるようならヨシオちゃんにやっつけてもらうから。ねっ」

「うん！ いいよ」

「むうう…」

恒彦が思い切り渋い顔をした。

第五十九章

高い影、低い影。

二つの人影が昏々と眠り続ける殉の傍らに立っていた。

「おにいちゃん、なにもいってくれない…」

佐野碧は無菌テントの向こうをじっと眺めながら呟いた。

「なにも聞こえないのか？」

堀川烈が碧に訊ねた。

「時々、寝言みたいな『声』が聞こえるけど、それだけだよ。ウチがどんだけ話しかけてもダメ」

「そうか…」

「おじさん、おにいちゃんのおにいちゃんなんだよね？」

「ああ」

「もし、もしもだよ、殉にいちゃんが…しんじやったら…おじさん、どうする？」

つぶらな瞳をいっぱいに広げて、碧は堀川を見上げた。

「悲しむだろうな。辛くなるだろう。そしてこの国を出る。もう戻る事もないだろう」

「泣かないの？」

「たぶん」

「どうして？ おじさんの弟なのに」

「もう流す涙がない」

「なんで？」

ポケットに突っ込んでいた片手を抜き、堀川は軽く碧の頭を叩いた。

「大人になっても泣けるのは強いひとだ。弱い奴は泣き過ぎて、大人になる頃には涙が枯れちまう」

「おじさんは、じゃあ弱いひとなの？」

「そうらしい。こうはなるなよ、お嬢ちゃん」

慌ただしい足音に堀川が顔を向けると、白衣の男が足早に近付いてきた。

「堀川さん」

「オマエか…」

九十九は素早く目礼すると、堀川の脇を抜け病室の奥へと入っていった。

いいんですよ、逃げて

刑事には何も言ってませんから

擦れ違いざまに九十九が堀川へ耳打ちした。

彼は何も返さなかった。

「…あれ？」

不意に碧が眉をひそめた。

「どうした」

「いま…なにか…聞こえた」

「殉がなにかいったのか？」

「…なんだろ…なまえ…おねえちゃんの名前？」

「清水加夏子と呼んでるのか？」

「ちがう…誰？」

碧が耳を覆いながら首を傾げた。

◇

幾台かのモニターに囲まれたデスク。

若い医師が情けない顔をしてそれらを睨んでいた。

「九十九…」

部屋に入ってきた九十九にすぎるような声をかける。

「泣き言は後だ。状況は？」

「芳しくない。肝機能はいい数値じゃないが今のところは落ち着いている。肺炎も抗生物質で抑えていたんだが突然、意識を失った」

「…脳、か。MRIは？」

「俺も同じことを考えた。今、技師がこっちへ向かっている」

「抗凝固剤は」

「減らしていた。あれだけ弱っている患者には投与にもバランスが必要だからな」

「血栓だとしたら…」

「卒中と同じだ。回復は難しいだろう」

「とにかく、今は出来るだけの事をやろう」

看護師が来て、MRIの準備が出来たと告げてきた。

九十九は若い医師の背中をぽんと叩くと一緒に部屋を出た。

◇

夜が来て、夜が更けた。

紗季子はそっと加夏子の肩に毛布を掛けた。

病院からの電話を待ちながらテーブルに伏して眠ってしまった娘の頭をそっと撫でながら、目の前で胡座をかいている大男二人を眺めた。

ソファを潰してしまうだろうヨシオの巨体を床に座らせ自分も腰を降ろした恒彦は、ぼつりぼつりと喋る彼の身の上話に

耳を傾けていた。

ヨシオは難しいことは話せない。

聞かれれば素直に、だが幼い言葉で答える。

その一つ一つを拾うように恒彦が話しかけていた。

そんな彼の目が腫れているのに紗季子は気がついた。

「あなた…」

「…なんて親なんだ。こんないい子に悪事の片棒担がせて、気に喰わなきゃ銚を打ち込んで…」

「とうちゃん、わるいことしてた。でもボクにごはんいっぱい食べさせてくれた。おこるとひどいことした。でもかあちゃんがいきってた頃のとうちゃん、やさしかった」

「そうか…そうか…」

盛大に鼻をすすり上げた恒彦が、両手で顔をごしごとと擦った。

「どうだ、そろそろお腹がすいたんじゃないか」

「うんっ！」

「よしっ、ご飯にしようじゃないか！ おじさんちはな、おじさんもいっぱい食べるからご飯はうんとあるんだ。好きなだけ食べてっていいぞ」

「ほんとっ!？」

「ああ、料理も美味しいぞ」

目をキラキラさせてこっちを見たヨシオにニッコリと微笑み、立ち上がった紗季子は台所へと向かった。

◇

一週間が過ぎても、殉の容態は変わらなかった。

医師達は意識の回復に期待しつつ肝臓移植の準備を進めていた。

誰もが諦めを隠せなかった。

ただ一人を除いて。

「使いたくない手だが、今のところ他に方法がないんだ。協力してくれるね」

見舞いの帰りに呼び止められた加夏子は、いつになく厳しい表情の九十九に告げられた。

「ワタシに出来る事なら何でもします。でも長官、何をするの？」

「外科的なアプローチは限界だ。残るは僕の専門分野だけだ」

「それって、もしかして」

「彼に『内側』から刺激を与え脳を活性化する。碧ちゃんの助けも借りて君と殉君をもう一度シンクロさせるんだ」

「そんな事が出来るんですか？」

「君達は今までに二度、シンクロに成功している。いわば頭の中に『通路』が出来ている状態なんだ。きっかけさえあれば難しくはない筈さ。脳の器質的欠陥や損傷をサイコインにより克服することは可能だ。乃木修司がいい例さ」

「でもあのヒトは」

「未だに狂ったままだ。リスクは極めて大きい。だがこのままでは、殉君は良くて植物人間、悪ければ生命維持の能力す

ら失ってしまう」

「わかりました。やります」

「ありがとう。バックアップの準備が整うまで半日かかる。実行は明日。いいね」

「はい」

「たぶん、これがラストチャンスになる。頼んだよ」

病院を出た加夏子は、取り出した携帯電話のボタンを押した。

「ママ。わたし」

「カナちゃん、どうだったの今日は？」

「うん。まだダメ。それでね」

今しがた九十九と話した内容を紗季子に話す。

そして、もうひとつのことも。

少しの間黙っていた紗季子の声が、やがてゆっくりと聞こえてきた。

「わかったわ。何かあったらワタシとパパで必ず何とかするから」

「ありがとう、ママ」

「今更なにいつてるのよ、へんなコね」

「尾道で悪い奴らにさらわれて、ヨシオがワタシを助けてくれたとき言ったの、『かあちゃんが二人いるってスゴイ！』って。優子ママが死んじゃった時はもの凄く悲しかったけど、今はホントに感謝してる」

「…いいから。帰ってらっしゃい」

加夏子は携帯を切ると、一度病院のほうを振り返った。

第六十章

無菌テントに横たわる殉の隣りに二つのベッドが運ばれていた。

それぞれに加夏子と碧が横たわっている。

二人とも脳波や心電図用の電極を着け、酸素マスクで口元を覆っていた。

彼女達のバイタルシグナルは部屋の反対側に置かれた数台のモニターに逐次表示されている。

病院服の脇下から、異様に太く伸びたコードが大型の機械に繋がっていた。

蘇生装置だった。

「気分はどうだい？」

ベッドの脇にきた九十九が二人に話しかけた。

「ちょっと息苦しいです」

加夏子が少し引きつった笑顔で答えた。

「ウチ苦手だな…こういうの。ここに来たときのこと思い出しちゃう…」

小さな碧がちいさな抗議を口にする。

「事故のことだね。嫌な事を思い出させちゃったな、ゴメンよ」

佐野碧は列車の脱線転覆事故の被災者で、その時に両親と片腕を失っていたのだ。

九十九はそっと碧の頭を撫でた。

「いま身に着けてもらっているのは全て、君達に異常が生じた際に素早く蘇生・回復処置を行う為のものだ。サイコインは危うい綱渡りだ、どれだけ準備をしておいても慎重過ぎることはない」

「ウチ、おねえちゃんと一緒に殉にいちゃんを連れてくればいいんだよね？」

「ちょっと違う。碧ちゃんには、おねえちゃんが殉君の『心の入り口』に辿り着けるよう道案内して欲しいんだ」

「みちあんない？」

「そうだ。そこから先はおねえちゃんが一人でいく。碧ちゃんは帰ってくるんだ」

「そんな！ ウチもいくよ！！」

「駄目だ。乃木さんのなかに入っていった時、どんな目にあったか思い出してごらん」

乃木修司の名前が出た途端、碧は口籠もった。

尾道での体験は、碧にとってそれだけ過酷なものであったのだ。

「判ったかい。じゃ、始めるよ」

「ワタシたち、これからどうすればいいんですか」

「これから碧ちゃんに催眠誘導をかける。誘導剤を二人に滴下してまず加夏子ちゃんへのサイコインへといざない、君の頭の中の『通路』を見つける。そこからは殉君の能力が君へとシンクロする筈だ」

「『通路』が見つからなかったら？」

「殉君の脳機能が生きていれば必ず見つかる。無ければ、もう彼を救う事は諦めねばならない」

加夏子は唾を飲んだ。

◇

どこかで見たような景色ばかりだった。

自分自身の心象風景なのだから当然なのだが、隣に佐野碧が立っているのが不思議であった。

誘導剤を点滴されて眠りに落ちた。

サイコイン開始。程なく開けた視界に碧の姿があった。

『通路』はあっけない程簡単に見つかった。

以前に比べ随分とまばらになった茨の森が一カ所、木立の中の道のように開け向こうへと続いていた。

「ここ…なの、かな」

つないだ手をぎゅっと握り、碧が不安気な声を掛けてきた。

「何だかあっちの方が広くなってる気がする。きつとここだよ」

「おねえちゃん、ひとりでいくの？」

「センセイがそういってたでしょ。碧ちゃんはここから戻って」

「やっぱりウチもいく」

「ダメだって。おこられちゃうよ」

「ウチだっておにいちゃん連れ戻したいよ。また一緒に折り紙したいよ！ カエルさん作りたいよっ！！」

「碧ちゃん…」

「ウチ、もうヒトがしんじょうのヤダッ！ 絶対ヤダ！！」

少し下をキッと睨み、碧は激しく駄々をこねた。

大粒の涙があとからあとから足元に滴っていた。

「ジュンはおねえちゃんが必ず連れてくるから。ワタシ碧ちゃんに嘘ついたこと、ないよね？」

「…」

「だからお願い、さきに戻って。それにもしここで碧ちゃんに何かあったら、ワタシ…」

「…わかった、かえる…」

「いい子」

加夏子は碧の手を離した。

「ここまでちゃんと来られるかも判らなかったから、おねえちゃんのママに『何かあったら碧ちゃんの面倒をみて』ってお願いしておいたの。だからここから別々だけど、もし帰りに怖い目にあったり、ワタシが帰れなかったりしたら、おねえちゃんのママに会って」

「そんなのやだよお」

まだ泣き腫らした目で碧が見上げてくる。

「ジュンも碧ちゃんも、おねえちゃんにはかけがえのない大切な人なの。だから…ね？」

碧がぎくしゃくと頷いた。

「じゃ、いってくるよ」

ぽんぽんと二つ、碧の小さな頭を叩いた加夏子は、腕の無い肩を愛おしそうに撫でた。

「いちおう今、いっとくね。ありがとう」

二歩三歩後ずさり碧に背を向けると、加夏子は茨の森へ続く道へと足を踏み出した。

◇

加夏子の緊張は少しだけほぐれていた。

九十九が言った通り『通路』はあった。それはつまり、殉の脳がまだ生きているという事に他ならなかったからだ。

きっと大丈夫だ

この向こうにジュンがいる

こんどはワタシがジュンを助けるんだ

かならず…

『通路』をしばらく行くと、茨の森が唐突に途切れ急にだだっ広い場所に出た。

砂漠でも荒野でもない。

上も下も右も左も、本当に何も無い空間。

振り返ってみたが、今しがた歩いてきた茨の森もない。

明るいような、薄暗いような、空虚な場所。

加夏子は殉の『心の中』に辿り着いた事を知った。

◇

あてどなく歩いた。

これだけ何も無い世界で、何をあてにして進めばよいのかわからなかった。

わからないまま、ただただ使命感に突き動かされ加夏子は先へと歩んでいった。

じゅーん！

ワタシよ、いるんでしょー！

へんじして、じゅーんっ！！

どれだけ叫んでも、何の返事も返ってこない。

木霊すらなく、加夏子の声は虚無へと吸い込まれていった。

走り出した。

何処かに辿り着くあてなどなかったが、ぐずぐずしてはいられなかった。

闇雲でいい、とにかく殉を探すんだ

右へ走り、左へ進んだ。

声を振り絞り、手を振り回してみる。

その全てが空振りとなり、手応えの無い手応えとして加夏子を苦しめた。

「おねがいだから何かいって！　じゅん！　まだいっちゃダメだよっ！　アタシここにいるよっ！！」

その時、加夏子は気づいた。

上からか下からか、薄黒い靄のようなものが湧きだしてきて、ゆるゆると辺りを包みこもうとしていた。

生臭い風のような靄。

ここがイメージの世界であることを加夏子は思い出した。

あれはきっと、ジュンの『病』のかたちだ

なら、そこに彼が…

ゆっくりと、しっかりと足を踏み出した。

身体が生ゴミのような雰囲気にもまれる。

視界が暗くなっていった。

その先に。

ぽつんと見えた。人の姿。

立っているような、大の字で倒れているような。

上下左右の感覚が怪しかった。

今度こそ加夏子は全力で走り出した。

第六十一章

走り寄っているつもりだった。

踏みしめていたつもりの地面？がだんだんと柔らかく頼りなくなってゆく。

そのうち沼の中を進んでいるようになった。

暗い靄がヌルヌルと身体にまとわりついてくる。

もどかしいほど距離は縮まらなかった。

水中の人型のように、殉の姿は上下無く漂っていた。

あと、すこし

あとチョット…

もう半分泳ぐように身悶えし続ける加夏子の手が殉の身体に触れた。

瞬間、何かが弾けた。

爆発のようだった。

吹き飛ばされる感覚に、加夏子は思わず目を閉じた。

◇

まっしろだった。

目を開けると一面が白で塗りつぶされていた。

虚無ではないが、『何もない』という事実が辺りを満たしている…そんな感じであった。

殉が立っていた。

着ている病院服も白く、まるで首と手足だけがそこに居るような奇妙な姿だった。

「じゅん」

加夏子は一歩、踏みだそうとした。

膝から力が抜け、その場にへたり込んでしまう。

「え？」

「来たんだね。くるんじゃないかと思ってた。でも駄目だよ、すぐ戻らなきゃ」

優しい目をした殉が、ゆっくりと加夏子のそばまで来て手を差し出した。

「この世界を作っているのもほんの少しの間だけさ。もう僕には力が残ってない。カナが僕の病気に同調しちゃったら大変なことになる。でも嬉しいよ」

差し出された手につかまって、加夏子はかろうじて立ち上がった。

力がでない。

頭がぼうとする。

身体が痛い、痒い、気持ちが悪い。
ひっきりなしに吐き気がし脱力感に襲われる。
力を振り絞らないと殉の姿がハッキリ見えない。
呼吸が苦しい。

その全てが今、殉が味わっている苦痛なのだ。
加夏子は泣きたくなかった。
何も出来ない、してあげられない自分が情けなかった。

「ワタシ、どうしてもジュンに伝えたいことがあったの。いwanaきゃならないことがあったの」
「…ゴメン、知ってたんだ、ボク…」
「!？」
「知ってて知らんぷりしてた。怖かったんだ。僕が死んだあとカナと赤ちゃんが二人きりで残されるなんて、僕には耐えられなかった。だから…」
「だから何も言わずに黙って死のうとしたの？ ひどい！ ひどいよジュン！！」
「カナ…」

加夏子の絶叫に、殉がたじろいだ。

「なに勝手に死のうとしてるの！ 九十九先生だって、アタシや碧ちゃんだって、ほかのみんなだって、ジュンを助けようって必死に頑張ってるのよ！ お兄さん だって骨髄移植してくれた、輸血が足りなくなったら真山さんだって協力してくれた、なのになによ！ なに悟った顔して逝っちゃおうとしてるのよ！！」

半分怒鳴りながら加夏子は叫び続けた。

「ジュンはパパなのよ！ お父さんになるの！ なれるの！ アタシと一緒に赤ちゃん抱くのっ！！ お願い、いっちゃダメッ！！」

イメージの殉が加夏子を柔らかく包み込んだ。
息づかいまで聞こえる殉の身体に、加夏子は抱きついた。
強くしがみつく。

「…逝かないよ、まだ…」

加夏子の髪を撫でながら殉が呟いた。

「僕にもわからないんだ。見ただろ？ この病気。凄い病気なんだ、とてもやっつけられるとは思えない。だからここで、静かに最後の時がくるのを待ってた。でも… みんなが支えてくれてた。僕、もう少し頑張ってみてもいいのかな？」

殉の胸のなかで加夏子が激しく首を上下させた。

「生きようとしていいのかな？」

顔をあげ、殉の唇に重なった。
暖かった。
言葉はいらなかった。

長いキスが終わり、加夏子は濡れた瞳で殉を見上げた。

「…約束は出来ない。でも僕達、結婚しよう」

「嬉しい。アタシ待ってる、殉が戻ってくるまで。ずっとずっと待ってる、二人で」

「辛くないかい」

「大丈夫、アタシだって強くなったんだよ。いつまでも待てる。だから必ず戻ってきて」

「ああ、かえってくるよ。きみたちの…君と美幸の所へ」

「みゆき？」

「ゴメン、勝手に考えちゃった、子供の名前。美しく幸せな子…ダメかな？」

「碧ちゃんが聞いたのって、それだったんだ。素敵な名前だね。でもどうして女の子だってわかるの？」

「感じるんだ、君の中から。きっとカナに似て可愛い子だよ」

殉の姿が霞み始めた。

その姿が消え、意識が途切れるまでずっと加夏子は殉を見上げ続けた。

◇

「…ちゃん…加夏子ちゃん…聞こえるかい？」

うっすらと目を開けた加夏子のベッドの脇には、見慣れた顔が並んでいた。

九十九と医師達が。

碧が。

恒彦と紗季子が。

ヨシオが。

銀さんが。

真山が。

北山が。

殉の兄が。

皆、心配そうな顔で覗き込んでいた。

「…大丈夫、かれ、帰ってくるって…」

奇妙に満たされた気分のまま、加夏子は見下ろす人達に告げた。

◇

長い、永い月日が流れた。

肝移植は成功し、だが殉の意識は戻らないまま年月だけが過ぎていった。

肉体の機能は正常値に近付いていたが、意識だけは戻らなかった。

脳死の判定はなく、殉はただ昏睡状態のまま歳月を積み重ねていった。

そして人々は…

◇

「いってきまあ～す！」

「合唱の練習がおわったら、まっすぐ帰ってくるのよ」

「はあ～い」

清水家の門を、ランドセルを背負った少女が勢いよく飛び出していった。

「みーちゃん、車に気をつけるのよ」

「わかってるって、おばあちゃ～ん！」

白髪の混じった髪を品よく結い上げた紗季子が庭から声をかけたが、少女はどこ吹く風といった感じで走り去っていった。

「元気なのはいいんだけど。まったく、誰に似たのかしらねえ～」

「パパの隔世遺伝かもよ、ママ」

開け放した縁側の奥で、台所の片付けをしながら加夏子が言った。

「あのヒトが生きてたら大変だったわね。おっきな子供とちっちゃな子供でひっちゃかめっちゃかよ」

鉢に植えたミニバラに霧吹きで葉を吹きながら、紗季子が小さく溜息を漏らした。

清水恒彦は2年前、食道癌でこの世を去っていた。

「でも、それはそれで楽しかったでしょうね」

「ママ、パパがいなくてさみしい？」

「チョットね。でもあなたたちが居てくれるから全然大丈夫。少しウンザリするくらい」

紗季子は可愛く舌を出した。

「そういえばね、この間、銀さんからメールが来たのよ」

加夏子の言葉に、霧吹きをする紗季子の手が止まった。

「久我さん、から？」

「うん。静岡で元気にやってるって。ヨシオ、すごい働き者らしいよ。収穫が多過ぎて出荷が大変みたい」

久我銀次はリハビリトレーナーを辞め、身寄りの無いヨシオを養子として引き取り静岡で石垣苺の農園を営んでいた。佐野碧も住み込みで働いている筈だった。

「元気でやってるのね。よかった」

歳のわりにふくよかな胸元をそっと押さえ、呟くように紗季子が言った。

「夏になる前にみんなで苺狩りにいかない？　うちの苺は甘くて美味しいって、銀さん書いてたよ」

「そうね。夏になる前に…いきましょう、みんなで」

紗季子がニッコリと微笑みかけた。

最終章

かなこさ〜ん！

タクシーから降りた三人に、よく日に焼けた女の子が手を振りながら走り寄ってきた。

静岡県、清水市。

徳川家康の眠る久能山のふもと。

長く続く海岸線の向かいには、街道沿いに石垣苺の農園がそこかしこあった。

「みどりちゃん、久しぶり！ すっかりいいオンナになっちゃったね」

「『なっちゃったね』はヒドいなあ〜」

「ふふふ、ゴメンゴメン」

「皆さんもお元気そうで」

佐野碧はゆっくりと両手を前に揃えておじぎをした。

「あれ？ みどりちゃん、その手…」

「すごいでしょ。義手、電動式のに換えたんだ。チョットでも動いてくれないと人手が足りなくて」

「ヨシオがいるじゃない」

「ゴリラと超人ハルクの組み合わせよ。事務はワタシがやらなきゃ。二人とも数字はてんでダメだからさ」

「大変そうね」

「うううん、毎日楽しい、すっごく」

目をキラキラさせながら話す碧を、加夏子は眩しそうに見た。

「いきましょう。みんな待ってますから。みーちゃんもおっきくなったね、おねえちゃんと競争する？」

「うん、する！」

「じゃいくよ、よ〜いドンッ！」

すらりと伸びた肢体を弾ませ、碧が走り出した。

猪のような影が慌てて後を追いかける。

「…あの子、まるでウリ坊ね」

「うふふふっ」

「わたしたちも行きましょう」

少ない手荷物を持って、二人はゆっくりと歩き始めた。

◇

「おお、来たきた！ あがってくれ」

開けはなった玄関から、銀さんの威勢のいい声が響いてきた。

「みどり、裏の井戸に苺が冷やしてある、とってきてくれ」

「はい」

「おっと、おチビもきたか！　すごい汗だな」

「おチビじゃないやい！　清水美幸だい！」

「ハハ、じゃ美幸お嬢様、こちらでお汗をお拭き下さいな」

むっとする顔ごと頭からタオルを被せた銀さんは、サンダル履きで玄関から出てくると二人の前に立った。ゆっくり加夏子と…そして紗季子と視線を交わす。

「元気そうだな」

「おかげさまで。久我さんも元気そうね」

「俺あすっかりジジイになっちまったよ。御主人の葬式に行けなくて済まなかった。あの頃はまだ農園を軌道に乗せるのに必死でな」

「もう2年も前の話よ。それより美味しい苺を御馳走して」

「ああ」

三人は屈託無く笑った。

◇

「彼は相変わらずなのか」

風通しのよい六畳間。

質素な和室の卓袱台を囲んで、苺を頬張りながら銀さんが聞いた。

「ええ。よく眠ってます」

世間話のように加夏子は答えた。

「顔色もいいんですよ。すこしふっくらしてきたし」

「昏睡状態の患者ってのは痩せてくもんだ。太るってのはいい兆候かも知れんな」

「父が亡くなった年に2回目の骨髄移植をしました。それも良かったのかもしれませんが」

「ドナーは？」

「烈さんです」

「あいつ、今も戦場にいるんだろな」

「あの人は殉が目覚めるまで絶対に死なない。そんな気がします」

「美幸ちゃんは小学校4年生だったっけ」

「ええ。いつの間にか大きくなりました」

「やんちゃな年頃だ、しつけも大変だろう」

茶を啜る銀さんが紗季子を見た。

「危なっかしい位に元気だけど、とても優しくていい子よ。加夏子と殉さんの良い所をちゃんと半分づつもらっているみたい」

紗季子がうっすらと目を細めた。

「まるで昔の碧だなあ」

アタシがどうしたって？

奥から碧が大きな声で聞いた。

「なんでもねえよ！ いいオンナになったって噂しただけさ」

やだあ、銀さんのバツカァ～

後で海岸を案内してやんなど台所へ声をかけてから、銀さんは次の苺に手をつけた。

◇

碧に連れられ加夏子と美幸が出かけたあと、紗季子と銀さんは差し向かいで苺を摘んでいた。

「…随分、経ったわね」

「そうだな」

「ギン、楽しい？」

「ああ。サキは？」

「楽しいわよ。このままおばあちゃんになって、あの人の所へ逝く。怖いけど、楽しみでもあるな」

「おまえらしいよ」

「ギンも結婚すれば判るわよ。穏やかに色々なものがサラサラ薄れてく。それが心地いいの」

「…」

「どうしたの？」

「俺にも判るかもな、サキの気持ち」

「え？」

「嫁さんもらうんだ、オレ」

「ええ！？ 相手は？」

銀さんが黙って海の方を指さした。

暫くの間、紗季子には意味が判らなかった。

「あなた…まさか…」

「歳、離れ過ぎだよなあ～」

ボリボリと銀さんが頭を掻いた。

「…あなたってひとは…」

アングリと口を開けた紗季子は、次の瞬間、腹を抱えて大笑いし始めた。

笑い過ぎた目から涙がこぼれた。

◇

みどりちゃん…今、なんて…

「ワタシ銀さんのお嫁さんになるの」

潮風に吹かれ、髪をなびかせた碧が言った。

「本気？」

「うん。ここで銀さんとヨシオと三人で苺を作って、子供も産んで、お母さんになって、いつかおばあちゃんになるって。決めたんだ」

「そうなんだ。びっくりしたケド、おめでとうって言えばいいのかな」

「ありがとう。私、加夏子さんみたいなお母さんになりたい」

「私…ワタシは…」

加夏子は水平線へと視線をさまよわせた。

◇

都内の某病院。

開けはなった窓から微かな風が吹き込んでいた。

眠り続ける男のベッドを、看護師がいつものように直していた。

「堀川さん、枕、取り替えますよ」

そっと頭を持ち上げようとした彼女の手が不意に握られた。

「!？」

「…か…な…こ…」

「堀川さん、聞こえるんですね？ わかりますか！？ 堀川さんっ!!!」

看護師は握られた手を引き剥がすと傍らのナースコールを押した。

誰か出てっ！

先生を…九十九先生を呼んで、はやくっ！

返事が聞こえるまで、彼女はボタンを押し続け叫び続けていた。

◇

碧と美幸が手をつなぎ、延々と積まれたテトラポット沿いに歩いてゆく後ろを、少し離れて加夏子は歩いていた。

碧の笑顔が眩しかった。

加夏子のような母親になりたいと言った言葉が胸に痛かった。

待つのに慣れた。

それでも時々、殉の声が聞きたい、聞かせてと叫びだしたくなった。

美幸がいなければ耐えられなかったかも知れない。

こんなに光が溢れてても
さみしいよ
じゅん

その時ふと誰かが触れたような気がして、加夏子のははと振り返った。
柔らかな風が、懐かしい気配を運んでくるのを感じた。

…そう…

やっとおきたのね
わたし、すぐいく
とんでくから
まってて

立ち止まり、何かを抱くように両肩をかかえ俯く加夏子を心配した二人が駆け寄ってきた。

「どしたの、どっかいたい、ママ？」

顔をあげ、涙を拭いながら加夏子は抱きついてきた美幸の頭を撫でた。

おねぼけさんが、やっとおきたよ
会いに行く？ パパのところへ

キョトンとした美幸が、やがてニッコリ笑うと加夏子に抱きついてきた。

日差しはもう眩しくなかった。

(了)